ISSN 1345-2959

研究成果報告書 ③

現代葬祭仏教の総合的研究

浄土宗総合研究所

浄土宗総合研究所　研究成果報告書　3

現代葬祭仏教の総合的研究　目次

はじめに　熊井康雄　3

第1章　データ分析編

1.「檀信徒アンケート」分析　名和清隆　6
2.「寺院アンケート」分析　共同執筆　大蔵健司　38
　和田典善
　八木英哉
　名和清隆

第2章　分析研究編

1. 檀信徒のお葬式に対する意識　八木英哉　86
2. 檀信徒の性差によるお葬式に関する意識について　和田典善　93
3. バリエーションに富んだ浄土宗のお葬式　大蔵健司　98
4. 寺院アンケートから見たお葬式の問題　名和清隆　103
5. まとめ　熊井康雄　113

第3章　お葬式をとりまく環境の変化

1. 危機を迎える仏教葬儀　武田道生　116
2. 浄土宗のお葬式の現代的な意義　武田道生　122

第4章　資料編

資料1　『宗報』連載「崩れゆく葬祭のこころ」　126
資料2　浄土宗総合研究所　公開シンポジウム①
「崩れゆく葬祭のこころⅠ　―いま！　開い直す『葬式仏教』―」　209
基調講演
パネルディスカッション
浄土宗総合研究所　公開シンポジウム②
「崩れゆく葬祭のこころⅡ
―今あらためて意味を問う！　浄土宗の葬儀・年回法要―」　264
資料3　『浄土宗の葬儀と年回法要について』　319
編集後記　336

はじめに

近年とくに平成以降、世間一般のお葬式に対する意識の変化と実態の変容は、誰しもが感じているところであろう。このような傾向を察知した浄土宗総合研究所が「葬祭仏教研究」のプロジェクトを立ち上げたのは、平成5年のことである。この葬祭仏教研究は、当初の第1次から現在の第3次まで、足掛け19年に及んでいるので、まず始めにその概要を記し、活動を振り返って見たい。

第1次の研究は「葬祭仏教を過去・現在にわたって総合的に調査・研究し、望ましいありようについて提言する」という趣旨のもとに発足し、その研究成果は『葬祭仏教　―その歴史と現代的課題―』（ノンブル社発行・1997年）として上梓され、各教団における葬祭研究の先駆けとなった。その後平成10年からは、いわゆる「戒名問題」をテーマとする第2次プロジェクトがスタートした。同11年に宗内寺院を対象とするアンケート「戒名に関する調査」を実施し、さまざまな角度から検討を加えて、13年3月に浄土宗未来委員会委託研究報告書を兼ねた冊子『戒名　―その問題点と課題―』を発行して研究を終了した。以上までの経緯については、それぞれの報告書に詳述されている。

平成13年度からは、第3次プロジェクト「現代葬祭仏教研究」として、時代的変遷が激しく地域差の大きい「葬儀の実態的研究」へと移行した。アンケート調査や現地調査を通して、葬送習俗や儀礼の両面から実態調査を行うこの研究は、まず全国調査を行う前の基礎研究として、地域を限定した調査分析から始めることになった。対象地域として選定したのは、地理的文化的に東西日本の接点であり、南部は海に面して漁業・工業地帯や大小の都市が存在し、北部には山間農村部が広がるなど、現在の都市化・過疎過密化などによって生じている葬儀に関するさまざまな問題を、多面的にとらえるのに最も適していると考えられた静岡教区である。まず始めに行ったのは、同教区全寺院への郵送によるアンケート調査であり、その分析結果は『教化研究』第13号（平成14年）に掲載した。平成14年には、このアンケートの分析をもとに、山間農村部の特徴的地域である御殿場地区、翌15年には、漁村であり江戸時代には風待ち港として栄えた西伊豆子浦、大都市およびその近郊である浜松地区の各寺院にご協力をいただき、それぞれの住職や檀信徒から、過去・現在のお葬式の実態や習俗習慣などについて聞き取り調査を行った。さ

らに平成16年には、同教区寺院の檀信徒各10名にアンケート用紙を配布願い、平成以後のお葬式に関する調査を実施、およそ36％の檀信徒から回答を得た。以上の静岡教区に対するアンケート調査の集計・分析結果は『教化研究』第16号（平成17年）に「研究ノート」として掲載、さらに平成17年度の静岡教区普通講習会で「静岡教区の葬祭意識の変化」として報告し、同教区に対する葬祭研究調査を一応終了して、平成17年度からは全国の寺院、檀信徒のお葬式に対する実態調査を行うことになった。

全国調査の始めに実施したのは、浄土宗の檀信徒を対象としたアンケートである。平成17年9月現在の正住職寺院5653ヶ寺に、平成元年以降にお葬式を行った檀信徒各3名にアンケート用紙の配布をお願いし、檀信徒から直接郵送で回答いただく方法で、配布数に対して19・2％の回答を得ることができた。この集計結果については『教化研究』第17号（平成18年）に第1次報告として単純集計を、さらに第18号（平成19年）には第2次報告として全国と近畿地区・東京神奈川との比較を試みた結果を掲載し、19年度総合学術大会において共同研究発表を行った。

引き続き19年度後半からは、寺院に対する全国調査のアンケート作成に掛かる予定であったが、たまたま浄土宗文化局から、葬祭研究班による『宗報』連載の依頼が入ったため、寺院調査を一年繰り下げ、「崩れゆく葬祭のこころ」と題する連載に向けて、別角度からの集計分析と原稿執筆に研究班の主力を注ぐことになった。さらにその平行企画として、「崩れゆく葬祭のこころ～いま！問い直す「葬式仏教」～」をテーマとするシンポジウムを21年2月に開催し、有意義な内容の講演とパネリストの意見発表は、大本山増上寺三縁ホール満堂の聴衆に大好評を博した。

『宗報』連載などのために予定が遅れた寺院アンケート調査は、20年度後半から準備に入った。遅れを取り戻すために、同年度中の発送を目指し、シンポジウム開催準備を行いながらのアンケート作成となったが、何とか21年3月の調査票発送にこぎつけることができた。このアンケートの目的は、「浄土宗の住職・教師から見たお葬式の実態」や「お葬式から見える死生観」を探り、先に行なった檀信徒対象アンケートに見える檀信徒の意識との比較を行うというものである。回答期限を発送1ヶ月後の4月下旬に設定するという性急なお願いにも関わらず、40％という宗内アンケート調査としては空前の高回答率を得、葬祭に対する宗内教師の意識の高さを伺うことができた。この単純集計の分析結果は『教化研究』第21号（平成22年）に掲載、引き続き各種のクロス集計と分析を行った。

23年2月には、21年に好評を得たシンポジウムの第2弾として「崩れゆく葬祭のこころⅡ～今あらためて意味を問う！浄土宗の葬儀年

回法要～」を開催した。浄土宗におけるお葬式と追善法要の意義を再確認することを目的としたこのシンポジウムは、平成22年に里見法雄前宗務総長の依頼により、今岡達雄主任研究員（現副所長）と葬祭仏教研究班の代表が執筆し、『宗報』12月号とともに全寺院に配布された冊子『浄土宗の葬儀と年回法要』を受けて開催したものである。

以上が葬祭仏教研究プロジェクトの概要であるが、本研究成果報告書『現代葬祭仏教の総合的研究』は、第3次プロジェクト「葬儀の実態的研究」のうち、平成17年度以降に行った全国調査のデータ分析を中心として編集したものである。アンケートの一部に不備もあり、完全な内容には至らなかったが、内容は以下のとおりである。

第1章「データ分析編」は、全国檀信徒アンケートの第1次集計と第2次集計を総合分析した「檀信徒アンケート報告」（担当名和清隆研究員）と、寺院アンケート第1次集計に各種のクロス集計を加えて詳細分析を行った研究成果（担当大蔵健司・和田典善・八木英哉各研究員）を収載した。なお各アンケートのクロス集計作業は、鍵小野和敬研究員が担当した。

第2章「分析研究編」には、檀信徒・寺院の両アンケートを八木英哉・和田典善・大蔵健司・名和清隆各研究員が、それぞれの専門分野からの視点で研究した、現代葬祭仏教の実態や変化などに関する論考を掲載した。

第3章は「お葬式をとりまく環境の変化」と題し、研究全体の総括を武田道生研究員が執筆した。

巻末の「資料編」は、『宗報』に連載した「崩れゆく葬祭のこころ」と、二度にわたるシンポジウムの記録である。「崩れゆく葬祭のこころ」、「シンポジウム講演録」ともに、既に『宗報』誌上に掲載したが、本報告書には内容を再検討し、新たに編集（担当西城宗隆・島恭裕研究員）したものを収載した。

当研究所の葬祭仏教研究は、本年度をもって一応の区切りとし、平成24年度には別角度から葬祭や追善儀礼、祭祀継承問題などを広範囲に扱う、新たなプロジェクトとして再発足する予定である。

末筆ながら、平成5年のプロジェクト発足当初から大本山清浄華院法主御上任まで、研究代表としてご指導賜った浄土門主・総本山知恩院門跡伊藤唯真猊下、永年にわたりプロジェクトを統括された故鷲見定信前主任研究員、第2次までの研究を主務として纏められた細田芳光前専任研究員をはじめ、19年間の葬祭仏教研究に携わられた研究員諸氏に深く感謝の意を表して、巻頭の言葉としたい。

平成24年3月

浄土宗総合研究所
主任研究員　熊井康雄

第1章　データ分析編

1　「檀信徒アンケート」分析

現代葬祭仏教プロジェクトは、近年、急激に変容しているお葬式の実態的研究を行なった。平成13年（２００１）には、静岡教区全寺院の住職に対して葬送儀礼の現状に関するアンケート調査、および檀信徒への聞き取り調査を行なった。平成16年度には、静岡教区正住職寺院の檀信徒への「お葬式に関するアンケート調査」を行ない、葬送儀礼のなかでの通夜から葬儀式に関する一連の意識調査を行なった。

これらの調査を踏まえ、平成17年度に、全国正住職寺院の檀信徒へ同様の調査を行なった。

・設問の趣旨

今回のアンケート調査の目的は、喪主を務めた人のお葬式に対する意識を知ることである。具体的には、お葬式の実態・お葬式の意義・戒名の意義・他界観・霊魂観・先祖観などを探るものであった。

・アンケートについて

平成17年９月、浄土宗国内全教区の正住職寺院５６５３ヶ寺に、檀信徒を対象としたアンケート用紙を３票ずつ郵送（計１万６９５９票）した。そして、各寺院の住職に平成元年以降にお葬式を行なった檀信徒３名にアンケート用紙を配布依頼した。

回収方法は、回答者が浄土宗総合研究所に直接郵送する形式をとった。回収数は、３２６０票（回収率19・２％）、有効回答数は３１８４票であり、今回はこの有効票を元に分析を行なった。

なお、データの分析に関しては、煩雑を避けるため小数点以下第一位を四捨五入で表記する。

今報告では、回答者のお葬式に対する意識をより詳細に見るために、いくつかの項目でクロス集計をかけ分析を行った。また、全国での数値を基準として、それと明確な相違が現れると思われる東京

教区・神奈川教区（以下「東京・神奈川」と略す）、および近畿地方教化センター（以下、「近畿」と略す）との比較分析を行った。東京・神奈川は人口流入現象が起こり、伝統的なお葬式、およびお葬式に対する意識に顕著な変化が起こっていると想定される地域である。近畿は、大阪府、兵庫県といった大都市圏を含み、人口移動現象があったが、伝統的に月参りや五重相伝が行われていることからも、寺院と地域をめぐってお葬式に対する伝統的な意識が強く残っていると想定される地域である。

本文中で「お葬式」という場合には、〈枕経〉〈通夜〉〈葬儀式・告別式〉などを含む一連の葬送全体を指し、「葬儀」という場合には〈葬儀式・告別式〉を指すことにする。葬儀式と告別式を〈葬儀式・告別式〉と表記したのは現在、葬儀式と告別式が同日に、また同一儀式内に分けられることなく執行されることが多い状況を考慮してのことである。

なお、今回のアンケート回答の分析の重要な用語として、各所に用いられている〈「家」制度〉は、以下のような意味で用いている。

「家」制度（イエ制度）

日本の伝統的家族制度で、名字、屋号などの家名の世代を超えた存続と繁栄を重視する生活制度。そのため、この家に所属し、同じ家名を名乗る親族集団の家長・戸主は、その親族に所属する家産や家業を所有し、その存続発展の責任を先祖に対して負った。これが「家」制度の基本的な型である。

明治31年（１８９８）に制定された明治民法により、戸主権と家督相続、祭祀継承権を基本とする家父長制的な「家」制度が、日本の家族の標準として法的根拠をあたえられ、長男は生まれながらにして嫡子とされた。

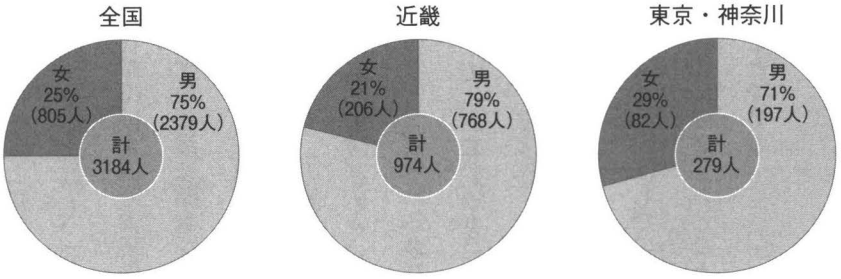
第二次世界大戦後の昭和22年（１９４７）に、個人の尊厳と男女平等を基本原則とする現行民法に改正されると、家父長制的な家制度に代わり、夫婦中心の家族理念が新たなモデルとされた。１９６０年代までは、この理念と実態との間にはずれが大きかったが、１９６０年代後半からの高度経済成長による産業構造の変化と人口移動、女性の社会進出により、「家」観念は急速に変化していった。

①あなたの性別を教えてください。

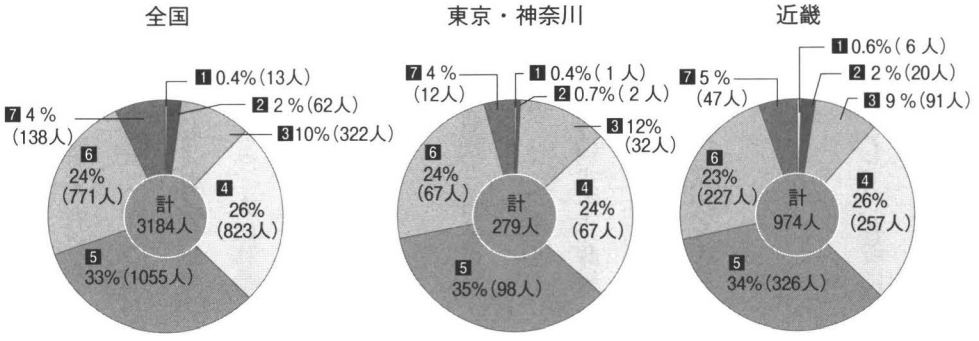
男性が75％、女性が25％であった。今回の調査は喪主を務めた方に、回答をお願いしたアンケートであり、伝統的な「家」制度からは、喪主は「家」の継承者である男性が中心と思われていたが、女性回答者（喪主を務めた方）が25％いるということは注目すべきであ

る。近畿では21％と全国よりも少ない。これに対して東京・神奈川では近畿の約1・5倍の29％と多く、大きな地域差が見られる。

①あなたの性別を教えてください。

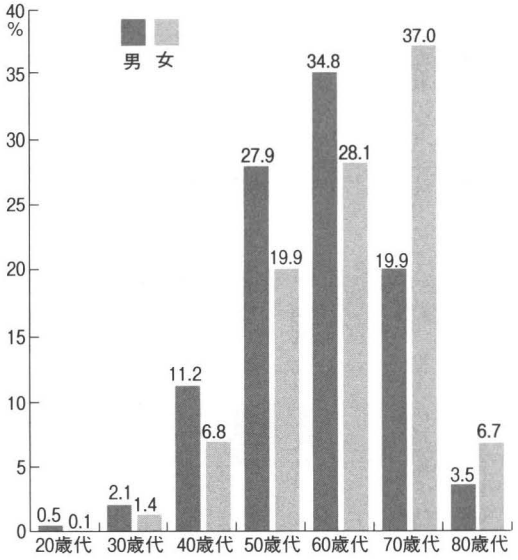


②あなたの年齢を教えてください。



1 20歳代　5 60歳代
2 30歳代　6 70歳代
3 40歳代　7 80歳代
4 50歳代

年別と年代のクロス（全国）



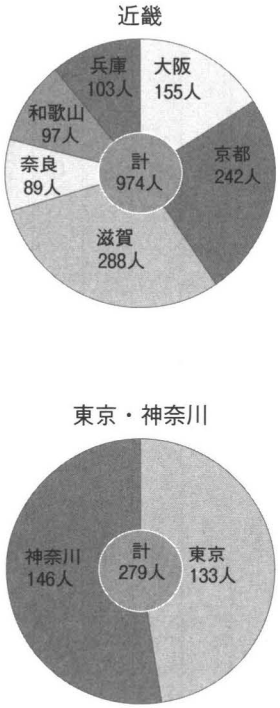
60歳代がもっとも多く、ついで50歳代、70歳代となっている。なお、地域差は見られない。年齢と性別との関連について分析すると、男性では60代の喪主が35％を占め、女性では70代での喪主が37％と最も多い。

③あなたのお住まいの都道府県・市・町・村名を教えてください。

	寺院数	配布数	有効回答数
北海道	129	387	56
青森	97	291	54
岩手	30	90	29
秋田	39	117	14
山形	90	270	29
宮城	51	153	46
福島	89	267	58
群馬	67	201	50
栃木	55	165	41
茨城	86	258	49
埼玉	121	363	81
東京	389	1167	133
千葉	107	321	62
神奈川	233	699	146
山梨	55	165	34
新潟	62	186	66
富山	55	165	38
長野	183	549	71
静岡	128	384	117
愛知	387	11161	178
三重	211	633	125
岐阜	62	186	29
石川	34	102	18
福井	57	171	55
滋賀	361	1083	288
京都	523	1569	242
奈良	223	669	89
和歌山	141	423	97
大阪	439	13117	155
兵庫	195	585	103
鳥取	37	111	26
島根	74	222	75
岡山	25	75	17
広島	64	192	54
山口	122	366	55
香川	19	57	16
徳島	10	30	0
高知	8	24	5
愛媛	58	174	41
福岡	238	714	143
佐賀	79	237	47

	寺院数	配布数	有効回答数
長崎	62	186	40
熊本	70	210	47
大分	51	153	29
宮崎	17	51	19
鹿児島	13	39	4
沖縄	7	21	9
未記入			7
合計	5653	1万6959	3184

近畿と東京・神奈川の有効回答数

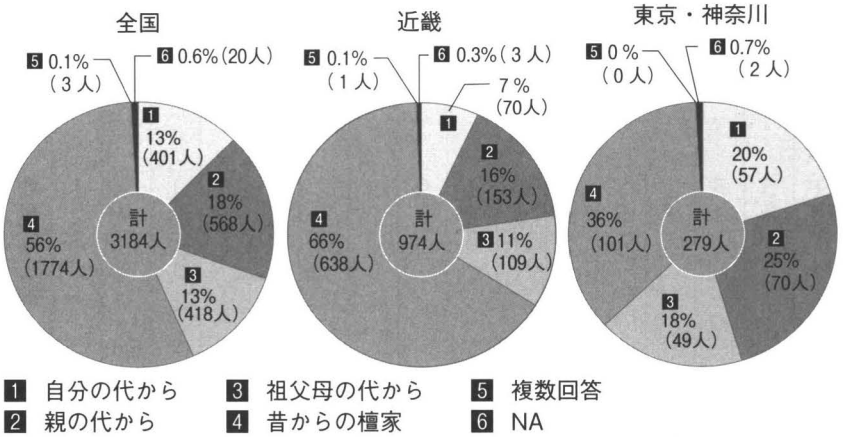


④あなたの家がお寺の檀家になったのはいつですか。

1. 自分の代から　2. 親の代から
3. 祖父母の代から　4. 昔からの檀家

全国では、「4. 昔からの檀家」が56%あり、寺院と長く関係を保っている人の回答が多いことがわかる。「1. 自分の代から」または「2. 親の代から」と答えた人が合わせて約30%いる。これらの人たちは、一世代の経過年数といわれる、およそ過去30年の間に寺院と檀信徒関係を結んだ人であると考えられる。つまり、高度成長期における人の移動や新たな分家によって寺院との関係を結んだということである。

④あなたの家がお寺の檀家になったのはいつですか。



「4．昔からの檀家」は近畿では66％と高く、東京・神奈川は、近畿の約半分の36％と低い。一方「1．自分の代から」と「2．親の代から」を合わせた数字は、近畿は約23％で、東京・神奈川では近畿の約2倍の45％と高くなっている。全国は近畿と東京・神奈川の中間の数字を示している。

東京・神奈川は「1．自分の代から」と「2．親の代から」を合わせた数字（45％）が、「4．昔からの檀家」（36％）を上回っており、新しく移入してきた人が多いことがわかる。

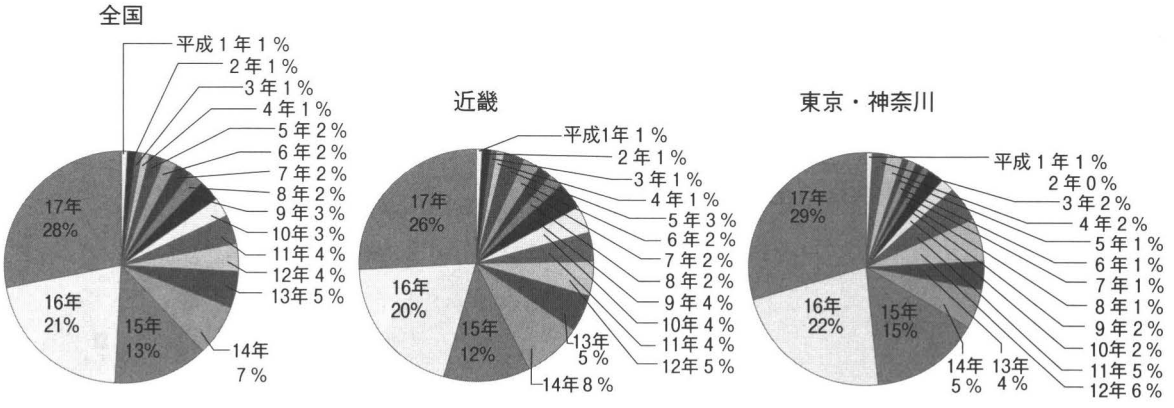
Ⅰ．あなたがもっとも最近に経験した、あなたのご家族のお葬式についてお伺いします

（1）あなたのご家族のお葬式のなかで、もっとも最近のお葬式はいつでしたか。

平成（　）年

過去3年で7割を占め、年が遡るほど回答者が減少している。この傾向は、3地域に共通しており、地域的な差異ではなく、アンケート用紙を配布した住職の記憶に新しいお葬式の喪主、もしくは最近行われた法事の施主に配布したと考えられよう。

（1）あなたのご家族のお葬式のなかで、もっとも最近のお葬式はいつでしたか。



（2）それは、あなたからみて、どのような関係の方のお葬式でしたか

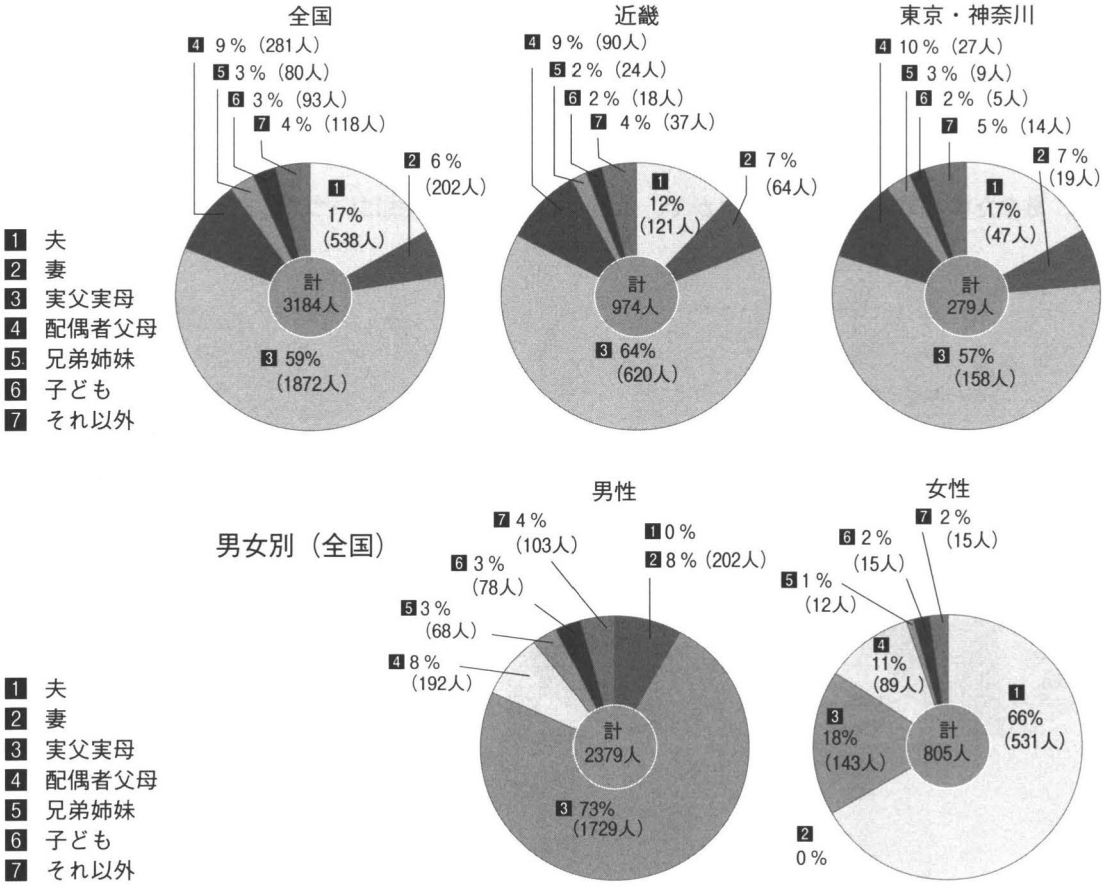
1．夫　2．妻　3．実父または実母
4．配偶者の父または母　5．兄弟姉妹
6．子供　7．それ以外（具体的に　　）

「3．実父または実母」という回答が6割程度と大きな割合を占めている。近畿は全国と比べると、「実父実母」の割合が高く、「夫」という割合が低い。これは、近畿においては女性の喪主の割合が低いことと関係すると思われる。

全国の値を男女別にみると、男性が喪主を務めるのは「3．実父または実母」が73%であり、女性では「1．夫」が66%となり、男女により「誰のお葬式の喪主を務めるか」ということに大きな違いがみられる。

注目すべきは、女性で喪主を務めた人の11%が「4．配偶者の父または母」、つまり夫の親のお葬式の喪主を務めていることである。

（2）それは、あなたからみて、どのような関係の方のお葬式でしたか



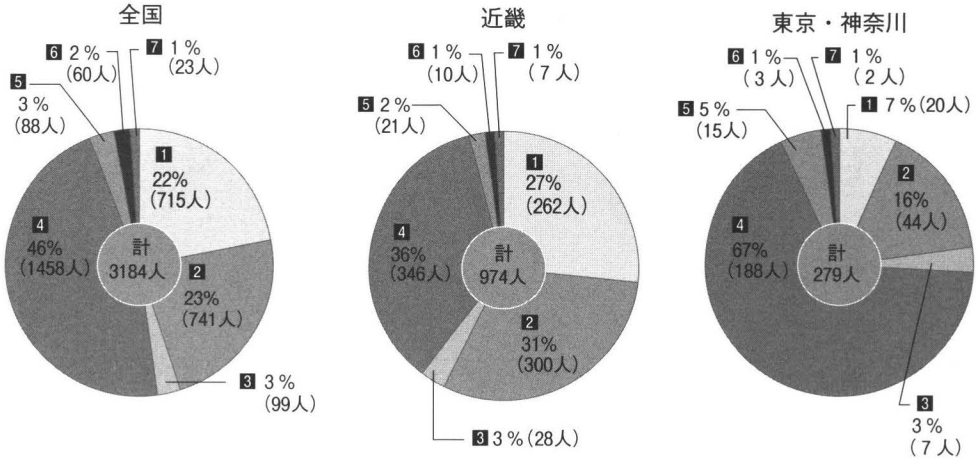
（3）お葬式の準備・運営にもっとも深く関わったのはどなたでしたか

1．近隣地域の人々（講・近隣組・町内会・自治会など）
2．親戚　3．寺院　4．葬儀社
5．その他（具体的に　　）

どの地域でも「葬儀社」が最も高い値を示している。しかし、この値には地域により大きな違いが見られる。全国では、「1．近隣地域」と「2．親戚」を合わせると45％であり、「4．葬儀社」の46％とほぼ同数を示す。

近畿は「1．近隣地域」と「2．親戚」を合わせると、全国より13ポイントも多い58％で、「4．葬儀社」は全国よりも10ポイントも低い36％で、「近隣地域」「親戚」の強い地域であることがわかる。これに比べて、東京・神奈川での「1．近隣地域」と「2．親戚」を合わせた数字は、全国より22ポイントも低い23％であり、一方「4．葬儀社」は21ポイントも多い67％となっている。このように、地域での差が大きく見られ、近畿では、地域・親戚の影響が強く、東京・神奈川では葬儀社の影響が強いことがわかる。

（3）お葬式の準備・運営にもっとも深く関わったのはどなたでしたか



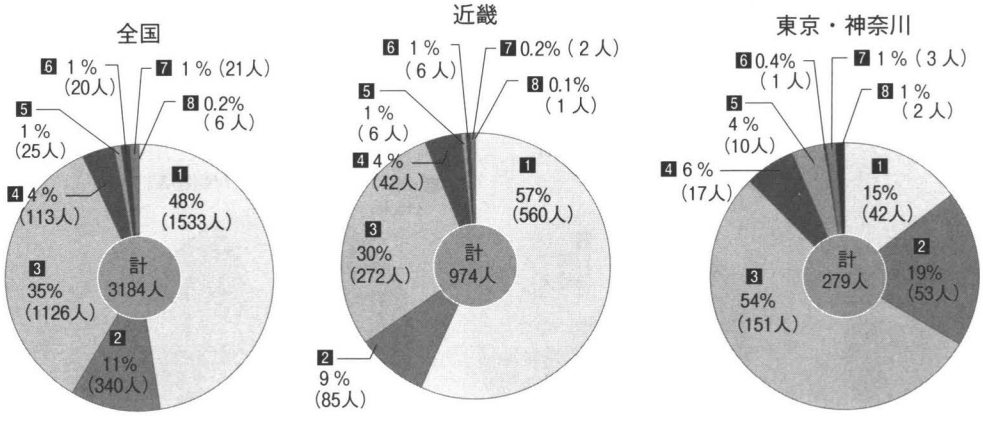
（4）お通夜はどこで行ないましたか。

1. 自宅→（4）―1～（4）―3にお答えください
2. 菩提寺→（4）―1～（4）―3にお答えください
3. 葬祭場→（4）―1～（4）―3にお答えください
4. 集会所・公民館などの地域の施設→（4）―1～（4）―3にお答えください
5. その他（具体的に　　）→（4）―1～（4）―3にお答えください
6. お通夜は行なわなかった→（5）にお進み下さい

全国では、「1. 自宅」が48%と多い。ついで「3. 葬祭場」が35%、「2. 菩提寺」が11%となっている。かつては自宅や寺院で行われるのが通例であったことを考えると、「葬祭場」の割合が35%ということは、大きな変化であるといえよう。近畿では、「1. 自宅」は57%と全国より9ポイントも高くなっている。東京・神奈川では「1. 自宅」は15%で、全国の3分の1、近畿の4分の1であり、自宅での通夜が少なくなっている。その一方、「3. 葬祭場」が54%と高い。また「2. 菩提寺」が19%と全国・近畿の2倍と高い数字となっている。

＊（4）で1～5と回答した人のみ、以下の（4）―1～（4）―3に回答。

（4）お通夜はどこで行ないましたか。



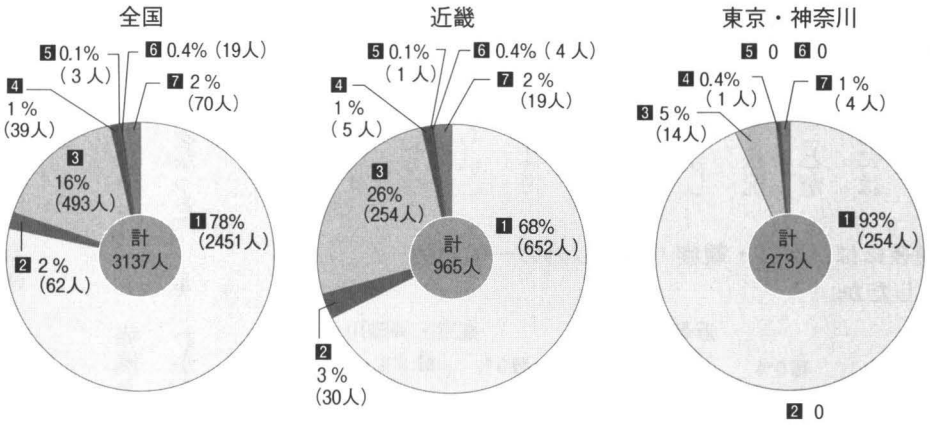
1 自宅
2 菩提寺
3 葬祭場
4 集会所・公民館
5 その他
6 通夜は行わなかった
7 複数回答
8 NA

（4）—1　お通夜はどのように行ないましたか。

1. 僧侶を招き読経をしてもらった
2. 僧侶を招かずに地域の講（念仏講など）に供養をしてもらった
3. 僧侶の読経・地域の講（念仏講など）の供養の両方をしてもらった
4. 僧侶の読経・地域の講（念仏講など）のどちらもしてもらわなかった
5. その他（具体的に　　）

全国では「1. 僧侶に読経をしてもらった」が78％と大半をしめている。しかし、「2. 僧侶を招かずに地域の講」と「3. 僧侶の読経・地域の講両方」の合計が18％あったことは注目される。近畿では「2. 僧侶を招かずに地域の講」と「3. 僧侶の読経・地域の講両方」の合計が29％で全国より約1割多い。一方、東京・神奈川では「2. 僧侶を招かずに地域の講」はなく、「3. 僧侶の読経・地域の講両方」が5％と全国の約4分の1、近畿の5分の1と少ない数字となっている。講の存在は、地域社会の結びつきの強さを表していると考えられるだろう。

（4）—1　お通夜はどのように行ないましたか。



1 僧侶を招き読経
2 僧侶を招かずに地域の講に供養してもらう
3 僧侶の読経・地域の講の両方に供養してもらう
4 どちらにもしてもらわない
5 その他
6 複数回答
7 NA

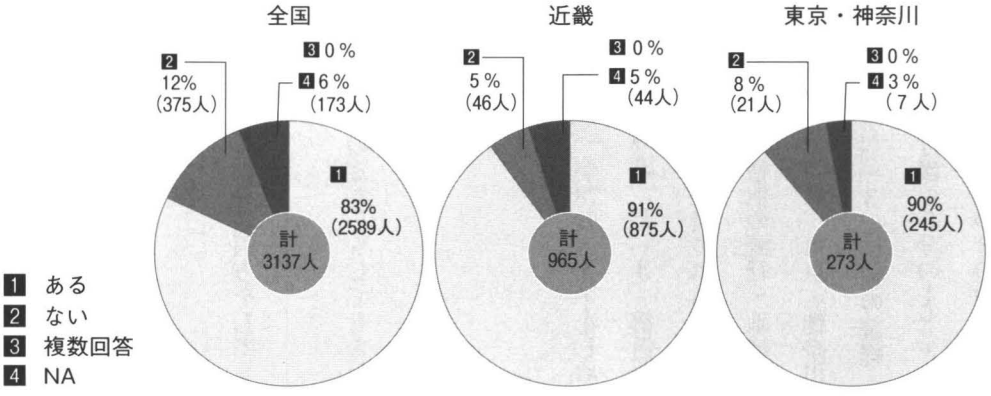
（4）―2　あなたの地域では、お通夜に一般参列者を呼ぶ習慣がありますか。

1. ある→（4）―3にお答えください
2. ない→（5）にお進み下さい

全国では、8割が通夜に参列者を呼んでいる。近畿、東京・神奈川では9割が通夜に参列者を呼んでいることが分かる。

＊（4）―2で「1. ある」と回答した人のみ（4）―3に回答。

（4）―2　あなたの地域では、お通夜に一般参列者を呼ぶ習慣がありますか。

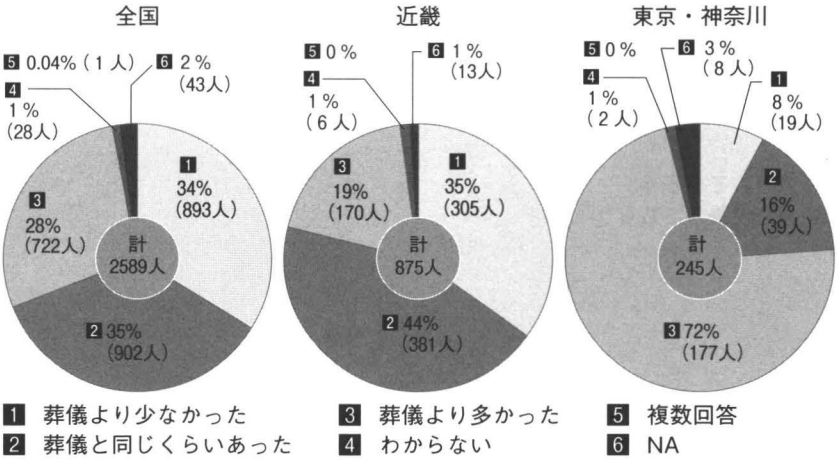


（4）―3　お通夜には、家族・親族・隣組以外の一般参列者はありましたか。

1. 葬儀より少なかった　2. 葬儀と同じくらいあった
3. 葬儀より多かった　4. わからない

全国では、通夜の参列者は「1. 葬儀より少なかった」34%、「2. 葬儀と同じくらい」35%、「3. 葬儀より多かった」28%となっており、通夜の参列者が「葬儀と同じ、もしくは多い」という状況が6割を超えることが分かった。伝統的には葬儀の方が一般参列者は多いと考えられるため、この数字は「お通夜」の意味合いに変化

（4）―3　お通夜には、家族・親族・隣組以外の一般参列者はありましたか。



が生じ、葬儀と同じ告別式の意味合を持っていることを予測させる。

「通夜の方が葬儀より参列者が多い」を比較してみると、近畿では19％であるが、全国では28％と9ポイントも多く、さらに東京・神奈川ではこの回答が72％と、圧倒的に葬儀よりも通夜に多くの人が集まるという状況が明らかになっている。

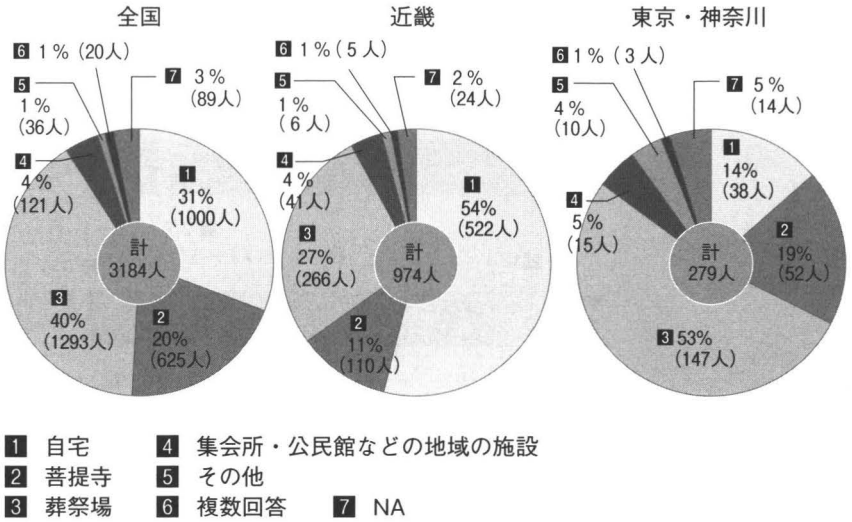
（5）葬儀はどこで行ないましたか。

1．自宅　2．菩提寺　3．葬祭場
4．集会所・公民館などの地域の施設
5．その他（具体的に　　）

全国では、「3．葬祭場」が40％と最も多く、ついで「1．自宅」31％、「2．菩提寺」20％となっている。近畿では「1．自宅」が最も多く54％を占め、次いで「3．葬祭場」27％で、「2．菩提寺」は11％と少ない数字となっている。東京・神奈川では、「3．葬祭場」が53％と過半数以上を占め、ついで「2．菩提寺」が19％である。「自宅」で葬儀を行なった人は14％と全国の半分以下、近畿の4分の1となっている。

また、通夜の場所を尋ねた問（4）と、この問（5）を比較すると、通夜と葬儀で場所を変える地域があることが分かる。全国を見ると、自宅で通夜を行った人（問（4）の回答1）は48％（1533人）であったが、自宅で葬儀を行った人は31％（1000人）と、少なくとも全体の約17ポイントが通夜と葬儀の場所を変えている。近畿では少なくとも3ポイントが、東京・神奈川は少なくとも1ポイントが通夜と葬儀の場所を変えているが、全国に比べると通夜と葬儀で場所を変える割合は極めて少ない。

（5）葬儀はどこで行ないましたか。



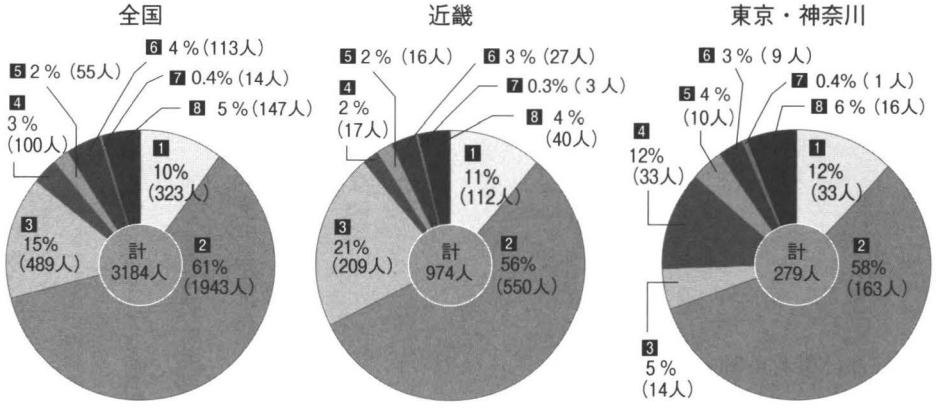
（5）―1　その場所をお決めになったのは、主に誰のお考えによりますか。

1．故人の希望　2．家族の希望　3．地域の風習
4．葬儀社の勧め　5．僧侶の指導
6．その他（具体的に　　）

全国、近畿、東京・神奈川いずれも「2．家族の希望」が約6割と最も多く、「1．故人の希望」が約1割しかないことは共通している。しかし「3．地域の風習」では際立った相違がみられ、近畿がもっとも高い21％、全国が15％、東京・神奈川では5％である。また、「4．葬儀社の勧め」でも相違がみられ、全国は3％、近畿が2％である一方、東京・神奈川は12％と高くなっている。

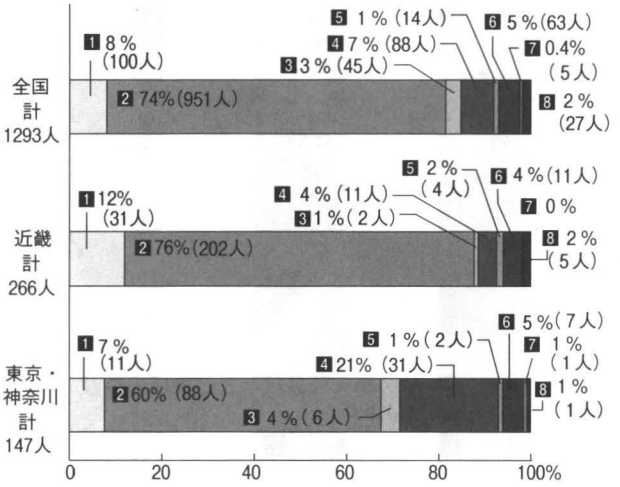
問（5）での「葬祭場」という回答を「誰の考えによるか」と掛け合わせてみる。東京・神奈川では、葬祭場で葬儀を行った人の場合、葬儀社の勧めによってその場所を決めた人が21％であり、全国7％、近畿4％に比べると高い数字となっている。つまり、東京・神奈川では葬儀社の影響が強いということがわかる。

（5）―1　その場所をお決めになったのは、主に誰のお考えによりますか。



1 故人の希望
2 家族の希望
3 地域の風習
4 葬儀社の勧め
5 僧侶の指導
6 その他
7 複数回答
8 NA

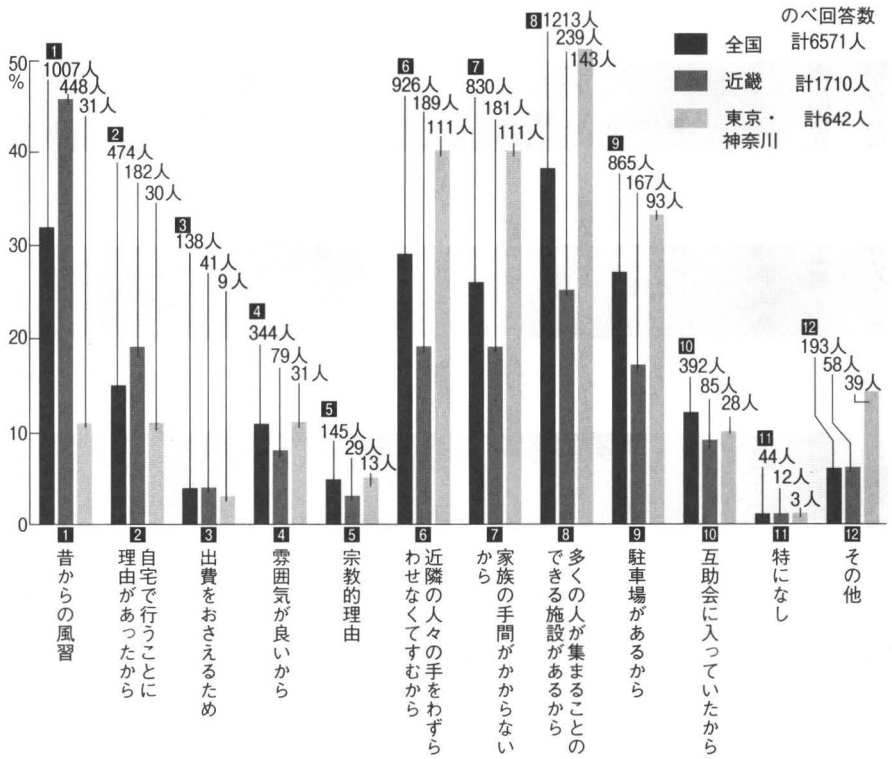
「葬祭場」に決めたのは、誰の考えによりますか。



（5）―2　その場所をお決めになった理由は何ですか。当てはまるものをすべて選びお答えください。

1. 昔からの風習　2. 自宅で行うことに理由があったから
3. 出費をおさえるため　4. 雰囲気が良いから
5. 宗教的理由
6. 近隣の人々の手をわずらわせなくてすむから
7. 家族の手間がかからないから
8. 多くの人が集まることのできる施設があるから
9. 駐車場があるから
10. 互助会に入っていたから
11. 特になし
12. その他（具体的に　　）

この設問は複数回答である。よって以下で出るパーセントは、分母が各地域の票数（全国3184、近畿974、東京・神奈川279）、分子が各回答者数である。全国では「8. 多くの人が集まることのできる施設がある」が38%、ついで「1. 昔からの風習」が32%となっている。注目すべきは、「6. 近所の人々の手をわずらわせなくてすむ」が29%と高く、これは「通夜葬儀が近所を中心とする地域社会によって支えられるもの」という従来からの通念に変化が生じていることを意味しているだろう。また「9. 駐車場があるから」が27%と高くなっており、参列者の便宜ということも、葬儀の場所を決める大きな要因となっている。



地域に分けて見ると、近畿では「1. 昔からの風習」が46%と突出して高く、続いて「8. 多くの人が集まることのできる施設があ

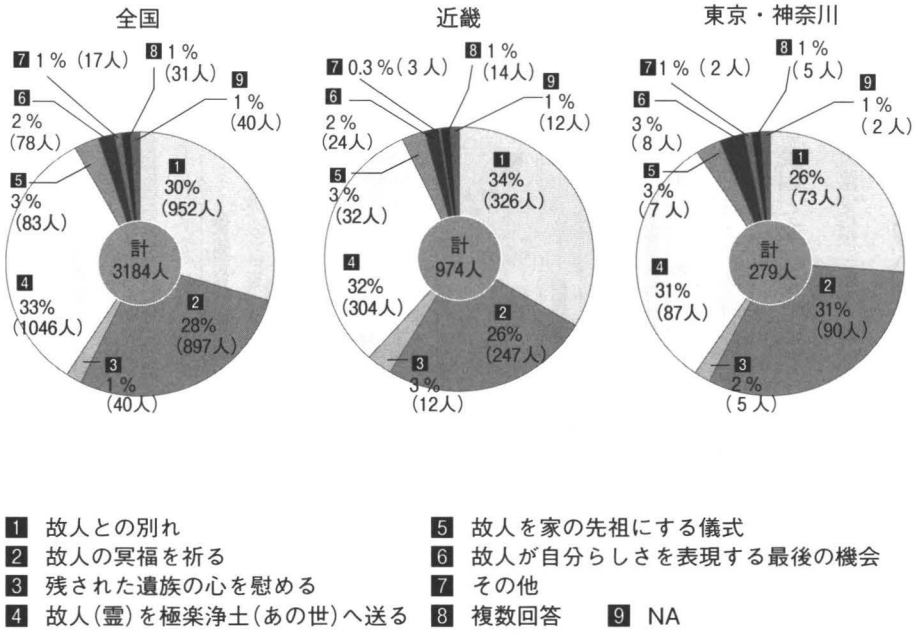
る」が25％となっている。東京・神奈川では、「8．多くの人が集まることのできる施設がある」51％、「6．近隣の人に煩わせたくない」40％、「7．家族の手間がかからない」が40％となっており、場所を決める理由には、地域によって大きな違いが見られる。

「葬儀を決めた理由」と問（5）「葬儀を行った場所」を掛け合わせて見る。「1．昔からの風習」と回答した人の約7割が自宅で葬儀をおこなっている。また「6．近隣の人々の手をわずらわせなくてすむ」と回答した人の約8割が葬祭場で、「8．多くの人が集まることのできる施設がある」と回答している人の約7割が葬祭場で葬儀を行なっていることが明らかになった。この結果は3地域とも共通している。

（6）ご家族のお葬式を行われて、お葬式のもっとも大きな意味は何だったと思いますか。

1．故人との別れ　2．故人の冥福を祈る
3．残された遺族の心を慰めること
4．故人（霊）を極楽浄土（あの世）へ送る
5．故人を家の先祖にする儀式
6．故人が自分らしさを表現する最後の機会
7．その他（具体的に　　）

（6）ご家族のお葬式を行われて、お葬式のもっとも大きな意味は何だったと思いますか。



「4．故人（霊）を極楽浄土（あの世）に送る」という回答は、お葬式を宗教的儀礼であると捉えている回答であり、「1．故人との別れ」という回答は、お葬式を人間関係での儀礼と捉えている回

答である。得られた結果は、「4．故人（霊）を極楽浄土（あの世）に送る」が33％、「1．故人との別れ」が30％、「2．故人の冥福を祈る」が28％と、これら3つの回答がほぼ同じ割合となっている。なお、全国、近畿、東京・神奈川での差はほぼ見られない。

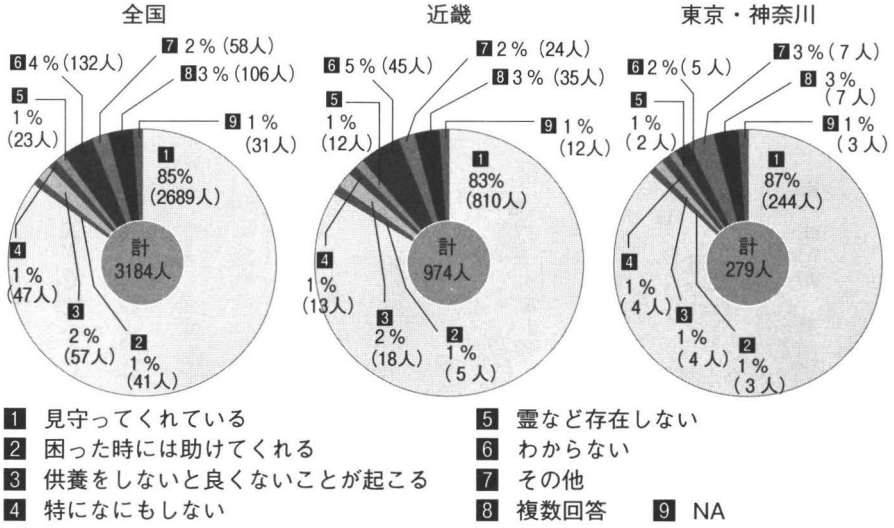
回答を年齢と掛け合わせて見る。「4．故人（霊）を極楽浄土（あの世）に送る」と回答し、お葬式を宗教的儀礼であると捉えている人の割合は、70代以上に多くみられ、「1．故人との別れ」「6．自分らしさを表現する機会」との回答は、50歳代以下に多くみられた。また、「5．故人を家の先祖にする儀式」と回答した人は、70歳代以上に多く見られた。

（7）故人の霊は、あなたにとってどのような存在であると思いますか。

1．見守ってくれている　2．困った時には助けてくれる
3．供養をしないと良くないことが起こる
4．特になにもしない　5．霊など存在しない
6．わからない　7．その他（具体的に　　）

この質問は、「亡くなった家族が自分とどのように繋がっているか」を意味する質問であるが、全国では「1．見守ってくれている」が85％と大多数であり、「2．困った時には助けてくれる」「3．供養をしないと良くないことが起こる」という回答をあわせてもわずか3％であることから、亡くなった身内を、自分に積極的な影響を及ぼす存在とは捉えてはいないが、亡くなった人の霊は自分と繋がっており、見守ってくれていると捉えている人が多いことが分かる。近畿、東京・神奈川でもこの傾向は変わらない。

（7）故人の霊は、あなたにとってどのような存在であると思いますか。



（8）あなたは、ご自分が亡くなった際には、お葬式をしてほしいと思いますか。

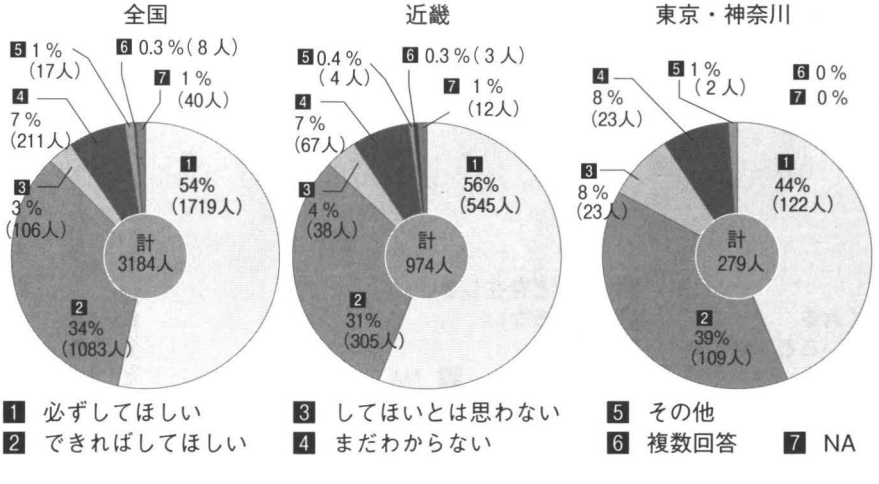
1. 必ずしてほしい→（8）―1～（8）―4にお答えください
2. できればしてほしい→（8）―1～（8）―4にお答えください
3. してほしいとは思わない→（8）―1～（8）―4にお答えください
4. まだわからない→（9）にお進みください
5. その他（具体的に　）→（9）にお進みください

全国では、「1. 必ずしてほしい」54%、「2. できればしてほしい」34%と回答しており、合わせて88%の人が「してほしい」と回答している。しかし「3. してほしいとは思わない」3%、「4. まだわからない」7%、「5. その他」1%であり、約1割の回答者が自分のお葬式に対し否定もしくは未決定な態度だということがわかる。近畿では全国と明確な違いは見られないが、東京・神奈川では違いが見られる。東京・神奈川では自分のお葬式を「1. 必ずしてほしい」が44%で全国より10ポイント低くなっている。また、自分のお葬式を「3. してほしいとは思わない」との明確な否定意見が8%見られる。「平成に入ってからお葬式を執り行った檀信徒に対して浄土宗寺院住職が配布したアンケート」という今回のアンケートの性格からすると、決して小さい数字ではないと思われる。

男女別で見ると、3地域とも女性のほうがお葬式に対してやや消極的な意見を持っていることが分かる。「1. 必ずして欲しい」割合は男性のほうが女性より割合が高く、「3. して欲しいと思わない」は女性のほうが高い割合になっている。特に東京・神奈川の女性は、「1. 必ずしてほしい」は28%という低い数字（男性は50%）であり、「3. して欲しいと思わない」は13%（男性は6%）と高い数字を示している。

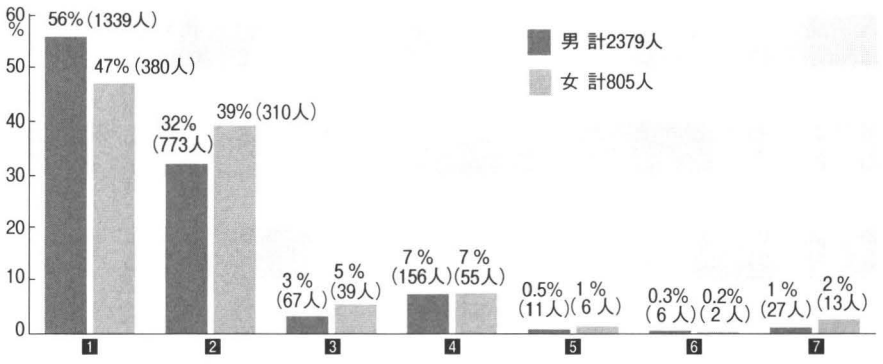
＊（8）で「1、必ずしてほしい」・「2、できればしてほしい」と回答した人のみ、（8）―1～（8）―4に回答。

（8）あなたは、ご自分が亡くなった際には、お葬式をしてほしいと思いますか。

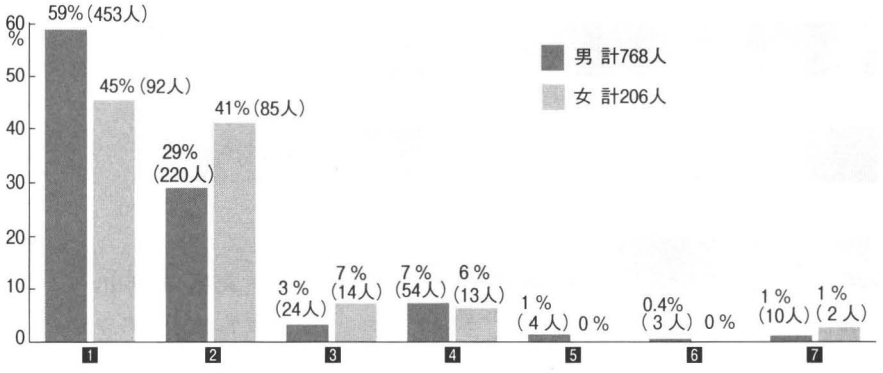


（8）あなたは、ご自分が亡くなった際には、お葬式をしてほしいと思いますか。（男女別）

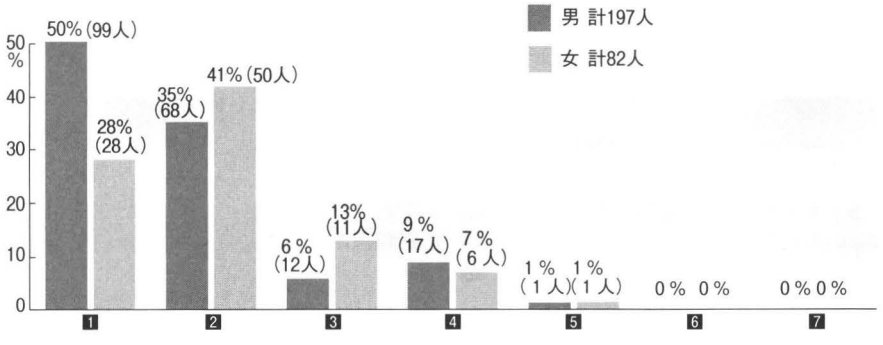
全国



近畿



東京・神奈川



1 必ずしてほしい
2 できればしてほしい
3 してほしいとは思わない
4 まだわからない
5 その他
6 複数回答
7 NA

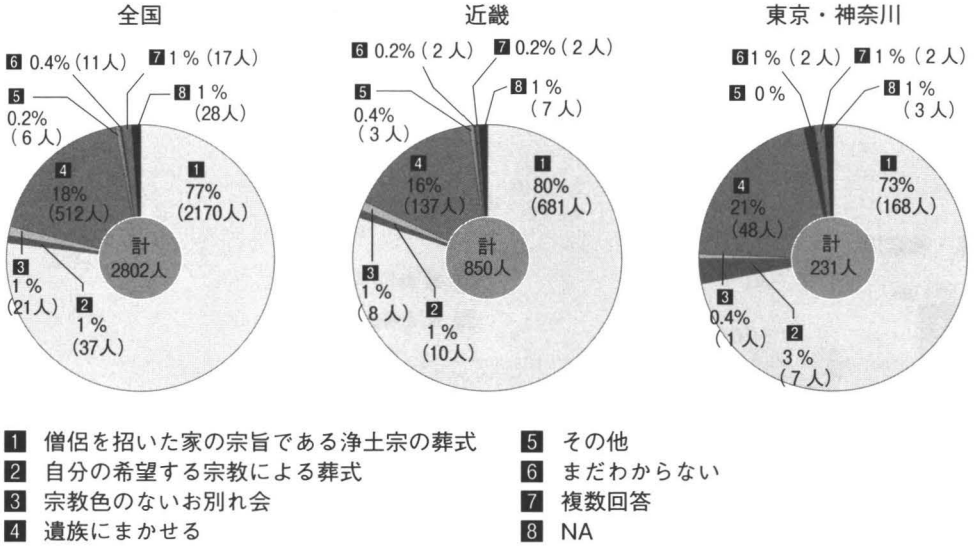
（8）—1　あなたは、どのような形式のお葬式を望みますか。

1．僧侶を招いた家の宗旨である浄土宗の葬式
2．自分の希望する宗教による葬式
3．宗教色のないお別れ会
4．遺族にまかせる
5．その他（具体的に　　）
6．まだわからない

この設問は、お葬式を「1．必ずしてほしい」「2．できればしてほしい」と回答した人に対する質問であるので、自分のお葬式に明確なイメージを持っている人が回答していると考えられる。

全国では、「1．僧侶を招いた家の宗旨である浄土宗の葬式」77％、「2．自分の希望する宗教による葬式」1％、「3．宗教色のないお別れ会」1％、「4．遺族にまかせる」18％、「6．まだわからない」0・4％と、約8割が浄土宗のお葬式を希望している。しかし、その中でも地域差が見られ、近畿では「1．僧侶を招いた家の宗旨である浄土宗の葬式」が80％と高く、東京・神奈川では73％と全国より低くなっている。

（8）—1　あなたは、どのような形式のお葬式を望みますか。



1 僧侶を招いた家の宗旨である浄土宗の葬式
2 自分の希望する宗教による葬式
3 宗教色のないお別れ会
4 遺族にまかせる
5 その他
6 まだわからない
7 複数回答
8 NA

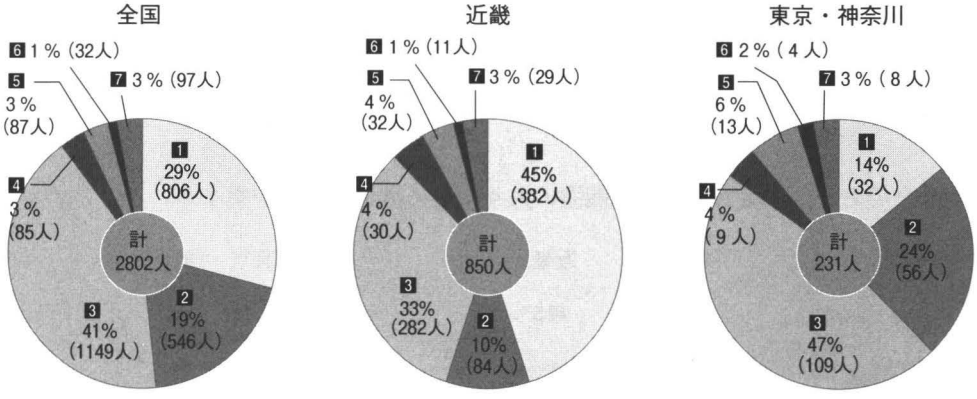
（8）—2　あなたは、どこでお葬式を行ないたいと思いますか。

1．自宅　2．菩提寺　3．葬祭場
4．集会所・公民館などの地域の施設
5．その他（具体的に　　）

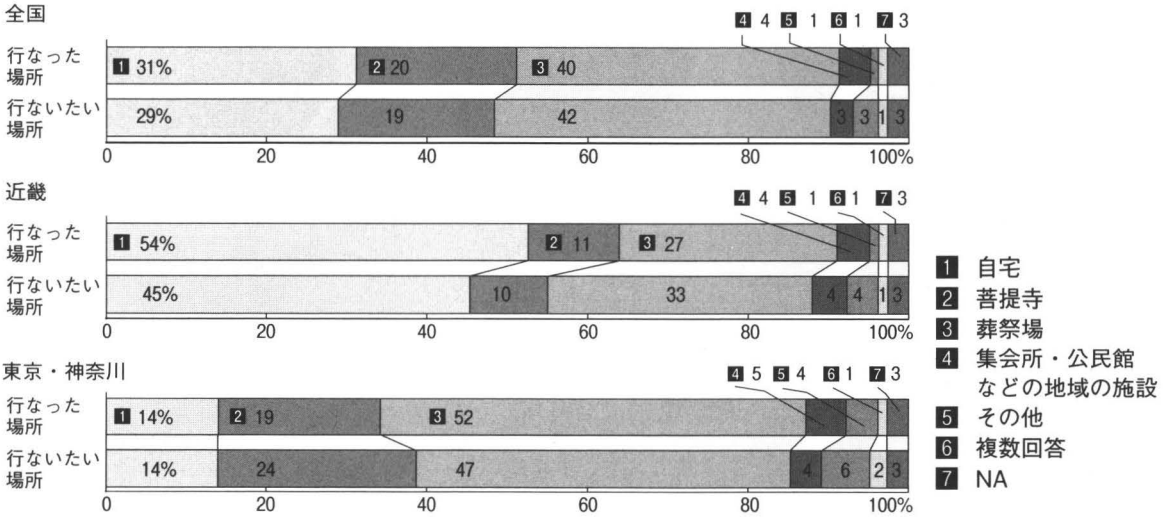
全国では「3．葬祭場」が41％と最も多く、ついで「1．自宅」29％、「2．菩提寺」19％となっている。近畿では「1．自宅」が45％と高く、「2．菩提寺」は全国の半分である10％となっている。東京・神奈川では「3．葬祭場」が47％と高い数字を示している。

回答者が喪主を務めたお葬式の場所（問5）と比較してみる。全国では、「お葬式を行なった場所」と「お葬式を行ないたい場所」の違いがほぼ見られない。近畿では、自分の「自宅で行なった」人が54％であったが、自分の場合には9ポイント減り45％の人が「自宅でお葬式を行いたい」と回答しており、「葬祭場で行いたい」人が6ポイント増えている。東京・神奈川では、菩提寺が5ポイント増え、葬祭場が5ポイント減っている。

（8）—2　あなたは、どこでお葬式を行ないたいと思いますか。



葬儀を「行なった場所」と「行きたい場所」の比較

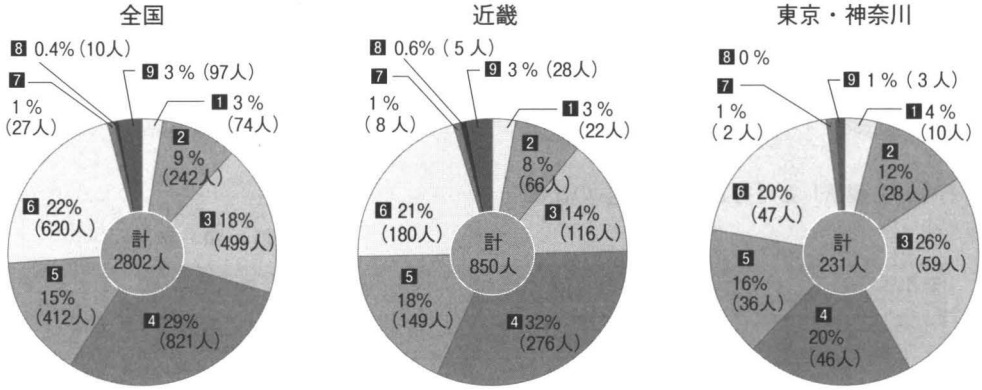


（8）—3　あなたのお葬式の会葬は、どの範囲の人々に来て欲しいと思いますか。

1. 家族のみ　2. 家族・親戚　3. 家族・親戚・友人
4. 家族・親戚・友人・地域の人々
5. 家族・親戚・友人・地域の人々・仕事関係の人々
6. 家族・親戚・友人・地域の人々・仕事関係の人々・遺族の関係の人々
7. その他（具体的に　　）

お葬式の会葬に来てほしい範囲は、その人が関わっている社会や人間関係と深く関わっていると考えられる。「地域社会」を含まない1～3までの回答の合計が、全国では30％、近畿では25％であるのに対して、東京・神奈川では42％であり、全国と比較すると12ポイントも高く、東京・神奈川は地域社会に対する関わりが低いことが伺える。

（8）—3　あなたのお葬式の会葬は、どの範囲の人々に来て欲しいと思いますか。



1 家族のみ
2 家族・親戚
3 家族・親戚・友人
4 家族・親戚・友人・地域の人々
5 家族・親戚・友人・地域の人々・仕事関係の人々
6 家族・親戚・友人・地域の人々・仕事関係の人々・遺族の関係の人々
7 その他　　8 複数回答　　9 NA

（8）—4　あなたは、自分のお葬式にはどのような意味があると思いますか。

1．家族や友人などとの別れ　　2．自分の冥福を祈ってもらう
3．遺族の心を慰める
4．極楽浄土（あの世）へ送ってもらう
5．家の先祖になる儀式　　6．その他（具体的に　　）

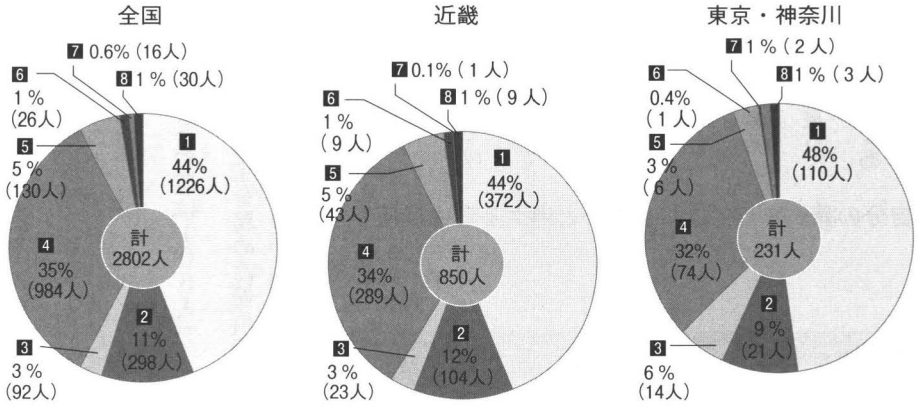
全国では「1．家族や友人などとの別れ」44％、「4．極楽浄土（あの世）へ送ってもらう」35％、「2．自分の冥福を祈ってもらう」11％である。この数値は、近畿、東京・神奈川ともほぼ同じである。

全国での「自分のお葬式の意味」と問（6）「家族のお葬式の意味」を比較してみる。

「自分のお葬式の意味」を「1．家族や友人との別れ」と捉えている人が43％と多くを占めているが、この数字は、家族のお葬式においてはお葬式の意味を「故人との別れ」と捉えた人が30％であったのと比較すると、13ポイント多い。これには、送った側と送られる側での立場の違いが表れていると考えられる。自分が送られる際には、お葬式に対して、浄土宗の教義とは離れた、「告別（お別れ）の式」という意味合いを強く見出していることがわかる。

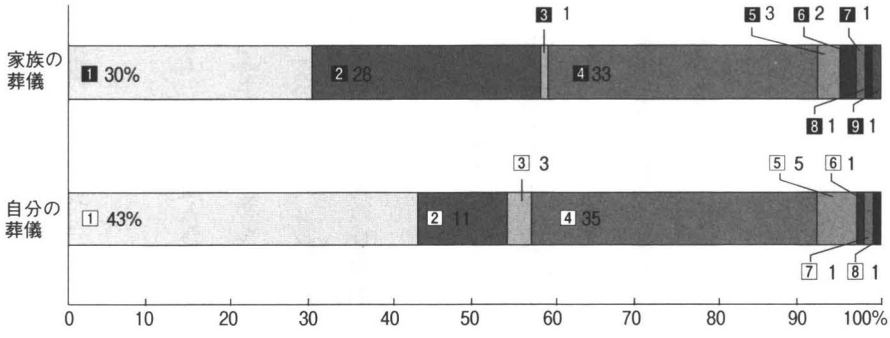
＊（8）で「3、してほしいとは思わない」と回答された方のみ、（8）—5に回答。

（8）—4　あなたは、自分のお葬式にはどのような意味があると思いますか。



1 家族や友人などとの別れ
2 自分の冥福を祈ってもらう
3 遺族の心を慰める
4 極楽浄土（あの世）へ送ってもらう
5 家の先祖になる儀式
6 その他
7 複数回答
8 NA

「家族の葬儀のもっとも大きな意味」と
自分の葬儀のもっともおおきな意味」比較



1 故人との別れ
2 故人の冥福を祈る
3 残された遺族の心を慰める
4 故人（霊）を極楽浄土（あの世）へ送る
5 故人を家の先祖にする儀式
6 故人が自分らしさを表現する最後の機会
7 その他
8 複数回答
9 NA

1 家族や友人との別れ
2 自分の冥福を祈ってもらう
3 遺族の心を慰める
4 極楽（あの世）へ送ってもらう
5 家の先祖になる儀式
6 その他
7 複数回答
8 NA

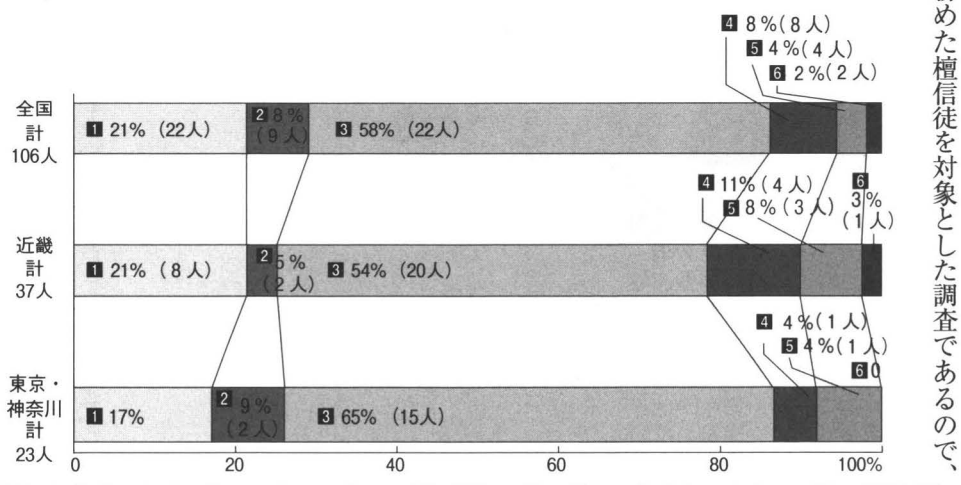
（8）—5　あなたは、自分の葬式をしてほしくないと考える理由は何ですか。

1. お葬式に意味を見出せないから
2. 費用が高いから
3. 遺族の手を煩わせたくないから
4. その他（具体的に　　）

この質問の回答者数は106人で、全体の3%ほどである。しかし、今回の調査は喪主を務めた檀信徒を対象とした調査であるので、この3%という割合は決して少ない数字ではない。

お葬式を行ってほしくない理由として最も多かったのは、「3. 遺族の手を煩わせたくないから」であり、全国58%、近畿では54%、東京・神奈川では65%である。「費用が高いから」と回答した人は、全国、近畿、東京・神奈川ともに10%未

（8）—5　あなたは、自分の葬式をしてほしくないと考える理由は何ですか。



1 お葬式に意味を見出せないから
2 費用が高いから
3 遺族の手を煩わせたくないから
4 その他
5 複数回答
6 NA

満であった。また、「1．お葬式に意味を見いだせないから」が全国、近畿、東京・神奈川いずれにおいても約2割を占めていることは注目に値する。

（9）あなたは、戒名を希望しますか、それとも生前の名前（俗名）のままで良いと思いますか。

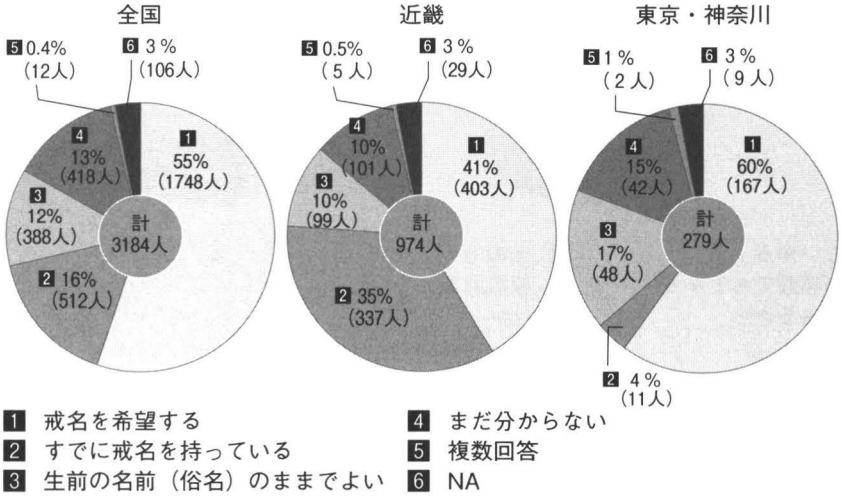
1．戒名を希望する→（10）にお進み下さい
2．すでに戒名を持っている→（10）にお進み下さい
3．生前の名前（俗名）のままでよい→（9）―1に回答してください
4．まだ分からない→（10）にお進み下さい

全国では、戒名を「1．希望する」55％、「2．持っている」16％、「3．俗名のままでよい」12％、「4．まだ分からない」13％となっている。本調査の特徴として、「回答者は寺とのつきあいが密である檀信徒」ということが想定されるので、「生前の名前のままでよい」と回答した人が12％いるということは大きな意味を持っていると考えなければならないだろう。近畿においては、「2．持っている」が35％と高く、これは五重相伝、授戒会の実施率の高さと関係していると思われる。

「1．希望する」「2．持っている」を足した数値で見ると、全国が71％、近畿が76％である一方、東京・神奈川では64％と低くなっている。これは東京・神奈川においては、「3．俗名でよい」が17％「4．まだ分からない」が15％と戒名に対して未確定、また否定的な考えを持っている人が多いことと関連しよう。

＊（9）で「3、生前の名前（俗名）のままでよい」と回答した人のみ（9）―1に回答。

（9）あなたは、戒名を希望しますか、それとも生前の名前（俗名）のままで良いと思いますか。

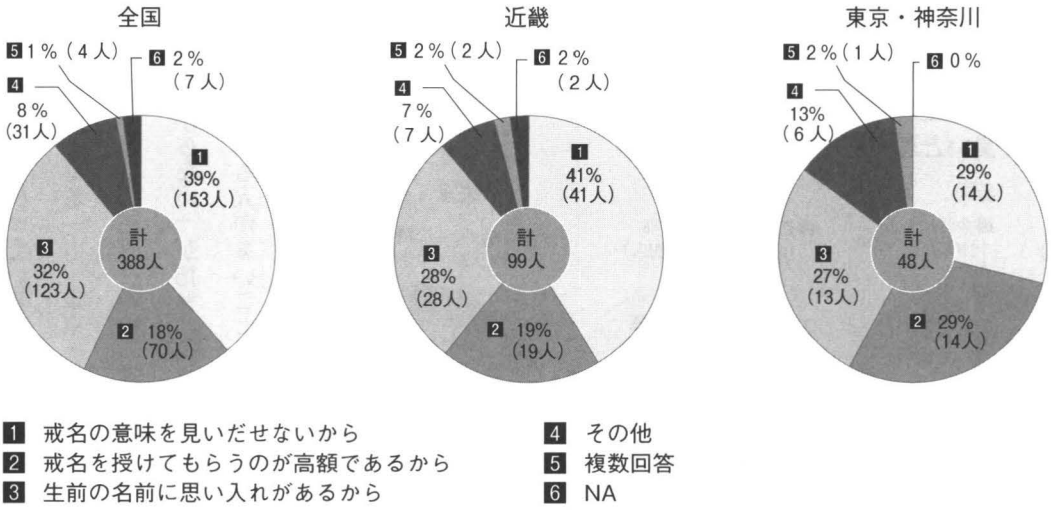


（9）—1 「生前の名前（俗名）のままでよい」と思う理由は何ですか。ひとつだけお答えください

1. 名の意味を見いだせないから
2. 戒名を授けてもらうのが高額であるから
3. 生前の名前に思い入れがあるから
4. その他（具体的に　　）

全国では「1. 戒名の意味を見いだせないから」39％、「2. 戒名を授けてもらうのが高額であるから」18％、「3. 生前の名前に思い入れがあるから」32％である。世間で言われるような「金額」の問題よりも、「戒名の意味を見出せない」ことに問題の根本があることは注目されよう。我々僧侶は戒名の意味をより丁寧に伝えていく必要があるといえるだろう。近畿はほぼ全国と同様の傾向を示しているが、東京・神奈川では、「2. 戒名を授けてもらうのが高額であるから」が29％と高くなっている。

（9）—1 「生前の名前（俗名）のままでよい」と思う理由は何ですか。ひとつだけお答えください



(10) あなたは亡くなった後、あなたの霊はどこに往くと思いますか。

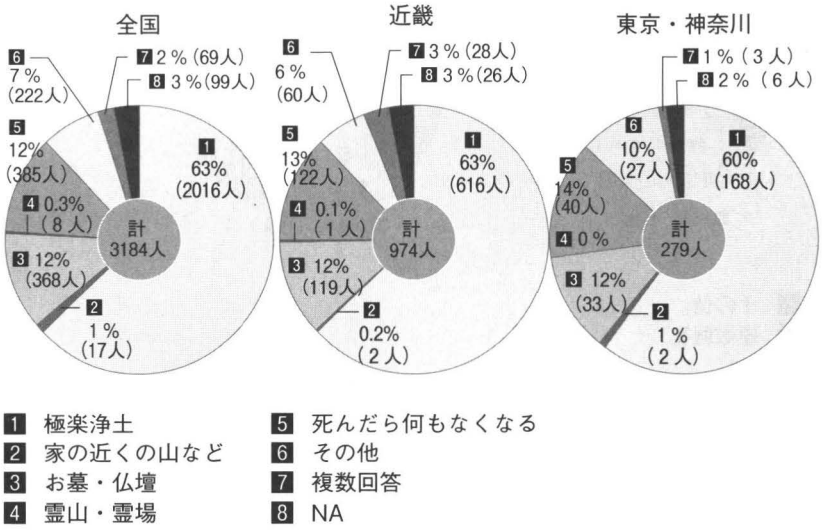
1. 極楽浄土　2. 家の近くの山など　3. お墓・仏壇
4. 霊山・霊場（具体的に　）　5. 死んだら何もなくなる
6. その他（具体的に　）

全国では、「1. 極楽浄土」が63%と多い。また「3. お墓・仏壇」が12%である。本調査は、身内のお葬式を喪主として体験した人に対してのアンケートであるにも関わらず「5. 死んだら何もなくなる」と回答した人が12%もいるということは注目すべきであろう。なお、地域による差はみられない。

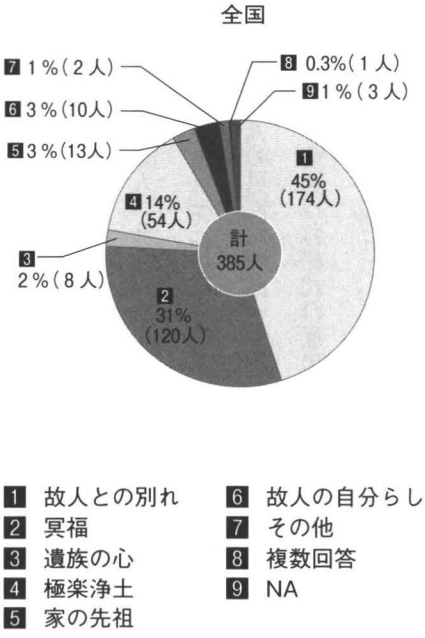
この「5. 何もなくなる」との回答に注目したい。この回答には地域による差は見られないので、全国の回答（385人）から詳しく見てみる。

男女別では男性86%（331人）、女性14%（54人）である。アンケート調査回答者の男女比が男性75%女性25%であるので、「5. 何もなくなる」と回答した人の男性比が高いことが分かる。回答者の年齢的特長は見られない。家族のお葬式の意味を尋ねた問（6）と掛け合わせて見ると、「故人との別れ」が45%と最も多く、「冥福を祈る」が31%となっている。このクロス集計によって、「冥福を祈る」ということの意味の多義性が明らかになったと思われる。設問設定時に、我々はこの言葉は「死者の霊のために死後の幸福を祈る」という宗教意識と想定したが、問（10）の質問に対して、霊の存在を否定する回答をした人のなかの31%もの人が「冥福を祈る」と回答しているということは、「冥福を祈る」という言葉が「死者への哀しみや悼みを表す」という儀礼的表現としても用いられていることが推測される。

(10) あなたは亡くなった後、あなたの霊はどこに往くと思いますか。



「死んだら何もなくなる」と回答した人にとっての「葬儀の意味」

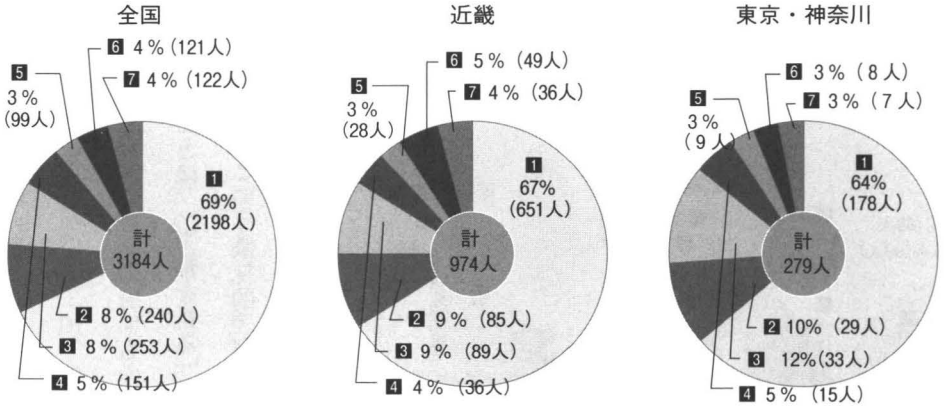


(11) あなたは、葬儀式の以下のどの部分が一番重要だと思いますか。

1. 僧侶の引導・読経　2. 焼香
3. 出棺前の別れの花入れ
4. 会葬者への挨拶　5. その他（具体的に　　）

全国では、「1. 僧侶の引導・読経」69%、「2. 焼香」8%、「3. 出棺前の別れの花入れ」8%、「4. 会葬者への挨拶」5%、「5. その他」3%となっている。近畿、東京・神奈川でも同じ傾向を示している。全体の約7割が「1. 僧侶の引導・読経」が一番重要だと回答していることから、「葬式に僧侶は必要」と考えていることがわかる。

(11) あなたは、葬儀式の以下のどの部分が一番重要だと思いますか。



まとめ

ここまで、全国での回答数値を基準として、近畿、東京・神奈川との設問ごとの比較分析を行なった。ここからは、本調査からみえたお葬式に関する変化について全体を通して分析する。なお、繰り返しになるが、本文中で「お葬式」という場合には、〈枕経〉〈通夜〉〈葬儀式・告別式〉などを含む一連の葬送全体を指し、「葬儀」という場合には、〈葬儀式・告別式〉を指すことにする。

1・地域共同体とお葬式　―地域共同体の衰退とお葬式の変化―

このアンケート調査を通じて、最も明確に表れていたのは、葬儀を行う場所に大きな変化が生じていることであった。葬祭場で葬儀を行った人が全国では40％、東京・神奈川では52％と過半数を占めていることが明らかとなった[1]。この理由として、「多くの人が集まることができる」「駐車場がある」といった施設の問題も大きな要因であるが、「近隣の手を煩わせたくない」という回答も多いことから、「お葬式は地域共同体で執り行うもの」という通念が希薄化していることが伺える[2]。また、「葬儀を行う場所」として当たり前の場所であった「自宅」が、少数派になってきている。近畿では54％と依然多数派となっているが、全国では31％、東京・神奈川に至っては14％のみである[3]。葬儀の場所を選ぶ理由として、施設の問題や、近隣・家族の手間の問題が大きな要素となっていることから考えると、自宅での葬儀が減り、葬祭場での葬儀が増加したことは、当然の傾向と言えるかもしれない。

しかしながら、この葬儀を行う場所が変化したということは、単に場所の変化という問題だけでなく、お葬式そのものの持つ意味合いが変化したことと関係していると考えられる。近畿では、自宅で葬儀を行う人（54％）が、東京・神奈川（14％）と比較すると圧倒的に高い。これは、近畿での葬儀の場所を決めた理由が「昔からの風習」を挙げた人が他地域に比べると突出して高く、また、お葬式の準備・運営に関わった人として「近隣地域」もしくは「親戚」を挙げた人は、合わせて58％で、東京・神奈川の数値23％と比較すると圧倒的に多いのである[4]。つまり、お葬式が近隣地域や親戚との関係で行われている近畿のほうが、「昔からの風習」を重んじる傾向があり、そのため、葬儀の場所も昔からの「自宅」で行う傾向があるようである。

お葬式における地域の講の関わりを見てみる。通夜を「僧侶の読経・地域の講の供養の両方にしてもらった」が、全国16％であったが、近畿では26％と多く、東京・神奈川ではわずか5％と大きな相違が見られた[5]。講の存在は、地域社会の結びつきの強さを表す一つ

の指針と考えると、近畿では地域社会の結びつきが強く、東京・神奈川では弱いといえるのかもしれない。この、地域社会の結びつきの強弱は、「葬儀の場所を決めた理由」「お葬式に呼びたい人の範囲」にも表れていた。「葬儀の場所を決めた理由」を尋ねた質問で、「近所の人々の手をわずらわせなくてすむ」と回答した人は全国では29％であったが、近畿では19％と少なく、一方、東京・神奈川では40％と多く、近畿と東京・神奈川では大きな相違が見られた[6]。また、自分の「お葬式に呼びたい範囲」を見ると、「地域社会」を含まない回答の合計が、全国では30％、近畿では25％であるのに対して、東京・神奈川では42％と高い数字を示していたのである[7]。

近年、葬儀社による「お葬式のサービス化」が益々進行している。葬祭場を所有する葬儀社が増加し、また通夜・葬儀において、多様な演出を目にするようになってきた。生花を使っての祭壇、通夜・葬儀の前後での音楽の生演奏、故人の思い出の品の展示など、もはや珍しいことではない。なお、全日本葬祭業協同組合と全日本冠婚葬祭互助協会によって、お葬式のサービスを向上させるための資格として平成7年（1995）から始まった「葬祭ディレクター」資格があるが、この資格の所有者が平成23年までには2万3604人とその数を増やしている[8]状況である。

隣組・葬式組といった、地域共同体の組織が果たす、お葬式における役割が減少するにつれて、お葬式の主体が葬儀社へと移行している。「お葬式の準備・運営に誰が最も深く関わったか」という質問では、全国では、「葬儀社」が46％とほぼ半数であった。一方、近畿では35％と低く、東京・神奈川では67％と高くなっている[9]。また、東京・神奈川では、葬儀の場所を決めたのも、「葬儀社の勧め」によった人が12％を占め、全国3％、近畿2％に比べて、葬儀社の影響が強いことがわかる[10]。互助会制度による生前からの契約や、葬祭場使用が契約に組み込まれている事例も、この数値に含まれていると思われる。

2、お葬式のもつ意味合いの変化

地域共同体の弱体化とともに、家族（世帯）の小規模化・世帯類型の変化、また産業形態が変化したことも、お葬式を変化させた要因として挙げられるだろう。平均世帯人員は昭和50年（1975）には3・35人であったのが、平成14年（2002）には2・74人となった。これを詳しく見ると、単独世帯と夫婦のみの世帯の割合が増加し（単独世帯―1975年、18・2％→2002年、23・5％。夫婦のみ世帯―1975年、11・8％→2002年、21・5％）、3世代世帯が減少（1975年、16・9％→2002年、10・0％）したのである[11]。このような家族の小規模化、世帯類型の変化は、意

識面においても家族関係の個人化を進展させ、例えば、親子関係においても、リタイア後の生活については、できるだけ子供に負担をかけたくないとする親の意識が強まっているという[12]。今回の調査では、自分のお葬式は「してほしくない」と回答した人は3％と少数であったが[13]（全国数値）、その理由として「遺族の手を煩わせたくない」という回答が6割を占めている[14]（全国数値）ことは、この意識面における家族関係の変化を表しているだろう。

また、昭和30年以降、農業・林業・漁業などの第一次産業が減少した。このことは、田畑、山林、漁業権などの「家産を継承する」ということが少なくなったということであり、それに伴って、伝統的な「家」という観念が弱くなったと考えられる。死者は「子孫の祀りを受けることによって、段々とイエを守護する先祖になっていく」という伝統的な先祖観の変化を招き、お葬式や法事の持つ意味を変化された要因となったと考えられる。

今回の調査では、女性回答者（＝女性で喪主を務めた方）が25％であり、その多くは夫がなくなったお葬式の喪主を務めるというパターンであった。伝統的な「家」制度からは、喪主は「家」の継承者である男性が中心的に務めるものであったことから考えると、大きな変化といえる。伝統的な「家」の葬儀から「家族・個人」のお葬式へと意識が変化したことが伺える。また、女性のお葬式への意識を見ると、女性のほうがお葬式に対してやや消極的な考えを持っていることが分かる。お葬式を「必ずして欲しい」割合は男性のほうが女性より高く、「して欲しいと思わない」は女性のほうが高い割合になっている。特に東京・神奈川の女性は、「必ずしてほしい」が28％という低い数字（男性は50％）であり、「して欲しいと思わない」は13％（男性は6％）と高い数字を示している[15]。なぜ「女性のほうがお葬式に対してやや消極的な考えを持っているか」ということは一概に説明することは難しい。しかし、お葬式が社会的意味合いを持っていることと関連すると思われる。つまり、男性と女性の社会との関わり方の違いが、お葬式に対する考え方として表れているのだろう。

「自分のお葬式の意味」を尋ねた質問では、「家族や友人などとの別れ」と回答した人が43％（全国）という高い数値であった[16]。これは、お葬式に対して、浄土宗の教義とは別の「告別（お別れ）の式」という意味合いを強く見出していることである。お葬式が、〈あの世に送る〉と〈告別（お別れ）〉という2つの意味を持っているとするならば、〈あの世に送る〉よりも、〈告別（お別れ）〉という意味が強く出てきているのではないか。

近年、通夜に多くの人が参列する状況が明らかになった。とくに東京・神奈川では「通夜の方が葬儀より参列者が多い」と回答した

人は72％にも上っている。[17] この現象は、「仕事の都合上、夜におこなう通夜のほうが参列しやすい」ということも大きく関係するだろう。しかし、それと同時に、一般参列者にとっては通夜と葬儀の区別が曖昧になったため、「通夜と葬儀式、同じようなものだから、都合の良いほうに行こう」という状況になったためではないだろうか。

ここまでで、檀信徒アンケートの結果から見えるお葬式の変化と喪主の意識についてみてきた。最後に以上の結果を踏まえたうえで、いくつかの提言をすることによって、まとめとしたい。

地域によって大きな違いがあるものの、通夜に多くの人が参列する状況が見られるようになっている。これは、通常昼に行われる葬儀よりも、夜に行われる通夜のほうが、参列しやすいからであろう。特に東京を中心とした首都圏では、通夜のほうが葬儀よりも多くの人が参列しているというのが現状である。通夜・葬儀を「布教の場」と捉えると、人が多く集まる通夜の場は非常に有効な布教の場と考えられる。

「戒名はいらない」と回答した人が、全国では12％、東京・神奈川に至っては17％もいた。この理由としては、「戒名の意味が見出せない」という回答が最も多かった。このことから、通夜や葬儀、また普段の教化活動の場で、戒名の意義について地道に説く必要があるといえよう。また、戒名不要派の中に金額を問題にしている人が2割いるということも、我々僧侶は謙虚に耳を傾ける必要があるだろう。[18]

自分の葬儀の意味を「家族や友人との別れ」と回答した人が43％と最も多く、「極楽へ送ってもらう」と回答した人は35％に留まった（全国）。[19] このことから、浄土宗の葬儀の本義的意味である「亡き人を極楽に送る」という意味を理解していない檀信徒が、少なからず存在すると考えられるのである。現在、僧侶を介在させない、無宗教の「お別れの会」がマスコミで多く取り上げられている。もしも、一般の人びとが葬儀に対して「この世、また、この世に残った人との別れ」という意味しか見出さないのであれば、そこに僧侶という存在が必要なくなるであろう。我々は、阿弥陀仏と極楽の存在、お念仏のみ教えをしっかりと伝え、そのうえでお葬式の意味を伝えることが不可欠である。

共同執筆者　主務／西城宗隆・大蔵健司・武田道生・
鍵小野（旧姓田中）和敬・
名和清隆・和田典善

（1）p17、問（5）参照
（2）p19、問（5）―2参照
（3）p17、問（5）参照
（4）p13、問（3）参照
（5）p15、（4）―1参照
（6）p19、問（5）―2参照
（7）p26、問（8）―3参照
（8）http://www.sousai-director.jp/
（9）p13、問（3）参照
（10）p18、問（5）―1参照
（11）2002国民生活基本調査
（12）日戸浩之／塩崎潤一『「続」変わりゆく日本人』野村総合研究所2001、p45―46
（13）p22、問（8）参照
（14）p28、問（8）―5参照
（15）p23、男女別「お葬式をしてほしいか」参照
（16）p27、問（8）―4参照
（17）p16、（4）―3参照
（18）p29～30、問（9）、（9）―1参照
（19）p27、問（8）―4参照

2 「寺院アンケート」分析

はじめに

「寺院アンケート」の目的

「寺院アンケート」調査の目的は、住職あるいはお葬式を勤めている教師から見た「お葬式の実態」と「檀信徒の死生観」の変容を分析するためである。先に行った「檀信徒アンケート」と比較して、檀信徒とお葬式を執行する僧侶との意識のズレなどを分析するために法話・戒名など檀信徒アンケートと共通する項目をいくつか設けた。

本アンケートは平成21年3月に浄土宗全寺院7045ヶ寺（無住職寺院等を除く）の住職、もしくはお葬式を執行している教師を対象に郵送によるアンケートを実施した。アンケートの回収方法は、回答者が直接郵送する形式を採用した。回答数は2818票（回収率40％、有効票2790票）であった。この回収率は従来のアンケート調査では見られない高い数値で寺院住職・教師が葬祭の問題に高い関心があることが回答率からも伺える結果となった。

また、お葬式に関する問題点とその対応策を記述する項目を設けたところ、回答者の約半数の1516人からの貴重なデータが収集することが出来た。なお、データの分析に関しては、煩雑を避けるため小数点以下第一位を四捨五入で表記する。

本文中で「お葬式」という場合には、「枕経」「通夜」「葬儀式・告別式」などを含む一連の葬送儀礼全体を指すことにした。この回答結果と第一次分析結果は平成22年9月1日発行の『教化研究』21号に掲載されている。ここではその第1次分析をうけて、教区別に分析、クロス分析、他のアンケートとの比較分析を加えた結果を「寺院アンケート報告」として掲載する。

（1）あなたの性別を教えてください。

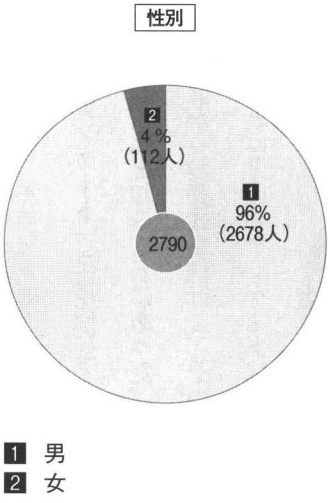
1．男 ……2678

2．女 ……112

※計 2790

今回のアンケート調査は、当該寺院において「お葬式」を勤めることが多い教師の方を対象として回答をお願いした。男女比は、男

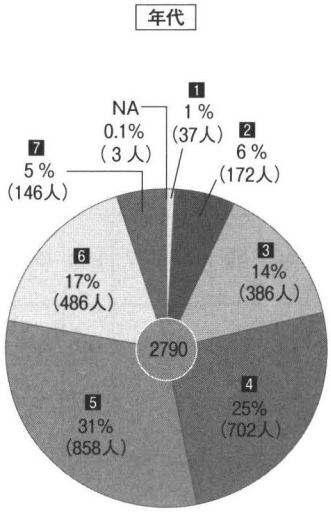
性が全有効回答の96・0％、女性が4・0％である。浄土宗教師全体の男女比（平成21年　4月1日現在）は全教師10、817名のうち9900名（91・5％）が男性であり、917名（8・5％）が女性である。浄土宗全体で女性教師は8％であるのに、今回の女性回答者の比率は半数に止まっている。お葬式に直接関わっている女性教師の割合が低いことが伺える。



（2）あなたの年齢を教えてください。

1. 20歳代　2. 30歳代　3. 40歳代
4. 50歳代　5. 60歳代　6. 70歳代
7. 80歳以上

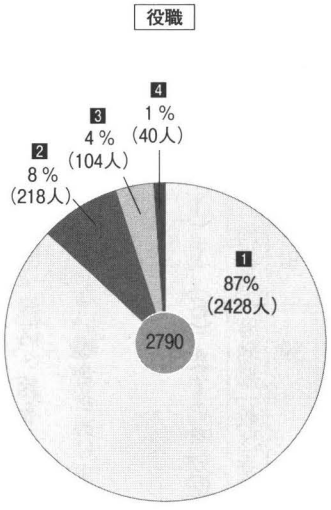
「お葬式」を勤めることが多い教師の年齢分布は、「60歳代」が31％と最も多く、次に「50歳代」の25％と続く。3位の「70歳代」（17％）以下を大きく離した。「60歳代」と「50歳代」の二世代を合わせると全体の56％と半数以上を占めている。



（3）あなたの役職は何ですか。

1. 住職
2. 兼務住職
3. 副住職
4. その他

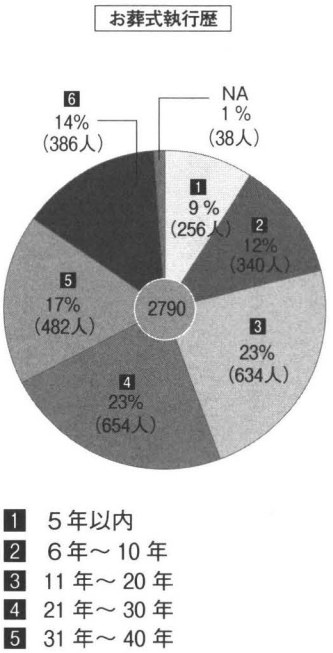
最も多いのは「住職」で、全有効回答の87％を占める。次いで「兼務住職」の8％、「副住職」の4％、「その他」と回答した40人の中には「前住職」・「職員」等が含まれている。



（4）あなたが貴寺院のお葬式を執行するようになってから、何年が経過していますか。

1．5年以内　2．6年～10年
3．11年～20年　4．21年～30年
5．31年～40年　6．41年以上

お葬式の執行歴では、「21年～30年」が23％、「11年～20年」も23％と、1位・2位が近接している。次いで3位は「31年～40年」17％である。21年以上お葬式を執行している人たちが、全体の55％を占めている。20年以下の人たちが45％と半分近くになる。前回の「檀信徒アンケート」を含めたアンケートの実施目的は、ここ20年の意識の変化を知ることにあった。そのため、今回の回答者が、20年以上前からお葬式を執行し、その変化を直接実感している人たちであることは今回のアンケートにとって有益であった。



（5）貴寺院の都道府県・教区・組をご記入ください。
※県名と教区名の一致しない場合がありますので、すべてご記入ください。

母数2790（1）～（6）までの有効回答

番号	教区	回答数	有効票	教区寺院数	有効票／教区寺院数
1	北海道第一	40	39	75	52・0％
2	北海道第二	30	30	66	45・5％
3	青森	56	56	113	49・6％
4	岩手	17	17	34	50・0％
5	秋田	15	15	48	31・3％
6	山形	36	36	119	30・3％
7	宮城	28	28	56	50・0％
8	福島	69	69	166	41・6％
9	群馬	28	28	75	37・3％
10	栃木	27	27	79	34・2％
11	茨城	49	49	101	48・5％
12	埼玉	64	64	149	43・0％
13	東京	183	183	436	42・0％
14	千葉	47	47	146	32・2％
15	神奈川	106	106	264	40・2％
16	山梨	19	19	91	20・9％
17	新潟	38	38	80	47・5％

18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39
富山	長野	静岡	三河	尾張	伊勢	伊賀	岐阜	石川	福井	滋賀	京都	奈良	和歌山	大阪	兵庫	鳥取	出雲	石見	岡山	広島	山口
22	81	88	80	59	99	22	28	20	37	223	233	103	89	214	107	20	25	15	12	34	47
22	81	88	76	58	98	22	28	20	36	219	231	100	89	214	105	20	25	15	11	34	46
68	236	162	319	216	253	49	89	41	86	472	598	316	197	485	240	42	56	51	28	75	140
32・4%	34・3%	54・3%	23・8%	26・9%	38・7%	44・9%	31・5%	48・8%	41・9%	46・4%	38・6%	31・6%	45・2%	44・1%	43・8%	47・6%	44・6%	29・4%	39・3%	45・3%	32・9%

40	41	42	43	44	45	46	47	48	総計
南海	愛媛	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	三州	空白	
17	28	109	40	21	30	21	25	17	2818
17	28	108	40	21	30	21	24	12	2790
52	69	260	90	67	89	57	44		
32・7%	40・6%	41・5%	44・4%	31・3%	33・7%	36・8%	54・5%		

各教区全てにわたってご回答を頂いた。40％という回収率は、浄土宗のアンケートとしては異例なほど高率であった。なお、役職無記入、設問無回答などの28票を無効票とし、有効票を2、790票とした。

＊お葬式全体についてお尋ねいたします。

(6) 貴寺院で最も多いのは、どのようなお葬式ですか。（1つだけお答えください）

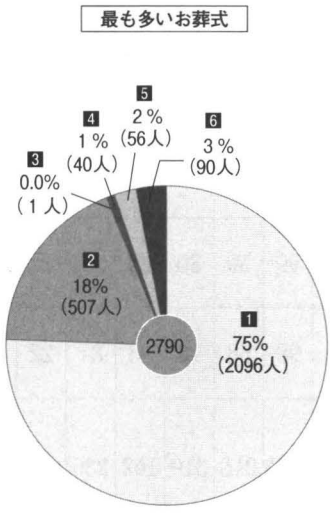
1. 枕経・通夜・葬儀式ともに行なう
2. 通夜・葬儀式を行なう
3. 通夜のみ行なう

4. 葬儀式のみ行なう

5. その他（　　）

6. 従来からお葬式は行なっていない

「1. 枕経・通夜・葬儀式ともに行う」と回答した人は75％で、多くの寺院が枕経・通夜・葬儀式ともに行なっている。「2. 通夜・葬儀式を行う」という回答が18％であり、枕経を行わない寺院が2割近くあるが、合計93％の寺院は、通夜・葬儀を行っている。また数は少ないが、葬儀は行なわず「3. 通夜のみ行なう」、あるいは通夜は行なわず「4. 葬儀式のみ行なう」との回答も見られた。これは歴史的な本寺と末寺との関係や、通夜を地域の「講」等が行なっているケースが考えられる。「6. 従来からお葬式は行なっていない」との回答も3％（90人）あるが、これは旧来檀家を持たない寺院、伝統的にお葬式を行わない寺院等がこれに該当するのではないだろうか。



1 枕経・通夜・葬儀式ともに行なう
2 通夜・葬儀式を行なう
3 通夜のみ行なう
4 葬儀式のみ行なう
5 その他
6 従来からお葬式は行なっていない

なお、次の問(7)以下の設問は、この90人を差し引き、お葬式を行っている2700票をもとに分析する。

(7) 貴寺院で最も多いのは、どのような方のお葬式ですか。（1つだけお答えください）

1. 檀信徒

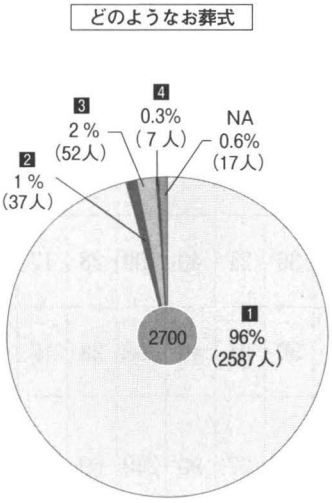
2. 他寺院（本寺・末寺等）の檀信徒

3. 葬祭業者等の紹介

4. その他（　　）

96％と、ほとんどの寺院は「1. 檀信徒」のお葬式が最も多いと回答している。「もっとも多いのは」という尋ね方なので、当然のことながら檀信徒の葬儀が一番多いといえる。

一方、「3. 葬祭業者の紹介」によるお葬式が最も多い寺院が52（2％）ある。ここには現在の菩提寺を持たない人たちや、郷里を離



1 檀信徒
2 他寺院(本寺・末寺等)の檀信徒
3 葬祭業者等の紹介
4 その他

れた檀信徒などのお葬式の実態が伺える。「3. 葬儀業者からの紹介」は東京や大阪などの大都市だけでなく全国的に見られる。特に、三州教区沖縄組も有効回答8のうち7が「3. 葬儀業者からの紹介」で特徴的である。

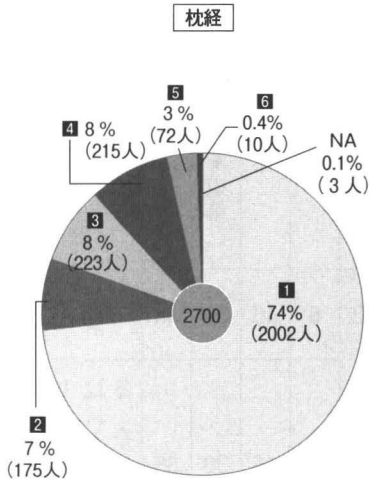
＊枕経についてお尋ねいたします。

(8) 貴寺院では枕経を勤めていますか。(1つだけお答えください)

1. 必ず、もしくはほとんど勤める
2. 勤めることが多い
3. 勤めることが少ない
4. ほとんど勤めない
5. 全く勤めない
6. その他 (　　)

「1. 必ず、もしくはほとんど勤める」が74%と最も多く、「2. 勤めることが多い」の7%含めると、8割が枕経を勤めていることがわかる。

しかし、「3. 勤めることが少ない」が8%、「4. ほとんど勤めない」が8%、「5. 全く勤めない」が3%と、少数ながら枕経を勤めることが少ない寺院がある。主に関東圏に集中しており、東京・埼玉では枕経を勤めることが少ないのは8割以上であり、群馬・栃木・茨城は7割前後である。ただし、関東圏でも千葉・神奈川はおよそ5割の寺院で勤めている。



1 必ず、もしくはほとんど勤める
2 勤めることが多い
3 勤めることが少ない
4 ほとんど勤めない
5 全く勤めない
6 その他

枕経勤めるは＝「1.」+「2.」
枕経勤めない派＝「3.」+「4.」+「5.」

教区	枕経勤める派	枕経勤めない派	教区	枕経勤める派	枕経勤めない派
北海道第一	100.0%	0.0%	岐阜	95.5%	4.5%
北海道第二	100.0%	0.0%	石川	94.7%	5.3%
青森	89.1%	10.9%	福井	100.0%	0.0%
岩手	73.3%	26.7%	滋賀	99.5%	0.0%
秋田	100.0%	0.0%	京都	99.1%	0.4%
山形	100.0%	0.0%	奈良	100.0%	0.0%
宮城	100.0%	0.0%	和歌山	77.0%	23.0%
福島	66.7%	33.3%	大阪	94.4%	5.1%

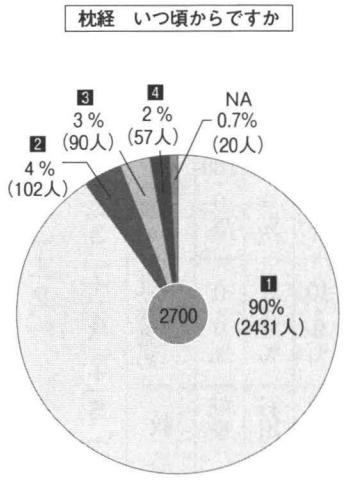
(8)—1　それはいつ頃からですか。（1つだけお答えください）

1. 従来（20年以上前）から
2. 20年ほど前から
3. 10年ほど前から
4. その他（　　）

	1	2	3	4
群馬	28・6％	67・9％	1・9％	1・9％
栃木	25・9％	74・1％	0・0％	45・0％
茨城	29・2％	70・8％	0・0％	4・2％
埼玉	14・1％	85・9％	0・0％	0・0％
東京	15・2％	84・8％	0・0％	0・0％
千葉	48・9％	48・9％	2・2％	6・3％
神奈川	51・9％	48・1％	0・0％	2・2％
山梨	84・2％	15・8％	0・0％	25・0％
新潟	92・1％	7・9％	0・0％	46・4％
富山	95・2％	0・0％	4・8％	1・9％
長野	80・8％	15・1％	4・1％	0・0％
静岡	75・0％	25・0％	0・0％	0・0％
三河	98・4％	1・6％	0・0％	3・3％
尾張	100・0％	0・0％	5・0％	0・0％
伊勢	98・9％	1・1％	0・0％	45・8％
伊賀	100・0％	0・0％	0・0％	40・0％
兵庫	98・1％	1・9％	0・0％	0・0％
鳥取	55・0％	45・0％	0・0％	0・0％
出雲	95・8％	4・2％	0・0％	0・0％
石見	100・0％	0・0％	0・0％	0・0％
岡山	100・0％	0・0％	0・0％	0・0％
広島	93・8％	6・3％	0・0％	0・0％
山口	97・8％	2・2％	0・0％	0・0％
南海	75・0％	25・0％	0・0％	0・0％
愛媛	50・0％	46・4％	3・6％	0・0％
福岡	98・1％	1・9％	0・0％	0・0％
佐賀	100・0％	0・0％	0・0％	0・0％
長崎	100・0％	0・0％	0・0％	0・0％
熊本	93・3％	3・3％	3・3％	0・0％
大分	95・2％	0・0％	4・8％	0・0％
三州	50・0％	45・8％	4・2％	0・0％
空白	60・0％	40・0％	0・0％	0・0％

「1. 従来（20年以上前）から」が90％と大半を占めている。逆に、近年になってからの変化は「2. 20年ほど前から」が4％、「3. 10年ほど前から」が3％と少ない。

「枕経を勤めることが多い寺院」の96％が「従来から」と回答しており、枕経は伝統的に継続していることがわかる。



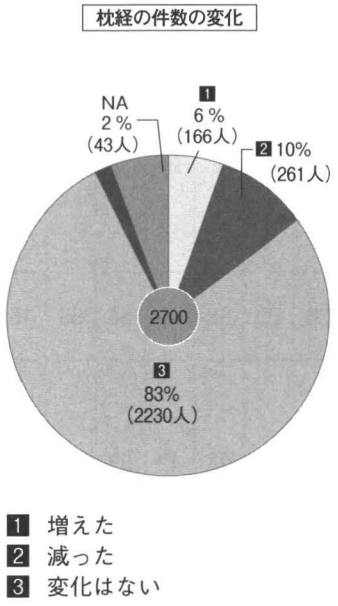
教区番号	教区	集計	1. 必ずもしくはほとんど勤める 全体	集計／必ずもしくはほとんど勤める 全体
1	北海道第一	38	38	100・0％
2	北海道第二	30	30	100・0％
3	青森	46	46	100・0％
4	岩手	6	6	100・0％
5	秋田	13	15	86・7％
6	山形	36	36	100・0％
7	宮城	25	28	89・3％

29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8
京都	滋賀	福井	石川	岐阜	伊賀	伊勢	尾張	三河	静岡	長野	富山	新潟	山梨	神奈川	千葉	東京	埼玉	茨城	栃木	群馬	福島
205	206	36	16	20	22	88	40	54	53	46	20	30	9	21	12	7	1	3	5	4	41
212	210	36	16	20	22	93	42	57	56	51	20	32	14	28	13	9	2	7	5	5	43
96・7%	98・1%	100・0%	100・0%	100・0%	100・0%	94・6%	95・2%	94・7%	94・6%	90・2%	100・0%	93・8%	64・3%	75・0%	92・3%	77・8%	50・0%	42・9%	100・0%	80・0%	95・3%

総計	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30
	空白	三州	大分	熊本	長崎	佐賀	福岡	愛媛	南海	山口	広島	岡山	石見	出雲	鳥取	兵庫	大阪	和歌山	奈良
1924	6	11	19	23	20	39	97	9	12	43	27	8	14	22	8	96	183	63	91
2002	6	11	20	25	21	39	98	10	12	44	27	10	15	23	9	99	183	64	94
96・1%	100・0%	100・0%	95・0%	92・0%	95・2%	100・0%	99・0%	90・0%	100・0%	97・7%	100・0%	80・0%	93・3%	95・7%	88・9%	97・0%	100・0%	98・4%	96・8%

(8)—2　枕経の件数に変化はありましたか。

1．増えた
2．減った
3．変化はない（※枕経を勤めていない場合も含む）



(8)—2枕経増えた×(8)—1「20年ほど前から」の表

(8)「必ずもしくはほとんど務める」×(8)—1「20年前から」

教区番号	教区	集計	1．必ずもしくはほとんど勤める 全体	集計／必ずもしくはほとんど勤める 全体
5	秋田	1	15	6・7％
7	宮城	2	28	7・1％
8	福島	1	43	2・3％
11	茨城	2	7	28・6％
14	千葉	1	13	7・7％
16	山梨	2	14	14・3％
17	新潟	2	32	6・3％

総計	46	45	44	42	37	35	29	28	23	22	21	20	19
	大分	熊本	長崎	福岡	岡山	出雲	京都	滋賀	伊勢	尾張	三河	静岡	長野
29	1	2	1	1	1	1	1	1	2	1	1	2	3
2002	20	25	21	98	10	23	212	210	93	42	57	56	51
1・4％	5・0％	8・0％	4・8％	1・0％	10・0％	4・3％	0・5％	0・5％	2・2％	2・4％	1・8％	3・6％	5・9％

(8)—2枕経増えた×(8)—1「10年ほど前から」の表

教区番号	教区	集計	1．必ずもしくはほとんど勤める 全体	集計／必ずもしくはほとんど勤める 全体
7	宮城	1	28	3・6％
8	福島	1	43	2・3％
9	群馬	1	5	20・0％
11	茨城	1	7	14・3％

13	東京	1	9	11・1%	総計	41	愛媛	1	10	10・0%	1・2%
15	神奈川	4	28	14・3%		39	山口	1	44	2・3%	
16	山梨	1	14	7・1%		37	岡山	1	10	10・0%	
19	長野	2	51	3・9%		36	石見	1	15	6・7%	
20	静岡	1	56	1・8%		30	奈良	2	94	2・1%	
21	三河	1	57	1・8%		29	京都	2	212	0・9%	
22	尾張	1	42	2・4%		28	滋賀	2	210	1・0%	

「3．変化はない（※枕経を勤めていない場合も含む）」が83％と多い。その中には、もともと勤めていて変化がない地域と、勤めていなくて変化がない地域など、地域性が大きく関わっていることが推測される。しかし、「1．増えた」が6％、「2．減った」が10％と1割ほどではあるが、枕経に関しては変化が起こっていることが分かる。

長野で12％、福岡で9％が増えたと回答しており、首都圏でも東京で7％、神奈川で8％と、枕経を行う寺院が近年増えてきていることが分かる。また、「問（8）―1」の「4．その他」にあったコメントでは、自分が住職になってから行うようになったとの記述もあり住職の交代がそのきっかけとなった例も見られる。

（8）―2で1．増えた　と回答した人のみお答えください。

（8）―3　その最大の理由はなんですか。（1つだけお答えください）

1．依頼が増えたから

2．僧侶の人手・時間などの条件が整ったから

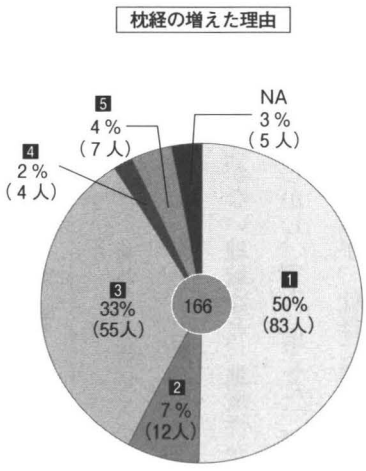
3．積極的教化策として行なっているから

4．周りの寺院がそのようにしているから

5．その他（　　）

（8）―2で「増えた」と答えた166人のうち「1．依頼が増えたから」が50％で半数を占め、檀信徒の自然増による増加や、檀信徒からの依頼の増加がわかる。また「3．積極的教化策として行なっているから」が33％あり、3分の1の寺院が枕経を教化策として進めていることがわかる。「2．僧侶の人手時間などの条件が整ったから」は7％、「4．周りの寺院がそのようにしているから」は2％

と、人的条件や近隣寺院の活動の影響は少ない。



1 依頼が増えたから
2 僧侶の人手・時間などの条件が整ったから
3 積極的教化策として行なっているから
4 周りの寺院がそのようにしているから
5 その他

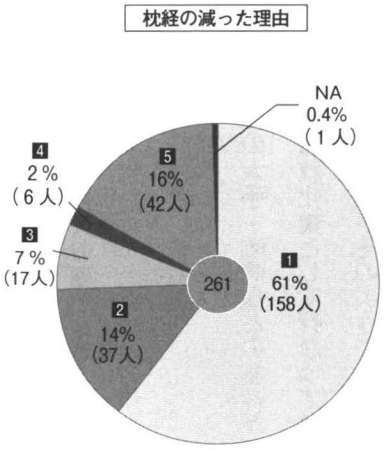
(8)—2で2. 減った と回答した人のみお答えください。

(8)—4 その最大の理由はなんですか。(1つだけお答えください)

1. 依頼が減ったから
2. 依頼が無くなったから
3. 僧侶の人手・時間などの事情
4. 周りの寺院がそのようにしているから
5. その他 (　　)

(8)—2で「減った」と答えた261件の中「1. 依頼が減ったから」が61%で最も多く、ついで「2. 依頼が無くなったから」は14%と、合わせて75%が寺院側の理由ではなく、依頼の減少であると答えている。設問「(8)—3」の増えた理由と同様、双方とも檀信徒からの依頼という点で共通している。

枕経が減った「5. その他」の理由として一番多かったのは「病院から自宅に戻らず斎場に遺体を安置する習慣」といった回答であり、葬祭場が完備されることによって枕経が出来ない状況が多くなってきていることがわかる。また「檀信徒の居住地が広範囲になった」との記述もあり、人口の流動が枕経に影響を与えていることがうかがえる。



1 依頼が減ったから
2 依頼が無くなったから
3 僧侶の人手・時間などの事情
4 周りの寺院がそのようにしているから
5 その他

＊通夜についてお尋ねいたします。

(9) 貴寺院では通夜を勤めていますか。(1つだけお答えください)

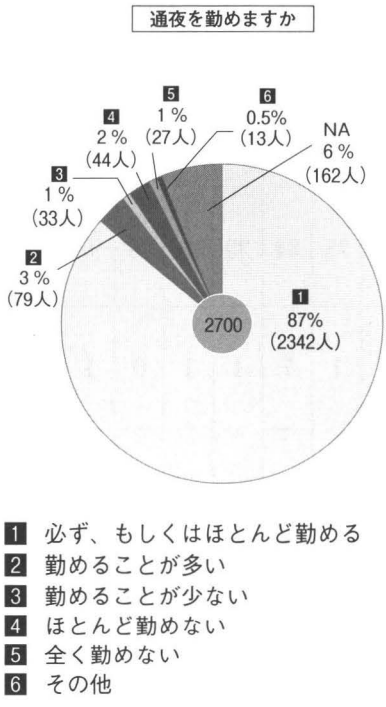
1. 必ず、もしくはほとんど勤める
2. 勤めることが多い
3. 勤めることが少ない
4. ほとんど勤めない

5．全く勤めない

6．その他（　　）

「1．必ず、もしくはほとんど勤める」が87％で最も多く、「2．勤めることが多い」が3％と、合計で9割以上が通夜を勤めており、これが浄土宗寺院の大勢を占めている。

しかし、「4．ほとんど勤めない」が2％、ついで「3．勤めることが少ない」が1％、「5．全く勤めない」が1％と、少数ながら通夜を勤めない寺院があることが分かる。「6．その他」は1％であるが、そのコメントの中では山形教区のように、一般に言う「通夜」よりも、入棺式（納棺）に重点を置いている。また、沖縄では通夜に僧侶を呼ぶ習慣がないと回答している。そして、通夜をやっていない地域で特徴的なのは、三州教区沖縄組、福島教区会津組、山形教区などである。檀信徒アンケートでも「僧侶を招かずに地域の講に供養をしてもらった」の回答3件はいずれも福島の会津地域であった。また枕経と葬儀式のみ行う地域もあり、お葬式のなかで通夜を勤めるか勤めないかは地域の伝統や習慣によることが多いようである。



通夜勤める派

教区番号	教区	1．必ずもしくはほとんど勤める	2．勤めることが多い	勤める派	教区内有効回答	集計／教区内有効回答
1	北海道第一	36	0	36	39	92・3％
2	北海道第二	27	0	27	30	90・0％
3	青森	49	1	50	55	90・9％
4	岩手	7	4	11	15	73・3％
5	秋田	6	5	11	15	73・3％
6	山形	23	2	25	36	69・4％
7	宮城	24	0	24	28	85・7％
8	福島	40	1	41	69	59・4％
9	群馬	24	2	26	28	92・9％
10	栃木	26	0	26	27	96・3％
11	茨城	37	6	43	48	89・6％
12	埼玉	59	4	63	64	98・4％
13	東京	161	9	170	178	95・5％

35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
出雲	鳥取	兵庫	大阪	和歌山	奈良	京都	滋賀	福井	石川	岐阜	伊賀	伊勢	尾張	三河	静岡	長野	富山	新潟	山梨	神奈川	千葉
19	17	86	200	82	89	202	194	34	17	19	19	82	40	55	75	54	20	31	19	97	43
0	2	3	2	1	0	2	2	0	0	0	0	1	0	1	1	7	1	1	0	1	1
19	19	89	202	83	89	204	196	34	17	19	19	83	40	56	76	61	21	32	19	98	44
24	20	104	214	87	94	225	215	36	19	22	22	95	44	61	84	73	21	38	19	106	47
79・2%	95・0%	85・6%	94・4%	95・4%	94・7%	90・7%	91・2%	94・4%	89・5%	86・4%	86・4%	87・4%	90・9%	91・8%	90・5%	83・6%	100・0%	84・2%	100・0%	92・5%	93・6%

通夜勤めない派

教区番号	教区	3. 通夜勤めることと少ない	4. 通夜勤めないほとんど	5. 通夜全く勤めない	勤めない派	教区内有効回答	集計／教区内有効回答
1	北海道第一	0	0	0	0	39	0・0%
2	北海道第二	0	0	0	0	30	0・0%
3	青森	1	0	0	1	55	1・8%

総計	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36
	空白	三州	大分	熊本	長崎	佐賀	福岡	愛媛	南海	山口	広島	岡山	石見
2342	8	13	18	28	13	32	94	24	11	38	29	9	12
79	2	1	0	0	2	2	4	3	1	4	0	0	0
2421	10	14	18	28	15	34	98	27	12	42	29	9	12
2700	10	24	21	30	21	40	104	28	16	46	32	11	15
89・7%	100・0%	58・3%	85・7%	93・3%	71・4%	85・0%	94・2%	96・4%	75・0%	91・3%	90・6%	81・8%	80・0%

25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4
岐阜	伊賀	伊勢	尾張	三河	静岡	長野	富山	新潟	山梨	神奈川	千葉	東京	埼玉	茨城	栃木	群馬	福島	宮城	山形	秋田	岩手
0	1	1	0	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	4	0	3	1	1
0	1	3	0	0	1	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	11	0	1	1	2
1	0	1	1	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0	0	2	0
1	2	5	1	1	3	4	0	3	0	0	0	0	0	2	0	1	23	0	4	4	3
22	22	95	44	61	84	73	21	38	19	106	47	178	64	48	27	28	69	28	36	15	15
4・5%	9・1%	5・3%	2・3%	1・6%	3・6%	5・5%	0・0%	7・9%	0・0%	0・0%	0・0%	0・0%	0・0%	4・2%	0・0%	3・6%	33・3%	0・0%	11・1%	26・7%	20・0%

47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26
三州	大分	熊本	長崎	佐賀	福岡	愛媛	南海	山口	広島	岡山	石見	出雲	鳥取	兵庫	大阪	和歌山	奈良	京都	滋賀	福井	石川
0	1	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	1	5	0	0	0	1	2	0	1
6	0	0	3	0	0	0	1	1	0	0	0	2	0	4	1	0	0	2	1	0	0
1	1	0	1	0	2	0	0	0	0	1	0	1	0	2	0	1	0	0	1	0	0
7	2	0	4	1	3	0	2	1	0	1	0	3	1	11	1	1	0	3	4	0	1
24	21	30	21	40	104	28	16	46	32	11	15	24	20	104	214	87	94	225	215	36	19
29・2%	9・5%	0・0%	19・0%	2・5%	2・9%	0・0%	12・5%	2・2%	0・0%	9・1%	0・0%	12・5%	5・0%	10・6%	0・5%	1・1%	0・0%	1・3%	1・9%	0・0%	5・3%

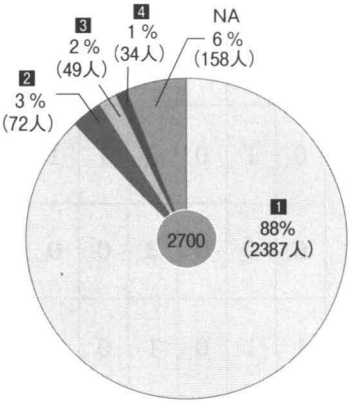
(9)—1　それはいつ頃からですか。(1つだけお答えください)

1. **従来(20年以上前)から**
2. **20年ほど前から**
3. **10年ほど前から**
4. **その他(　　)**

総計	48
	空白
33	0
44	0
27	0
104	0
2700	10
3・9%	0・0%

「1. 従来(20年以上前)から」が88%と高率で、通夜を勤める、勤めないにかかわらず、大多数の寺院が変化はないと回答している。これに対して、少数ではあるが、「2. 20年ほど前から」が3%、「3. 10年ほど前から」が2%と、最近20年間で変化が生じている地域がある。「従来勤めていた通夜を勤めなくなった」という回答はほとんど見られず、変化が生じているのは「従来勤めていなかった通夜を勤めるようになった」である。また、勤めるようになる場合には「必ず勤める」に変化する傾向がある。その理由は、明らかにはできないが、従来通夜を勤めていた講が衰退してきたことや、葬儀社が介在することによって僧侶の勤める通夜が一般化してきたことなどが考えられる。

通夜　いつ頃からですか



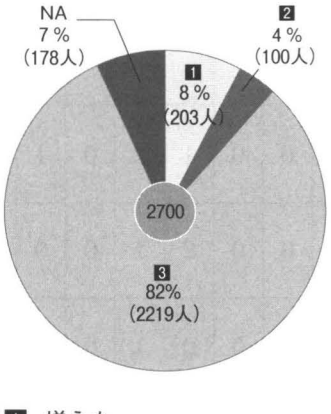
1 従来(20年以上前)から
2 20年ほど前から
3 10年ほど前から
4 その他

(9)—2　通夜の件数に変化はありましたか。

1. **増えた**
2. **減った**
3. **変化はない(※通夜を勤めていない場合も含む)**

「3. 変化はない(※通夜を勤めていない場合も含む)」が82%で最も多く、大半の場合変化がないことがわかる。ただし、変化が生じた場合は、「1. 増えた」が8%で、「2. 減った」4%の倍である。

通夜　件数の変化



1 増えた
2 減った
3 変化はない

り、増加の傾向が見られる。その理由は、明らかではないが、従来勤めなかった通夜を勤める地域が増えたための増加、また高齢者人口の増加に伴い死亡者数が増えたことなどが考えられる。

1．増えた　と回答した人のみお答えください。

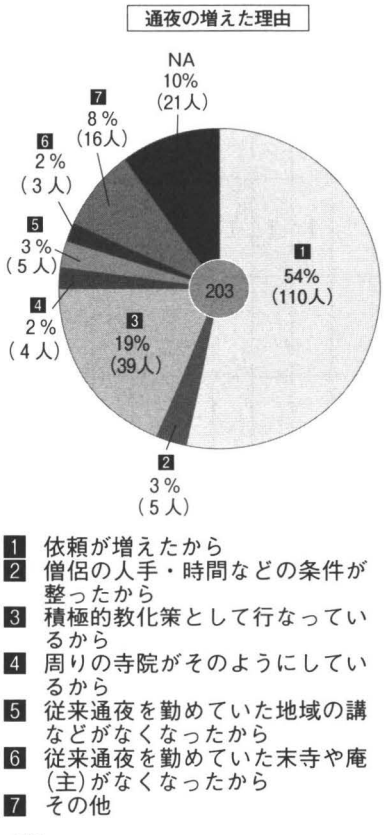
(9)―3　その最大の理由はなんですか。（1つだけお答えください）

1．依頼が増えたから
2．僧侶の人手・時間などの条件が整ったから
3．積極的教化策として行なっているから
4．周りの寺院がそのようにしているから
5．従来通夜を勤めていた地域の講などがなくなったから
6．従来通夜を勤めていた末寺や庵（主）がなくなったから
7．その他（　　）

(9)―2で「増えた」と答えた203件のうち「1．依頼が増えたから」が54％と半数を占めている。ついで「3．積極的教化策として行なっているから」が19％となっている。通夜を教化のために従来よりも積極的、もしくは今まで行なってこなかったのに行なうようになった寺院が、「増えた」寺院の約2割を占めることが分かる。「2．僧侶の人出・時間などの条件が整ったから」と「5．従来通夜を勤めていた地域の講などがなくなったから」がそれぞれ3％で、寺院側または地域の事情による増加である。

「地域の講などがなくなったから」の3％については、ここ近年の地域社会の弱体化、あるいは講自体の衰退や消滅が進行し、通夜の執行者が僧侶に移行したことが増加の一因になっているとも考えられる。これを選択した回答が多いのは、茨城教区絹組、福岡教区粕屋組、山口教区周央組、兵庫教区摂陽東組、青森教区三八組などであり、この地域では講などのあり方の変化が生じていると推測される。

なお、「4．周りの寺院がそのようにしているから」が2％、「6．従来通夜を勤めていた末寺や庵（主）がなくなったから」が2％である。「6．従来通夜を勤めていた末寺や庵（主）がなくなったから」の回答が3件あるが、いずれも青森教区の東青組である。

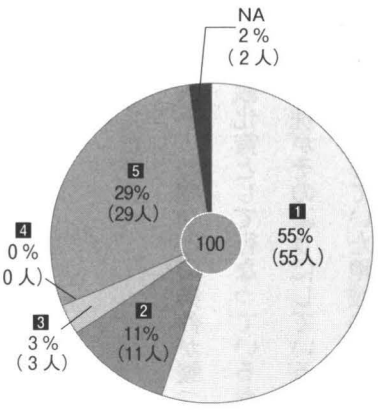


2. 減った　と回答した人のみお答えください。

(9)―4　その最大の理由はなんですか。（1つだけお答えください）

1. 依頼が減ったから
2. 依頼が無くなったから
3. 僧侶の人手・時間などの事情
4. 周りの寺院がそのようにしているから
5. その他（　　）

通夜の減った理由



1 依頼が減ったから
2 依頼が無くなったから
3 僧侶の人手・時間などの事情
4 周りの寺院がそのようにしているから
5 その他

(9)―4×(9)「依頼が減った」地域の通夜の執行状況

教区番号	教区	教区	1. 必ず、もしくはほとんど勤める	2. 勤めることが多い	3. 勤めることが少ない	4. ほとんど勤めない	5. 全く勤めない	6. その他
5	3	秋田		1	1			
	4	青森						

総計	48	46	43	40	39	36	33	32	31	30	29	28	26	23	21	20	19	17	15	14	13	12	11
	空白	大分	佐賀	南海	山口	石見	兵庫	大阪	和歌山	奈良	京都	滋賀	石川	伊勢	三河	静岡	長野	新潟	神奈川	千葉	東京	埼玉	茨城
45			2	1	2	1	2	9	1	1	1	1	1			1	1	1	3	1	10	1	1
6	1		1											1							2		
4		1											1		1								

「減った」と答えた100件の中「依頼が減ったから」が55%で最も多く、次いで「その他」29%、「依頼が無くなったから」11%

となっており、「その他」の数が多い。「僧侶の人手・時間などの事情」は3％と少数である。地域社会の過疎化や、檀家数の減少とは別に、葬儀だけ行ない通夜は行わないなどのお葬式の簡略化が考えられる。

また過疎化による人口減少で、檀家も減少して依頼が減ったのではないかと考えられる、また自由記述には「お金」「生活保護水準の家庭が増えた」との記述も見られる。

一方都市では簡略化の傾向が考えられる。全国で通夜が減ったと回答しているのは100であるが特に東京では20、大阪では10で通夜の減少が多く見られる。

大都市で通夜を勤めないことが増え始めているが、お葬式の簡略化、葬儀社主導で始められた通夜を行わないいわゆる「ワンデーセレモニー」との関係も考えられる。こういった大都市での通夜の減少は、今後全国へも波及する可能性を含んだ重要な調査結果だといえる。

(10) 貴寺院で最も多いのは、どのような初七日法要ですか。（1つだけお答えください）

1. 正当日に行なう（逮夜参りを含む）

2. 繰り上げて葬儀式と同日中に行なう（葬儀式とは時間的に間をおいて行なう）

3. 繰り上げて葬儀式に引き続いて（葬儀中に）行なう

4. 初七日法要は行なわない

5. その他（　　）

いつ初七日法要を行うかについてであるが、全体では、「1. 正当日に行なう」が22％、「2. 繰り上げて葬儀式と同日中に行う」が57％、「3. 繰り上げて葬儀式に引き続き行う」が12％、「4. 初七日は行わない」が1％であった。「2.」と「3.」を合わせた約7割が葬儀当日に初七日法要を行っている。

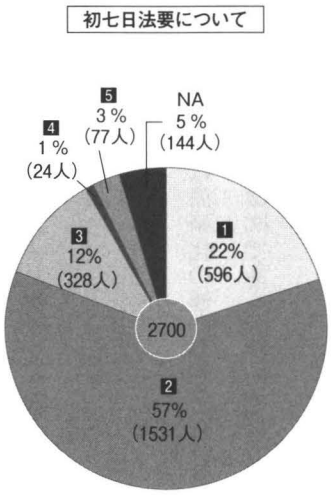
次に、これらを詳しく見ていくと、「1. 正当日に行なう」と回答したのが高い地域は、北海道第二（80％）佐賀（80％）長崎（76％）北海道第一（72％）と北海道と九州が多く、その他の比較的数値が高いところは、青森、秋田、山形などの東北地方であった。

また、「2. 繰り上げて同日中に行う」との回答が高い地域は、大阪（91％）三河（87％）富山（86％）尾張（84％）であり、全国的にも57％と半数を超える寺院が同日中と回答している。しかしながら、ここ10～20年の間に、繰り上げて同日中に行なう地域が増えており、本来正当日であったものが、檀信徒の要望により同日中への変化が見える。

「3. 繰り上げて葬儀式に引き続いて行う」という回答数が高い

地域は、長野（77％）茨城（60％）埼玉（50％）千葉（49％）であった。特に長野の場合は、火葬後の葬儀式となる場合が多く、その後のお斉で、参列頂いた方におもてなしをするという意味合いが強く、式中に繰り込むことで、ゆっくりとして頂きたいという配慮からかと思われる。

次に「4．初七日法要は行なわない」という回答が多い地域は鳥取（15％）伊賀（14％）福島（12％）であるが、鳥取・伊賀は有効票そのものも少ないため詳細な理由は不明である。ただし、福島に関しては、会津地方での数値が特に高く、初七日法要は行なわないということは、地域的な習慣であろうと推察される。



1 正当日に行なう（逮夜参りを含む）
2 繰り上げて葬儀式と同日中に行なう（葬儀式とは時間的に間をおいて行なう）
3 繰り上げて葬儀式に引き続いて（葬儀中に）行なう
4 初七日法要は行なわない
5 その他

（大蔵健司）

(10)―1　その最大の理由はなんですか。（1つだけお答えください）

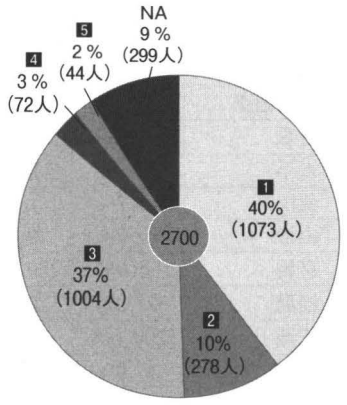
1．地域の習慣
2．住職の判断
3．檀信徒の希望
4．葬儀社の要望
5．その他（　　）

その最大の理由としては、「地域の習慣」が40％と最も多い。ついで「檀信徒の希望」が37％と多く、地域の習慣とほぼ同数であり、檀信徒の希望が重視されていることがうかがえる。また「住職の判断」は10％、「葬儀社の要望」も3％と少数であり、地域の習慣と檀信徒の希望が大多数を占めていることが分かる。

「いつ行なうか」と、「その最大の理由」のクロス集計をしたところ、「1．正当日に行なう」と回答した内の63％が地域の習慣と答えており、次いで、26％が住職の判断としている。「2．繰り上げて同日中に行う」との回答では、檀信徒の希望が52％であり、次いで地域の習慣が35％となっている。「3．繰り上げて葬儀式に引き続いて行う」では、檀信徒の希望が44％であり、次いで地域の習慣が36％と「2．」と同様に檀信徒の希望が強く反映される形となっている。また、「4．初七日法要は行なわない」と回答した中では、地域の習慣が59％、次いで住職の判断が13％となっている。このことから、初七日法要の理由は、地域の習慣性を反映したものであるが、繰り上げて行うということに関しては、檀信徒の希望が強く反

映されているものと言えよう。

初七日法要の行い方　最大の理由



1　地域の習慣
2　住職の判断
3　檀信徒の希望
4　葬儀社の要望
5　その他

1．正当日に行う　596票　教区%表示

		理　由					いつからですか？		
教区番号	教　区	1．地域の習慣	2．住職の判断	3．檀信徒の希望	4．葬儀社の要望	5．その他2	1．従来（20年以上前）から	2．20年ほど前から	3．10年ほど前から
1	北海道第一	85.7%	3.6%	3.6%	0.0%	0.0%	96.4%	0.0%	0.0%
2	北海道第二	79.2%	12.5%	8.3%	0.0%	0.0%	95.8%	4.2%	0.0%
3	青森	65.5%	13.8%	13.8%	0.0%	0.0%	89.7%	0.0%	0.0%
4	岩手	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
5	秋田	66.7%	0.0%	11.1%	0.0%	11.1%	77.8%	0.0%	0.0%
6	山形	75.0%	20.0%	5.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
7	宮城	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
8	福島	60.0%	20.0%	20.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
11	茨城	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
13	東京	33.3%	33.3%	0.0%	0.0%	0.0%	33.3%	33.3%	0.0%
14	千葉	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
16	山梨	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	50.0%
17	新潟	72.2%	27.8%	0.0%	0.0%	0.0%	94.4%	5.6%	0.0%
19	長野	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
20	静岡	42.9%	50.0%	7.1%	0.0%	0.0%	92.9%	0.0%	7.1%
21	三河	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
22	尾張	0.0%	66.7%	33.3%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
23	伊勢	75.0%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%	87.5%	0.0%	0.0%
24	伊賀	75.0%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
25	岐阜	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
26	石川	75.0%	0.0%	25.0%	0.0%	0.0%	75.0%	0.0%	0.0%
27	福井	72.7%	27.3%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
28	滋賀	73.9%	19.6%	2.2%	0.0%	3.3%	91.3%	1.1%	0.0%
29	京都	43.8%	33.3%	16.7%	0.0%	2.1%	87.5%	4.2%	2.1%
30	奈良	42.9%	46.4%	7.1%	0.0%	0.0%	89.3%	0.0%	7.1%
31	和歌山	70.3%	21.6%	5.4%	0.0%	0.0%	94.6%	0.0%	2.7%
32	大阪	28.6%	57.1%	14.3%	0.0%	0.0%	85.7%	0.0%	14.3%
33	兵庫	68.2%	18.2%	9.1%	0.0%	0.0%	95.5%	0.0%	0.0%
34	鳥取	50.0%	16.7%	25.0%	0.0%	0.0%	83.3%	0.0%	8.3%
35	出雲	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
36	石見	75.0%	12.5%	12.5%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
37	岡山	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
38	広島	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
39	山口	61.9%	28.6%	4.8%	0.0%	0.0%	90.5%	0.0%	0.0%
40	南海	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%
41	愛媛	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	50.0%	0.0%
42	福岡	42.9%	47.6%	4.8%	4.8%	0.0%	90.5%	4.8%	4.8%
43	佐賀	68.8%	18.8%	6.3%	0.0%	0.0%	93.8%	0.0%	0.0%
44	長崎	50.0%	37.5%	6.3%	0.0%	6.3%	93.8%	0.0%	0.0%
45	熊本	41.2%	29.4%	17.6%	0.0%	0.0%	88.2%	0.0%	0.0%
46	大分	66.7%	33.3%	0.0%	0.0%	0.0%	88.9%	11.1%	0.0%
47	三州	63.6%	18.2%	18.2%	0.0%	0.0%	81.8%	0.0%	9.1%
48	空白	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
総計		62.8%	25.5%	7.6%	0.2%	1.0%	91.1%	1.7%	1.7%

2．繰り上げて葬儀式に引き続いて　328票　教区%表示

		理　由					いつからですか？		
教区番号	教　区	1．地域の習慣	2．住職の判断	3．檀信徒の希望	4．葬儀社の要望	5．その他2	1．従来（20年以上前）から	2．20年ほど前から	3．10年ほど前から
2	北海道第二	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
3	青森	83.3%	16.7%	0.0%	0.0%	0.0%	66.7%	16.7%	16.7%
4	岩手	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
5	秋田	75.0%	0.0%	25.0%	0.0%	0.0%	75.0%	25.0%	0.0%
6	山形	50.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
7	宮城	50.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
8	福島	61.1%	5.6%	27.8%	5.6%	0.0%	83.3%	5.6%	5.6%
9	群馬	30.0%	10.0%	40.0%	0.0%	0.0%	20.0%	20.0%	50.0%
10	栃木	16.7%	16.7%	66.7%	0.0%	0.0%	33.3%	16.7%	50.0%
11	茨城	24.1%	10.3%	58.6%	0.0%	0.0%	44.8%	24.1%	17.2%
12	埼玉	28.1%	9.4%	50.0%	3.1%	9.4%	46.9%	12.5%	34.4%
13	東京	15.0%	25.0%	42.5%	7.5%	5.0%	20.0%	12.5%	47.5%
14	千葉	34.8%	17.4%	39.1%	4.3%	0.0%	60.9%	13.0%	21.7%
15	神奈川	29.2%	12.5%	33.3%	20.8%	0.0%	33.3%	25.0%	12.5%
16	山梨	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
17	新潟	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
18	富山	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
19	長野	51.8%	3.6%	37.5%	1.8%	1.8%	58.9%	23.2%	12.5%
20	静岡	17.4%	4.3%	60.9%	4.3%	0.0%	30.4%	4.3%	52.2%
21	三河	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	50.0%
22	尾張	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
23	伊勢	20.0%	0.0%	80.0%	0.0%	0.0%	0.0%	20.0%	40.0%
24	伊賀	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
25	岐阜	50.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	50.0%
26	石川	50.0%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%
27	福井	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%
28	滋賀	50.0%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	50.0%	0.0%	50.0%
29	京都	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
30	奈良	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%
32	大阪	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
34	鳥取	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
35	出雲	60.0%	0.0%	40.0%	0.0%	0.0%	60.0%	20.0%	20.0%
37	岡山	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
38	広島	60.0%	0.0%	40.0%	0.0%	0.0%	60.0%	20.0%	20.0%
39	山口	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	33.3%	33.3%	33.3%
40	南海	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
41	愛媛	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
42	福岡	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
45	熊本	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
48	空白	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	33.3%	33.3%
総計		35.7%	9.1%	43.6%	5.2%	1.8%	46.3%	16.2%	26.5%

3. 葬儀式に引き続きおこなう

教区番号	教区	集計	教区内有効回答数	集計／教区内有効回答数
1	北海道第一	1	30	3・3%
2	北海道第二	1	30	3・3%
3	青森	6	55	10・9%
4	岩手	3	15	20・0%
5	秋田	4	15	26・7%
6	山形	2	36	5・6%
7	宮城	2	28	7・1%
8	福島	18	69	26・1%
9	群馬	10	28	35・7%
10	栃木	6	27	22・2%
11	茨城	29	48	60・4%
12	埼玉	32	64	50・0%
13	東京	40	178	22・5%
14	千葉	23	47	48・9%
15	神奈川	24	106	22・6%
16	山梨	1	19	5・3%
17	新潟	2	38	5・3%
18	富山	2	21	9・5%
19	長野	56	73	76・7%
20	静岡	23	84	27・4%
21	三河	2	61	3・3%

総計																					
	空白	熊本	福岡	愛媛	南海	山口	広島	岡山	出雲	鳥取	大阪	奈良	京都	滋賀	福井	石川	岐阜	伊賀	伊勢	尾張
328	3	1	1	1	2	3	5	1	5	1	1	2	1	2	2	2	2	1	5	1
2700	10	30	104	28	16	46	32	11	24	20	214	94	225	215	36	19	22	22	95	44
12・1%	30・0%	3・3%	1・0%	3・6%	12・5%	6・5%	15・6%	9・1%	20・8%	5・0%	0・5%	2・1%	0・4%	0・9%	5・6%	10・5%	9・1%	4・5%	5・3%	2・3%

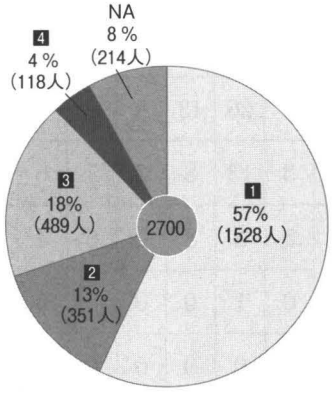
(10)―2　それはいつ頃からですか。（1つだけお答えください）

1. 従来（20年以上前）から
2. 20年ほど前から
3. 10年ほど前から
4. その他（　　）

「従来（20年以上前）から」が57％と多数である。しかし、「20年ほど前から」が13％、「10年ほど前から」が18％と、合計31％がこの20～10年前からのことだと答えている。枕経や通夜と異なり、お葬式全体の中での初七日法要の位置が近年大きく変わってきていることがわかる。

さらに、これらの実施はいつ頃からかの問いでは、「1. 正当日に行なう」という回答中では、91％が従来（20年以上前）からと回答しており、その伝統性を色濃く示している。一方「2. 繰り上げて同日中に行なう」と回答した中では、49％が従来（20年以上前）からであり、25％が10年程前から、18％が20年程前からであり、「3. 繰り上げて葬儀式に引き続いて行なう」では、従来（20年以上前）からが46％、10年程前からが27％、20年程前からが16％となっている。「4. 初七日法要は行なわない」では、従来（20年以上前）からが75％、20年ほど前と10年程前からが8％ずつとなっている。「2.」「3.」に関しては、半数近くが20年以上前からとしつつも、20年前からの変化に比べ、10年前からの変化が大きいことがわかる。

初七日法要　いつ頃からですか

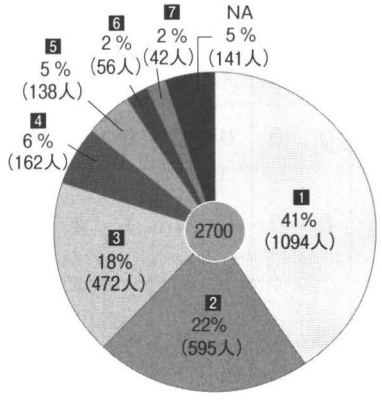


1 従来（20年以上前）から
2 20年ほど前から
3 10年ほど前から
4 その他

(11)　貴寺院では現在、葬儀式は何人の僧侶で行なうことが多いですか。（1つだけお答えください）

1. 1人
2. 2人
3. 3人
4. 4人
5. 5人
6. 6人
7. 7人以上

お葬式　僧侶の人数



1 1人
2 2人
3 3人
4 4人
5 5人
6 6人
7 7人以上

■表(B)—1

(11) 僧侶の人数について（実数）

19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
長野	富山	新潟	山梨	神奈川	千葉	東京	埼玉	茨城	栃木	群馬	福島	宮城	山形	秋田	岩手	青森	北海道第二	北海道第一	教区
5	0	4	1	81	38	134	51	39	23	23	52	13	3	3	6	22	7	9	1. 1人
13	6	20	5	19	5	34	12	6	4	5	13	10	25	10	5	20	18	22	2. 2人
36	12	12	12	1	1	2	0	0	0	0	1	1	8	2	3	9	2	5	3. 3人
7	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4. 4人
2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5. 5人
4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6. 6人
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7. 7人以上
67	21	36	19	101	44	170	63	45	27	28	66	24	36	15	14	51	27	36	NA以外の回答数

41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20
愛媛	南海	山口	広島	岡山	石見	出雲	鳥取	兵庫	大阪	和歌山	奈良	京都	滋賀	福井	石川	岐阜	伊賀	伊勢	尾張	三河	静岡
19	6	26	13	8	1	7	10	48	120	28	4	138	12	0	1	0	0	15	3	2	15
5	3	13	8	2	7	6	9	19	41	4	10	27	17	1	10	6	3	16	4	6	22
3	5	3	8	0	6	4	1	19	29	53	19	33	63	10	7	5	11	27	16	7	14
0	0	1	0	0	0	5	0	9	9	0	4	8	31	6	0	7	6	7	14	17	28
0	0	0	0	0	0	0	0	4	2	0	4	5	67	13	0	2	1	16	4	13	2
0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	27	0	8	0	0	0	0	3	0	9	0
0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	19	0	4	5	0	0	0	7	1	4	0
27	14	43	29	10	14	22	20	101	204	85	87	211	202	35	18	20	21	91	42	58	81

総計	48 空白	47 三州	46 大分	45 熊本	44 長崎	43 佐賀	42 福岡
1094	5	21	4	7	7	10	50
595	2	1	15	12	9	20	45
472	0	0	1	9	4	5	3
162	0	0	0	1	0	0	0
138	1	0	0	0	0	0	0
56	2	0	0	0	0	0	0
42	0	0	0	0	0	0	0
	10	22	20	29	20	35	98

「1人」が41％と最も多く、次いで「2人」が22％、「3人」が17％となっている。およそ8割の寺院が3人以内で葬儀式を勤めていることが分かる。「4人」は6％、「5人」は5％、「6人」は2％、「7人以上」が2％であり、4人以上になるとその数値はかなり少数になる。「三仏」、「五仏」などといわれる脇導師をつける伝統的な形式はかなりの少数派となっていることが分かる。

全国的には3人で勤める比率は比較的高く、これは鎖龕・起龕の儀礼が伝承・実行されている地域が多いことが理由としてあげられる。しかし、山梨を除く関東ブロックと福島では、1人で勤めることが圧倒的に多く、詳細には栃木（85％）、群馬（82％）、茨城（81％）、千葉と埼玉（80％）、神奈川（76％）、東京（75％）、福島（73％）となっている。また、この他に2人以上の複数で勤めることよりも、むしろ1人で勤めることの方が多い地域として、大阪、京都、兵庫、鳥取、愛媛、三州などがある。そもそも『浄土宗法要集』[1]上等では1人で葬儀を勤めることを前提としていながら、いつ頃から1人で勤めることが主流となってきたのか、またその理由に関しては、さらに詳細な調査が待たれるところである。

逆に奈良では、6人もしくは7人以上と回答した数が49％と高く、次いで3人が20％となっている。また、僧侶の数が多い奈良、滋賀、福井、静岡、三河などは、その理由として寺院同士の相互扶助的な意味合いも強いのではないかと推察される。また、関東ブロックを境に北日本では、4人以上で勤める地域はなく、東海・近畿地方は4人以上の地域も多く見られる。しかし中国・四国・九州になると出雲を除き、そのほとんどが3人以下となっている。

（1）浄土宗総合研究所編『浄土宗法要集』（二〇〇二・三）

(12) 貴寺院では近年、葬儀式の僧侶の人数に変化がありますか。（1つだけお答えください）

1. **増えている**
2. **減っている**
3. **変化はない**

■表(B)—2

(11) 僧侶の人数について (%)

	教　区	1. 1人	2. 2人	3. 3人	4. 4人	5. 5人	6. 6人	7. 7人以上	NA以外 の回答数
1	北海道第一	25%	61%	14%	0%	0%	0%	0%	36
2	北海道第二	26%	67%	7%	0%	0%	0%	0%	27
3	青森	43%	39%	18%	0%	0%	0%	0%	51
4	岩手	43%	36%	21%	0%	0%	0%	0%	14
5	秋田	20%	67%	13%	0%	0%	0%	0%	15
6	山形	8%	69%	22%	0%	0%	0%	0%	36
7	宮城	54%	42%	4%	0%	0%	0%	0%	24
8	福島	79%	20%	2%	0%	0%	0%	0%	66
9	群馬	82%	18%	0%	0%	0%	0%	0%	28
10	栃木	85%	15%	0%	0%	0%	0%	0%	27
11	茨城	87%	13%	0%	0%	0%	0%	0%	45
12	埼玉	81%	19%	0%	0%	0%	0%	0%	63
13	東京	79%	20%	1%	0%	0%	0%	0%	170
14	千葉	86%	11%	2%	0%	0%	0%	0%	44
15	神奈川	80%	19%	1%	0%	0%	0%	0%	101
16	山梨	5%	26%	63%	5%	0%	0%	0%	19
17	新潟	11%	56%	33%	0%	0%	0%	0%	36
18	富山	0%	29%	57%	5%	10%	0%	0%	21
19	長野	7%	19%	54%	10%	3%	6%	0%	67
20	静岡	19%	27%	17%	35%	2%	0%	0%	81
21	三河	3%	10%	12%	29%	22%	16%	7%	58
22	尾張	7%	10%	38%	33%	10%	0%	2%	42
23	伊勢	16%	18%	30%	8%	18%	3%	8%	91
24	伊賀	0%	14%	52%	29%	5%	0%	0%	21
25	岐阜	0%	30%	25%	35%	10%	0%	0%	20
26	石川	6%	56%	39%	0%	0%	0%	0%	18
27	福井	0%	3%	29%	17%	37%	0%	14%	35
28	滋賀	6%	8%	31%	15%	33%	4%	2%	202
29	京都	65%	13%	16%	4%	2%	0%	0%	211
30	奈良	5%	11%	22%	5%	5%	31%	22%	87
31	和歌山	33%	5%	62%	0%	0%	0%	0%	85
32	大阪	59%	20%	14%	4%	1%	1%	0%	204
33	兵庫	48%	19%	19%	9%	4%	1%	1%	101
34	鳥取	50%	45%	5%	0%	0%	0%	0%	20
35	出雲	32%	27%	18%	23%	0%	0%	0%	22
36	石見	7%	50%	43%	0%	0%	0%	0%	14
37	岡山	80%	20%	0%	0%	0%	0%	0%	10
38	広島	45%	28%	28%	0%	0%	0%	0%	29
39	山口	60%	30%	7%	2%	0%	0%	0%	43
40	南海	43%	21%	36%	0%	0%	0%	0%	14
41	愛媛	70%	19%	11%	0%	0%	0%	0%	27
42	福岡	51%	46%	3%	0%	0%	0%	0%	98
43	佐賀	29%	57%	14%	0%	0%	0%	0%	35
44	長崎	35%	45%	20%	0%	0%	0%	0%	20
45	熊本	24%	41%	31%	3%	0%	0%	0%	29
46	大分	20%	75%	5%	0%	0%	0%	0%	20
47	三州	95%	5%	0%	0%	0%	0%	0%	22
48	空白	50%	20%	0%	0%	10%	20%	0%	10
総計		1094	595	472	162	138	56	42	

※　上記%は　分子：回答数
　　分母：各教区内NA以外の回答数

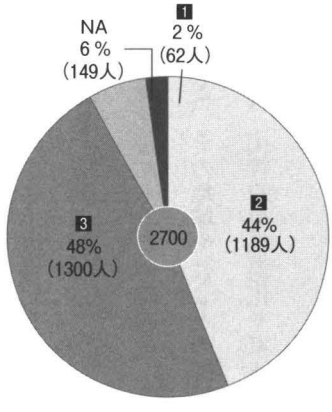
僧侶の人数に「変化はない」と回答した人が48％である。「減っている」が44％、「増えている」が2％しかいない。つまり、半数近くの寺院において、僧侶の人数が減っているという現状を見ることができる。

葬儀式での僧侶の人数の変化であるが、増加したとの回答は全体として非常に少ないが、比較的高い地域としてあげられるのは、秋田（13％）、熊本（10％）、埼玉（9％）であり、これらの地域はもともと住職1人で勤めていた寺院が、子弟の資格取得などの理由で2人へと増加したのではないかと思われる。

一方、減少したとの回答が多い地域は、山梨（84％）、富山（81％）、大阪（80％）、奈良（79％）、和歌山（74％）、兵庫（73％）で、もともと伝統的に大人数で行なう地域での減少率が高いことがいえる。また、京都・大阪など近畿の都市部でも大幅な減少を見ることができるが、これは3人から1人への減少であろうと思われる。山梨では従来3人で勤めていた地域であったことが予想されるが、近年急速に2人へ、そして1人へと減少していることが窺われる。

この全国的に急速に広まりをみせる減少傾向の理由としては、昨今の経済情勢はもちろんではあるが、都市部を中心に1人でも葬儀が勤められるということの認知度の高まりではなかろうか。この理由での減少傾向を食い止めるには、なぜ僧侶が複数でなければならないかのしっかりとした意味づけが必要であり、またその理由をしっかりと檀信徒に伝えていく必要があるのではないだろうか。

お葬式　僧侶の人数の変化



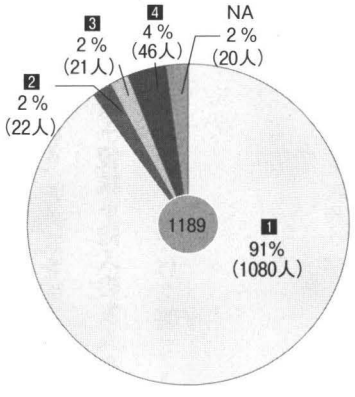
1 増えている
2 減っている
3 変化はない

1．増えている　もしくは　2．減っている　と回答した人のみお答えください。

(12)－1　その理由はなんですか。（1つだけお答えください）

1．檀信徒からの要望　2．寺院側からの要望
3．僧侶の手配の都合
4．その他（　　）

僧侶の人数　減った理由



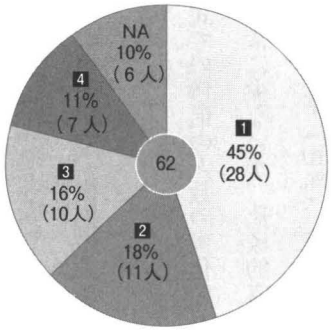
1 檀信徒からの要望
2 寺院側からの要望
3 僧侶の手配の都合
4 その他

僧侶の人数が「減っている」理由を見ると、「檀信徒からの要望」が91％、「寺院側からの要望」が2％、「僧侶の手配の都合」が2％であり、「檀信徒から要望によって葬儀式での僧侶の人数が減っている」という実態が明らかになった。ここにも、お葬式の縮小化がうかがえる。一方、僧侶の人数が「増えている」と回答した人は2％と少数であるが、その理由をみると「檀信徒からの要望」が45％、「寺院側からの要望」が18％、「僧侶の手配の都合」が16％であった。

僧侶の人数が減っている理由としては、全国的に「1．檀信徒からの要望」からがそのほとんどであり、寺院側からの要望として宮城、東京、神奈川、新潟、大阪で複数票みられるのみであり、そのほとんどが、檀信徒の要望であることがわかる。

僧侶の人数が増えている理由としては、東京や埼玉などで僧侶の手配の都合によるとするものがわずかにあるのみである。

僧侶の人数　増えている理由



1 檀信徒からの要望
2 寺院側からの要望
3 僧侶の手配の都合
4 その他

(13) 貴寺院では近年、お葬式を縮小化した、いわゆる「家族葬」（参列者を家族＋親族＋数人の友人などに限定したお葬式）が増えていますか。（1つだけお答えください）

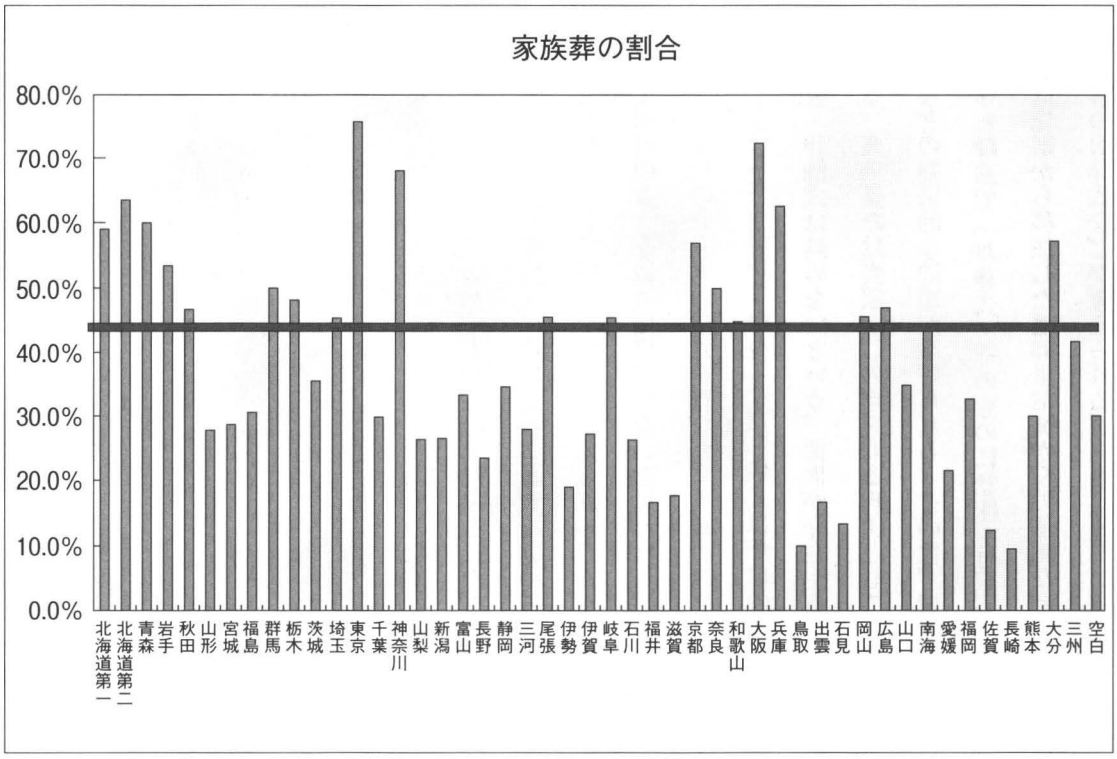
1．はい

2．いいえ

参列者の少ない「家族葬」が「増えている」という回答は44％と約半分を占めていた。この傾向は、お葬式の今後のあり方を見極めるためには特に重要である。

家族葬は増えたのかの設問であるが、東京（76％）、大阪（72％）、神奈川（68％）、兵庫（63％）と大都市部を中心に増加傾向にある。これらの理由として考えられることは、家族・生活のスタイルの変化があげられる。顕著な例としては10年程前から会社関係は呼ばない等の理由で葬儀がより小規模化し個人化している。また、離れて住んでいる子供世代が年老いた親を呼び寄せるケースも増えており、これらの呼び寄せられた高齢者は、転地での生活時間が少なければ少ないほど、その地域や社会との関係性が希薄であり、よってその葬儀などは、比較的小規模化や家族葬となることが多いと考えられる。

さらには、北海道、青森、岩手、秋田などでも43％から63％と高い数値となっている。これらの地域では、過疎や高齢化などが深く



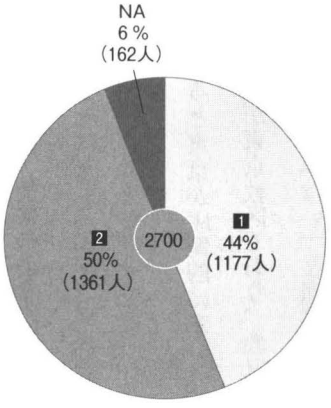
関わっていると思われる。また全国的に見ても単独世帯の増加などの理由から、家族葬が増える傾向にある。

近年、経済や社会構造の変化がこの家族葬の増加へと向かわせているが、これはあくまで葬儀の小規模化であり、また僧侶が介在する葬儀を指している。しかし、昨今「直葬」なるまったく僧侶が介在しない、もしくは葬儀を行なわず火葬をするということも増加しており、この明確な区別と「直葬」を行なわせないようにしていくにはどうするかを考えていかなければならない。

一方で、その増加が少ない教区は、長崎と鳥取10%、佐賀と石見13%、出雲17%、滋賀18%、伊勢19%と10%台の教区も存在している。これらの教区は山陰と九州北部が中心的であり、依然強固な伝統的な共同体を堅持していることがその理由にあげられるのではなかろうかと推察されるが、今後この理由について、詳細な検討を待つところである。

（和田典善）

家族葬の増加について



1 はい
2 いいえ

(14) 貴寺院では近年、従来のような通夜・葬儀を行わず、炉前で勤めることが増えていますか。（1つだけお答えください）

1. はい
2. いいえ

「はい」という回答が4％と少数であった。一部マスコミ等で「東京では約3割程度がお通夜・お葬式を行っていない」ということが報じられているが、この数字に比べるとかなり少ない数字であった。これは東京という一部地域での数値と全国での数値という違いもあるだろうが、今回のアンケートが寺院を対象としたものであり、回答者である浄土宗教師は主に檀信徒のお葬式を勤めている、ということがこの数字として現れていると考えられるだろう。そのために、マスコミ報道のような数値は出ていないと思われる。

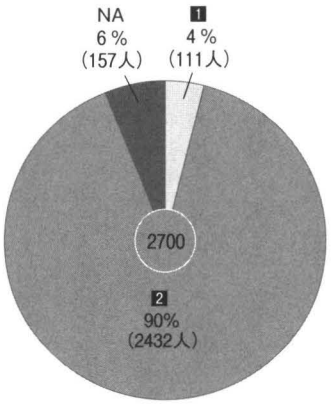
これは、僧侶の介在する儀式を行なわず火葬のみを行ういわゆる「直葬」とは異なる形態である。ただし儀式は炉前のみで勤め、従来の通夜・葬儀式は勤めないという、僧侶が介在する最小の形を指している。喪主または喪家がこの形を取る理由として、生活保護受給世帯などの経済的な問題が挙げられる。その他、檀家であれば日頃から寺と疎遠で「お葬式」そのものに意味を見出せていない方、あるいは他県から移住した離郷里信徒からの依頼などだろうか。他に独居者のお葬式などが考えられる。

本アンケートでは、従来のような通夜・葬儀を行わず、炉前で勤める形態が増えているとの回答は全回答のうち4％と少数であった。

教区別で見ると東京が圧倒的に多い。「はい」と回答した全有効回答111票中41票が東京教区であり、教区内の有効回答の中でも178票中の41票（23％）が「はい」と回答している。ただし、近県の神奈川教区は106票中の5票（5％）、千葉教区は47票中の1票（2％）、埼玉教区は64票中の6票（9％）という回答であり、東京の近隣県が同じような増加傾向とは言えない。大阪教区も214票中の8票（4％）と多い訳ではなく、大都市に限った特徴とも言いきれない。

教区ごとの有効回答の中で「炉前で勤めることが増えた」の割合が高い教区として茨城教区の15％、愛媛教区の14％、山梨教区と石川教区の11％があるが、分母となるサンプル数が少ないため、教区として傾向とは判断できない。

家族葬の増加について



1 はい
2 いいえ

(14) 炉前での葬儀増えた

教区番号	教区	集計	教区内有効回答	集計／教区内有効回答
1	北海道第一	2	39	5・1%
3	青森	2	55	3・6%
6	山形	1	36	2・8%
8	福島	1	69	1・4%
9	群馬	2	28	7・1%
10	栃木	2	27	7・4%
11	茨城	7	48	14・6%
12	埼玉	6	64	9・4%
13	東京	41	178	23・0%
14	千葉	1	47	2・1%
15	神奈川	5	106	4・7%
16	山梨	2	19	10・5%
19	長野	2	73	2・7%
20	静岡	1	84	1・2%
22	尾張	2	44	4・5%
23	伊勢	2	95	2・1%
24	伊賀	1	22	4・5%
26	石川	2	19	10・5%
28	滋賀	6	215	2・8%
29	京都	1	225	0・4%
30	奈良	2	94	2・1%
31	和歌山	2	87	2・3%
32	大阪	8	214	3・7%
33	兵庫	1	104	1・0%
41	愛媛	4	28	14・3%
43	佐賀	1	40	2・5%
44	長崎	1	21	4・8%
45	熊本	1	30	3・3%
47	三州	1	24	4・2%
48	空白	1	10	10・0%
総計		111	2145	5・2%

(15) 貴寺院では、お葬式のお布施について相談を受けることがありますか。（1つだけお答えください）

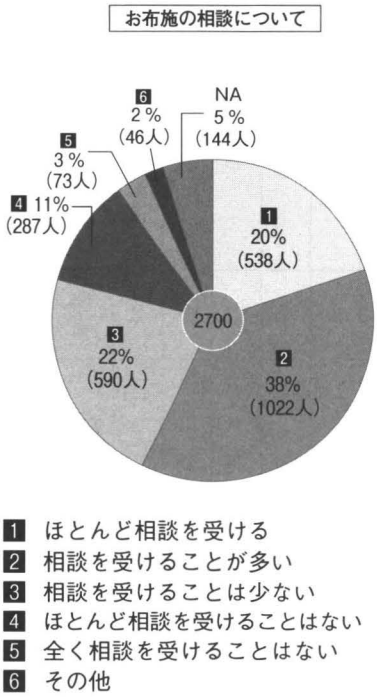
1. ほとんど相談を受ける
2. 相談を受けることが多い
3. 相談を受けることは少ない
4. ほとんど相談を受けることはない
5. 全く相談を受けることはない
6. その他（　　）

「3. 相談を受けることは少ない」22%、「4 ほとんど相談を受け

ない」11％、「5．全く相談を受けることはない」3％と、36％の寺院が相談を受けることが少ないか、相談を受けていない。これに対して、「2．相談を受けることが多い」38％、「1．ほとんど相談を受ける」20％で、全体の6割の寺院でお布施に関して相談を受けている。これは、地域社会や親族関係の変化によって、布施の金額に対する共通認識がなくなって、分らないから僧侶に相談せざるを得ない状況を見てとることができる。また、布施を喜捨ではなく、対価と捉える人々の意識の表れかもしれない。

設問中の「お葬式のお布施について相談」には「金額の目安を知りたい」「金額を安くして欲しいが応じてもらえるのか?」「この金額で失礼はないか?」「前回と同額で良いのか?」など様々な意味合いでの相談が考えられる。また、出仕する僧侶の人数の確認なども含まれて来るが、「お布施について」の相談の多くは「布施とは何か」といった意義を訊ねるものではなく、金額の多寡に関するものであろう。

ここでは、お葬式全般においてお布施に関する相談を受ける場合が多いのか、少ないのかを尋ねた。結果は以下の通りである。



ほとんど相談受ける～相談受けること多い

相談受ける派

教区	1．ほとんど相談を受ける	2．相談を受けることが多い	1＋2	(1＋2)／教区内有効回答％
北海道第一	9	11	20	51・3％
北海道第二	5	10	15	50・0％
青森	5	12	17	30・9％
岩手	1	9	10	66・7％
秋田	6	7	13	86・7％
山形	19	11	30	83・3％
宮城	10	8	18	64・3％
福島	7	28	35	50・7％
群馬	16	7	23	82・1％
栃木	14	4	18	66・7％
茨城	15	17	32	66・7％
埼玉	31	19	50	78・1％
東京	36	94	130	73・0％

千葉	神奈川	山梨	新潟	富山	長野	静岡	三河	尾張	伊勢	伊賀	岐阜	石川	福井	滋賀	京都	奈良	和歌山	大阪	兵庫	鳥取	出雲
11	19	10	8	2	22	39	17	17	17	6	3	4	14	34	43	11	5	33	17	4	5
25	55	4	12	9	28	28	23	16	24	6	7	7	15	73	101	17	29	117	62	12	5
36	74	14	20	11	50	67	40	33	41	12	10	11	29	107	144	28	34	150	79	16	10
76・6%	69・8%	73・7%	52・6%	52・4%	68・5%	79・8%	65・6%	75・0%	43・2%	54・5%	45・5%	57・9%	80・6%	49・8%	64・0%	29・8%	39・1%	70・1%	76・0%	80・0%	41・7%

石見	岡山	広島	山口	南海	愛媛	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	三州	空白	総計
		1		3	4	1	5	1	1	2	3	2	538
1	7	12	5	5	15	19	13	3	8	11	5	6	1022
1	7	13	5	8	19	20	18	4	9	13	8	8	1560
6・7%	63・6%	40・6%	10・9%	50・0%	67・9%	19・2%	45・0%	19・0%	30・0%	61・9%	33・3%	80・0%	57・8%

相談うけること少ない～ほとんど相談受けない

教区	3．相談を受けることは少ない	4．ほとんど相談を受けることはない	3＋4	(3＋4)／教区内有効回答%
青森	22	8	30	54・5%
北海道第二	8	4	12	40・0%
北海道第一	9	5	14	35・9%

岐阜	伊賀	伊勢	尾張	三河	静岡	長野	富山	新潟	山梨	神奈川	千葉	東京	埼玉	茨城	栃木	群馬	福島	宮城	山形	秋田	岩手
8	5	18	5	10	8	10	6	9	3	16	6	25	6	9	7	1	20	4	3	1	2
2	2	25	4	2	5	4	2	5		8	1	12	4		2	3	10	2	3		1
10	7	43	9	12	13	14	8	14	3	24	7	37	10	9	9	4	30	6	6	1	3
45・5%	31・8%	45・3%	20・5%	19・7%	15・5%	19・2%	38・1%	36・8%	15・8%	22・6%	14・9%	20・8%	15・6%	18・8%	33・3%	14・3%	43・5%	21・4%	16・7%	6・7%	20・0%

三州	大分	熊本	長崎	佐賀	福岡	愛媛	南海	山口	広島	岡山	石見	出雲	鳥取	兵庫	大阪	和歌山	奈良	京都	滋賀	福井	石川
8	3	11	12	14	54	8	6	21	9	1	5	3	2	14	35	32	35	36	54	3	3
2	2	7	3	2	20			11	6	1	5	4	1	6	9	16	19	16	36	3	2
10	5	18	15	16	74	8	6	32	15	2	10	7	3	20	44	48	54	52	90	6	5
41・7%	23・8%	60・0%	71・4%	40・0%	71・2%	28・6%	37・5%	69・6%	46・9%	18・2%	66・7%	29・2%	15・0%	19・2%	20・6%	55・2%	57・4%	23・1%	41・9%	16・7%	26・3%

空白			
総計	590	287	877
		2	2
		20・0％	32・5％

選択肢の「1．ほとんど相談を受ける」と「2．相談を受けることが多い」は相談される場合の方が多いという回答、「3．相談を受けることは少ない」「4．ほとんど相談を受けることはない」は相談されない場合の方が多いという回答であり、「5．全く相談を受けることはない」は「相談」自体が皆無であるという場合の選択肢である。

「5．」との回答は全体の3％に満たない。

選択肢の「1．」と「2．」の相談される場合の方が多いという回答は合わせて58％、逆に相談されない場合の方が多いという「3．」「4．」は合わせて33％であり、ほぼ6割の寺院が「お葬式のお布施」について喪家から何らかの相談を受けていることが分かる。

大別して「1．」「2．」の合計「相談される場合の方が多い」という回答が多く寄せられた地域の1位は教化センター別でみると、関東（76％）、2位が東海（65％）、3位が近畿（61％）の各センターであり、関東が高いことが分かる。最も低いセンターは九州（32％）であった。

教区別で見ると秋田（87％）、山形（83％）、福井（81％）、群馬（82％）鳥取と静岡（80％）が高い。大都市や産業拠点を抱え、他県からの流入人口が多いと思われる教区が高い数値を示している訳ではない。

逆に「3．」「4．」の合計、「相談される場合の方が少ない」という回答が多く寄せられた教区を見てみると、長崎と福岡（71％）、山口（70％）、石見（67％）がとりわけ高く、その他熊本（60％）を除いて6割を超す教区はない。これはこれらの教区が「お布施の額など尋ねるものではない」と考える人が多いのか、または具体的な金額を指導してくれる親族関係や地域の関係が残っているということが推測される。

この設問は、地域社会や親族関係の変化による布施の金額の共通認識の崩壊が背景にあるとの前提で問題設定した部分もあるのだが、単に都市部と地方の差という理由では割り切る事が出来ない。例えば同じ地域でも石見教区が67％と高いのに対して、近隣の鳥取教区では15％と極端な数値の差が出ているからである。

「(15)布施の相談について」と「(21)戒名の位号の高低」との関係について

ここで問(21)「貴寺院では近年、戒名の院号や位号（居士・大姉、信士・信女など）に対する檀信徒の希望に変化が見られますか。」の回答との関連性を見ておきたい（問(21)の結果は後述）。

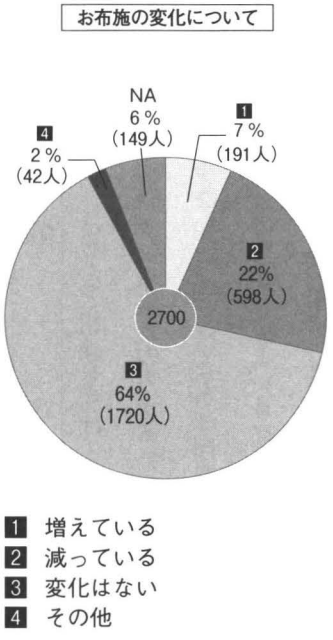
問(21) ＼ 問(15)	相談を受ける	相談受けない
変化はない（位号同じで良い）	59%	29%
位号低く希望	81%	11%
位号高く希望	56%	37%

上のクロス集計の結果によれば、位号を低くしたいと希望する檀信徒の相談を受ける割合が、8割を超えていることである。変化はない（位号同じで良い）、位号を高くしたいと希望する場合も6割近い人が相談している。

(16) 貴寺院では、お葬式のお布施に変化はみられますか。（1つだけお答えください）

1. 増えている　2. 減っている　3. 変化はない

4. その他（　　）



(16) 布施減っている

教区番号	教区	集計	有効回答	%
1	北海道第一	16	39	41・0%
2	北海道第二	11	30	36・7%
3	青森	12	55	21・8%
4	岩手	7	15	46・7%
5	秋田	3	15	20・0%
6	山形	4	36	11・1%
7	宮城	9	28	32・1%
8	福島	17	69	24・6%
9	群馬	7	28	25・0%
10	栃木	3	27	11・1%
11	茨城	11	48	22・9%
12	埼玉	12	64	18・8%
13	東京	63	178	35・4%
14	千葉	7	47	14・9%
15	神奈川	28	106	26・4%
16	山梨	6	19	31・6%
17	新潟	4	38	10・5%
18	富山	8	21	38・1%
19	長野	10	73	13・7%
20	静岡	20	84	23・8%

教区番号	教区	集計	有効回答	%
1	北海道第一	2	39	5・1%
2	北海道第二	1	30	3・3%
3	青森	4	55	7・3%
4	岩手	0	15	0・0%
5	秋田	4	15	26・7%
6	山形	2	36	5・6%
7	宮城	4	28	14・3%
8	福島	2	69	2・9%
9	群馬	1	28	3・6%
10	栃木	2	27	7・4%
11	茨城	4	48	8・3%

教区番号	教区	集計	有効回答	%
21	三河	11	61	18・0%
22	尾張	11	44	25・0%
23	伊勢	11	95	11・6%
24	伊賀	0	22	0・0%
25	岐阜	5	22	22・7%
26	石川	8	19	42・1%
27	福井	2	36	5・6%
28	滋賀	24	215	11・2%
29	京都	47	225	20・9%
30	奈良	18	94	19・1%
31	和歌山	14	87	16・1%
32	大阪	58	214	27・1%
33	兵庫	25	104	24・0%
34	鳥取	8	20	40・0%
35	出雲	3	24	12・5%
36	石見	1	15	6・7%
37	岡山	2	11	18・2%
38	広島	5	32	15・6%
39	山口	17	46	37・0%
40	南海	2	16	12・5%
41	愛媛	4	28	14・3%
42	福岡	30	104	28・8%

教区番号	教区	集計	有効回答	%
43	佐賀	9	40	22・5%
44	長崎	3	21	14・3%
45	熊本	8	30	26・7%
46	大分	7	21	33・3%
47	三州	4	24	16・7%
48	空白	3	10	30・0%
総計		598	2700	22・1%

(16) 布施増えている

12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33
埼玉	東京	千葉	神奈川	山梨	新潟	富山	長野	静岡	三河	尾張	伊勢	伊賀	岐阜	石川	福井	滋賀	京都	奈良	和歌山	大阪	兵庫
4	9	4	10	1	5	1	7	1	6	6	15	4	0	3	4	17	15	1	4	7	10
64	178	47	106	19	38	21	73	84	61	44	95	22	22	19	36	215	225	94	87	214	104
6・3%	5・1%	8・5%	9・4%	5・3%	13・2%	4・8%	9・6%	1・2%	9・8%	13・6%	15・8%	18・2%	0・0%	15・8%	11・1%	7・9%	6・7%	1・1%	4・6%	3・3%	9・6%

34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	総計
鳥取	出雲	石見	岡山	広島	山口	南海	愛媛	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	三州	空白	
2	5	1	1	1	3	3	1	5	1	2	2	1	3	0	191
20	24	15	11	32	46	16	28	104	40	21	30	21	24	10	2700
10・0%	20・8%	6・7%	9・1%	3・1%	6・5%	18・8%	3・6%	4・8%	2・5%	9・5%	6・7%	4・8%	12・5%	0・0%	7・1%

「3. 変化はない」が64%、「2. 減っている」が22%、「1. 増えている」が7%と、圧倒的に変化がないと回答した寺院が多い。しかし、「増えている」に対し、「減っている」と回答している寺院が3倍にも及んでいる。このことは、百年に一度といわれる昨今の経済情勢の影響も否定できないが、お葬式に対する費用が高額過ぎ

るというような風潮や小規模化するお葬式の影響等、金銭的な要因だけではなく、お葬式に対する意識の変化がその要因として考えられる。いずれにしろ、寺院の運営を鑑みると「2．減っている」の22％という数字は軽視できない。

「変化はない」が64％ではあるが、「減っている」が「増えている」の3倍の数値である点は看過できない。

「減っている」との回答が多いのは、岩手（47％）、石川（42％）、北海道第一（41％）、鳥取（40％）、の各教区である。逆に伊賀教区では「減っている」が0％である。

一方、「増えている」との回答が多いのは、秋田（27％）出雲（21％）、南海（19％）、伊賀（18％）、伊勢と石川（16％）の各教区である。岩手と岐阜は「増えている」が0％という結果であった。

（15）の「布施の相談の有無」と、「お布施の増減」のクロス集計も試みたが、両者の相関関係は見られなかった。

＊法話についてお尋ねいたします。

（17）お葬式（枕経・通夜・葬儀式・出棺式）、初七日のなかで法話を行なっていますか。（1つだけお答えください）

1．はい

2．いいえ

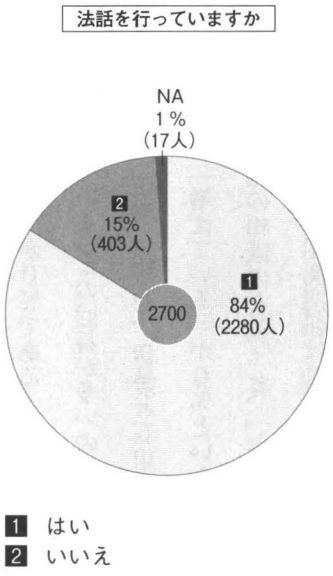
8割以上の教師が法話を行なっているが、行なわないという回答が15％存在する。「いいえ」が20％を超える教区は以下の教区である。

和歌山教区	35・6％
尾張教区	34・1％
三州教区（宮崎、鹿児島、沖縄）	25・0％
伊勢教区	23・2％
福岡教区	22・1％
大阪教区	22・0％
京都教区	21・8％
奈良教区	20・2％
熊本教区	20・0％

ここには五重相伝の開筵率が高い近畿センターの6教区の中、滋賀教区（15％）と兵庫教区（8％）を除く4教区が含まれている。九州地方でも五重相伝の開筵率は高いと思われるが、三州、福岡、熊本の3教区に高い数値が出ている事が分かる。すでに教化が行き届いていることを理由に、お葬式では法話をする必要がないと考える地域的特徴なのかもしれない。あるいは、お葬式の際の5～10分程度のお話は「法話」の範疇に入らないということなのだろうかとも類推される。

しかし、平成19年10月～平成20年3月末にかけて実施された、第

6回宗勢調査において、「住職は法話・説教を行なっていますか」の質問に対して、12・12％のご住職が「法話・説教は行なわない」と答えている。また所属教師に対する同じ質問では38・96％が「法話・説教は行なわない」と答えている。この質問はお葬式での法話に限ったものではないことを考えると、そもそも日常の教化として法話を行なわない住職がこれだけいるということである。



1. はい と回答した人のみお答えください。

(17)—1 法話のなかで、お葬式の意味をどのように説いていますか。重点を置く順番に三つ以内でお選びください。

8. をお選びの場合は第1位の枠にのみ記入してください。

1. 故人との別れ
2. 故人の冥福をいのる
3. 残された遺族の心を慰める
4. 故人を引導し極楽往生を薦める
5. 故人が家の先祖になるための初めの儀式
6. 故人が自分らしさを表現する最後の機会
7. その他（ ）
8. 法話はしているが、お葬式の意味は説明していない

	1位	2位	3位	point
1. 故人との別れ	466	258	237	2151
2. 故人の冥福をいのる	370	611	294	2626
3. 残され遺族の心を慰める	191	586	569	2314
4. 故人を引導し極楽往生を薦める	800	300	322	3322
5. 故人が家の先祖になるための初めの儀式	22	73	104	316
6. 故人が自分らしさを表現する最後の機会	20	26	59	171
7. その他	83	39	71	398
8. 法話はしているが、お葬式の意味は説明していない	297	10	83	994
NA	19			

＊ポイントは1位3ポイント、2位ポイトン、3位1ポイントとして計算。本文中ではポイトンはPと表記する。

この結果をみると「故人を引導し極楽往生を薦める」（3322P）以下、「故人の冥福をいのる」（2626P）、「残された遺族の心を慰める」（2314P）、「故人との別れ」（2151P）と続く。「極楽往生」「冥福をいのる」といった宗教的意味の方が、「故人との別

れ」という告別の意味よりも上位となった結果は、順当と言えよう。

この設問は「お葬式の意味をどのように」説いているかだったが、「お葬式の意味」については説いていないという回答が９９４Ｐあることには注目しておきたい。

さらに注目すべきは、ここで「残された遺族の心を慰める」は3位となっているが、「檀信徒アンケート」では、喪主の立場でわずか1％、自分の場合でも3％と極めて低い事である。教師の思いと裏腹に、檀信徒は「残された遺族の心を慰める」ことにはほとんど意味を置いていない。

(17)―2　亡くなった方はどのような存在であると説いていますか。重点を置く順番に3つ以内でお選びください。

7．をお選びの場合は第1位の枠にのみ記入してください。

1．極楽で仏となるために修行している
2．安らかに眠っている
3．家族などを見守っている
4．家の先祖となり子孫・家を守る
5．死んだら何も無くなる
6．その他（　　）
7．特に説明していない

	1位	2位	3位	point
1．極楽で仏となるために修行している	1447	180	197	4898
2．安らかに眠っている	103	154	119	736
3．家族などを見守っている	352	1150	290	3646
4．家の先祖となり子孫・家を見守る	155	409	826	2109
5．死んだら何もなくなる	2	3	2	14
6．その他	71	24	59	320
7．特に説明していない	121	6	11	386
NA	22			

亡くなった方の存在について総合ポイントで見ると、「1．極楽で仏となるために修行している」（４８９８Ｐ）、次いで「3．家族などを見守っている」（３６４６Ｐ）、「4．家の先祖となり子孫・家を守る」（２１０９Ｐ）となっている。

(17)―1のお葬式の意味では低い数値しかなかった「故人が家の先祖になるための初めの儀式」だが、故人の存在を問うこの質問では、「家の先祖となり子孫・家を見守る」が意外にも高い位置にある。しかし、これを1位とした教師の回答は１５５ポイントと多くはない。しかし2位となると４０９ポイント、3位になると

826ポイントと高くなる。この質問で「極楽で仏となるために修行している」を1位として選んだ回答者が、2位、3位に何を選択したかを見てみると選択肢「1．極楽で仏となるために修行している」「3．家族などを見守っている」「4．家の先祖となり子孫・家を守る」の組み合わせが断然多い。想像するに、ひとつの法話の中で「極楽修行」⇓「家族を見守ってくれている」⇓「やがては家の先祖となり、子孫まで見守る」といった流れで話を組み立て、それぞれを説いているという事なのではないだろうか。

宗義の上からは、「極楽で仏となるために修行している」が1位になるのは当然のこととして、何らかの形で遺族や子孫を見守る存在であると、多くの教師が説いているようだ。「家族などを見守っている」「家の先祖となり子孫・家を見守る」の2つをどちらも「見守る存在」という意味で合わせれば総ポイント数5755ポイントと「極楽で仏となるために修行している」を上回る数値となる。「檀信徒アンケート」で故人の存在を問う質問に85％の檀信徒が「見守ってくれている」と答えていたのもここに起因しているのだろう。

（八木英哉）

（18）戒名の意義や授けた戒名の意味（選字）を説明していますか。

（1つだけお答えください）

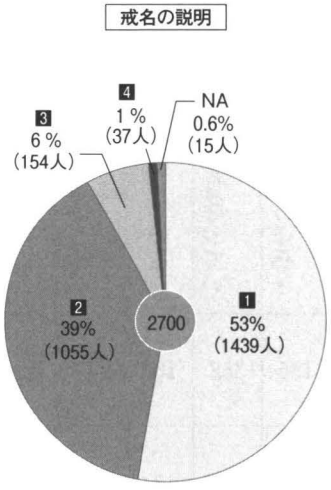
1．必ず、もしくはほとんどの場合は説明している

2．尋ねられた場合は説明している

3．ほとんど説明していない

4．説明するものでないと思うから説明していない

「1．必ず、もしくはほとんどの場合は説明している」が53％、次いで「2．尋ねられた場合は説明している」が39％、「3．ほとんど説明していない」が6％と、9割の寺院で戒名について説明している。一方「4．説明するものではないと思うから説明していない」との回答も1％あった。なお、教区による回答の傾向は見られなかった。平成17年に実施した「檀信徒アンケート」では、戒名を希望せず俗名で良いとする人が12％いた。この戒名を希望しない理由を見ると、最も多いのが「戒名の意味を見いだせないから」（39％）であり、「戒名をつけてもらうのが高額であるから」（18％）という、金銭的理由を大きく上回っているのである。戒名の意味（選字）に関しては、説明をするものではないという見解も存在するであろう



1 必ず、もしくはほとんどの場合は説明している
2 尋ねられた場合は説明している
3 ほとんど説明していない
4 説明するものでないと思うから説明していない

が、仏弟子として授戒をするという戒名の意義に関して、広く説明すべきであろう。

(19) 貴寺院では近年、五重相伝・授戒会以外の生前戒名授与（逆修）に変化はみられますか。（1つだけお答えください）

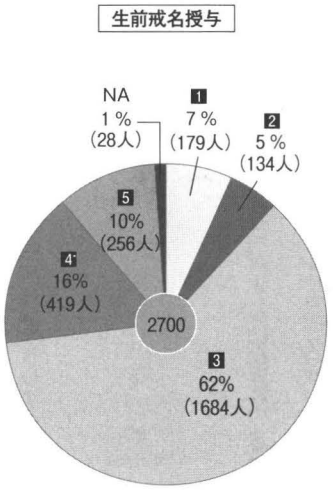
1. 増えている
2. 減っている
3. 変化はない
4. 五重相伝・授戒会以外での生前戒名授与は行なわない
5. 生前に戒名授与は行なわない

1位は「3. 変化はない」の62%、次いで「4. 五重相伝・授戒会以外での生前戒名授与は行わない」が16%であった。また「1. 増えている」7%、「2. 減っている」5%と、増減に関してはほとんど差がない。一方、「5. 生前に戒名授与は行わない」が10%であった。

「1. 増えている」という回答を教区ごとに分けて見ると、岡山（27%）、岩手と秋田（20%）、東京（19%）が高い数値を示していた。次の（20）の質問において、これらの教区はいずれも「生前戒名の重要性を説いている」と回答した人の割合が高かったことから、生前戒名授与の必要性を積極的に説いていることが生前授戒の増加に結びついているという可能性がある。また、特に東京においては、都市部の傾向として見られる「自分が死んだ時に、子供に迷惑を掛けたくない」という親子間での遠慮の意識が理由で、生前に戒名を受けておくことが増えた可能性もあるだろう。

「4. 五重相伝・授戒会以外での生前戒名授与は行わない」という回答は、滋賀（40%）、奈良（37%）で高い数値を示していた。これは、五重相伝会の開筵率が両教区において高いということを反映していると考えられる。

なお、「5. 生前に戒名授与は行わない」とする消極的な回答が10%あった。生前に戒名を頂き仏弟子として日々を過ごすことこそ念仏者の模範的なあり方であり、この点において1割にも及ぶ否定的な回答があったことは、非常に残念な結果といえよう。

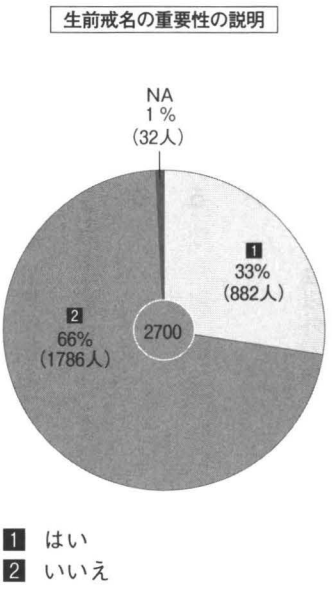


1 増えている
2 減っている
3 変化はない
4 五重相伝・授戒会以外での生前戒名授与は行なわない
5 生前に戒名授与は行なわない

(20) 貴寺院では「生前戒名」の重要性を説いていますか。（1つだけお答えください）

1．はい
2．いいえ

「1．はい」が33％、「2．いいえ」が66％であった。教区別に見ると、「はい」が高い教区は、青森（51％）、秋田（47％）、岡山（46％）、栃木（44％）、兵庫（43％）などであった。一方、「いいえ」が高い教区は、山梨（90％）、岐阜（86％）、鳥取（85％）などであった。また年代別にみても、違いは見られなかった。前項においても述べたが、念仏者として生前に戒名を頂くことは、信仰生活において非常に重要なことであり、今後これを積極的に説き、理解させ、実践していくことが、檀信徒の信仰を深める方法の一つであり、各寺院は積極的に取り組むべきである。



（21）貴寺院では近年、戒名の院号や位号（居士・大姉、信士・信女など）に対する檀信徒の希望に変化が見られますか。（1つだけお答えください）

1．これまでの位号より高くしてほしいという檀信徒が増えている
2．これまでの位号より低くしてほしいという檀信徒が増えている
3．変化はない
4．その他（　　）

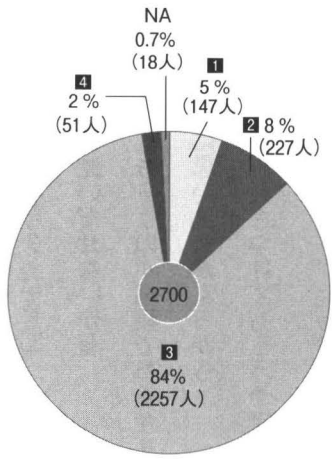
この設問も、戒名に対する檀信徒の意識の変化を見るものである。菩提寺によって授与される戒名は、これまで菩提寺との関わりや地域社会における地位や貢献によって決定されてきたと思われる。ところが近年、地域社会の結びつきが希薄化するとともに、社会的な地位や金銭的な要因によって位号を高く、あるいは低くしてほしいという希望が寺院に寄せられるという声が聞かれるようになった。

しかし、アンケートでは84％という多くの回答者が希望の変化がないと回答しており、これまでのように祖父母・父母と同じ位号を求める人が多いことが明らかになった。位号を変えてほしいと希望する檀信徒の割合を見ると、「低くしてほしい」は8％、「高くして欲しい」は5％であり、「低くしてほしい」がやや上回る結果となった。

「高くしてほしい」という回答の比率が高い教区は、秋田（27％）、山口と出雲（17％）であった。一方、「低くしてほしい」という回

答の比率が高い教区は、群馬（32％）、静岡（31％）であった。これら檀信徒からの希望は、経済的状況や社会的な意識の変化のほかに、地域差があることが予想される。それはつまり、伝統的に戒名授与に対する布施の習慣がない地域や、地域の人々ほぼすべてに院号を授与する地域があるなど、戒名に関する慣習や意識がそれぞれ異なるのが実情である。このことも考慮に入れる必要があるだろう。

位号の希望の変化



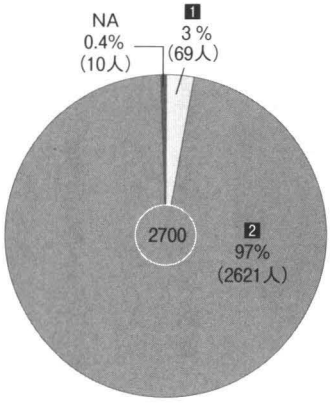
1 これまでの位号より高くしてほしいという檀信徒が増えている
2 これまでの位号より低くしてほしいという檀信徒が増えている
3 変化はない
4 その他

（22）貴寺院では近年、俗名のままでのお葬式の希望は増えていますか。（1つだけお答えください）（※俗名でのお葬式の是非は別とします。）

1. はい　2. いいえ

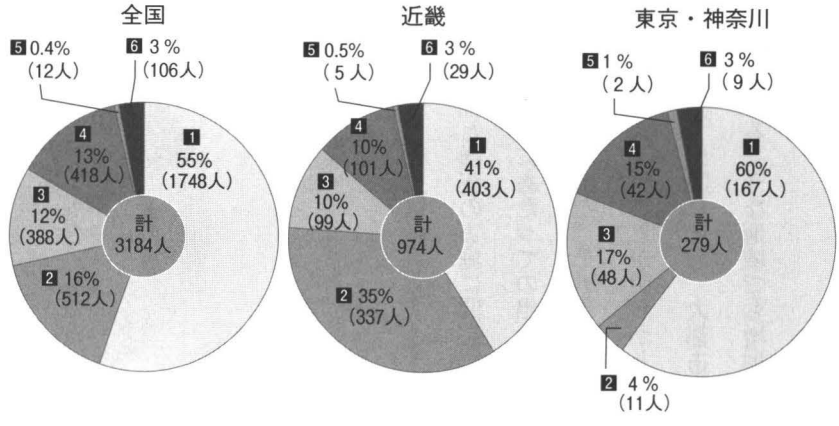
「1. はい」、つまり「俗名のままでのお葬式の希望が増えている」という回答が3％と少なかった。少ないながらもこの数値が比較的高い教区は、茨城10％、東京9％、神奈川8％、埼玉と千葉が6％と関東首都圏に集中していることが明らかになった。「檀信徒アン

俗名でのお葬式の希望の増加



1 はい
2 いいえ

（9）あなたは、戒名を希望しますか（檀信徒アンケートより）



1 戒名を希望する
2 すでに戒名を持っている
3 生前の名前（俗名）のままでよい
4 まだ分からない
5 複数回答
6 NA

ケート」では、自分のお葬式の際には「戒名はいらない」という人が12％であり、とくにこの数値を東京教区・神奈川教区に限ってみると17％にも上昇する。つまり、全国平均に比べると関東首都圏では「戒名はいらない」という人が多く、今回のアンケートではこのような檀信徒の意識が裏付けられる結果となった。

1．はい　と回答した人のみお答えください。

(22)―1　その理由は以下のうちのどれが最も多いと思いますか。

（1つだけお答えください）

1．戒名の意味を見いだせないから

2．戒名を授けてもらうのが高額であるから

3．生前の名前に思い入れがあるから

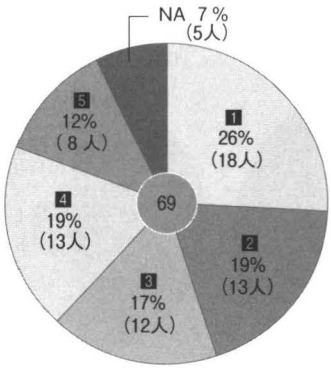
4．後に菩提寺で戒名をつけてもらう予定でいるから

5．その他（　　）

その理由を尋ねてみると、「俗名のままでのお葬式の希望は増加している」という回答は全体で69票と少数であり分析する数値としては問題があるが、あくまで参考数値として報告する。「1．戒名の意味が見出せないから」と考える人が26％と最も多く、ついで「2．戒名を授けてもらうのが高価であるから」が19％、「4．後に菩提寺で戒名をつけてもらう予定があるから」が19％「3．生前の名前に思い入れがあるから」が17％である。「檀信徒アンケート」においても、やはり「戒名はいらない」一番の理由は「戒名の意味が見出せないから」であった。このことからも、檀信徒に対して、戒名の意義を説く重要さが伺えるのである。

（名和清隆）

俗名を希望する理由



1 戒名の意味を見いだせないから
2 戒名を授けてもらうのが高額であるから
3 生前の名前に思い入れがあるから
4 後に菩提寺で戒名をつけてもらう予定でいるから
5 その他

おわりに

「寺院アンケート」の分析結果をまとめてみると、「お葬式の実態」としては、枕経と通夜の実施に関しては、大きな変化を見ることはなかったが、(1)葬儀にあたっての出仕僧侶の人数が、全国的に減少傾向にあることがわかった。(2)その理由としては、檀信徒側からの要望によるところが大きいことが明らかとなった。また、お葬式を縮小化した「家族葬」に関しても、大都市圏だけでなく地方の過疎や高齢化が進んでいるような地域でも増加傾向にある。(3)また、従来のよ

うな通夜、葬儀を行わない、炉前での回向に関しては、全国的にはわずかであるが、特に東京においては、この数値が急激に増加している。[4] さらに、近年問題視されている戒名に関しては、その位号を低くしてほしいという回答や俗名のままのお葬式を希望する回答も少なからずあった。しかし、その理由は金銭的な問題以上に、戒名の意味が伝わっていないことにあることが今回明確となった。[5]

次に「お葬式から見える死生観」についてであるが、「檀信徒アンケート」からもお葬式の意味について告別の意識が非常に強くなっていることが明確となったにもかかわらず、「寺院アンケート」においては、その意味を説かないという数値が９９４Ｐと高く、僧侶側が十分な対応をしていないことがわかった。[6] さらには、法話においてもお葬式を「故人との別れ」と説く数値も高く、このことが檀信徒が葬儀式を告別式と混同することにつながっているのではなかろうか。僧侶が執り行う葬儀式と告別式との意味付けを僧侶自身がもう一度明確にしておく必要がある。また、死後の故人との関係についても、「安らかに眠っている」や、少数ではあるが「死んだら何もなくなる」というような内容の法話を行っていることが判明した。このような誤解を招くような法話をすることが、より一層檀信徒のお葬式や僧侶不要論を加速させる一因となることを認識する必要があるであろう。

以上のことから、我々僧侶は、檀信徒に正しくお葬式の意味を伝え、さらには浄土宗の檀信徒として故人の死後のあり方に関して理解してもらうための、法話を行うことが必要であろう。そのために、僧侶は宗義の正しい理解をより一層深めることが求められるのである。

（和田典善）

共同執筆者／大蔵健司・名和清隆・八木英哉・和田典善

（1）設問（8）から（9）
（2）設問（11）から（12）
（3）設問（13）
（4）設問（14）
（5）設問（18）から（22）
（6）設問（17）―1

第2章　分析研究編

1　檀信徒のお葬式に対する意識

はじめに当研究班以外の機関が実施したアンケートについて触れておきたい。

読売新聞社が平成20年5月17日から18日に行なった「年間連続世論調査　日本人」の「宗教観」に関する調査[1]によれば、何かの宗教を信じている人は全体の26・1％で、逆に信じていない人は71・9％に及ぶと言う。「あなたは死んだ人の魂は、どうなると思いますか。」との質問での回答は、「消滅する」が17・6％、「魂は存在しない」が9・0％で、合わせて26・6％が、死者が何らかの形で存続する事を否定する回答を寄せている。回答者自身の葬式について「葬式は形式にとらわれない無宗教の葬式にしてほしいと思いますか、そうは思いませんか、それとも葬式はしなくてよいと思いますか。」の質問には8・1％が「葬式はしなくてよい」と答え、「形式にとらわれない無宗教の葬式にしてほしい」との回答は実に39・1％に及んでいる。

また朝日新聞社が平成22年9月から10月にかけて行なった「死生観」についての世論調査[2]にも同様の質問がある。「あなたは、この世とは違う死後の世界や「あの世」があると思いますか。「あの世」はないと思いますか。」との質問に43％が「ないと思う」と答え、「あると思う」の49％に迫ろうとしている。死後に霊魂が残ると思うかとの質問でも「そうは思わない」が42％、「霊魂が残る」が46％と、死者の霊魂が死後も存続する事を否定する回答の比率は相当に高い。回答者自身の葬儀についても当然この影響が顕れる。自分の葬儀を「しなくてもよい」と36％が答え、その形式についての質問でも「宗教色を抜いた形式にしてほしい」が44％と、「なんらかの宗教に基づいた形式にしてほしい」と答えた回答の41％を遂に上回ってしまっている。宗教者としては危機感を持たざるを得ない数値である。ちなみにこの調査では「あなたには、家族の葬儀や追悼行事について相談できる宗教者（僧侶・牧師・神父など）がいますか。」

との質問があるが、いると答えた人は39％に過ぎない。6割以上の方は、葬儀や追悼行事について相談できるような宗教者との関わりを持っていないのである。

では浄土宗の檀信徒は現在「お葬式」をどのような意味で捉え、どのような意識を持っているのか、平成17年9月に当研究班が実施した檀信徒対象の「お葬式に関するアンケート」[3]（以下、「檀信徒アンケート」と略す）と、平成21年3月に実施した「お葬式に関するアンケート調査　寺院対象」[4]（以下、「寺院アンケート」と略す）」の二つのアンケートの結果から見えて来た「檀信徒のお葬式に対する意識」に関する事柄を報告したい。なお紙幅の関係からここでは、全教区の結果を中心とする。教区や地域による特性は第一章をご覧頂きたい。また年代差や性差による檀信徒の意識の違いなどは事項以降に譲る。

【自分のお葬式はしてほしいか】

冒頭の読売新聞の調査にある、自分のお葬式を「葬式は形式にとらわれない無宗教の葬式にしてほしいと思いますか、そうは思いませんか、それとも葬式はしなくてよいと思いますか。」という質問への回答は以下の通りであった。

1位「そうは思わない」	48・5％
2位「形式にとらわれない無宗教の葬式にしてほしい」	39・1％
3位「葬式はしなくてよい」	8・1％
4位「答えない」	4・3％

浄土宗の檀信徒はどうか。以下が当研究班の調査結果である。

1位「必ずしてほしい」	54％
2位「できればしてほしい」	34％
3位「まだわからない」	7％
4位「してほしいとは思わない」	3％
5位「無回答」	1％
5位「その他」	1％

「檀信徒アンケート」の回答者は、平成元年以降に喪主を努めた浄土宗の檀信徒で、ご住職を通して配布されたものであるから、ある程度菩提寺と近しい関係が築かれている方々と考えられる。一方読売新聞の調査対象は性別年齢を問わない不特定多数を対象としている。

読売新聞の調査では「そうは思わない」の48・5％が無宗教でない葬式を望む意見である。浄土宗の檀信徒は1位と2位を合わせて

88％が「必ず」もしくは「できれば」してほしいと望んでいる。

読売新聞の調査で「葬式はしなくてよい」と明確に否定した回答が8.1％なのに対して、檀信徒の全教区平均は3％である。しかし、特に東京・神奈川の2教区では明確な否定意見が8％と、読売新聞の調査とほぼ同数値が出た。近年喪主を務めたにも関わらず、こうした結果が顕れることは重く受け止めるべきであろう。自身が経験したお葬式に価値を見出せなかった、あるいは何らかの不満を持っている意識の顕れとも考えられるからである。また「まだわからない」という不確定的な意見も7％ある。

【お葬式を望まない理由】

浄土宗の檀信徒の中で、自分のお葬式を「してほしいとは思わない」その理由上位3位は以下の通りである。

1位「遺族の手を煩わせたくないから」　58％
2位「お葬式に意味を見いだせないから」　21％
3位「費用が高いから」　8％

金銭的な理由が高い位置に上るかと予想されたが、実際は3位でそれほど多くはない事が明らかとなった。「お葬式に意味を見いだせないから」もまた高い比率を占めそうだが、意外にも第1位は「遺族の手を煩わせたくないから」で6割近くを占めている。東京・神奈川では65％と更に高い。自らが喪主を務めた経験から、遺族の身心の負担を軽減してやりたいという「思いやり」からか、あるいは家族の関係が希薄になっていて迷惑をかけたくない、悪く言えば「世話になりたくない」間柄であるかなどが具体的な理由だろうか。

2位の「お葬式に意味を見いだせないから」が2割を超えている事も見逃せない。儀式の執行や法話の内容など、僧侶の職分に大きく左右される部分だからである。ただし、この理由は僧侶の努力次第では、今から取り除く事の出来得る部分であるとも言える。「自分の時もあの人に引導を渡してもらいたい」と感じて頂けるお葬式を、どなたのお葬式でも執行出来ているかどうか、今一度問い直す時が来ている。

【どんなお葬式を望むか】

自分のお葬式を「必ずしてほしい」「できればしてほしい」と答えた方への質問「あなたは、どのような形式のお葬式を望みますか。」の結果である。

1位「僧侶を招いた家の宗旨である浄土宗の葬式」　77％（2170人）
2位「遺族にまかせる」　18％（512人）
3位「自分の希望する宗教による葬式」　1％（37人）

4位「無回答」　1％（　28人）
5位「宗教色のないお別れ会」　1％（　21人）
6位「まだわからない」　0.4％（　11人）
5位「その他」　0.2％（　6人）

檀信徒の8割近くは、近年家族を送った時と同じく、浄土宗の僧侶を招いてのお葬式を希望している。地域的には「五重相伝」「授戒会」の開筵率の高い近畿センターでは81％と更に高く、東京、神奈川の2教区では73％と全教区より若干低かった。

また2割近い檀信徒が自分のお葬式の形を「遺族にまかせる」と回答している。ならば、解決策は遺族への「信仰の継承」を図る事であろう。お葬式の際の教化のあり方は、次世代の浄土宗檀信徒のお葬式のあり方を左右すると心得て、真剣に取り組む事が望まれる。

【お葬式の意味】

回答者が喪主として家族を送り出したお葬式での、最も大きな意味を尋ねた質問の上位3位は以下の通りであった。

1位「故人を極楽浄土へ送る」　33％
2位「故人との別れ」　30％
3位「故人の冥福を祈る」　28％

上位3位はほぼ拮抗した結果である。「故人を家の先祖にする儀式」「故人が自分らしさを表現する最後の機会」といった他の選択肢はいずれもわずかな数値で「残された遺族の心を慰める」の回答は1％である。

ところが回答者自身のお葬式の意味についての質問では、以下のように順位に差が現れているのである。

1位「家族や友人との別れ」　43％
2位「極楽浄土へ送ってもらう」　35％
3位「自分の冥福を祈ってもらう」　11％

家族を送る場合に対して、自分が送られる側の場合は、言わば「告別式」的意味合いに重きを置く人が増えている事が分かる。つまり、「極楽往生」という宗教的意味より人間関係上の別れの儀礼の意味が優先されるという事である。

では教師の側はお葬式の意味をどのような重点順位で伝えているかを、「寺院対象アンケート」から見てみよう。回答は第1位から3位までを重点を置く順に選択する方法を取った為、第1位に3ポイント、第2位に2ポイント、第3位に1ポイントを付け、総合ポイント数での比較とする。（以下ポイントはPで表示する）

1位「故人を引導し、極楽往生を薦める」　3322P
2位「故人の冥福を祈る」　2626P
3位「残された遺族の心を慰める」　2314P
4位「故人との別れ」　2151P

教師は上のような順で比重を置いてお葬式の意味を伝えている。檀信徒の意識と比べて、「残された遺族の心を慰める」に重きを置いているのが特徴と言える。しかし、檀信徒が家族のお葬式の意味として、これを選択したのはわずか1%である。あくまでも遺族にとってお葬式の中心は、故人その人であり、自分の為の儀式とは思っていないという事が明らかになった。

【死後の存在】家族の場合

「故人の霊は、あなたにとってどのような存在であると思いますか。」の質問には、檀信徒の85%と圧倒的多数が「見守ってくれている」、言わば守護的存在であると答えている。前述の読売新聞の調査では、「消滅する」「魂は存在しない」といった故人の死後の存続や、魂の存在を否定する人が4分の1以上あり、朝日新聞の調査では、魂が残る事を否定した回答が42%と高かった。しかし、浄土宗の檀信徒で「霊など存在しない」と答えた人は全教区では1%であり、北海道、東北、関東、北陸、中四国の5教化センターでは0%である。「霊」とか「魂」といった形ではないにしても、遺族を見守る存在として捉える回答が多く、わずかながら、「困った時に助けてくれる」1%、「供養しないとよくないことが起こる」2%と、能動的に働きかけてくる存在とした回答もある。これらを含めると浄土宗の檀信徒の約9割は、亡き人を死後も何らかの形で遺族との関係を保ち続けられる存在と認識している。

【死後の存在】自分の場合

では自分の場合はどうか。「あなたは亡くなった後、あなたの霊は、どこに往くと思いますか。」の回答では、全教区で63%が「極楽浄土」を選んでいる。「極楽浄土」を選んだ回答は関東・東海の各センターで59~60%と若干低いものの、北海道や九州では7割を超える。これは教師が説いた通り受け取ってくれた檀信徒の層と見て良い。

しかし、故人（家族）の存在を問うた時「霊など存在しない」は1%とごく少数だったが、自分自身の死後の質問では「死んだら何もなくなる」が12%と増加するのである。ごく近い親族のお葬式で喪主を務めた方にも関わらず、その1割以上が存在否定の回答を寄せた事には危機意識を持つ必要がある。

【葬儀式のどこが重要か】

檀信徒対象アンケートの次の質問「あなたは葬儀式の以下のどの部分が一番重要だと思いますか。」では、ほぼ7割の檀信徒が「僧侶の引導・読経」を選択し、以下は「焼香」8％、「出棺前の別れの花入れ」8％、「会葬者への挨拶」5％、「その他」3％と、2位以下が皆少数というのが、全教区での結果である。近畿センターや東京・神奈川のような、特徴の出やすいエリアでもほぼ同様の結果だった。

【戒名について】

「檀信徒アンケート」の戒名を希望するかを問う質問では、全教区では「戒名を希望する」55％、「すでに戒名を持っている」16％と、合わせて7割を超える檀信徒が、戒名肯定の立場を示している。「まだ分からない」という未確定層も13％あるが、戒名授与に対して理解を示している層はまだ厚い。「すでに戒名を持っている」人は五重相伝や授戒会に参加しているケースが多いと推測される。最も高いのは近畿の35％、次に高いのが北陸の18％である。しかしこのような教化の進んだ地域においても他のセンター同様「生前の名前のままで良い」との回答が約1割存在する。東京・神奈川においては17％に上る。ではその理由は何か。授与戒名が高額だという回答が比率として高いかと予想されたが、その実、これを理由とした檀信徒は全教区で18％、近畿センターで19％、東京・神奈川だけが29％と高い数値だが、最も多い理由ではなかった。最も回答が多かったのは「戒名の意味を見出せないから」の39％なのである。又、「生前の名前に思い入れがあるから」も32％と高い。これも、生前の名前以上の思い入れを戒名には見出せないという意識の顕れであろう。

やはり僧侶の側としては、選字の意味も含めた戒名授与の意味は積極的に伝えていくべきであろう。ただし、時間に制限のあるお葬式の時だけで全てを理解させようというのでは無理がある。お葬式以外の普段の教化を怠れば、浄土宗の檀信徒の中でも「お葬式に意味を見いだせない」方や「生前の名前のままで良い」という方が、今後増えて行く可能性は否定出来ない。

【法話について】

また法話についても、こちらが意図したほど伝わってはいない可能性もある。当研究所の現代布教班が、平成20年7月から8月にかけて東京・神奈川・埼玉・千葉の葬儀社の職員の方を対象に行なった「葬儀における法話のアンケート」調査[5]では、「客観的にみて、

心に響く法話は何％ぐらいでしょうか。」との設問をした。その結果は、浄土宗の葬儀に限った事ではないが、「81～100％」との回答はわずか1％であった。回答者の47％と約半数が、心に響いた法話は「0～20％」であると答えている。あくまでも葬儀社の目から見た感想ではあるが、「20～40％」が心に響く法話だったと答えた方も34％と高く、合わせて8割以上が、心に響いた法話はこれまで経験したお葬式全体の4割に満たないと回答しているのである。

僧侶は儀式の執行も勿論ながら、お葬式の意味を理解して頂く為の法話にも法式同様の準備をして望むべきである。しかし、前述のようにお葬式の現場だけでは時間的にも不十分である。日頃からその下地となる教化を行き渡らせておかねば、今後、浄土宗の檀信徒のお葬式に対する意識も、読売新聞社や朝日新聞社のアンケート結果が示すような危機的時流に呑み込まれてしまう可能性が高いと言えるだろう。本アンケートの結果を重く受け止め、せめて浄土宗に縁のある檀信徒がこうした危機的な時流に呑み込まれてしまわぬよう、積極的にお葬式を勤める事の意義や、過去、現在、未来の三世の因果を踏まえた上での念仏往生の尊さを伝えていかねばならない。

（1）読売新聞　平成20年5月30日朝刊掲載（個別訪問面接聴取法、回収率61・2％）
（2）朝日新聞　平成22年11月4日朝刊掲載（郵送法、回収率77％）
（3）本誌　第1章第1節、『教化研究』No.17、No.18参照
（4）本誌　第1章第2節、『教化研究』No.21参照
（5）『教化研究』No.21参照

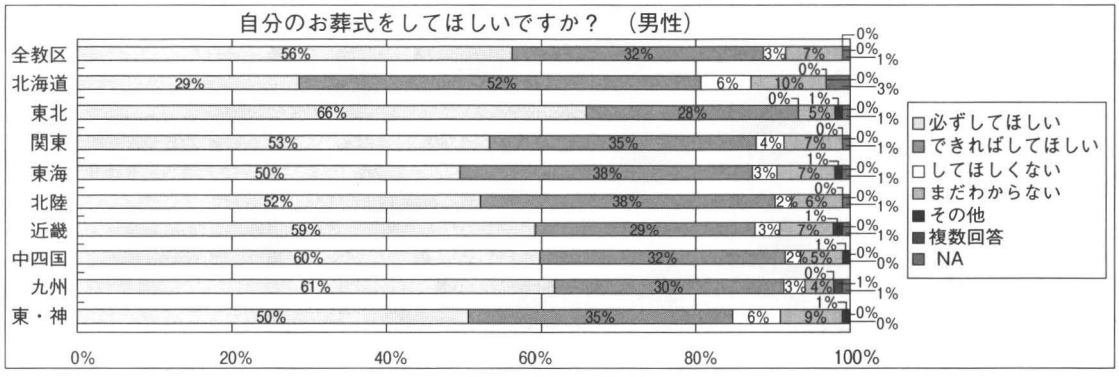
（執筆者　八木英哉）

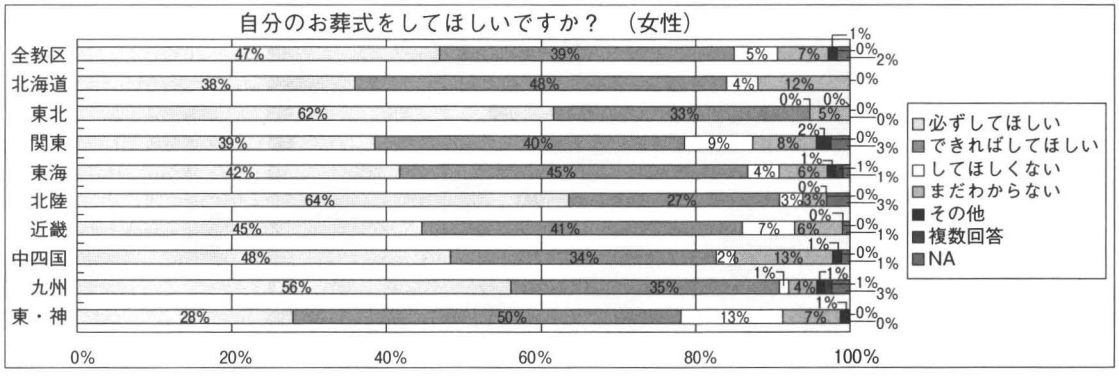
2　檀信徒の性差によるお葬式に関する意識について

ここでは、檀信徒アンケートから見られる性差によるお葬式に関する意識の違いについて、平成23年7月に（株）くらしの友が行ったアンケート調査[1]（以下、くらしの友アンケートと称す。）を活用し、その中で檀信徒に行ったアンケートと同様の設問に関して比較対象としながら考察を行っていく。

まず、檀信徒アンケートのお葬式を必ずして欲しいかの問いでは、「必ずして欲しい」、「できればして欲しい」と回答した数値の合計は、全国では男性88％、女性86％であり、男女ともに多くの方は、お葬式をして欲しいと考えている。一方「してほしくない」との回答は、男性3％、女性5％であり、この両者では性差による、あまり大きな違いは見られなかった。しかし、東京・神奈川では「してほしくない」との回答が男性6％に対し、女性13％とその差が大きくなった。

（1）被災地の葬儀にあってほしい「火葬場」、「棺」、「遺影」と題し、団塊世代の葬儀観について、東日本大震災以降による意識の変化や男女の意識差を調査。調査方法は2011年7月14日から15日首都圏（1都6県）在住の男女で、団塊世代（1947（昭和22）年～1949（昭和24）年生まれ）の方を対象としたインターネットによる調査。有効サンプル数は800。

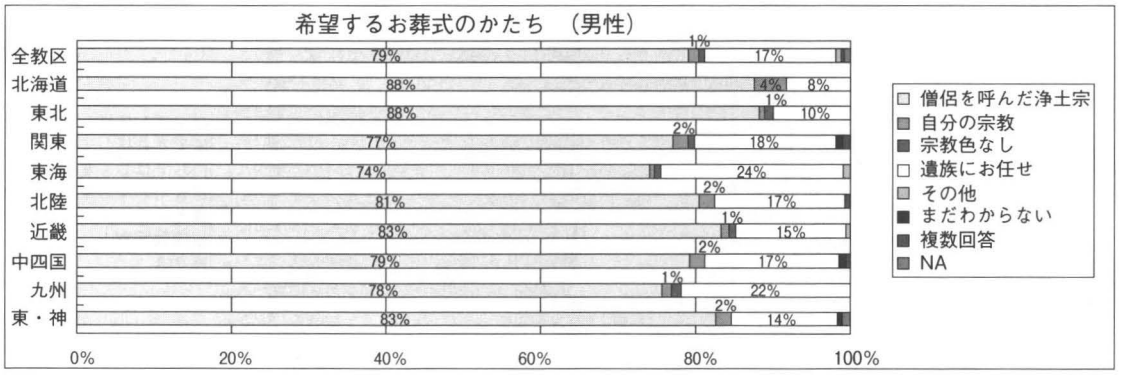


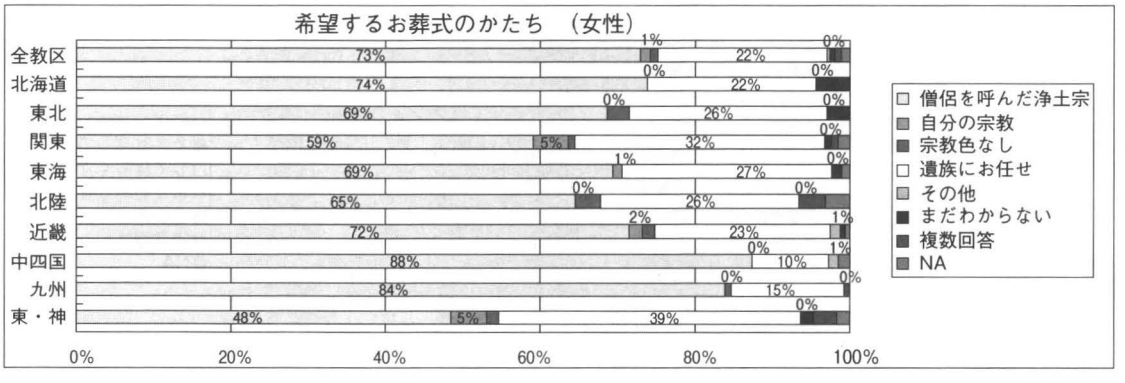


次に檀信徒アンケートで、あなたの希望するお葬式のかたちを問うたところ、「僧侶を呼んだ浄土宗のかたち」と回答が、男性79％、女性73％となっている。「遺族に任せる」と回答は、男性17％、女性22％となり、東京・神奈川では、男性14％、女性39％と都市部の女性では、「遺族に任せる」との回答が非常に高い数値となっている。

一方、くらしの友アンケートでは、あなたの葬儀はどういうものですかと聞いたところ、「自分の葬儀だから、自分の意思を反映させたものにしたい」との回答は男性36％、女性58％であった。また「遺族の意思を反映したものでよい」との回答は、男性39％、女性22％、さらには「深く考えていない」との回答は男性22％、女性18％であり、同社のコメントでは葬儀は「遺族のもの」と考える男性と「自分のもの」と考える女性というようにクッキリと分かれたとしている。

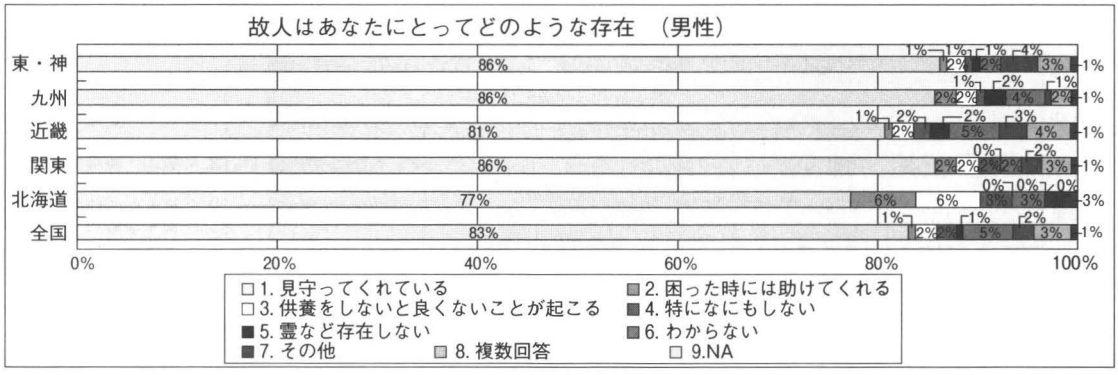
両アンケートを比較すると、檀信徒アンケートでは、「遺族に任せる」と回答する数値は全国の女性で22％とくらしの友アンケートの「遺族の意思を反映したものでよい」との回答の女性22％と同数値であったが、男性の数値は逆に檀信徒アンケートでは低い。さらには、檀信徒アンケートでは、男性の79％が浄土宗での形の葬儀を希望しているが、くらしの友アンケートでは、自分の意思を反映させたいとした男性は39％に止まっている。これらのことから、特に

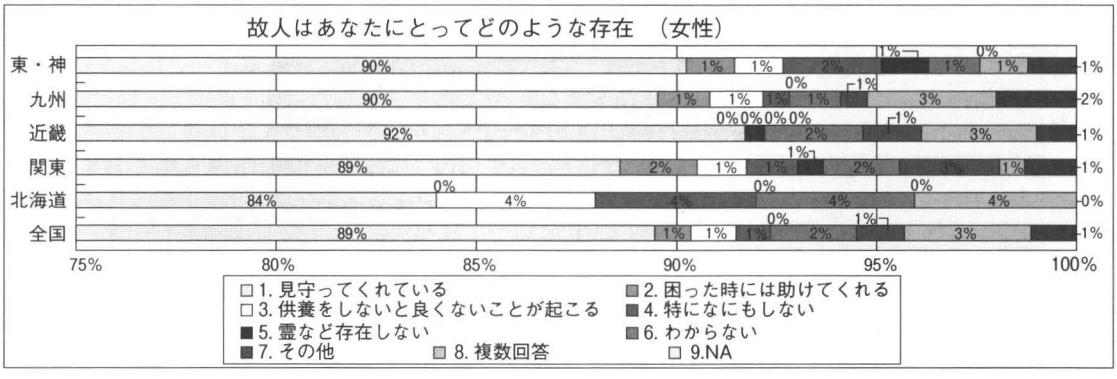




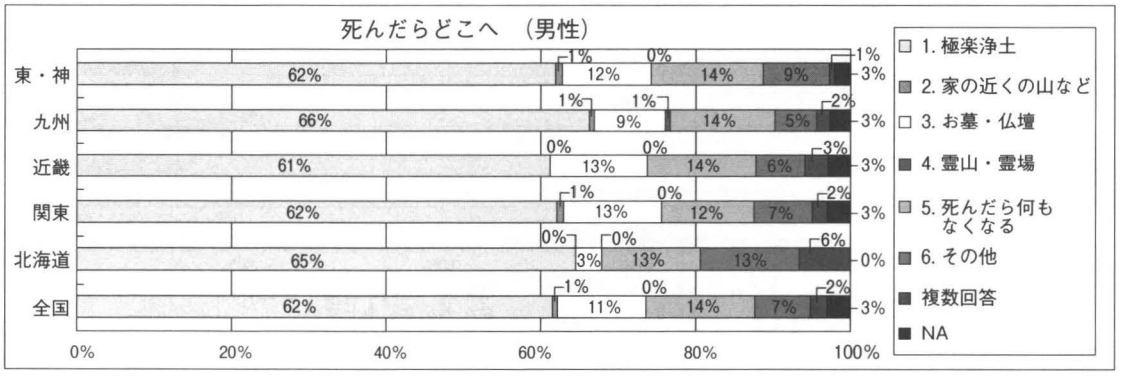
男性においては、浄土宗への帰属意識の差が明確に表れたのではないかと思われる。

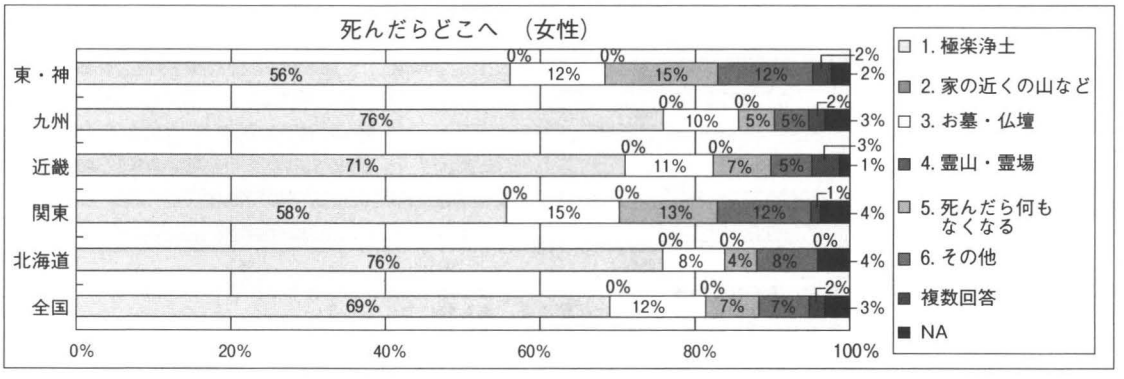
次に檀信徒アンケートで、故人はあなたにとってどのような存在かを聞いたところ、「見守ってくれる存在」と回答が、男性83％、女性89％となり、男性に比べ女性の方が、故人に守護されていたいという意識が高いことが窺える。一方男性は「困った時に助けてくれる」「供養しないと良くないことが起こる」という回答が女性よりごくわずかながら高い。





次に檀信徒アンケートで、死んだらどこへ行くかと聞いたところ、「極楽浄土」との回答が男性62％、女性69％であったが、「死んだら何もなくなる」と回答が男性14％、女性7％であった。これは、全国的にどの地域を見ても同様の数値がでており、お寺へ参る比率が女性の方が高いといったことが言われる中、今後男性への教化活動に重点を置いていく必要があるように思われる。

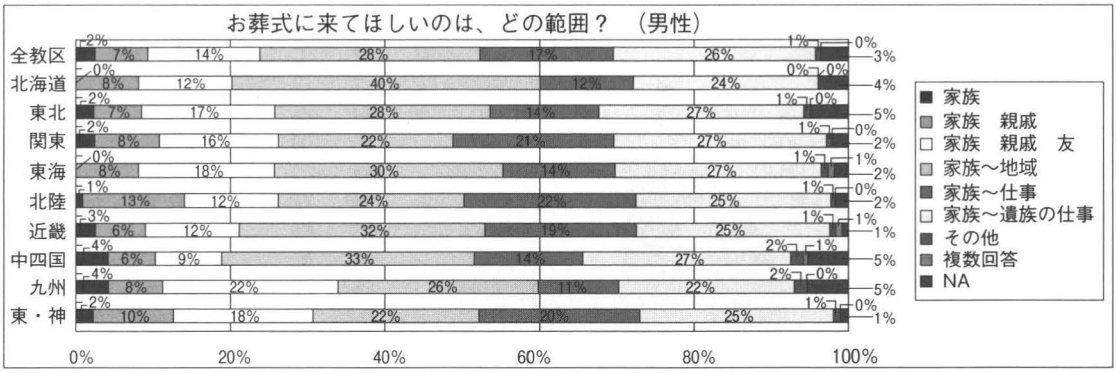


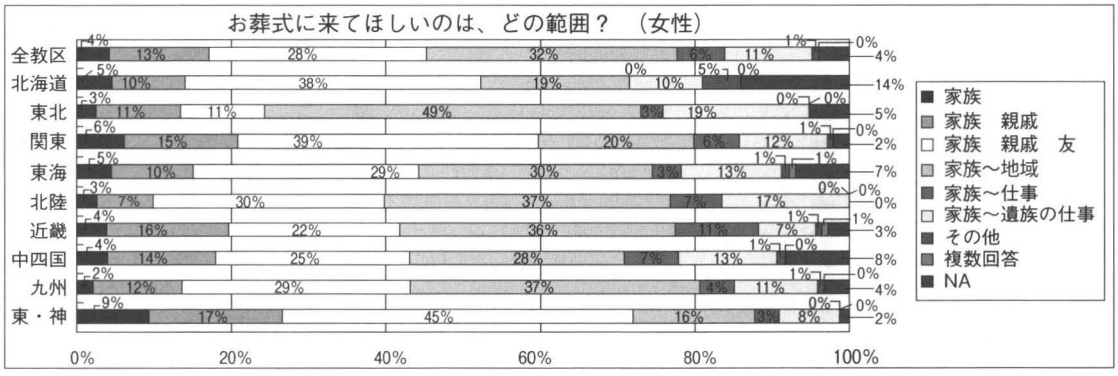


次にお葬式に来てほしいのはどの範囲かを聞いたところ、「家族」、「家族・親戚」までとした回答は男性9％、女性17％、「家族・親戚・友人」までとした回答は男性14％、女性28％、「家族・親戚・友人・地域」までとした回答は男性28％、女性32％であった。さらに「家族・親戚・友人・地域・仕事」までとした回答は男性17％、女性6％、「家族・親戚・友人・地域・仕事・遺族の仕事」までとした回答は男性26％、女性11％となった。このことから、女性は「家族」「親戚」「友人」「地域」までの範囲とした合計が77％に対し男性は51％であった。一方男性は「家族から仕事」「家族から遺族の仕事」までとの回答が43％で、女性の17％と比べ大きな差が生じている。このことは、現在の女性の生活範囲が男性の生活範囲に比べ狭いケースが多いことなどが考えられる。

一方、くらしの友アンケートでは、あなたがご自身の葬儀に望む形式はどのようなものですかとの問いに、従来型（家族、親類、友人、近所、会社関係）と回答が男性17％、女性7％、家族葬（家族、親類、友人）と回答が男性54％、女性51％、身内葬（配偶者や子供だけ）と回答が男性30％、女性42％となり、全体の9割近くが比較的小規模な葬儀を希望しているようだとしている。このことに関しては、檀信徒アンケートでも特に女性に関しては8割近くが「家族から地域」までの範囲と回答しており、くらしの友アンケート同様に比較的小規模な葬儀を希望している。

（執筆者　和田典善）





3　バリエーションに富んだ浄土宗の葬式

浄土宗における『葬儀式』は『浄土宗法要集』に記載されている差定（次第）は、迎接式（出棺式）、密葬式（迎接式に同じ）と表葬式の堂内式、露地式、三昧式（露地式に同じ）、自宅式（露地式に同じ）、となっている。基本的な導師脇導師式衆の作法である合鉞、鎖龕、起龕、奠湯、奠茶、下炬等は各式に記載されており基本的に複数の僧侶による葬儀式を想定したものとなっている。

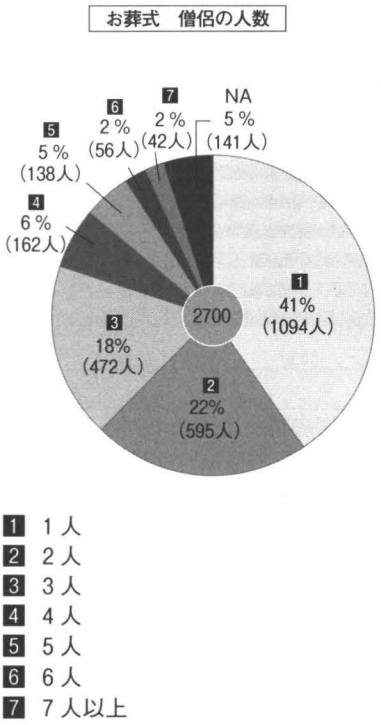
実際の現場では、僧侶アンケートでは

(11) 貴寺院では現在、葬儀式は何人の僧侶で行うことが多いですか。（一つだけお答えください）

1．一人　2．二人　3．三人　4．四人　5．五人　6．六人
7．七人以上

全国では「1人」が41％と最も多く、次いで2人が「22％」、「3人」が18％となっている。およそ8割の寺院が3人以内で葬儀式を勤めていることが分かる。「4人」は6％、「5人」は5％、「6人」は2％「7人以上」は2％であり、脇導師をつけた『浄土宗法要集』に記載されている形式はかなり少数派になっていることが分かる。

この「全国」の数値を見ると8割の寺院が3人以内であるから脇導師をつけた伝統的な形式が「標準的」な葬儀でな無くなっている事が分かる。



各教区別で見てみるとかなり差異があることが分かる。

この図からわかるように、回答が0％の部分がグレーの網掛け。黒地で文字白抜き部分がその教区で行われている葬儀の最大人数である。

1人か2人で行っている数が多いが1人で行うとの回答が80％前

僧侶の人数について（実数）

	教区	1. 1人	2. 2人	3. 3人	4. 4人	5. 5人	6. 6人	7. 7人以上	NA以外の回答数
1	北海道第一	9	22	5	0	0	0	0	36
2	北海道第二	7	18	2	0	0	0	0	27
3	青森	22	20	9	0	0	0	0	51
4	岩手	6	5	3	0	0	0	0	14
5	秋田	3	10	2	0	0	0	0	15
6	山形	3	25	8	0	0	0	0	36
7	宮城	13	10	1	0	0	0	0	24
8	福島	52	13	1	0	0	0	0	66
9	群馬	23	5	0	0	0	0	0	28
10	栃木	23	4	0	0	0	0	0	27
11	茨城	39	6	0	0	0	0	0	45
12	埼玉	51	12	0	0	0	0	0	63
13	東京	134	34	2	0	0	0	0	170
14	千葉	38	5	1	0	0	0	0	44
15	神奈川	81	19	1	0	0	0	0	101
16	山梨	1	5	12	1	0	0	0	19
17	新潟	4	20	12	0	0	0	0	36
18	富山	0	6	12	1	2	0	0	21
19	長野	5	13	36	7	2	4	0	67
20	静岡	15	22	14	28	2	0	0	81
21	三河	2	6	7	17	13	9	4	58
22	尾張	3	4	16	14	4	0	1	42
23	伊勢	15	16	27	7	16	3	7	91
24	伊賀	0	3	11	6	1	0	0	21
25	岐阜	0	6	5	7	2	0	0	20
26	石川	1	10	7	0	0	0	0	18
27	福井	0	1	10	6	13	0	5	35
28	滋賀	12	17	63	31	67	8	4	202
29	京都	138	27	33	8	5	0	0	211
30	奈良	4	10	19	4	4	27	19	87
31	和歌山	28	4	53	0	0	0	0	85
32	大阪	120	41	29	9	2	2	1	204
33	兵庫	48	19	19	9	4	1	1	101
34	鳥取	10	9	1	0	0	0	0	20
35	出雲	7	6	4	5	0	0	0	22
36	石見	1	7	6	0	0	0	0	14
37	岡山	8	2	0	0	0	0	0	10
38	広島	13	8	8	0	0	0	0	29
39	山口	26	13	3	1	0	0	0	43
40	南海	6	3	5	0	0	0	0	14
41	愛媛	19	5	3	0	0	0	0	27
42	福岡	50	45	3	0	0	0	0	98
43	佐賀	10	20	5	0	0	0	0	35
44	長崎	7	9	4	0	0	0	0	20
45	熊本	7	12	9	1	0	0	0	29
46	大分	4	15	1	0	0	0	0	20
47	三州	21	1	0	0	0	0	0	22
48	空白	5	2	0	0	1	2	0	10
総計		1094	595	472	162	138	56	42	

僧侶の人数について（%）

	教区	1. 1人	2. 2人	3. 3人	4. 4人	5. 5人	6. 6人	7. 7人以上	NA以外の回答数
1	北海道第一	25%	61%	14%	0%	0%	0%	0%	36
2	北海道第二	26%	67%	7%	0%	0%	0%	0%	27
3	青森	43%	39%	18%	0%	0%	0%	0%	51
4	岩手	43%	36%	21%	0%	0%	0%	0%	14
5	秋田	20%	67%	13%	0%	0%	0%	0%	15
6	山形	8%	69%	22%	0%	0%	0%	0%	36
7	宮城	54%	42%	4%	0%	0%	0%	0%	24
8	福島	79%	20%	2%	0%	0%	0%	0%	66
9	群馬	82%	18%	0%	0%	0%	0%	0%	28
10	栃木	85%	15%	0%	0%	0%	0%	0%	27
11	茨城	87%	13%	0%	0%	0%	0%	0%	45
12	埼玉	81%	19%	0%	0%	0%	0%	0%	63
13	東京	79%	20%	1%	0%	0%	0%	0%	170
14	千葉	86%	11%	2%	0%	0%	0%	0%	44
15	神奈川	80%	19%	1%	0%	0%	0%	0%	101
16	山梨	5%	26%	63%	5%	0%	0%	0%	19
17	新潟	11%	56%	33%	0%	0%	0%	0%	36
18	富山	0%	29%	57%	5%	10%	0%	0%	21
19	長野	7%	19%	54%	10%	3%	6%	0%	67
20	静岡	19%	27%	17%	35%	2%	0%	0%	81
21	三河	3%	10%	12%	29%	22%	16%	7%	58
22	尾張	7%	10%	38%	33%	10%	0%	2%	42
23	伊勢	16%	18%	30%	8%	18%	3%	8%	91
24	伊賀	0%	14%	52%	29%	5%	0%	0%	21
25	岐阜	0%	30%	25%	35%	10%	0%	0%	20
26	石川	6%	56%	39%	0%	0%	0%	0%	18
27	福井	0%	3%	29%	17%	37%	0%	14%	35
28	滋賀	6%	8%	31%	15%	33%	4%	2%	202
29	京都	65%	13%	16%	4%	2%	0%	0%	211
30	奈良	5%	11%	22%	5%	5%	31%	22%	87
31	和歌山	33%	5%	62%	0%	0%	0%	0%	85
32	大阪	59%	20%	14%	4%	1%	1%	0%	204
33	兵庫	48%	19%	19%	9%	4%	1%	1%	101
34	鳥取	50%	45%	5%	0%	0%	0%	0%	20
35	出雲	32%	27%	18%	23%	0%	0%	0%	22
36	石見	7%	50%	43%	0%	0%	0%	0%	14
37	岡山	80%	20%	0%	0%	0%	0%	0%	10
38	広島	45%	28%	28%	0%	0%	0%	0%	29
39	山口	60%	30%	7%	2%	0%	0%	0%	43
40	南海	43%	21%	36%	0%	0%	0%	0%	14
41	愛媛	70%	19%	11%	0%	0%	0%	0%	27
42	福岡	51%	46%	3%	0%	0%	0%	0%	98
43	佐賀	29%	57%	14%	0%	0%	0%	0%	35
44	長崎	35%	45%	20%	0%	0%	0%	0%	20
45	熊本	24%	41%	31%	3%	0%	0%	0%	29
46	大分	20%	75%	5%	0%	0%	0%	0%	20
47	三州	95%	5%	0%	0%	0%	0%	0%	22
48	空白	50%	20%	0%	0%	10%	20%	0%	10
総計		1094	595	472	162	138	56	42	

※　上記％は　分子：回答数
　　分母：各教区内ＮＡ以外の回答数

後またはそれ以上で、その教区は福島、群馬、栃木、茨城、埼玉、東京、千葉、神奈川、岡山、三州の各教区である。

3人以上で修することがない1人と2人のみの回答の教区は、群馬、栃木、茨城、埼玉、岡山である。逆に1人で行うのとの回答が無い教区が富山、伊賀、岐阜、福井となっている。

教化センター単位で見てみると　最も多い人数は

第一地区　北海道地方教化センター　2人2教区
第二地区　東北地区教化センター　1人4教区　2人2教区
第三地区　関東地方教化センター　1人7教区　3人2教区

このうち1都6県の関東地方はすべて1人で甲信越、の山梨、長野両教区は3人が最も多い。

第四地区　東海地方教化センター　3人3教区　4人3教区
第五地区　北陸地方教化センター　2人2教区
第六地区　近畿地方教化センター　1人3教区　3人1教区
　　5人1教区　6人1教区
第七地区　中・四国地方教化センター　1人7教区　2人1教区
第八地区　九州地方教化センター　2人4教区　1人2教区

多人数で葬儀を行う地域は中部と近畿が中心で特に静岡、三河、岐阜では4人で行うことが最も多く、福井、滋賀では5人が最も多い。

奈良では6人で行うが31％、7人以上が22％と全体の5割以上が6人以上で葬儀を行っていることがわかる。

他の地域は1人もしくは多くても3人で行っているのが特徴である。このように葬儀の形は教区ごとにかなり差があることが確認出来る。

『浄土宗法要集』では少人数で修するの差定は提示されていないのでアンケートからはどのような作法で葬儀が行われているかは確認できない。

総合研究所が平成13年に静岡教区を対象に予備調査として行ったアンケート調査では、（＊教化研究　第13号　浄土宗総合研究所）葬儀式で行う（唱える）ものの結果が下記の通りであるので、誦経以外の作法では必修の引導作法以外では合鉢が最も多くこの結果から類推すると下炬、誦経、合鉢等が多く行われ鎖龕、起龕、念誦等の脇導師作法が省略されていると思われる。

（9）次の中から普通の規模の葬儀式で行う（唱える）ものをすべて挙げてください。（該当する番号すべてに○印をつけてください）

1　合鉢　2　鎖龕　3　起龕　4　奠湯　5　奠茶
6　霊供　7　念誦　8　下炬・引導　9　下鍠・引導
10　その他の引導作法　11　授与三帰三竟
12　日中礼讃　13　三尊礼　14　その他の礼讃

15　声明（讃・唄等）　16　歎仏偈　17　広開偈
18　敬礼偈　19　阿弥陀経　20　四誓偈　21　歎仏頌
22　光明歎徳章　23　讃重偈　24　真身観文　26　詠唱
27　その他（　　）

質問6－9

合鉢	86	その他の礼讃	2
鎖龕	3	声明（讃・唄等）	0
起龕	3	歎仏偈	50
奠湯	5	広開偈	14
奠茶	5	敬礼偈	28
霊供	30	阿弥陀経	16
念誦	29	四誓偈	34
下炬・引導	94	歎仏頌	6
下鍠・引導	9	光明歎徳章	1
その他の引導作法	3	讃重偈	2
授与三帰三竟	27	真身観文	79
日中礼讃	0	詠唱	8
三尊礼	9	その他	7

また『図と写真で見る　知っておきたい基本的な法式作法〈上〉追善法要・葬儀式篇』熊井康雄著　浄土宗総合研究所監修　には導師と維那の2名での葬儀の解説がなされており現状の葬儀では同様に脇導師の作法が省略されている実態が類推される。

（執筆者　大蔵健司）

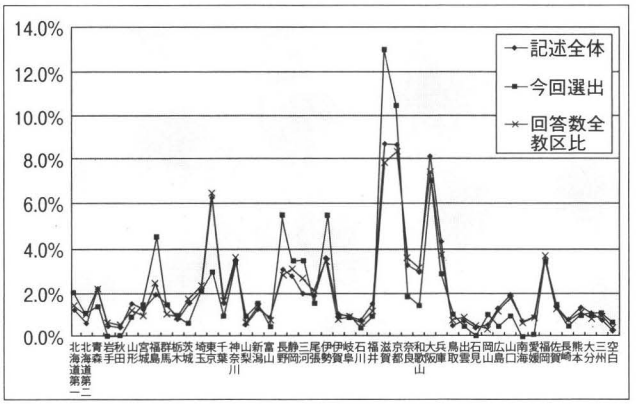
4　寺院アンケートから見たお葬式の問題

はじめに

本稿では、「寺院アンケート」の自由回答設問である設問（23）「現在、お葬式にどのような問題が生じていると思いますか、またどのようにしたらよいと思いますか。ご自由にご記入ください。」の回答を分析することによって、まず、僧侶方は、現在、お葬式にどのような問題が生じていると認識しているのか、また、その理由はどこにあると考えているのかについてまとめる。その後、これらの問題に対して、どのようにすれば良いと思うか、また実際どのような工夫をしているのかについてまとめていきたい。

なお、ここでは「この意見について何票あった」というような数量的な基準で、問題の深刻さの重軽を量るものではない。お葬式に見られる諸問題は、全国的に見られるものもあれば、都市部だけ、あるいは地方だけに見られるものもあるだろうが、ともかく巨視的にみて、「僧侶方はこのような問題があると感じている」というものをまとめることにする。

分析に用いるデータは、（23）に記述のあった１５２９票のうち２００票を無作為抽出したものである。分析の対象とした２００票のデータの抽出方法は、次の通りである。返信された順にナンバーリングし、ナンバーリングNo.１～５００から設問（23）に記述のあるものを無作為に35票を抽出、またNo.５０１～１０００から35票、No.１００１～１５００から35票、No.１５０１～２０００から35票、No.２００１～２５００から35票、No.２５０１以降から25票を抽出する層化抽出法をとった。なお、今回サンプリングした２００票を教区別に分けた比率は、（23）に記述のあった票を教区別に分け、その教区ごとの票数が全体に占める割合と概ね一致しており、サンプリングが適切であったと考える。



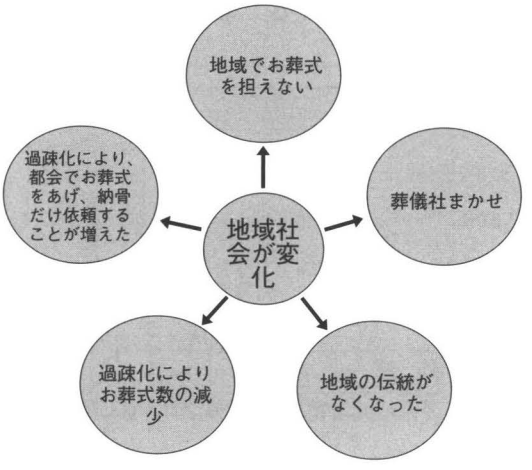
1．僧侶方が感じるお葬式の変化と問題点、その理由

ここでは、僧侶方が感じるお葬式の変化と問題点、およびその理由を、①地域の変化とその影響　②葬祭場でのお葬式の増大とその影響　③葬儀社の影響の増大　④お葬式・法要の形態の変化　⑤檀信徒の意識の変化　⑥僧侶の問題　とに分けてまとめていきたい。なお、参考のため、それぞれの意見の後には回答者の教区を記す。ただし、多数の回答があり、それが全国的な傾向を示している回答に関しては、回答者の教区は省略する。

①地域の変化とその影響

特に高度成長期を境にして、人口の移動現象、産業構造の変化が全国的に起こり、地域社会が大きく変化をした。これによってお葬式に変化が生じたとの意見が挙げられている。

・地域で葬式を担えない
　葬列が組めなくなってきた（静岡）
　過疎化の進行により、地域で葬儀を担えなくなった（福島）
　葬式組による葬式準備の簡素化（京都）
・葬儀社まかせになった
・地域の伝統がなくなった
・過疎化によって葬儀数が減少した（伊賀）（山形）（伊勢）（新潟）
・過疎地なので、年老いた夫婦が子供に引き取られ都会で死にお葬式をあげ、納骨だけ依頼しにくることが増えた（北海道第一）



②葬祭場でのお葬式の増大とその影響

葬祭場での通夜・葬儀が増えたという意見が多く寄せられた（34票／200票）。これは平成17年に実施した「お葬式に関するアンケート　檀信徒対象編」においても、葬祭場での通夜・葬儀の実施率が高い（通夜34％、葬儀式40％）ことが明らかになった。また、住職の意識からもこれを裏付けることになった。僧侶方はそのことによって、次のような影響が出ていると考えている。

・儀式に荘厳さが欠けるようになった（伊勢）
・地域の伝統がなくなり相互扶助がなくなった（茨城）（山梨）
・（寺で葬式を行う事が少なくなり、寺に来る機会が減ったことに

より）寺に関心のない檀家が増えた（群馬）

③葬儀社の影響の増大

葬祭場でのお葬式が増えてきたとともに、一連のお葬式、および喪家に対して葬儀社の影響が強くなってきていると感じている。その理由として、

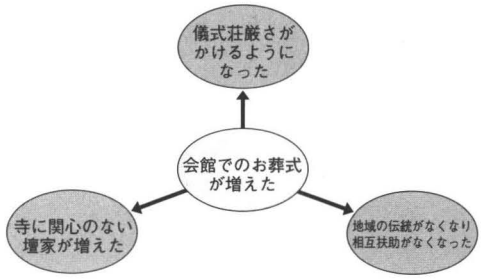
・地域社会の関係性が希薄になってきたため、近所の世話になりたくないという意識が強くなってきているのでは（大阪）（奈良）

・病院で亡くなる人がほとんどで、葬儀社が病院から介入している現状があるため（滋賀）（京都）

・親族間の交流が疎んじられている傾向があるため（兵庫）

・過疎化の進行により、地域で葬儀を担えなくなったため（福島）というような意見が挙げられており、本来、地域や親戚によって担われてきた役割を葬儀社が代わりに果たすようになってきた、との認識が見られる。また葬儀社の影響が増大してきたことによって、お葬式に次のような変化が生じてきたと感じている。

・喪主が相談するのは葬儀社



お葬式の仕方を葬儀社との間で生前に決める人が増えてきた（京都）

葬儀社主導で葬儀の時間などが決まってしまう（三河）（滋賀）

・葬儀社による過剰な演出がなされるようになった

葬儀社主導で過剰な演出（岐阜）（尾張）（京都）

お別れ会のようなセレモニー化（伊勢）

過剰なサービスがなされている（山口）（三州）

お葬式が均一化してきた（滋賀）（三河）

従来の習慣が希薄になってしまった（福島）（滋賀）（栃木）

・僧侶が付けたしのよう

・遺族が「お客様」というスタンスに

葬儀社任せのため、遺族親族が「お客様」というスタンスになって、「私たちが責任をもって送り出す」という意識が低下してきている（伊勢）

・葬儀社が間違った説明をしていることも

葬儀社が檀家に間違った説明をしていることがある（山梨）

・寺離れ

葬儀社まかせが寺離れの要因になっている（長野）

・葬儀社派遣僧侶の問題

葬儀社から派遣僧侶を手配してお葬式を行い、後日問題が生じ

ることもある（大阪）（三河）

派遣僧侶による葬儀で、葬儀や戒名の意義が軽いものになっている（埼玉）

これら葬儀社の影響に対して、僧侶方はどのようにすべきであると考えているのであろうか。このような状況を否定的に捉え、改善をすべきとする意見がある一方、葬儀社の存在を認めたうえで、僧侶も学ぶべきとする意見も見られた。

・葬儀社主導という現状に対して否定的に捉え、改善をすべき

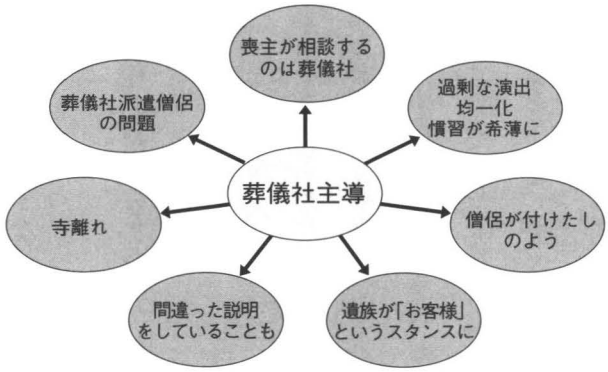
葬儀社が主導するのでなく、手伝い程度にとどめるようにするべき（福島）

葬儀の主導をにぎるため、宗・仏教会全体で運動すべき（滋賀）

葬儀社への教育が必要（鳥取）

住職がお葬式に関して相談されるようになるべき（京都）（伊勢）

・葬儀社の役割を認めたうえで、僧侶も学ぶべき



葬儀社がいなければ、お葬式が成り立たない現状（千葉）

葬儀社と僧侶との勉強会を開くべき（京都）

葬儀社がおこなっている部分が、遺族の心を慰めるうえで大切な部分が多い（広島）

葬祭ディレクターに負けないような僧侶のマナーアップを図るべき（京都）

④お葬式・法要の形態の変化

お葬式、またそれに続く追善供養の形態に関して、様々な変化が生じているとの意見が見られた。僧侶の人数の変化、参列者の減少、初七日・中陰法要での変化、飲食、その他においてである。

④-1　僧侶の人数の変化

まず、葬儀式において儀礼を執行する僧侶の人数が変化してきたという意見が多く見られた。これには、5人や7人といった多くの僧侶によるお葬式において僧侶の人数が減ってきたという場合、2～3人の僧侶によるお葬式が1人の僧侶によるものへと変化した場合、あるいは、地域にある他宗派寺院の僧侶を招き葬儀を執行する伝統がなくなってきたという場合もある。いずれにしても、寺院としてはお葬式に関わる機会が減少することにつながり、収入の減少

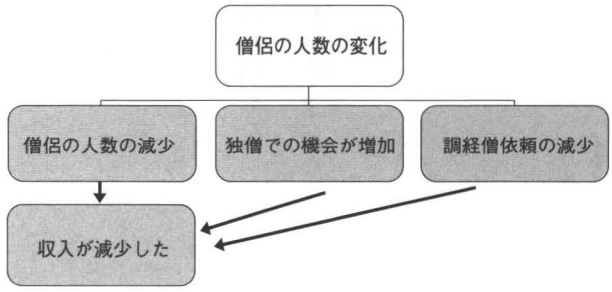
につながったという意見がみられた。

・僧侶の人数の減少（尾張）（兵庫）（三河）（滋賀）（静岡）（伊勢）（北海道第一）ほか

・一人で葬儀式を勤める機会が増加（山口）（京都）（福岡）（滋賀）（和歌山）ほか

・地域にいる他宗派の僧侶を呼ぶ習慣が少なくなってきている（京都）（和歌山）

そして、これらの状況に伴い収入が減ったという意見がみられた。



④-2 参列者の減少

近年、お葬式に参列する人数が減少している傾向が見られる。

・参列者が少なくなっている（兵庫）（佐賀）（栃木）（岡山）

・家族葬が多くなってきている（大阪）（静岡）（京都）（東京）ほか

という意見が見られたが、その理由としては、

・高齢化により、社会的に引退したひとのお葬式が増えている（東京）（岐阜）

・地域での人間関係の希薄化している（東京）（岐阜）

・地元に親戚が少なく、付き合いが薄れてきている（岡山）

という理由が挙げられている。

④-3 初七日・中陰法要での変化

初七日、中陰法要にも変化が生じているとの意見が見られた。

・葬儀式当日の初七日が増えている

葬儀式と同日に行うようになった

葬儀式当日の骨あげ後に行っていたが、葬儀式直後に行うようになった（式中初七日、繰り込み初七日ともいう）

・中陰法要を正当日以外にも

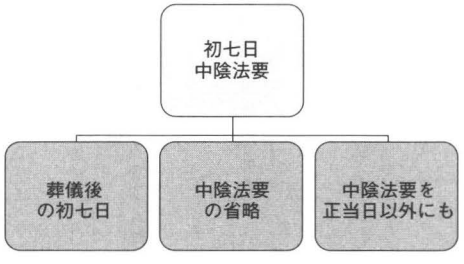
中陰法要を土日におこなうようになった（佐賀）

逮夜まいりを正当日に行えないようになってきた（尾張）

・中陰法要の省略

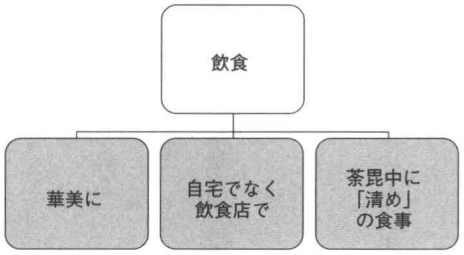
中陰法要を省略するようになった（京都）

回数を減らしてくれという依頼が増えた（京都）



④－4　飲食

・飲食が華美になってきている（福井）（青森）
・諸法要後の会食を自宅でなく、飲食店で行うようになった（福井）
・火葬場で茶毘に付している間に「お清め」の食事をとる場合が増えている（埼玉）



④－5　その他

・通夜主体で、葬儀式が付け足しのよう（青森）
・通夜の時間が制限されるようになった（北海道第二）
・葬儀式と告別式の混同（尾張）
・会葬者より香典を受け取らないお葬式が増えた（京都）（滋賀）
・近年のお葬式はきれいであるが、生死を見つめる大切な場を失った（長崎）
・葬儀式の時間が火葬場の都合で決まるようになった（大阪）

⑤檀信徒の意識の変化

檀信徒の意識に関して、次のような変化が生じているとの意見が見られた。

・お葬式全体に関して
お葬式を「お金のかかる厄介な風習」ととらえる傾向がある（埼玉）（奈良）
お葬式を宗教でなく、ただの風習として捉える人が増えた
派手な葬式を望む人が減ってきた（宮城）
家の先祖の一員になるという意識より、個人的な意識を重視したお葬式が多くなっている（大阪）
お葬式後、兄弟・子供がいても骨を寺に預ける人がいる（三河）
・布施に関して
布施が高いといわれる（群馬）
布施を料金と捉える人が増えた（京都）
・戒名に関して
戒名に興味がない人がいる（滋賀）
・檀信徒間での意識の相違
60歳代より若い世代の意識が、その前の世代と違う（京都）
旧檀家と新檀家に意識の違いがある（大阪）

⑥僧侶の問題

・説明不足、教化不足

お葬式や戒名に関する僧侶の説明不足（大阪）
僧侶の教化不足（大阪）
・勉強不足
教師の勉強不足（尾張）
僧侶自身が葬儀の意味を分かっていない場合がある（滋賀）
・お葬式の際の態度
僧侶のモラルの欠如した態度（京都）
お葬式のとき、経だけあげてさっと帰るような僧侶がいる（伊勢）

2．どうすればよいと思うか。どのような工夫をしているか。

自由記述のなかには、現在のお葬式の変化や問題点に対して、「どのようにすれば良いと思うか」「どのような工夫をしているのか」という意見も多く見られた。

①通夜・葬儀の場所の問題、②葬儀、諸法要を勤めるにあたっての工夫、③法話に関して、④信仰心の涵養に努める、⑤布施に関して、⑥平素からの檀信徒との関係、⑦地域と寺院、⑧僧侶の教育、⑨その他　とに分けて、以下にまとめる。

なお、葬儀社との関係についての意見も見られたが、これに関しては先の項で挙げたので、ここでは省略する。

①通夜・葬儀の場所の問題
・通夜・葬儀を寺院で行うように指導
・葬儀を自宅で行うように指導（福島）（京都）
・追善回向は寺でおこなうように指導（千葉）
・葬祭場で行っても、主導権はしっかりと握るべき（長野）

②葬儀、諸法要を勤めるにあたっての工夫
・丁寧に葬儀を行う
・なるべく独葬を断るようにする（伊勢）
・初七日を正当日に行うようにする（京都）
・儀式に新たな工夫が必要な時期にきている（東京）
・参列者全員が式に参加し供養できるように、全員で念仏を称えるようにしている（群馬）
・往生の素懐を遂げた本人と残された見送る縁者との共生を演出する方向が大切（滋賀）
・詠唱を取り入れ、お葬式次第を工夫（福島）

③法話に関して

・枕経は布教の大切な機会（北海道第一）
・通夜で法話をする（岡山）
・葬儀は念仏を勧める最高のチャンス（京都）
・心を打つ法話（群馬）
・枕経、通夜、葬儀、中陰でしっかり法話をする（三河）
・枕経、通夜、葬儀、中陰、追善供養という一連のなかで、浄土宗の教えと儀礼、日常の祀り方などをしっかりと伝える（兵庫）
・葬儀の意味を伝える（鳥取）（三河）（滋賀）

④信仰心の涵養に努める

・信仰を深める努力（滋賀）（埼玉）（群馬）
・死後の世界があることをきちんと説く（神奈川）
・「天国に行く」という一般的な用語をあらため、「極楽浄土」という他界観をしっかりと説く（埼玉）
・誰もみな浄土へ行くと僧が確信し、強く伝える（東京）
・念仏信者でない檀家に「死ねば極楽往生する」と説く僧侶が多い。念仏申さぬ者は極楽へ行けないと説くべき（新潟）
・死に対する世界観や精神性を共有できる機会を普段から持つ（滋賀）
・戒名と法名の区別をしっかりとする。（岐阜）
・先祖祭祀の大切さを説く（長野）

⑤布施に関して

・布施は檀家が決める（東京）
・布施にこだわらないこと（青森）
・お葬式布施（戒名料）についての宗の指針があってもよいのでは（東京）
・地域に浄土宗寺院が複数あり、それぞれ布施がかなり異なる状況にある。地域の寺で調節する必要がある（三河）

⑥平素からの檀信徒との関係

・普段からの檀家との関係を大切にする、接点を増やす（京都）（東京）（宮城）（大阪）
・寺に来るように指導（伊勢）
・寺は檀家のグリーフケアの役割を果たすと自覚する（神奈川）

⑦地域と寺院

・寺を地域のコミュニティの中心にする（京都）（福島）
・寺を念仏道場として生活の一部となるよう薦める（福岡）

・檀家制度の再興（佐賀）

⑧僧侶の教育

・宗がもっと実用的な書籍の配布などを行い、僧侶の力量の底上げをする必要（京都）
・業者まかせにならないよう、宗や宗公認の団体による指導が必要（伊勢）
・僧侶がプロ意識を持つ（千葉）
・意識の低い僧侶への教育（京都）
・家族へいかに安心を持たせるか考える（京都）
・他寺院の檀家の葬儀を行う場合には、勝手に戒名を授与したりすることは慎む（長野）

⑨その他

・葬式仏教から脱却した寺院のありかたを模索する良い時期と捉えるべき（大阪）（福島）（東京）（三河）
・能化が葬式などすべきではない（京都）
・クリスマスのように4月8日を強調したい（大阪）
・寺院墓地を使用するにあたり、浄土宗の儀式を行うような制約をしっかりとする必要がある（福岡）

結語

ここでは、僧侶アンケートの自由回答をもとに、僧侶が考えるお葬式の変化と問題、またこれらの問題についてどのようにすべきであるか、という意見をまとめた。ここからは、お葬式が大きく変化し、多様化しているという実態が浮かび上がった。また、僧侶がこれらお葬式に起こっている問題に対して行っている工夫も多く見られ、非常に示唆に富んでいた。

むろん、これらの変化や多様化の全てが「負的意味あい」、つまり歴史的にお葬式の執行者としての役割を果たしてきた僧侶や寺院に悪影響を与えるものではないだろう。しかしながら、これら変化のなかの「お葬式における宗教性の希薄化」、「簡略化」という変化は、大きな問題であると考える。お葬式において宗教性が希薄化してきたこととは、僧侶の儀礼執行の内容が変化したということではなく、場所の変化、葬儀社による演出などによってお葬式に「別れ」の要素が強くなり、相対的に葬式の持つ宗教的意味会いを感じ、理解することが難しくなってきたということである。これには葬列や念仏講などの葬送習俗が消滅したことも関係しよう。

現在、「お葬式に僧侶はいらない」という主張が一部書籍に見られ、人々に少なからず影響を与えていると考えられるが、このような仏

教式のお葬式を批判する理由の一つは、「お経、また儀式の意味が分らない」というものである。これには、お葬式の現代的変化によって人々にお葬式の意味が伝わりにくい状況になったことも関係しよう。だからこそ、我々はしっかりと阿弥陀仏と極楽浄土の存在を伝え、その上で浄土宗のお葬式の意味・意義をしっかりと伝える必要がある。

また、お葬式において大きな問題となっているのは、お葬式の「簡略化」である。葬儀式において僧侶の人数を減らす、初七日を葬儀式と同日あるいは葬儀式に引き続いて行う、地域の人々を呼ばないなど、全国的傾向としてこの「簡略化」は広がっている。一部の都市部では、通夜を行わず1日で済ませる「ワンデーセレモニー」という形式も登場している。これらの簡略化は社会的変化に伴い必然的に起こってきたとも考えられるが、大きな問題なのは、檀家を含めた一般の人々が「お葬式の持つ大切な意味」を忘れ、安易にこの流れに便乗している傾向があることである。また、僧侶側にも安易にこの傾向を「良し」としている傾向があるのではなかろうか。

一般的にお葬式の持つ機能には、①死体の処理　②霊魂の処理(浄土宗の場合では弥陀の来迎を願い往生を薦める)　③死の社会的認知　④共同体に生じた危機を克服する、ことが挙げられる。また、これらの機能が果たされたことによって、悲嘆の癒し(遺族の悲しみが癒される)という結果も生じる。安易な簡略化はこれらの機能を欠くことにつながる。僧侶はしっかりとこのようなお葬式が持つ機能を理解したうえで人々に伝え、安易な「簡略化」の流れを防ぐ責務があるのではないか。

僧侶自身も強く感じているように、現在、お葬式は大きく変化し問題も生じている。またその中で、「仏教式のお葬式はいらない」という批判的な意見も出てきている。我々僧侶はより一層の危機感をもってこの問題にあたらねばならない。浄土宗のお葬式が大きな意味・意義を持ち続けるためには、檀信徒、また一般の人々の意見や批判を総合的に捉えたうえで、各僧侶が実際に行っている工夫を皆で共有し「より良い」お葬式を考える必要があるであろう。

(執筆者　名和清隆)

5　まとめ

平成21年に行なった寺院対象の「お葬式に関するアンケート調査」は、檀信徒対象アンケート調査（平成17年実施）の分析結果に基づいて、僧侶と檀信徒のお葬式に対する意識を比較研究することが目的であった。しかしながら、寺院対象の調査では、儀式の実施方法や変化に関する設問が全体の約三分の二を占めたため、意識として比較できた点は、①お葬式の意味について②亡き人の存在について③戒名の意義についての三点である。個別の分析は第1項と第2項に詳述したが、上記三点についてアンケートの結果から見られる両者の意識について記し、本章のまとめとしたい。

①お葬式の意味について

これに関連するアンケートの設問は、

（ア）お葬式の意味をどのように説いていますか（寺院アンケート⑰-1）

（イ）お葬式のもっとも大きな意味は何でしたか（檀信徒アンケート⑥）

（ウ）あなたは自分のお葬式にはどのような意味があると思いますか（檀信徒アンケート⑧-4）

の3問である。寺院アンケートの（ア）は8つの選択肢の中から順位をつけて3項目以内を選ぶ回答法であったが、お葬式の第一義である「故人を引導し極楽往生を薦める」が第一順位を占めたのは、浄土宗の教師としては当然であろう。しかしながら、有効回答2681のうち、第1位から第3位までに「極楽往生」を選択したのは1422名で、「お葬式の意味は説明していない」の合計390名を除いても、869名即ち回答者の32%余りは極楽往生に全く触れていないことになる。

檀信徒アンケートでは（イ）回答者が喪主を務めたお葬式と（ウ）回答者自身が亡くなったことを想定した場合のお葬式の意味を択一方式で尋ねてみた。（イ）では33%（ウ）では35%が「極楽浄土へ送る（送ってもらう）」と答えているものの、（ウ）では「家族友人などとの別れ」が44%で第1位、（イ）も「故人との別れ」が30%で第2位である。これを（イ）では「極楽浄土へ送る」と「冥福を祈る」を合わせて宗教的儀礼と捉えている回答と分析し、（ウ）の第1次分析では葬儀の告別式化の反映とした。しかし浄土宗のお葬

式で喪主を務めた後に、自分のお葬式は別れの儀式と考える人が増加している点に注目すべきであって、むしろお葬式を執行した教師の32％が法話で「極楽浄土」に触れていないことの方が問題であろう。浄土宗教師である以上「お葬式は極楽浄土へ引導する儀式」である旨を必ず説く必要があることを示しているのではなかろうか。

②亡き人の存在について

（a）亡くなった方はどのような存在であると説いていますか（寺院アンケート⑰－2）

（b）故人の霊はあなたにとってどのような存在だと思いますか（檀信徒アンケート⑥）

（c）亡くなった後、あなたの霊はどこに往くと思いますか（檀信徒アンケート⑩）

の3問が、亡き人の存在に関する設問である。寺院アンケートの（a）は①の（ア）同様、複数の選択肢の中から3項目以内を選ぶ回答法で、当然ながら「極楽浄土で仏となるために修行をしている」が第1位を占めている。これに「家族などを見守っている」「家の先祖となり子孫・家族を見守る」が続くのは、極楽往生してから成仏するまでの経過を説く法話と捉えれば、ある意味では自然の流れといえよう。

檀信徒アンケートの（b）は、亡き人の存在ではなく、喪主と亡き人との繋がりを尋ねた設問であったため、（a）とは質問内容に異なりがあり、一概に比較はできないが「見守ってくれている」と答えた人が85％に上っている。（a）で「極楽修行、見守り」の3項目を選択した回答が89％（ポイント換算）であるから、寺院側の説明と檀信徒の意識は比較的近い結果とも考えられる。ただし（b）に「極楽浄土で……」という選択肢があった場合、どれ程の人がこれを選ぶかは興味深いところである。

（c）は自分の死後の存在に関する質問で、「極楽浄土」が63％と三分の二近くを占めている。寺院アンケート①の（ア）で「極楽往生」、（a）で「極楽浄土」に触れると回答したのが、それぞれ53％と68％であることを考えれば、妥当な数字とも言える。しかし「死んだら何もなくなる」が12％もあるのは重大な問題である。寺院対象の法話に関する質問（a）で「死んだら何もなくなる」と答えたのはさすがに0.3％弱であるが、〈死んだら安らかにしているだけで何もしていない〉とも受け取れる「安らかに眠っている」という回答が14％あったことと何らかの関連があるとも考えられる。一般の人であれば「安らかに眠っている」のは心地良い表現であろうが、浄土宗教師が用いる言葉としてはあまり適切とは言えないであろう。①・②の回答を通じて浮かび上がってくるのは、やはり極楽往

生を説く必要性のように思われる。

③戒名（法名）の意義について

戒名の意義に関連する設問としては、

（あ）戒名の意義や意味を説明していますか（寺院アンケート⑱）

（い）あなたは戒名を希望しますか（檀信徒アンケート⑼）

（う）俗名によるお葬式を希望する理由は何だと思いますか（寺院アンケート㉒－1）

（え）俗名のままでよいと思う理由は何ですか（檀信徒アンケート⑼－1）

などが該当する。（あ）で「説明している」「尋ねられたら説明する」と答えた寺院は92％強であり、かなりの高率で戒名の意義や意味が説かれているように見受けられる。しかし戒名の必要性を説いている寺院側に対して、（い）の檀信徒回答で「希望する」は53％と、今一つ認識はすれ違っているようである。寺院の回答のうち「ほとんど説明しない」「説明するものではない」が7％、「尋ねられたら」という消極派の39％を含めれば、46％が進んで説明はしていないことになり、檀信徒の戒名希望者と反比例している傾向もうかがえる。俗名希望の理由については「戒名の意味を見いだせないから」とする回答が最も多く、寺院26％、檀信徒39％、一方「戒名料が高額」という回答は、寺院が2位の19％であるのに対して、檀信徒は3位の18％である。パーセンテージは大差ないが、檀信徒は「俗名への思い入れ」が2位を占め32％である。しかし今回の分析には表れていないが、檀信徒アンケートが菩提寺経由であること、アンケート実施以後に、マスコミなどで戒名料を批判する論評が急増していることなどを考慮すると、配布方式を変えて改めてアンケートを実施した場合には、逆転することも充分考えられよう。戒名の意義の説明と戒名料の問題は、避けては通れない課題である。戒名は授与するものであり説明の必要はないという見識も理解はできるが、何事にも説明責任が求められる時勢であることを考えれば、積極的な意義や意味の説明が「戒名離れ」を防ぐことに繋がるのではなかろうか。

お葬式の変容は止まることがない。今回のアンケート調査は第1回目であるが、お葬式の変化を把握するためには、定期的にこの種の調査を実施することが必要である。そのためには、アンケート作成に当って比較しやすい内容に設問を修正する必要があること、回答選択肢の一部に研究班の思い込みによる回答例があったため再検討を要すること、分析をスピードアップすることなどが、今後の検討課題となろう。

（熊井康雄）

第3章　お葬式をとりまく環境の変化

1　危機を迎える仏教葬儀

はじめに

都市部における仏教葬儀の減少と変化

わが国で現在行われているお葬式は、大まかにいって約8割が仏教式であるといわれる。

もちろんこの数値は地域差が大きい。農村部など地域共同体が緊密で、寺請制度などにより歴史的に寺院が各地域に配置されてきた地方から見ると、この数字はあまりに低すぎると思われるかもしれない。しかし、後述するように大都市部を中心に、寺院との関わりをあまり強く持ちたくない人たちによる、葬儀のみの僧侶依頼や無宗教葬など仏教葬儀離れが進行していることは明らかである。

仏教葬儀はどのように選択されてきたか

これまでどのような人が仏教葬儀を選択してきたのであろうか。

第一は、菩提寺と檀信徒関係を結んでいる世帯である。第二は、次男や三男など独立した世帯ではあるが、親戚や兄弟、または喪家自身に「家」の宗派という伝統的な束縛が、葬儀を行うときの形態や宗派や寺院の選択に影響を与えている場合である。こうした選択の形が、近年まで極めて大きな比率を占めていたが、このケースは現在急激に減少している。第三は、とにかく仏教葬儀ならば親戚も納得してくれるから何宗でも良いと葬儀社に依頼する場合である。第二、第三のケースとも宗派の教義をきちんと理解している場合は少ないようである。このように、親族の拘束力が弱くなってきているのが、近年の大きな特徴と思われる(1)。

「家」制度の衰退と葬儀無用論の関係

田畑、山林や家産や財産の維持継承を前提とした「家制度」が衰退し、住職が檀信徒に語りかける「ご先祖さま」という言葉が、実

感のこもった言葉として受け止められるような生活体験を持つ人たちがほとんどいなくなった。死者は遺族の供養によって「先祖」になって、「家」の繁栄、一族の安寧を守護してもらわなければならない、という生活実感は希薄になっている。それでも、多くの地域では当然のこととして、仏教葬儀が行われてきた。どうして別れの場には、仏式葬儀がふさわしいと考えられてきたのだろうか。

長年にわたって親族共同体や「家」の維持に有効な「子孫による供養と先祖の加護」という宗教的関係によって教化を行ってきた仏教でお葬式を行うことは、親族関係や共同体にある種の共感感情と一体感、安心感を与えてきたことがその理由の一つとして考えられる。しかし、流入民によって急激に拡大した現代の都市は、特に高度経済成長期を経て、その構成員の意識を大きく変えてきた。日本の戦後復興の第一期である朝鮮特需、その後の昭和29年から32年にかけての「もはや戦後ではない」と言われた神武景気、昭和33年から36年の岩戸景気、昭和40年から45年のいざなぎ景気の時代に、「金の卵」として地方から都市部に賃金労働者として集団就職した多くの人たちは、地域社会から離れた人数が極めて高く、転勤が多く、社宅・共同住宅から戸建て住宅への定住化が遅かった為、地域共同体意識が薄く、伝統社会から切り離されて個人主義指向が強いことが指摘されており、このことがこの世代の死生観やお葬式への意識を大きく変えたことが推測される。この意識の変化は、第1章の檀信徒の意識調査にも分析されている。多くの人々にとって、お葬式は別離のための儀式という意識が中心で、葬儀社の進行もそうした流れに乗っている。そこには浄土宗の教義に根ざした宗教的意味はあまり強くうかがえない。

1. 変化するお葬式と檀家制度の危機
―家族葬・直葬・無宗教葬の増加―

家族葬の増加

家族葬とは、会葬者などの範囲を意図的に喪家が縮小したお葬式の形態を指す。一般的には、お葬式の会葬者などの規模から見た形態で、通夜・葬儀を行うパターンがほとんどである。最近の都市部の葬祭場は、私営・公営も含めて家族葬用の小さな式場を用意しているところが多い。家族葬と同様な用語として身内葬と表現する業者もあるが、内容に関しては違いを見ることはできない。家族葬は、一般に家族とごく近い親族やあるいは少数の親しい友人までを含めた意味であるが、固定された範囲を指すものではない。家族葬は、都市部では急激に増加している。四十九日法要やその後の年回法要の参列者の規模も同様で、子供家族のみということも多い。近年までは、出席者が少ないことを、申し訳なさそうに告げる喪主が多かっ

たが、最近は「家族だけでします」とはっきりと言う人が増えてきている。

また、遺族が都市流入第一世代である場合、高齢化して独居生活をしている親を都市に引き取り、高齢者施設に入居させる場合も多い。この場合には遺族の住む地域にほとんど生活していないことが多いため、亡くなった親は地域住民となっていない。そのため、遺族が地域近隣住民に知らせることなく、住民の会葬を希望しない例が増えてきている。

そこで、近隣に知られないように直接葬祭場に遺体を移送することが多く行われている。近隣から隔離してお葬式を行うのである。これを「密葬」と呼ぶことも多く見られる。また、高齢化社会のため、故人の生前の交友関係が遺族に不明になっていることも多い。こうした社会の変化によって、家族葬は急激に数を増やしつつある。

直葬の増加

近年新聞等で、通夜、葬儀などを行わずに直接に火葬をしてしまうことを「直葬」と呼び、その数が急増していることが報じられている。直葬の読み方については、現在では「ちょくそう」が一般的である。ちなみに、次の『産経新聞』では、ルビがふられていた。平成二十年秋彼岸期間中に、『産経新聞』が取り上げた「直葬」特集への反響は大きかった。家族の葬儀を、宗教儀礼を伴ったお葬式で行った人たちから、自分の時は「無宗教の直葬にしたい」という意見が数多く寄せられたのである。多くは、費用が高額で、お葬式の意味を理解することもできず、遺族に経済的ばかりでなく人的にも負担が大きく、ゆっくり家族でお別れも出来ないといったお葬式への批判であった。[2] これからさらに、直葬が増加するであろうことが予想される。

無宗教葬の増加

「無宗教葬」とは、宗教者による儀礼を伴わないかたちでのお葬式を指すが、近年この無宗教葬の増加が指摘されている。次男以下の独立所帯では、自分たちは菩提寺を持っていないと考える人たちが増え、寺檀関係を煩わしく思う人たちが出てきているのは、寺墓地よりも霊園を選ぶ比率の高さにも明らかである。寺の行事に縛られず、年回法要も自分たちがしたいときのみ選択的に寺と関わることを望む人たちが近年増えているのである。こうした層を中心に、無宗教葬は増加していくのではないだろうか。

「親が葬儀はしなくて良い／質素にして、おまえたちに迷惑掛けたくないからと言っていたから」ということを理由にして、家族葬や無宗教葬を選択する場合も見られる。親の思いの真意がわかって

いないのか、わかっていてこれ幸いと言っているのかは判断のしようがない。しかし、「育ててもらった恩を返す」という表現に見られる日本の伝統的な美風はもはや死語になっているように思われる。単に、経済状況の問題としてだけでは片づけられないもの、つまり社会や家族関係の変化によって、日本社会が培ってきた「お葬式のこころ」が欠如してきたことが、このような変化として現れているように思われる。

無宗教式の直葬は、これまで寺院と関わってこなかった人たちだけではなく、檀家のなかからも起こってきている。都内のある住職の話では、お葬式の布施を惜しむためかどうか、四十九日に納骨したいと遺骨を突然持ってくる檀家が増えているという。当然、お葬式も行っていないようである。

ここまで、家族葬、直葬、無宗教葬が増加していることを指摘してきたが、浄土宗の檀信徒の場合、お葬式に対してどのような意識を持っているだろうか。

2．檀信徒アンケートに見られる意識変化

ここでは、このアンケート内容から葬儀の変化を「無宗教葬への流れ」という視点で考察していきたい。第1章1節、また2章1節でも「檀信徒アンケート」を全教区、近畿、東京・神奈川という3つの地域を比較して分析しているが、「無宗教葬への流れ」が見えるのは、東京・神奈川である。

東京・神奈川では、「自分の代から」「親の代」から檀家となった人が多い。つまり移住流入者が多いということである。移住流入者の居住地の特徴は、ニュータウンや公営住宅、分譲マンションといった、伝統文化と切り離されて人工的に作られた都市である。当然そうした人たちの中から、お葬式が行われることになると、地域の協力もあまりなく、その地域のお葬式のすすめ方や伝統も分からない。そこで必要とされるのは、地域よりも葬儀社ということになる。

アンケート結果でも東京・神奈川では、お葬式の準備・運営に最も深く関わったのは葬儀社であるとの回答が高く、お葬式に重要な役割を果たしてきた近隣と親戚が無力になっていることは明らかである。地域伝統や親戚の意見は考慮されることなく、お葬式の形式は喪主家族が決めなくてはならないという大都市のお葬式の特徴をよく表している。

また通夜・葬儀の場所として葬祭場を選択することが多いことも明らかになったが、その理由は、多くの人が集まれること、家族の手間がかからないこと、近隣の手を煩わせなくて済むから、が上位を占める。「家族と近隣に迷惑を掛けたくない」という都市住民の気持ちがよく表れている。

このような移入した都市住民の意識は、「無宗教葬への流れ」の要因となっているようだ。

「自分の葬儀を望むか」という質問では、東京・神奈川は、「必ずして欲しい」との回答は44％と全教区より10ポイント低く、「して欲しくない」という明確な否定は8％もあり、全教区の3％と比べると、その差は非常に大きい。檀信徒アンケートでありながら8％と高率であることはきわめて深刻な数値であると考えられる。未定8％と「出来ればしてほしい」という消極的希望を含めれば、55％という驚くべき高率になる。

なお、この東京・神奈川の数値を男女別でみると、女性の「必ず」は、男性50％に対して25％と低く、逆に「して欲しくない」は男性6％に対して13％と倍であることがわかり、女性のお葬式に対する消極的な意識が明らかになった。この数値の背景は、お葬式で負担を強いられるのは主に女性であることや家族内の女性の置かれている立場などいろいろな理由が考えられるだろう。

では、「お葬式をしてほしくない」と考える理由は何であろうか。理由で一番高いのは、全教区共通していて、「遺族の手を煩わせたくない」で、次いで「葬儀に意味を見いだせないから」、次が「費用が高いから」となる。この回答は、きわめて示唆に富んである。もちろん、現在行われている葬儀不要論に関して、一般的にいわれている「高額であること」は葬儀不要の第一理由ではない。「遺族の煩わしさ」は規模の小さな家族葬へ、「意味を見いだせない」は無宗教葬・直葬へと流れていっていることが推測される。

お葬式に宗教的意味を見いだせず、お別れ会を望む者がいれば、当然俗名希望者も出てくる。「俗名でよい」との回答は、全教区の12％に比べ東京・神奈川は17％と高い数値を示している。「まだ分らない」という未確定者は東京・神奈川で15％である。つまり、東京・神奈川では「俗名でよい」と「まだ分らない」を足すと3割を超える。回答者が浄土宗寺院の檀信徒で平成以降行ったお葬式の喪主で、以後の年回法要もたびたび行っている人たちの回答であることを考えると、「なぜ戒名が必要なのか」を伝えきれていない寺院側の実態が伺えるであろう。なぜなら、「俗名でよい」と回答した人に、その理由を尋ねてみると、「戒名に意味を見いだせない」が最も多いからである。

ちなみに浄土宗では、生前に誉号や戒名を受ける「五重相伝会」「授戒会」を伝統的に積極的に行ってきているのは関西以西で、戒名を「既に持っている」という回答が近畿に多いのはこのことを裏付けている。

3．葬儀の行方

以上のように、アンケートを中心に、直葬や無宗教葬へ移りゆく現状との関わりを通して、戒名やお葬式不要の兆しが浄土宗の檀信徒にも現れてきていることが明らかになってきた。また、浄土宗のお葬式の意義が十分に理解されていない可能性がある現状が浮かび上がってきたのではないだろうか。

現在、地方と都市の過疎過密の傾向はいっそう両極化している。高度経済成長と共に、大都市に流入してきて定住化した人々は、高齢化を迎え、自身あるいは親のお葬式の担い手となってきている。「都市初代や二代目」には、連綿と続く農地などを土台とした文化はなく、当然そこには「先祖の加護と祈り」などもない。また移動の結果として親族も近隣に少なく、頼ることができない。定住まで、何回となく転居を繰り返し地域に根付くことも難しい。地域社会として新しい都市が成熟しバランスのとれた社会に未だなっていないので、連帯や互助も少ない。現代社会の人間関係は、近隣親族関係においてますます弱体化している。

以上のように、人は、親族、地域、会社などの共同体の一員から家族共同体の一員へ、その人の死は、地縁血縁共同体の一員としての死から、個人・家族の一員の死へと大きく変化し縮小化してきている。こうした状況への対応が今、我々に問われているのである。

（執筆者　武田道生）

（1）ＮＨＫ放送文化研究所「２　人間関係～場によって変化の方向が変わった」『現代日本人の意識構造』第七版　２０１０　２月　１９６～１９７頁。このなかで、親戚との関係が１９７３年の第１回から、「なにかに付け相談したり、助け合う」全面的つきあいは、51％から２００８年の第７回の35％へと減少してきている。「気軽に行き来する」部分的つきあいは、40％から43％とほぼ変わらないが、「一応の礼儀を尽くす程度」の形式的つきあいは、8％から22％へと4倍近く増加している。ここからも「遠くの親戚」には、頼らないという近年の傾向をはっきりと知ることができる。

（2）「直葬　消える弔い」上、中、下『産経新聞』２００９年９月22、23、24日、「反響」10月６日、８日

2　浄土宗のお葬式の現代的な意義

最後に、お葬式から年回法要までを含め、その重要性について考えてみたい。

これまで、日本におけるお葬式はどのような意味や目的で行われてきたのだろうか。

第1には、「遺体を処理するために行われる儀式」ということである。これはいつの時代でも共通しているといえよう。

第2には、「社会的に死を確認するための儀式」ということである。人は生涯のさまざまな場で多くの人々と出会い、社会的な役割を果たしている。つまり、故人と関わりのあった人たちにとって、お葬式は故人とのこれまでの関係を再確認する儀式でもある。この機能は、社会が複雑化して来るにつれ、一部地域の共同体のお葬式から大規模な葬儀や社葬などとして展開してきた。

第3には、「共同体で危機を克服する儀式」である。こうした意味でのお葬式は、近年まで重要な役割を果たしてきた。伝統的な地域社会では、近隣や親族など地縁血縁の多くの人たちによって、遺族の悲しみや今後の生活上の不安などの精神的物質的な危機を乗り越えるために行われる共同儀式であった。

第4には、「死者を先祖にする儀式」である。農業・林業・漁業などの第一次産業を主とする地域社会では、豊作・豊漁や家業の繁栄、子孫の安寧などを先祖に祈ってきた。このような人々は、きちんとしたお葬式を行うことで、故人がやがて先祖となり、あの世から子孫たちを守護してくれると考えたのであった。この意味においてお葬式は、死者を先祖にするための始めの儀式でもあった。

1、往生の目的を考える

浄土宗のお葬式は、阿弥陀如来の来迎引接を仰ぎ、故人を仏教信者にして極楽往生を願う儀式である。

浄土宗の教えを信じる者の生きる目的は、法然上人の教えに従い、日々のなかで念仏に励み、臨終に際して阿弥陀如来の来迎を得て極楽に往生することである。この意味において、浄土宗のお葬式は、遺族・親族・近隣など故人と生前に縁のあった会葬者が、故人の往生浄土という目的を視覚的・感覚的に実感し理解する機会でもある。そして往生の後は、菩薩として、さらには悟りをえて、苦しみの日々のなかで救いを求めている有縁無縁の一切衆生を救うために還相回

向を果たすことが究極の目的なのである。

このような教えであることを理解すれば、肉体的な死を迎えて営まれるお葬式は、真の目的を果たすために往生するという「新たな生まれ変わりの儀式」であることが理解できる。遺族や友人などお葬式の参列者は、故人が新たに浄土へ生まれ変わって往くことを実感し、今後遺された私たちを救ってくださることを確信する儀式なのである。

しかし、現代社会に生きる多くの人々が、肉体的な死は人生の終末だと考えていて、生に執着している。そうした人たちにとって、お葬式は前に述べた「遺体を処理するための儀式」であり、また「社会的に死を確認するための別れの儀式」でしかない。もちろん、これまで家族と過ごした日々や友人との交流の終わりであることは避けようもない事実である。この意味で、お葬式は「生者必滅、会者定離」という仏教の真理のひとつを遺された人たちに感得させる「別離」の重要な場でもある。「檀信徒アンケート」でも、自分のお葬式の意味について、「極楽浄土へ送ってもらう儀式」という回答より、「家族や友人との別れ」が高率であったことは既に報告した。喪主を務めたばかりの檀信徒の回答がこのような結果であったことについて、浄土宗の教えを正しく説いてきたか、改めて考え直す必要があるのかもしれない。

お葬式が浄土宗との初めての出会いとなる遺族や、日頃から寺との関わりがほとんどない家の遺族に対しても、折に触れ、法然上人の説かれた教えを懇切丁寧に説くことが重要であろう。

2、お葬式の社会的意味

現代社会は、死が縮小化しているといわれる。家の職業を継承することも少なくなり、職業は多様化し、農業など地域で共通の職業を行い、助け合って共同にすることも少なくなった。サラリーマンとして人はやむを得ず移動転居を生涯繰り返す人は多い。現代社会では、このように、これまでの地域や近隣などのさまざまな縁を切り保てずに生きていかざるを得ない。また、高齢者は故郷に取り残されたり、知り合いのない都市の住宅地に引き取られたり、施設で長期間暮らすことが増えている。友人との交友関係や社会的関係などはますます縮小化し、家族ですら故人の生涯での人間関係を把握することは困難になっている。近年のお葬式の縮小や「直葬」化が急激に進んでいる背景にはこうした社会状況があると思われる。

しかし、「社会的に死を確認するための儀式」としてのお葬式の機能は、故人の存在、尊厳にとって必要なものではなかろうか。人生のさまざまな困難や喜びを多くの人々との出会いのなかで分かち合ってきた人の死は、決して家族や故人だけのものではないはずで

ある。故人に関わってきた多くの人たちにとっても人生の一部なのである。私たちは有縁無縁のすべての縁のなかで、生前も死後も関わり合って生きていることを感じるためにもお葬式に参列することが必要なのではないだろうか。

3、家族の真の癒しとしてのお葬式

お葬式の重要な機能のひとつに、遺族や親類縁者、友人知人らの別離の悲しみや苦しみ、あるいは今後の不安などを癒すという役割もある。お葬式は、亡き人を極楽往生に導くための儀式であると始めに述べた通りだが、この癒しの機能も極めて重要なことは言うまでもない。悲しみと不安のなかにいる遺族は、近隣・親類縁者・友人らの会葬と励ましのなかで勤められていくお葬式によって癒されていくのである。われわれ僧侶には、傷つきやすい情況にいる遺族を思いやった誠実な儀礼の執行が求められている。

さらに、誰よりも遺族に「極楽往生のための儀式」という意味を理解してもらうことこそ真の癒しなのである。

浄土宗のお葬式は、これまでの生への別離と極楽への往生の儀式なのである。亡き人と生きる世界は異なっても、「家族」として共に生き続けているということを説かなければならない。遺族にとっては、「新しい家族の始まり」である。つまり、極楽での再会という「未来の希望」とともに、極楽で見守り続けてくれている亡き人と共に日々生きていくという「現在の希望」を持つことができる教えなのである。これは、現代社会の孤独と悲しみと不安のなかにいる遺族にとって、大きな意味を持つ教えといえるのではないだろうか。

4、お葬式と年回法要の現代的意義

近年、急激に地域共同体や親族関係が解体し変化している。その最も大きな変化は人間関係の希薄化である。人の移動現象と、生活圏の広範囲化によって、親族などの血縁、居住者同士の地縁が薄くなっている。その一方で、会社での「社縁」や趣味で繋がる友人との「友縁」に加え、共同墓の使用者同士の「墓縁」などの新たな人間関係も誕生し、改めて絆や縁が見直されてきている。

現代社会に生きる地縁や血縁などの縁が薄くなった家族や孤独な人たちにとっては、この世と極楽という異なる世界で共に絆を保ちながら生きていくという浄土宗の考え方や生き方こそ意義があるのではないだろうか。

現代でも、人は、亡き人の存在を、死んだら自分と無関係とは考えてはいない、いつまでも自分を見守っていてくれる存在であることを心の奥底で求めている。このことは「檀信徒アンケート」から

も明らかになっている。

浄土宗の教えでは、亡き人への追善回向は阿弥陀如来への念仏によってふり向けられる。遺族が自ら積極的に、日々の念仏や、仏果増進の願いを込めて法要を行うことこそ、阿弥陀如来と結縁し、亡き人との絆をいっそう強めることになるのである。お葬式が新たな家族の絆の始まりだとすれば、年回法要は亡き人との絆を強め、年々亡き人と共に生きていることを実感し振り返ることができる大切な機会なのである。

人と人の絆や縁が薄くなった現代社会だからこそ、浄土宗のお葬式と年回法要は、一層重要な意味を持つのである。

（執筆者　武田道生）

シリーズ　激変する檀信徒の宗教観

崩れゆく葬祭のこころ

浄土宗総合研究所　現代葬祭仏教研究班

第1回　変わる「お葬式とその意識」

近年、急激な社会の変化に伴い、お葬式に関する実態とその意識が著しく変化・多様化している。例えば、「お葬式」の場所が自宅から葬祭場へと移行してきた、また家族のみで行う「家族葬」が増加してきた、お葬式が簡略化してきたなどである。

そこで、総合研究所はこれらの実態と意識の変化を捉えるために、平成17年9月に檀信徒対象の「お葬式に関するアンケート（以下、「檀信徒アンケート」という）」を実施した。このアンケートの主たる目的は、喪主を務めた人が、どのような意識で、どのようなお葬式を行ったかを知ること、またその上で、自分自身の場合にはどのようなお葬式をしたいかということであった。

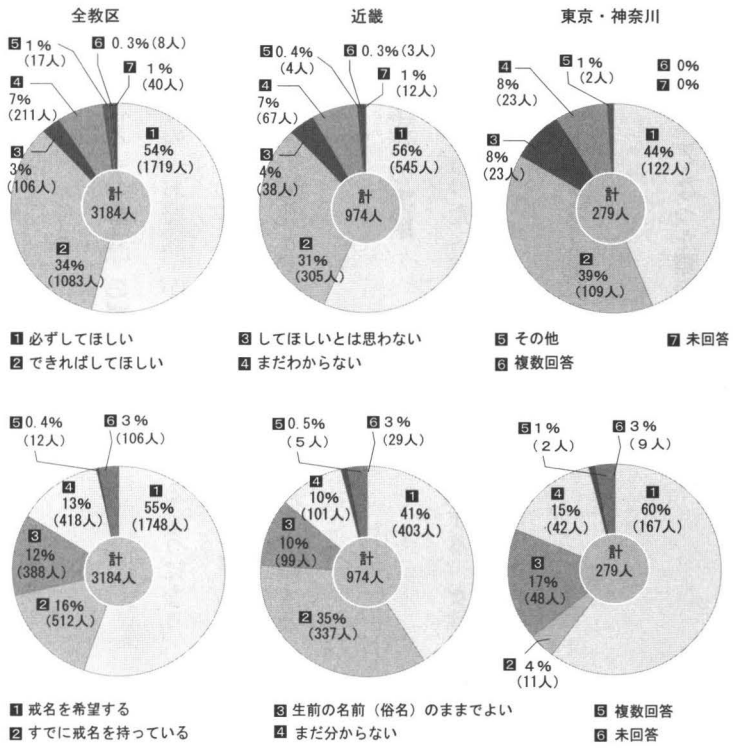
これまでに『教化研究』第18号の研究成果報告「全国葬祭アンケート第2次集計分析」（平成19年9月1日発行）で既報した通り、全教区と近畿地方教化センター（以下、近畿と略称）と東京教区、神奈川教区（以下、東京・神奈川と略称）との3地域を比較分析してきた。この結果、重要なテーマを抽出することができた。この連載では、それぞれのテーマを各地方教化センターの比較を交えながら分析し、報告していきたい。

なお、本文中で用いる「お葬式」は「枕経」「通夜」「葬儀式・告別式」などを含む一連の葬送儀礼全体を指し、「葬儀」という場合は、「葬儀式・告別式」を指すことにする。

さて、左記の数値をどのように思われるであろうか。

Q1、あなたは、ご自分が亡くなった際には、お葬式をしてほしいと思いますか。

Q2、あなたは、戒名を希望しますか、それとも生前の名前（俗名）のままで良いと思いますか。



3地域ともに約8割という多くの人が「お葬式を必ずしてほしい」または「できればしてほしい」と回答している。しかし、「お葬式をしてほしくない」または「まだわからない」という、自分自身の「お葬式」に対して否定または未決定の回答者が約1割もいる。東京・神奈川にいたっては、否定または未決定者が16%もいる。このアンケートは、平成以降に喪主として「お葬式」を務めた檀信徒が対象である。また、菩提寺から3名の檀信徒にアンケート票を渡したという配布方法から鑑みると、このアンケートの回答者は、「よく寺院にお参りに来られ、菩提寺に協力的」という傾向があると思われる。このようなアンケートの性格からすると、この数値は深刻な問題と考えざるをえない。

同様のことは戒名についても言える。約7割が「既に戒名を持っている」または「戒名を希望する」と回答している。しかし、東京・神奈川では「俗名のままでよい」が17%もいる。また、近畿では五重相伝などが盛んに行われているにもかかわらず、1割が戒名ではなく俗名のままでよいとしている。この「お葬式・戒名を否定する」という回答からは、我々僧侶が檀信徒からは聞くことのできない本音がうかがえるのである。

次号より報告していくテーマは、以下の通りである。

・新しい「お葬式」の「かたち」

現在、「お葬式」に起きている変化、これから起こりうる「お葬式」の変化についてまとめ、その変化の背景を述べる。具体的には急増する「家族葬」と「直葬」の状況、「エンディング・ノート」など

に代表される「お葬式」の自己決定、「手元供養」という遺骨の一部を手元に安置して追慕する新たなる供養形態などに触れる。

・人口変動と「お葬式」の変化

人口の変動による急激な都市化と過疎化が地域共同体を弱体化した。人口動態の変化から見た「お葬式」の変化について考察する。

・葬儀社と「お葬式」の場の変化

葬祭場での「お葬式」が一般的に行われるようになり、その運営は地域共同体から葬儀社に移行しつつある。「お葬式」に関する地域社会の役割の変化と葬儀社の関わりについて考察する。

・「お葬式」の実態

喪主として行った「お葬式」の実態を考究する。女性と高齢者の喪主の存在、「お葬式」の運営者の実体、通夜の参列者数などについて地方教化センター別に比較する。

・自分が亡くなった際の「お葬式」

「喪主として行ったお葬式」と「自分自身のお葬式」との意識のズレを分析する。また、「お葬式」をしてほしくない理由などを考究する。

・「お葬式」の意味―実体と宗教

「お葬式」に対して浄土宗義が有する意味合いと、檀信徒が有している意味合いのズレに注目し、なぜこのようなズレが生じているのかを言及する。

・戒名と「お葬式」

「生前の名前でよい」と考える人が少なからず存在する。その理由を考察し、その男女別、年齢別、地方教化センター別をはじめ、五重相伝実施率との関係などから分析する。

・女性にとっての「お葬式」

男性の喪主と女性の喪主とでは、「お葬式」に対する意識に差異がみられた。ここではなぜそのような差異が生じるのかを考察する。

・「お葬式」の意味―来世観と死者との関わり―

死後「私はどこへ行くのだろうか」「大切なあの人はどこに行くのだろうか」。この素朴で根本的な問題をアンケート結果から考察する。

このような問題点を論述する予定である。急激な社会の変化に伴い、激変している「お葬式の実態」と「お葬式から見える宗教観」を明らかにする。また、僧侶自身の意識変革とその対応が迫まられている状況にあることを明確にし、今後の葬祭における檀信徒教化の一助となることを念じるものである。

なお、この文責は執筆者にあるが、その研究責任は現代葬祭仏教研究班にある。

（西城宗隆）

ローソク会社が提案している新しい形の祭壇

第2回　新しい「お葬式」の〈かたち〉
―「個性化」「個別化」する「お葬式」―

現在、「お葬式」にはさまざまな変化が起きている。特に平成以降に起こっている変化は、私たち僧侶が実際に通夜や葬儀を勤めるなかで、切に感じるものであろう。我々浄土宗僧侶は、その変化を捉え、対応を考える必要がある。

ここでは、現在、「お葬式」に関して起きている変化、また、これから起こるであろう変化について報告したい。その後、その変化の背景についても、触れてみたいと思う。ただし、報告する変化は、首都圏を中心とした動向であり、全国に均等に起きているものではないことをお断りしておく。

「お葬式」に起きているさまざまな変化

現在、起きている「お葬式」に関するさまざまな変化について5点指摘しておきたい。それは、①葬祭場利用の増加　②「家族葬」や「直葬」の増加　③葬儀社による「お葬式のサービス化」「商品化」　④「お葬式」の自己決定　⑤遺骨処理の多様化（偲び方の変化）である。

①葬祭場利用の増加

近年、特に都市部を中心として通夜、葬儀を葬祭場で行うことが増えてきた。特に首都圏において顕著である。全教区では、通夜35％、葬儀40％（「檀信徒アンケート」結果）と多くの人が葬祭場でお葬式を行っている現状が明らかとなっている。ちなみに、東京・神奈川では、通夜54％、葬儀53％の人が葬祭場で行っている状況である。なお、近畿では通夜30％、葬儀27％であり、東京・神奈川とは大きな開きがみられ、葬祭場の利用状況は、地域によって大きな差が見られることが明らかとなった。

②「家族葬」や「直葬」の増加

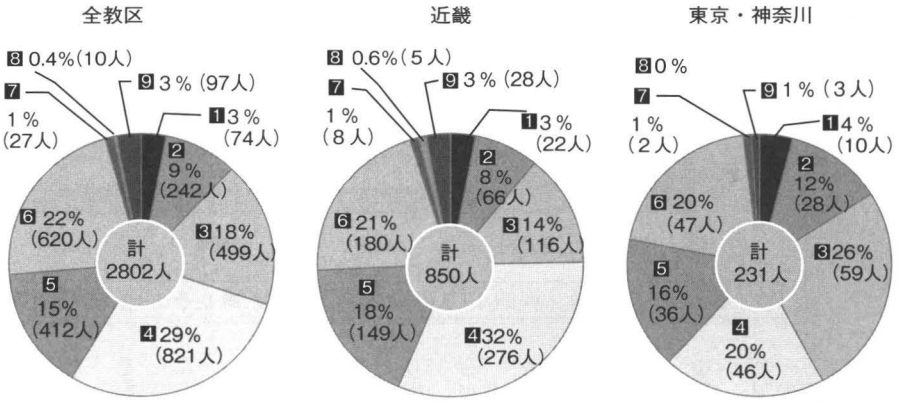
次のアンケート結果（「檀信徒アンケート」Q8―3）を見ていただきたい。

Q自分のお葬式には、どの範囲の人に来て欲しいか。

1．家族のみ　2．家族・親戚　3．家族・親戚・友人　4．家族・親戚・友人・地域の人々　5．家族・親戚・友人・地域の人々・仕事関係の人々　6．家族・親戚・友人・地域の人々・仕事関係の人々・遺族の関係の人々　7．その他

1～3までの回答が「地域社会」を含まない回答である。この1

(8) —3　あなたのお葬式の会葬は、どの範囲の人々に来て欲しいと思いますか。



～3の合計が、全教区では30%となっている。つまり、30%の人が地域の人々や仕事関係の人々を含まない「狭い範囲でのお葬式」を望んでいることが分かる。なお、東京・神奈川では42%であり、全教区と比較すると12ポイントも高く、半数に迫る人たちが「狭い範囲でのお葬式」を望んでいるのである。

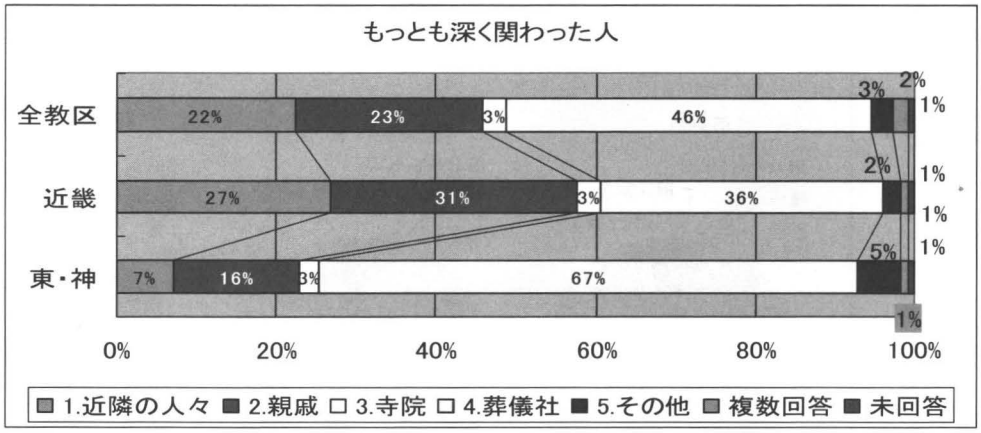
近年、参列者が少ない通夜や葬儀が増加している。家族や親族、また少数の友人のみが参加するというような、参列者が少ない「お葬式」を葬祭業界では、「家族葬」や「身内葬」などと称している。また、この参列者が少ない「お葬式」を新聞等では「密葬」と表現することもある。なお、我々僧侶がこれまで「密葬」という言葉を、「表葬に対しての『密葬』」という意味で用いてきたが、これとは異なる意味で用いている。

また、亡くなってから、通夜・葬儀を行わずに火葬して終わりにしてしまう「直葬」も増加している。この場合には、火葬をする際に、火葬炉の前で僧侶が読経する場合も多いという。

僧侶に儀式を依頼しない「お別れ会」も増加している状況にある。ただし、テレビなどでしばし取り上げられる有名人の「お別れ会」は、家族葬を行った後に、「お別れ会」を行うことが多いようである。

東洋大学の井上治代氏が、東京の状況を調べたところ、東京都世田谷区の葬祭業者A社で2005年1月から8月の間に請け負った「お葬式」では、直葬は15%、家族葬（身内葬）24%、家族+親しい友人10名以内12%であり、ごく少数でのお葬式が約5割であった

い。



という。また、東京都世田谷区B社（2005年1月より9月）では、直葬は20・7%、家族葬（身内葬）12・3%、その他のお葬式でも会葬者100名未満がほとんどであるという。

また最近では、通夜式を省略し、1日ですべてを済ます様式の「お葬式」を売り出している葬祭業者もあるが、これは会葬者の減少をその背景に持っているという。

③葬儀社による「お葬式のサービス化」「商品化」

再び、「檀信徒アンケート」結果を見ていただきたい。

Qお葬式の準備・運営に最も深く関わった人は誰ですか。

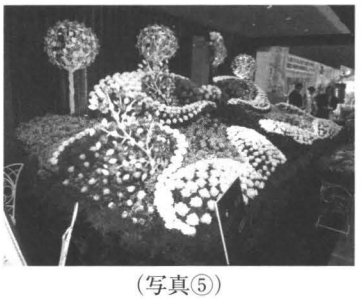
この結果から、葬儀社が如何にお葬式に深く関わっている（全教

（写真①）

（写真②）

（写真③）

（写真④）


（写真⑤）

（写真⑥）

区46％）かが分かる。特に、東京・神奈川においては圧倒的な影響力を持っている（67％）ということが言えよう。このように、葬儀社の影響力が強まっている。また通夜・葬儀が葬祭場で行われることが増えている状況において、「お葬式」に多様な演出がなされるようになってきた。洋花を使っての花祭壇、通夜や葬儀の場における音楽での演出、故人の思い出の品の展示などを普通に目にするようになってきた。

２００８年６月、「お葬式」に関連する業者が集まり、自社の商品を紹介する「フューネラル・ビジネスフェアー」が横浜（於：パシフィコ横浜）で開催された。ここで撮影してきた写真により、「新しいお葬式」の形を紹介したい。なお、葬儀業界が商品拡販を狙い出展しているものなので、「現在のお葬式」を表すものではないが、進みつつある方向線上にある「お葬式の近い将来の姿」を伺い知ることができよう。

写真①は、故人の思い出の写真を飾るパネルである。これは、現在しばしば目にするほど普及している。写真②は、祭壇に飾られる遺影であるが、数枚の遺影が時間ごとに切り替わるタイプのものである。写真②はちょうど遺影が切り替わる瞬間を写したものである。これらの商品は、故人の思い出を共有する場としての通夜・葬儀という意味を強調するためのものであろう。

写真③は、あるローソク会社がプロデュースしている祭壇で、数多くのローソクが祭壇の装飾品として飾られているものである。写真④⑤は有名な華道家である假屋崎省吾氏がデザインした花祭壇である。このように、祭壇にしても業者による過度の演出がなされ、他の業者との「独自化」を図っている状況にある。写真⑥は、「葬祭業者へのコンサルティングを行います」という講師による広告であるが、そこには、「演出文化」「家族葬の時代」「喪家とのコミュニケーション」「感動葬儀・高額葬儀・リピート葬儀」と記されており、葬祭業界での競争の激化している状況、また参列者が少なくなり、お葬式の規模が小さくなった状況に、如何に対応し利益を挙げるかという姿勢が見える。

（写真⑧）

（写真⑦）

④自分で決めるお葬式

自分のお葬式を、自分が生きている間に自分自身で決めておくという傾向もみられる。例えば、生きている間に、葬祭業者が主催する勉強会（セミナー）に参加したうえで、どのようなお葬式にしたいかを決め、葬祭

業者と契約しておくのである。

また、「どのようなお葬式にしてほしいかを記しておき、残しておく」というノートも売り出されている。このノートは現在、数多く販売されており、様々な名称が付けられているが、一般的には「エンディング・ノート」と呼ばれることが多い。この「エンディング・ノート」とはどのようなものであるか、具体的に、NPO法人市民葬送情報センターが出している「私のエンディングプラン　よろしくノート　もしものとき、あなたのメッセージをあの人に……」を見てみよう。（写真⑦⑧参照）

このノートの内容は、大きく分けて「私のこと」（私の履歴、私の思い出、証明書、保険、財産）、「私が病気になったとき」（介護の希望、終末期医療についての希望）、「私がもしものとき」となっている。この「私がもしものとき」とは、自分のお葬式のやり方や埋葬についての希望について記すものであるが、その中に、「お葬式をしてほしいか」「葬儀のときに知らせてほしい人」「参列者の範囲」「祭壇の様式」「戒名について」「遺影写真の希望」「香典について」など仔細にわたる希望を記しておき、また、その希望を伝えたい人を指定しておくのである。

この「エンディング・ノート」は、「お葬式を自分で決めたい」という本人の意思を表明するものである。しかしまた、「親と子と一緒に生活していないから、親がなくなったときに、子供が親の交友関係や、墓のことなどが分からない」という「家族関係の変化」ということも、このノートが用いられる背景にあると考えられよう。

⑤遺骨処理の多様化（偲び方の変化）

「散骨」「樹木葬」「宇宙葬」「手元供養」。これらは、しばしばマスコミなどに取り上げられて、注目を集めている。実際どの程度普及しているかは判然としていないが、一つの流れであることは確かであるといえよう。これらは、遺骨をどのように処理するかということであるが、「亡くなった人をどのように偲ぶか」ということと深く関係している。

ここで、「手元供養」について触れてみよう。手元供養とは、故

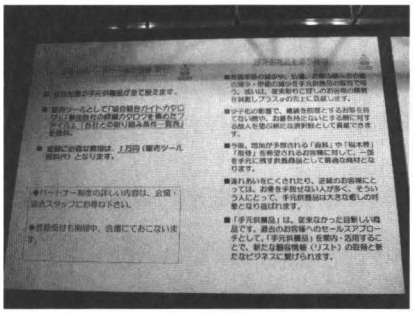
（写真⑨）

（写真⑩）

人の遺骨のすべて、または一部を家などの手元に安置し、供養・追慕するということである。これには、遺骨を容器に入れて置いておくタイプ、遺骨を加工するタイプがある。遺骨をお地蔵さんの置物に入れて安置する（写真⑨）、遺骨を写真付きのペンダントにいれて身につけておく（写真⑩）、さらには、遺骨を加工して合成ダイヤモンドにし、身につけておくというもの（写真⑪）までである。2005年にNPO法人「手元供養協会」が発足し、その普及に努めているが、この協会が葬祭関連業者に謳っている「手元供養を扱う効果」とは、次のようなものである（写真⑫）。

・葬儀単価の減少や、仏壇、お墓の購入者の量的減少・単価の減少を手元供養の販売で補う。
・少子化の影響で、継続を前提とするお墓を持てない層や、お墓を持たないとする層に対する故人を偲ぶ新たな選択肢として提供できる。
・今後、増加が予想される「直葬」や「樹木葬」「散骨」を希望されるお客様に対して、一部を手元に残す供養商品として最適な商材となる。
・連れあいを亡くされたり、逆縁のお客様にとっては、お骨を手放せない人が多く、そういう人にとっては、手元供養は大きな癒しの対象となり喜ばれる。

（写真⑪）



（写真⑫）

なお、この「手元供養」関連商品には、お墓代わりに使用するものと、墓に納骨、または散骨して一部を手元に置いておくものの両方がある。残った遺族が遺骨を分けて、それぞれが供養するために用いることもあるという。

お葬式の変化の背景

これまで挙げてきたように、「お葬式」が変化し、また「お葬式」に新しい形が生まれているが、この理由は何であろうか。この理由として、「平均寿命の延び（後期高齢での死の増加）」「お葬式の主体が葬儀社へと移行」、そして「お葬式に対する意識の変化」が挙げられるだろう。

①平均寿命の延び（後期高齢での死の増加）

まず、「平均寿命の延び（後期高齢での死の増加）」であるが、これは、特に「家族葬」や「直葬」が増加したことと関係していると思われる。平成18年の平均寿命は、男性79・00歳、女性85・81歳と、日本は世界一の長寿国である。このような状況は、高齢での死が増加しているということに結びつく。高齢で亡くなった際には、すでに故人の職場などの縁が切れているという状況が多く、「お葬式」に呼ぶ範囲として、遺族・親族・友人といったプライベートな関係のみを選択する傾向にあるようである。

②お葬式の主体が葬儀社へと移行

隣組・葬式組といった、地域共同体の組織が果たす「お葬式」における役割が減少するにつれて、「お葬式」の主体が葬儀社へと移行している。このことによって、先に見たような「お葬式の商品化」が進んでいる。また、通夜・葬儀の場所が葬祭場で行われるようになったこととも深く関係していると思われる。

③お葬式に対する意識の変化

人々の「お葬式に対する意識の変化」が、お葬式の変化の一因となっていると思われる。

具体的な「お葬式に対する意識の変化」は、「檀信徒アンケート」結果をもとに、次の回で詳述していくが、ここでは人々の「意識の変化」の背景を、2点指摘しておきたい。それはA「産業構造の変化」とB「家族の変化」である。

A「産業構造の変化」

昭和30年代以降、農業・林業・漁業などの第一次産業が減少した。このことによって、田畑、山林、漁業権などの「家産を継承する」ということが少なくなってきた。このことは、伝統的な「家」という観念を弱くし、また「死者は子孫の祀りを受けることによって、しだいに家を守護する先祖になっていく」という伝統的な先祖観を変化させることにつながった。

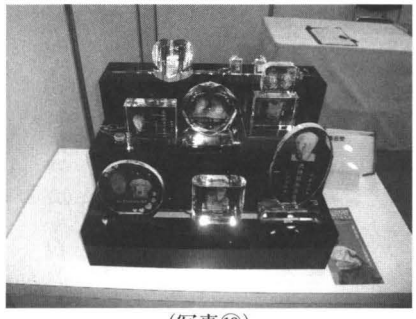
B「家族の変化」

戦後日本には、2回の大きな家族変動があったと指摘されている。1回目の変化は、高度成長期（1950―60年代）に見られた急激な核家族化である。それまで3世代以上が同じ家に生活する「大家族」が主であったのが、夫婦とその子供のみが同居するという核家族（夫婦家族制）が定着してきた。

2回目の変化は、1980年代、夫婦制家族の内部に起こった規範・価値観の変化であった。その規範・価値観の変化とは、離婚率の上昇、晩婚化、未婚化、少子化、そして家族内の「個人化」とし

て表れた。家族の「個人化」とは、生活を共にするそれぞれの家族が、個人としてそれぞれの活動領域、人間関係をもちながら、それぞれの自己実現を目ざすということである。これは例えば、父、母、子供が、同じ家に住み同じ仕事をするのではなく、同じ家に住みながらも、それぞれ異なる職業、趣味の活動、そしてそれにまつわる人間関係を持つということである。このような状況では、それぞれの家族のなかで共通する人間関係が少なくなり、「お葬式」の際には、故人の人間関係などが分からないという状況にもつながってくる。また、このように家族内で「個人化」が進むに従って、お葬式においては、悲しみを共有する家族、親族や友人だけで「お葬式」を行い、会社関係者や近隣の人々などお葬式を知らせない傾向がでてくる。

　これまで指摘したように、産業構造が変化し、「家族」が変化することによって、「家」という観念が希薄化してきた。また、それに伴って「家の先祖」という観念が薄くなってきた。このことはつまり、「死者は子孫の祀りを受けることによって、段々と家を守護する先祖になっていく」という、いわゆる「先祖代々」という伝統的な先祖観が分かりにくいものとなっているということである。そして父や母といった、親愛の情で結びつく近しい「追憶的死者」への供養がより強調されるようになってきている。これは、先に挙げた「手元供養」や、写真付きの位牌（写真⑬）などにその傾向が見て取れる。


（写真⑬）

　これまで、民俗レベルでは、「お葬式」とそれに続く49日、1周忌、3回忌という追善供養が、死者を「家を守護する先祖」にする意味を担ってきたといわれてきた。しかし、「家を守護する先祖」という観念が薄くなり、父や母といった、親愛の情で結びつく人への追慕が強調されるようになると、「お葬式」、およびそれに続いて繰り返し行う法事に対し、「何のために行なうのか」という意味を見出しにくくなるのではないだろうか。

　このように、現在、「お葬式」をめぐる状況が変化している。我々浄土宗僧侶は、その変化を捉え、対応を考える必要がある。特に浄土宗檀信徒の、お葬式に対する意識を知ることは、その変化を捉える上で大きな意味のあることなのである。

（名和清隆）

第3回　希薄化する人間関係
―なくなる世代差・地域差とお葬式の変化

はじめに

現在浄土宗総合研究所で筆者が行っている研究に、全国の各地域社会の変化予測がある。そのなかの一つは人口の変化に伴う、地域の過疎化・過密化と寺院の布教活動の関連である。

二つめは地域社会の産業の変化や少子高齢化などによる人口構成の変化が、地域社会そのものやそこに生きる人たちの生活や考え方、また宗教意識にどのような影響を与えていくのか。そしてそうした変化は、今回のテーマに沿っていえば、日本人の葬祭意識や霊魂観にどのような影響を与えていくのだろうかという研究である。

人口問題に関する研究では、浄土宗開教振興協会が刊行している機関誌『開教』の第25号（平成20年3月1日発行）で取り上げていただいた「地理情報システム」がある。詳細は同誌にゆずるとして、このシステムは日本全市町村の人口とその地域の寺院数のかかわりを中心に、2030年までにどれぐらい人口が増減していくかを未来予測するものである。単純に人口数ばかりか、5歳ごとの階層別増減数を予測して、それぞれの世代の増減の中で、どの地域でどのように高齢化や少子化が進んでいくかを予測し、地域の特性を探り、当該地域寺院へ警鐘を鳴らし、布教教化に役立ててもらうことを目指している。

三つめは「お葬式」に関する研究で、現代人が死をどのようにとらえようとしているのか。それは今後どのように変化していくのかといった問題を研究している。このシリーズで今回は、日本中の多くの地域で農耕社会から産業構造が劇的に変化し、新たな職業を求めて人々が都市近郊へ大量に移住し、新しい都市住民として定住化するなかで、都市の規模や世代差を超えて、あらゆる地域や世代の人の意識、特に今後の寺院活動や「お葬式」のあり方に大きな影響を与える対人関係意識に大きな変化が生じていることを報告したい。

具体的にいえば、「高齢者になれば寺院に必ず帰ってくる」「高齢者の人たちは地域や親戚との人間関係を非常に濃く求めていて、温かくて強い絆やつきあいを持っている人たちが多い。そうした考え方は大都市ではとても弱くて、都市の規模が小さくなるに従って人との関係は濃密になってくる。またその考え方は生まれた年代に影響を受けていて、社会の変化にはあまり影響を受けない」という、われわれ僧侶が抱きがちな考え方は、本当にあたっているのか。現在の高齢者や町村部の人たちはそのような意識を持っているのだろ

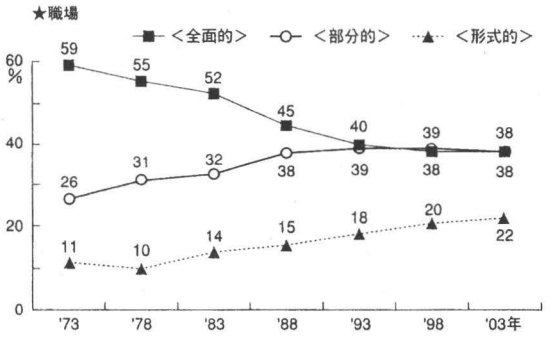
うかという根本的な問いかけとそれに対する答えである。

〈全面的つきあい〉から〈形式的つきあい〉へ
―職場・近隣・親戚―

「地域社会は本当に固定的で、人が生きる基盤となる関係がうまく作れているのか。変わりつつあるのではないか」という問いは、伝統仏教にとっては根本的で重要な問題である。「お葬式」を助け合う地域社会や親戚・職場の同僚の受付など、先祖と子孫、地縁と血縁、最近の言葉では社縁など、人と人を結び、そこに生きる意味を与える仏教にとって重要な対人関係観は本当に揺らいでいないのであろうか。そうした疑問への答えとなるのが『日本人の意識構造　第六版』（ＮＨＫ出版　２００４年）である。その中に「望ましい人間関係」についてのアンケート分析がある。以下そこで使われている図表を用いて、この問題について考えてみたい。

この分析では、基本となる「望ましい人間関係」を、職場・近隣・親戚という3種類に分けている。職場に関しては、1．何かにつけ相談したり、助け合えるようなつきあい〈全面的〉、2．仕事が終わってからも、話し合ったり遊んだりするつきあい〈部分的〉、3．仕事に直接関係する範囲内のつきあい〈形式的〉、という分け方である。近隣の場合は、1．何かにつけ相談したり、助け合えるようなつきあい〈全面的〉、2．あまり堅苦しくなく話し合えるようなつきあい〈部分的〉、3．会ったときに、あいさつする程度のつきあい〈形式的〉という分け方。親戚の場合も同様で、1．なにかにつけ相談したり、助け合えるようなつきあい〈全面的〉、2．気軽に行き来できるようなつきあい〈部分的〉、3．一応の礼儀を尽くす程度のつきあい〈形式的〉である。

まず、職場において、どのような関係が望まれているかについて考えていこう。このアンケート調査は、第1回目が１９７３（昭和48）年で、以後5年ごとに行われて、２００３（平成15）年の7回まで行われてきているので、ちょうど30年間の日本人の意識変化を知ることができる。

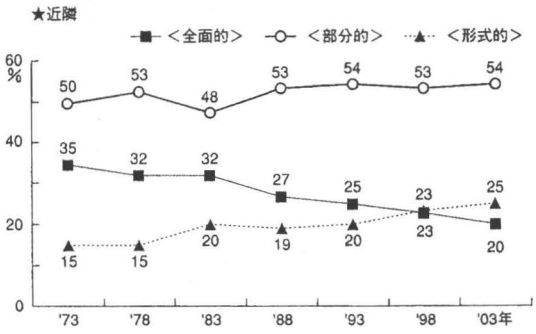


【職場】

上の図は、男女・年齢を問わず、全回答者の「職場での人間関係」に関する回答結果である。30年前の'73年では〈全面的なつきあい〉を望むという数値は約6割もあった。上司は部下の面倒を見て仲人をしたり、社員旅行や社員運動会

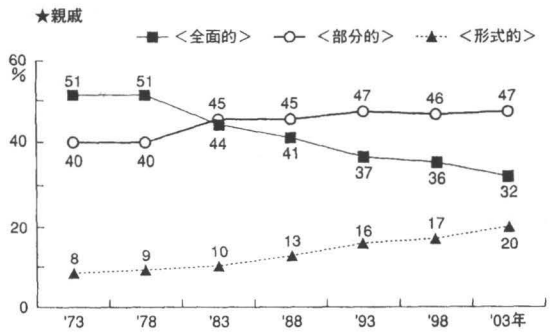
を行ったりと、会社は「一つの家族」という表現で例えられるような強い人間関係が望まれていたことがわかる。〈部分的〉は26％と〈全面的〉の半分以下であった。

ところが、'03年を見ると、〈全面的〉は、約20ポイントも減少して38％まで下降し、一方〈部分的〉は徐々に上昇し、「全面的」と同数値に並んでしまった。このままでは、'08年の次回アンケートでは、逆転して「部分的なつきあい」が1位になることが予測される。〈形式的〉は30年間で倍増し、22％に上昇している。この伸び率は劇的と言っていい。〈形式的〉が第1位になる日も遠くないかも知れない。



【近隣】

上に左の図の「近隣」について見ると、〈部分的なつきあい〉は50％から54％へと若干の増加が見られるが、30年間あまり変化なく、依然として第1位である。しかし、'73年のオイルショック直前は〈全面的〉が35％もあったことに注目しなくてはならない。当時は風呂や味噌・米の貸し借りといった近隣との、文字通り「裸のつきあい」という全面的な関係がこの数値に見られるようにあったのに対して、〈形式的〉は15％しかなかったのである。それが'03年には〈部分的〉はほとんど変化ないが、〈全面的〉は15ポイントも減少していた一方で、〈形式的〉が10ポイントも増加している。現在では、〈形式的・部分的なつきあい〉が「近隣関係」でも多数派となっているのである。



【親戚】

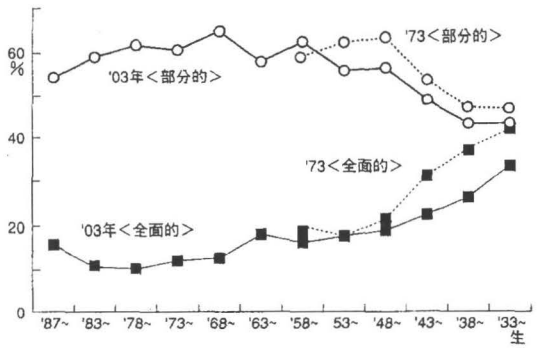
「親戚関係」はどうだろうか。近隣と親戚は寺にとっては、お葬式のときに助け合う重要な基盤だったはずだが、左図から見るとお葬式を仕切ったり甥や姪の仲人をするといった〈全面的なつきあい〉は、30年間に51％から32％まで、ほぼ半減した。親戚でも〈部分的〉が40％から47％と第1位に上昇している。30年前には8％しかなかった〈形式的〉は、20％まで上昇した。血縁間のつきあい関

係の希薄化は今後一層進行することが予想される。

以上のように、親戚を含むさまざまなつきあい関係で、形式的な関係を志向する傾向が急激に増加し、全面的つきあいは減少し、大多数が部分的なつきあいを望む傾向が大勢を占めるようになった。ではこのような人の意識の変化は、「世代」、つまり生まれた年代によって異なるのだろうか。「戦前生まれは伝統的全面的な関係志向がそれ以降の世代より強く、それは時代の変化に影響されない」と言われてきたが、果たしてどうだろうか。

希薄化する人間関係となくなる世代差

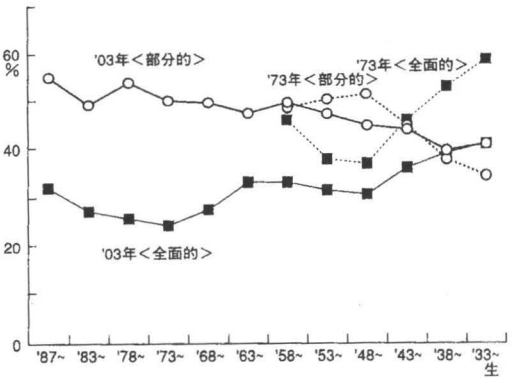
左図は「近隣とのつきあい」に関する生まれ年別の〈全面的〉〈部分的〉関係志向のグラフである。ちなみに'33（昭和8）年以前生まれは70歳以上の回答者、'87年生まれは16歳の最年少回答者である。'43年と'48年の間の'45年が昭和20年で、終戦の年である。この年が戦前戦中派と戦後派を分ける基準年となっている。



これを見ると、'73年（点線）と'03年（折れ線）の両調査共、グラフの形態が類似していて、'38年以前に生まれた、いわゆる戦前戦中派世代では、全体的に数値が高いだけでなく、〈部分的〉と〈全面的〉の数値が接近している。それに対して戦後派の世代ではこの二つの差は若い世代ほど拡大している。

しかし、戦前戦中派の同じ生まれ世代であっても、30年間に〈全面的〉も〈部分的〉も減少していることがわかる。特に〈全面的〉の減少の幅は約1割と大きい。〈部分的〉も数ポイント下落している。同じ世代の回答ならば、30年後でもグラフが重ならなくてはならないはずである。しかし、実際には30年前の戦前戦中派の意識と30年後の意識がこのように変化しているのである。この〈全面的〉と〈部分的〉の減少分は〈形式的〉に移行していることになる。つまり、これら世代の〈全面的〉と〈部分的〉の減少傾向は、生まれ世代に関係なく、この30年間の社会の変化や人間関係の変化などさまざまな要素によって起こっていることがわかる。

こうしたことから、すべての世代にわたって、つきあい関係が希薄になってきた原因は生まれ世代によるものではなく、社会的変化が要因になっていることが推測される。



【親戚】

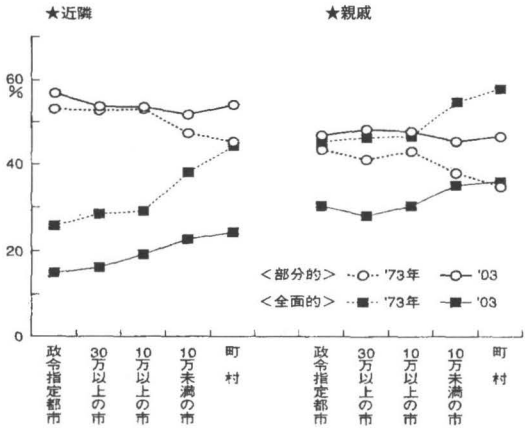
次の「親戚」についても同じことがいえる。次図によれば親戚関係でも、30年前には、戦前戦中派は約6割が圧倒的に〈全面的〉を求めていることがわかる。それに対して'03年にはその世代でさえ、約40％しか支持していない。現在では希薄なつきあい関係を望む人たちが戦前戦中派ですら増えているのである。このように、戦前戦中世代に対するわれわれの固定観念は、極端に言えば、変えざるを得なくなってきているのである。特に戦後派世代に関して言えば、〈全面的〉も〈部分的〉も共通して、どの世代もほとんど同じ数値になり、折れ線グラフは水平化していることがわかる。地域や遠い親戚を呼ばない家族葬などの増加は、若い喪主たちだけの考え方とは限らず、高齢者の間にもそうした葬儀を求める意識が生まれていることが十分考えられるのではないだろうか。

希薄化する人間関係のなかでなくなる地域差

次に重要だと思われるのは、都市の規模とつきあい関係のかかわりである。これまでの一般的な考えでは、小都市のつきあい関係は強く、大都市ほど地域との絆が弱いというものだった。しかし、実際にはどのような意識が見られるのだろう。「近隣」と「親戚」について見てみよう。

【近隣】

左図の左側の近隣グラフから、人口100万人以上の政令指定都市、30万人以上の都市、10万人以上、10万人未満、そして町村のそれぞれにおける「近隣とのつきあい」の関係を見ると、「都市規模が小さいほど近隣とのつきあい関係が強い」という現在も私たちが持っている固定観念は、'73年当時は当たっていたようである。町村で



は近隣との〈全面的〉が40％を超えていた。それが大都市になるほど下がって、25％と約半減していた。しかし、'03年の調査では、下落傾向はどこもみな同様だが、注目すべきは大都市よりも町村部のほうが下落幅が大きいなことと、都市の規模ごとの数値にほとんど差がなくなって、線が水平化してきていることである。'03年では〈全面的〉を望むのは、町村部でやっと2割、大都市部で約1割で、逆に〈部分的〉が増加している。〈部分的〉のグラフを見ると、'73年の町村部は〈部分的〉が大都市に比べて10％以上も下がって45％ほどだった。しかし、30年後では、どの規模の都市も上昇してほとんど同じ数値になって水平化している。特に町村部の上昇幅は都市部より大きい。ここ30年の間に都市の規模にかかわらず、人間のつきあい関係の意識はほとんど変わらなくなってしまったということである。つまり、この変化の背景となるどのような人間関係を望むかという意識は、都市の規模とはかかわりがなくなり、別の要因から起こっていることが推測される。「うちの寺は村にあるから変わっていない」というような楽観的で表面的な考えがもはや通用しない時代が来たのである。

【親戚】

前ページの図の右側のグラフの示している「親戚とのつきあい」も同様のことがいえる。'73年当時は、〈全面的〉は大都市で5割、町村部では6割近くと、都市規模が小さくなるほど高くなるという、われわれの既成概念に合った傾向を示している。ところが、'03年の特徴は、すべての規模の都市で20ポイント近く下がっていることである。さらに大都市よりも町村部のほうが劇的に下がっていて、大都市部とほとんど同じ数値になってしまっていることに注目する必要がある。「親戚づきあい」も〈部分的〉が都市の規模にかかわらず、ほぼ5割という高率になった。これまで「大都市の人の親戚付き合いは、希薄だ」といってきたが、現在では町村部も変わらなくなっているのが実状ではないのだろうか。これまでは、戦前戦中派は〈全面的〉な親戚関係を志向して、戦後派の世代は〈部分的〉志向が強かったと思われる。しかし今後、すべての世代で人間関係が希薄化していくことは間違いなく、全世代に共通して〈部分的〉〈形式的〉志向が一層加速していくと思われる。

以上のように、これまでの分析結果が示しているのは、大都市よりも規模の小さい都市、特に町村部の方が日本社会の劇的な変化の影響を大きく受けているということである。今後もすべての世代にわたって社会の影響を受けて、世代間の差がますます減少していくことは間違いない。生まれ世代が人の意識形成の決定的要素ではなくなっているのではないだろうか。どの世代でも、現状のまま社会

が進行していくならば、職場・近隣・親戚に代表されるすべての人間関係において、わずらわしさのない希薄な関係を志向していく傾向は一層強まっていくと思われる。

家族の間でさえも、「子どもたちに迷惑をかけたくないからお葬式をやらなくていい」という人たちが、われわれ浄土宗総合研究所で行った「檀信徒アンケート」でも、かなりの数が見られた。職場は当然として、近隣・親戚関係ばかりか、家族のなかでも〈遠慮・迷惑〉という空虚な心配りが感じられる希薄な人間関係を志向する傾向がこれからも増加していくことが考えられる。われわれ伝統仏教は、生と死の存在論的意味付けを個人と広く社会とのかかわりの中で行ってきた。とりわけお葬式は最も重要な教化活動であることは論をまたない。

人間関係が希薄化していく現代社会の中で、「葬祭のこころ」がいま、崩れはじめている。

（武田道生）

第4回　通夜・葬儀の「場所」の変化がもたらす影響

葬祭場での通夜・葬儀

従来より自宅や寺院などで行われてきた「お葬式」は、民間および公営などの葬祭場でも行われるようになってきた。民間の葬祭場は2000年を超えたあたりから急増し、現在では「お葬式」の場所として大きな位置を占めている。

すでに『教化研究』18号の研究成果報告「全国葬祭アンケート第2次集計分析」（平成19年9月1日発行）でも述べているように、地域共同体の衰退により「お葬式」の変化が顕著に現れたのは「お葬式」の場所の変化である。はじめに教化センター別のデータを示してその比較を行ってみたいと思う。（「檀信徒アンケート」の実施は平成17年9月）

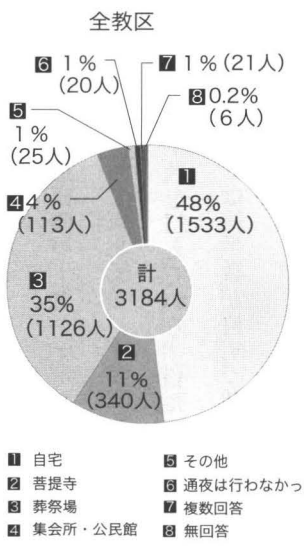
①通夜・葬儀の場所　アンケートからみた特徴

通夜の場所

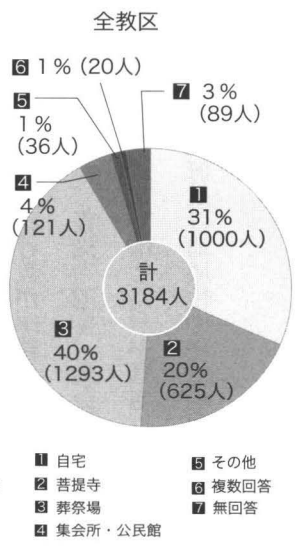
センター	自宅	菩提寺	葬祭場	集会場・公民館	その他	通夜は行わなかった	複数回答	無回答
北海道	4%	32%	44%	18%	2%	0%	0%	0%
東北	55%	16%	19%	6%	1%	3%	0%	0%
北陸	25%	15%	52%	6%	1%	0%	1%	0%
関東	33%	15%	46%	3%	2%	0%	1%	1%
東海	52%	8%	37%	2%	0%	0%	1%	0%
近畿	57%	9%	28%	4%	1%	1%	0%	0%
中四国	69%	9%	18%	3%	0%	1%	0%	0%
九州	45%	3%	49%	0%	0%	0%	3%	0%
全国	48%	11%	35%	4%	1%	1%	1%	2%

通夜の場所は、全教区では自宅が48%、菩提寺が11%、葬祭場が35%となっている。この通夜の場所について、教化センターごとに

お通夜はどこで行ないましたか。



葬儀はどこで行ないましたか。



みると明らかな差が見られる。

自宅で行われる通夜のパーセンテージは、中四国の69％が最も高く、ついで近畿57％、東北55％、東海52％と8つの教化センターのうち4カ所が過半数を超えている。45％の九州を含めると、関東・北陸・北海道以外では約半数が自宅で通夜を行っていることがわかる。

北海道の場合は、全回答数が56件と少数であるが、自宅が4％と少なく、葬祭場44％、菩提寺32％、集会場・公民館18％と、自宅以外の施設の合計が94％でほとんどが自宅以外の施設での通夜となっている。これは北海道の地域性・住宅事情が影響していると考えられる。

以上のように、通夜の場所は自宅で行われる場合が多い。しかしながらその一方、現在では葬祭場の利用もかなりの数に上っていることが明らかとなっている。全国のデータでもわかるように35％が葬祭場で通夜を行っており、九州ブロックでは49％、関東ブロックでは46％と約半分が通夜を葬祭場で行っていることになる。

葬儀の場所

	自宅	菩提寺	葬祭場	集会場・公民館	その他	複数回答	無回答
北海道	0％	29％	38％	18％	2％	11％	0％
東北	14％	53％	24％	5％	2％	1％	1％
北陸	10％	22％	55％	7％	1％	1％	4％
関東	16％	21％	53％	3％	3％	0％	4％
東海	29％	22％	42％	3％	1％	1％	2％
近畿	54％	11％	27％	4％	1％	1％	2％
中四国	38％	23％	31％	4％	1％	1％	2％
九州	24％	11％	62％	0％	0％	1％	2％
全国	31％	20％	40％	4％	1％	1％	3％

同様に葬儀の場所であるが、全教区では自宅が31％、菩提寺が20％、葬祭場が40％であり、通夜と比べると、「自宅」の数値が減少して「菩提寺」「葬祭場」の数値が増えている。通夜を自宅で行い翌日迎接式を行い出棺、火葬場での茶毘式、収骨式を経てから葬儀を菩提寺や葬祭場で行ういわゆる「骨葬（先火葬）」が行われる場合や、その他地域でのさまざまな習慣が自宅での通夜との数字の変化に表れたと思われる。

葬祭場に焦点を合わせ見てみると、通夜では自宅が48％、葬祭場が35％であったが、葬儀では自宅が31％、葬祭場が40％と数値が逆転している。なお、葬儀での葬祭場利用で特徴的な数字を示してい

るのは九州であり、62％と高い数字を示している。ついで北陸が55％、関東が53％と過半数を超えている。

同様の調査である全国葬祭業協同組合連合会の「第7回葬儀についてのアンケート調査報告書」（平成15年9月）でも、葬祭場（＝葬祭専門の式場）がトップとなっていたが、浄土宗総合研究所が実施したアンケート調査よりも葬祭場での実施率は高い数値を示している。全国では56・1％で、特に九州では79・7％とほぼ8割が葬祭場で葬儀を行ったと答えている。

②葬祭場の状況

葬祭業界の専門誌『月刊フューネラルビジネス』を出版している総合ユニコム株式会社の発行による『全国葬儀社&葬祭会館エリアレポート総集』（2005年6月20日刊）には、各都道府県の葬祭場数が記されている。このデータをもとに、都道府県ごとに「一つの会館がどれだけの人口を対象とするのか」を計算し、「一会館が対象とする人口」が少ない順番に並べたのが次の表である。

この表に示されているのは葬儀社が経営する葬祭会館（＝自社葬祭場）のみのデータで、公営や火葬場付設の葬祭場、寺院の葬祭場などはその数には含まれていない。しかし、全体的な傾向は把握できると考えられる。

一会館の対象人口の少ない順位	都道府県	人口	会館数	会館対象人口
1	鹿児島県	1,769,051	145	12,200
2	栃木県	2,015,976	160	12,600
3	宮崎県	1,161,407	83	13,993
4	福岡県	5,062,669	341	14,847
5	熊本県	1,852,632	123	15,062
6	大分県	1,215,315	79	15,384
7	福島県	2,103,888	133	15,819
8	高知県	802,099	50	16,042
9	山梨県	887,034	51	17,393
10	和歌山県	1,071,857	61	17,571
11	長野県	2,213,552	123	17,996
12	徳島県	814,686	45	18,104
13	新潟県	2,446,857	131	18,678
14	群馬県	2,033,308	108	18,827
15	長崎県	1,493,105	79	18,900
16	山口県	1,503,607	74	20,319
17	愛媛県	1,475,497	72	20,493
18	佐賀県	869,540	42	20,703
19	香川県	1,019,696	49	20,810
20	石川県	1,177,341	55	21,406
21	茨城県	2,992,461	134	22,332
22	福井県	825,817	34	24,289
23	富山県	1,116,429	45	24,810
24	岡山県	1,950,992	74	26,365
25	愛知県	7,218,729	264	27,344
26	千葉県	6,050,365	199	30,404

27	鳥取県	609,894	20	30,495
28	宮城県	2,371,212	75	31,616
29	岩手県	1,404,435	43	32,661
30	広島県	2,880,966	86	33,500
31	岐阜県	2,117,998	63	33,619
32	埼玉県	7,068,011	204	34,647
33	神奈川県	8,747,356	248	35,272
34	山形県	1,223,235	34	35,978
35	滋賀県	1,375,887	37	37,186
36	兵庫県	5,594,308	150	37,295
37	北海道	5,755,737	152	37,340
38	島根県	748,836	20	37,442
39	静岡県	3,803,487	100	38,035
40	三重県	1,870,295	44	42,507
41	奈良県	1,429,794	33	43,327
42	京都府	2,646,164	59	44,850
43	大阪府	8,841,491	182	48,580
44	秋田県	1,158,343	22	52,652
45	青森県	1,450,219	27	53,712
46	東京都	12,513,731	203	61,639
47	沖縄県	1,360,588	17	80,035

ドウエアが人口に対して非常に多いことがわかる。

この表での上位の県では、葬祭場はすでに「飽和状態」になっていると推察できる。全国で一番葬祭場の多い福岡県の例をみると、政令指定都市が2市あり、人口数も九州一番の県であるが、341カ所の会館がありその多さは際だっており、北九州市などではすでに葬祭場は飽和状態となっていることが分かる。

逆に東京・大阪などでは、確かに葬祭場も多いが、それ以上に人口が多いため、人口に対する葬祭場の比率は少ないことが分かる。特に東京では、火葬場の敷地内に葬祭場が敷設されているケースも多く、また一つの火葬場に複数の式場が設備されていることが多い。この総合ユニコムの調査では、「葬祭場数」が計上されているということに注意を払うことが必要である。例えば東京の民間火葬場で最大規模である町屋斎場では一つの施設に10の式場があるが、この施設も「1」と数えられているのである。

また、東京において人口に対する葬祭場の比率は少ないということは、地価が高いために葬祭業者が会館を敷設できない状況も関係していると思われる。その代わりに寺院が葬祭場の経営をする、また本堂を葬祭場として貸し出すというケースも多いという状況にも留意する必要がある。

この表から分かるように、人口に対して一番葬祭場の供給が過剰なのは鹿児島県であり、以下栃木県、宮崎県と続いている。この表の上位10県のうち、九州地方が5県と半数を占めており、このデータからは九州地方では葬祭業者の競争が激しく、葬祭場というハー

③変わりつつある葬祭業界と「お客様化」する喪主

葬祭業は元々明治期に葬具賃貸業から始まったとされている。現在でも葬具である棺の調達や祭壇の貸し出しがその業務の重要な一部となっているが、葬祭業者は「葬具賃貸業」から葬祭一切を取り仕切る「サービス業」へと変化しつつある。

今回の調査でも、全教区では46％と約半数近くの人が「お葬式の準備・運営にもっとも葬祭業者が深く関わった」と回答しており、現在において如何に葬祭業社がお葬式に深く関わっているかが分かる。前述のように、葬祭業者は葬祭場を設置することにより、葬祭の「場所」を地域社会や自宅から切り離し、お葬式の一切の進行を自己の会社内で執り行うことに成功したといえよう。

葬祭業者は許認可事業ではなく、現在でもその総数は増え続けていると思われる。旧来からの葬祭業者は地域で葬祭業組合を結成しており、その葬祭業組合の全国組織が「全日本葬祭業協同組合連合会（全葬連）」である。その加盟葬儀社は1，４５４社であり、生前予約制度である「if共済会」を運営している。

これとは別に月々掛け金をかけて将来の冠婚葬祭の金額を積み立てる、いわゆる「冠婚葬祭互助会」の全国組織が「社団法人全日本冠婚葬祭互助協会」であり、その加盟社は268社である。互助会は、葬祭などの費用を前払いで積み立てるシステムなので、顧客の獲得と同時に払い込みされた資金の運用が可能となった。その預かり金の試算は全国で1兆７０００億円と潤沢であるが、その資金を基に祭場を建設するなどの企業規模の大きな業者が多いことが特徴で、葬儀全体のシェア約４割を占める大きな存在である。また、農業協同組合も近年葬祭業界に大きく進出しており、単なる葬儀の紹介窓口から自社施行に移行する例も増えつつある。なお、碑文谷創著『改訂葬儀概論』（表現文化社、２００３年）によれば農協の葬儀は全国の約13％を占めるとされている。

「全日本葬祭業協同組合連合会」と「全日本冠婚葬祭互助協会」が共同して平成７年に作った葬祭の専門家としての民間資格が「葬祭ディレクター」である。そのホームページによると、平成19年時点で葬祭ディレクターは1・2級あわせて約１６，６８０名いるとのことである。葬祭業界ではこのような資格制度をつくり、葬儀社の従業員自身の質の向上を図っている。企業としては当然あるといえるが、葬祭場という箱（＝ハードウエア）と同時に従業員の質（＝ソフトウエア）の充実を図っていることが伺えるのである。

以上のように、旧来地域社会の相互扶助で行われていた「お葬式」は、葬祭業が発展するとともに、喪主自身もサービスを受ける対象

となった。つまり、お葬式の煩瑣な部分は日常生活の場である家や地域から切り離され、喪主はサービスの行き届いた葬祭場での「お客様」としての立場に変化しつつあるということである。

葬儀の「場所」が変化し、また葬祭業者自身も過当競争の波に飲み込まれる現在、葬祭業のサービスが過剰になることにより、「お葬式」における僧侶の存在、宗教的行為が希薄化する状況となりつつある。今後我々僧侶は「お葬式」におけるより積極的な教化や檀信徒との密接なコミュニケーションを心がける必要があるといえよう。

（大蔵健司）

第5回　こんなにも違う!?お葬式の実態

はじめに

「お葬式」は元来、地域社会によって支えられ、またそれ故に地域による特色が強く見られるものであった。ところが、高度成長期による人口移動と共同体の衰退、また葬祭業者の拡大と影響力の増大により、全国的にお葬式の形態は均一化されてきているといわれている。確かにこの指摘は、ある程度、的を得ているであろう。しかし、いまだお葬式は地域による差異が強く見られるようである。

我々僧侶は、自分の住んでいる地域の「お葬式」については熟知しているが、他の地域の実態については意外と知らないというのが実情のようである。しかし、地域によるお葬式の違いについて知っておくことも大きな意味があるだろう。

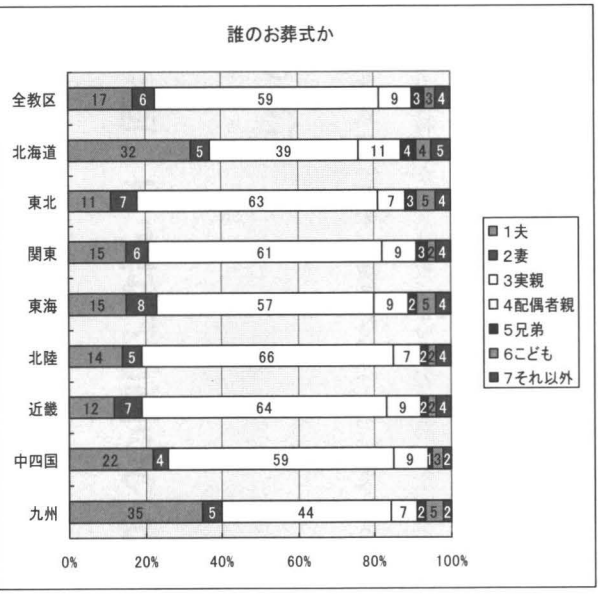
浄土宗総合研究所は、平成17年9月に「お葬式に関するアンケート調査（檀信徒アンケート）」を実施し、これまでその単純結果の報告（『教化研究』17号）、全教区と東京・神奈川と近畿を比較しその分析を行った（『教化研究』18号）。

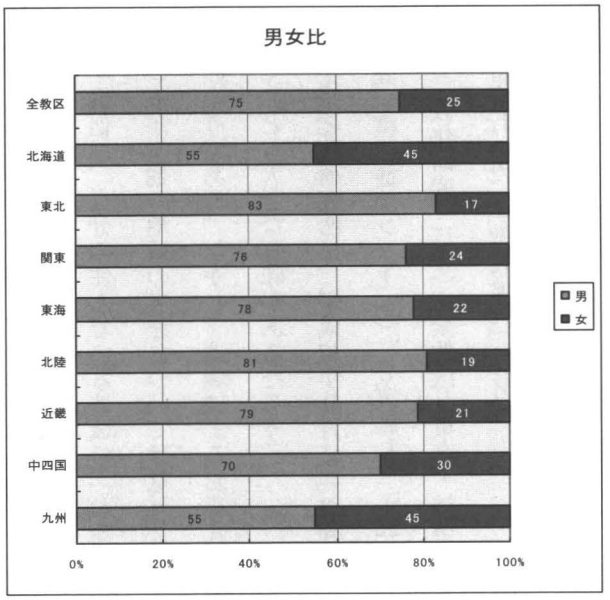
この回では、アンケートの結果を教化センターごとに集計し、「お葬式をどのように行ったか?」について教化センター間の比較をしてみたい。ただし、教化センターによってもその有効回答数にはかなりの相違がある。また、教化センター内の県によっても、大きく「お葬式」の勤め方が異なるということもある。この意味でここでの比較は、あくまで巨視的で限定的な比較であることをお断りしておく。

なお、「それぞれの地域における差はなぜ生じているのか?」ということは、その生活文化の違いによっていると思われる。残念ながら、現時点では我々はその「なぜ?」という理由を答えるだけの材料を持ち合わせていないので、それぞれの読者の考察にお任せしたい。

喪主の男女比および誰のお葬式の喪主を務めたか

全教区では男性75%、女性25%であった。これに比べ男性の比率が多いのが東北で、男性83%、女性17%である。一方、女性の喪主の比率が多いのが北海道と九州であり、女性の喪主の比率はともに45%と半数近くを占めていた。「誰の喪主を務めたか」という質問を見ると、この喪主の男女比と深く関連した回答となっている。つまり、女性の喪主の多い北海道、九州では「妻が夫のお葬式の喪主を務めた」という事例が多く、男性の喪主の比率が高い東北、北陸





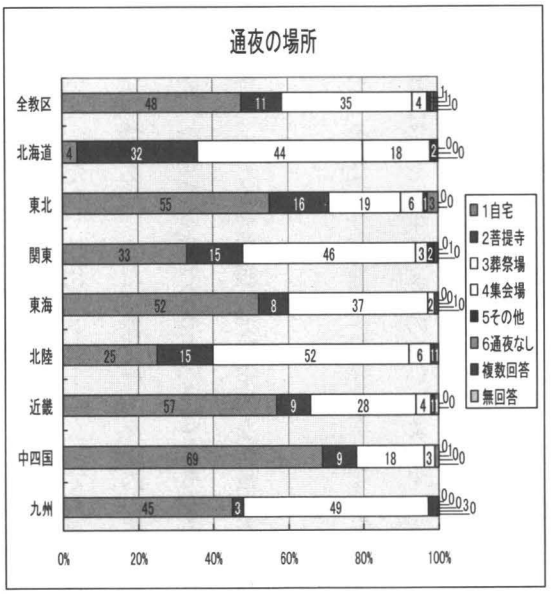
では「実の親のお葬式の喪主を務めた」という事例が多いのである。

通夜の場所

全教区では自宅48%、菩提寺11%、葬祭場35%、集会場4%であったが、この通夜の場所は、教化センターにより大きな違いが見られることが明らかとなった。

自宅の割合を見ると、中四国69%、近畿57%、東北55%と高い一方、北海道では4%と極端に少ない。また、北陸では25%、関東では33%と少ない数字となっている。なお、北海道では菩提寺での通夜が32%と多く、他教区センターと較べると突出しているのが特徴的である。

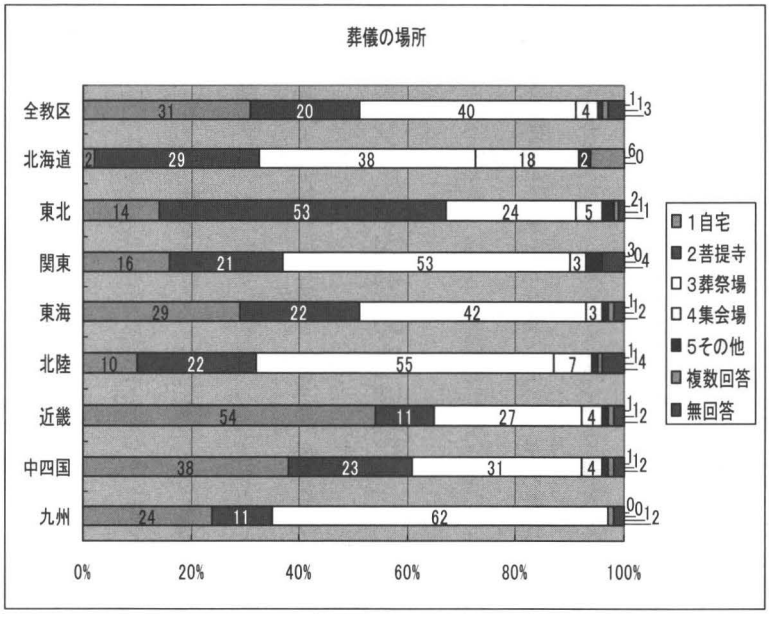
葬祭場での通夜の実施率は、北陸の52%が最も多く、ついで九州49%、関東46%、北海道44%と高い数値を示してい



る。一方、中四国では18％、東北では19％と低い数値となっており、教化センターによる違いが大きいことが分かる。

葬儀の場所

葬儀の場所の全教区値は、自宅31％、菩提寺20％、葬祭場40％、集会場4％である。このように、通夜では自宅が最も多かったが、葬儀では葬祭場が最も多くなっている。特に九州では葬祭場の割合が62％と高く、次いで北陸55％、関東53％となっている。自宅の割合を見ると、近畿が54％と高い割合を占めている。その一方で、北海道では2％、北陸10％、東北14％、関東16％と教化センターにより大きな違いがみられる。



通夜と葬儀での場所の移動

注目すべき点は、通夜と葬儀で行う場所をかえる所が多く見られることである。特に「自宅」の数値を通夜と葬儀で比較してみると、大きな違いが見られるところが多い。つまり、通夜は自宅で行い、葬儀は菩提寺や葬祭場で行うというパターンが多く見られるということである。

東北では、通夜を自宅で行うのが55％であったが、葬儀は14％である。一方菩提寺での通夜が16％であるが、菩提寺での葬儀は53％である。つまり、東北では、「通夜を自宅で行い、葬儀は菩提寺で行う」パターンが多いことが分かる。

九州は、「通夜を自宅で行ったが、葬儀は葬祭場で」という人が多く見られ、東海・中四国は、「通夜を自宅で行い、葬儀を菩提寺、または葬祭場で行った」人が多くいた。

なお、関東・北陸では、東北・東海・中四国ほど通夜と葬儀で場所の移動する事例は多くなく、北海道・近畿ではほとんど場所を移動していないことが明らかとなった。

この「通夜と葬儀で場所を移動させる」ことの理由を断定することはできない。しかしながら、「通夜→火葬→葬儀」という順序で行う（いわゆる「先火葬」）地域であるか、あるいは、「通夜→葬儀→火葬」という順序で行う（いわゆる「後火葬」）地域であるかの違いが関連しているかもしれない。なぜなら、前者の場合には、必然的に通夜と葬儀の間に遺体（遺骨）の移動があるからである。

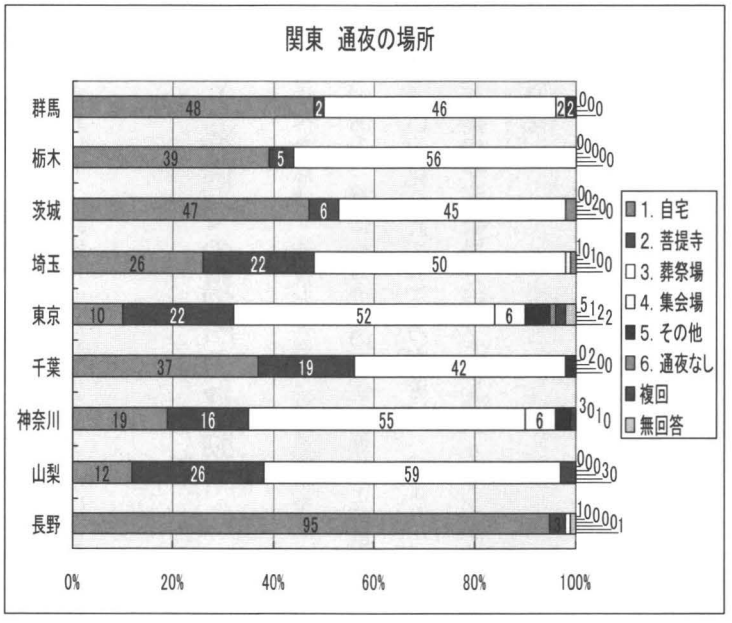
教化センター内での地域差

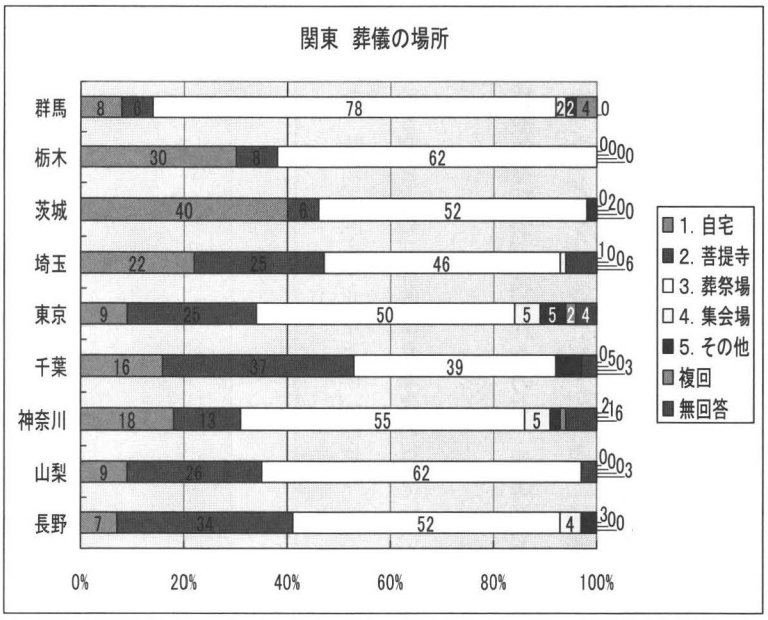
先に見たように、通夜と葬儀の場所については、教化センターによって差が大きく見られたが、実は、その教化センター内でも各県によって大きな違いがある。このことを確認しておくために、9都県を抱える関東教化センターを事例として、自宅での通夜・葬儀の割合を見てみよう。

「通夜の場所」を見ると、自宅の割合が少ないのが、東京10%、山梨12%、神奈川19%である。その一方、長野では95%という圧倒的に高い割合で自宅で通夜を行っている。また、群馬48%、茨城47%と高くなっている。

しかし、「葬儀の場所」を見ると、自宅で行う割合が一番少ないのが長野7%なのである。次いで群馬8%、東京9%、山梨9%となっている。一方、最も自宅の割合が高いのは、茨城40%で、次いで栃木が30%である。

これを「通夜と葬儀での場所の変化」という観点で見ると、長野では自宅での通夜95%→自宅での葬儀7%というように、通夜は自宅で行い、葬儀は場所を変えて菩提寺もしくは葬祭場で行うということが通例のようである。なお、長野では、「通夜→火葬→葬儀」という順序で行っている。長野に次いで自宅での通夜が多かった群馬は、自宅での通夜48%→自宅での葬儀8%と、自宅で通夜を行う割合は多いが、自宅での葬儀は少数であり、代わって葬祭場で行う（78%）ことが多い。一方、茨城では自宅での通夜47%と多いが、自宅での葬

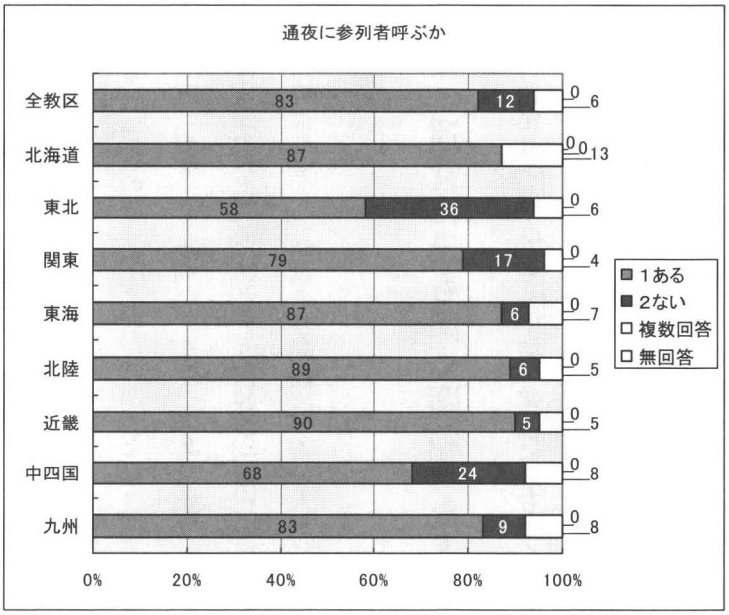




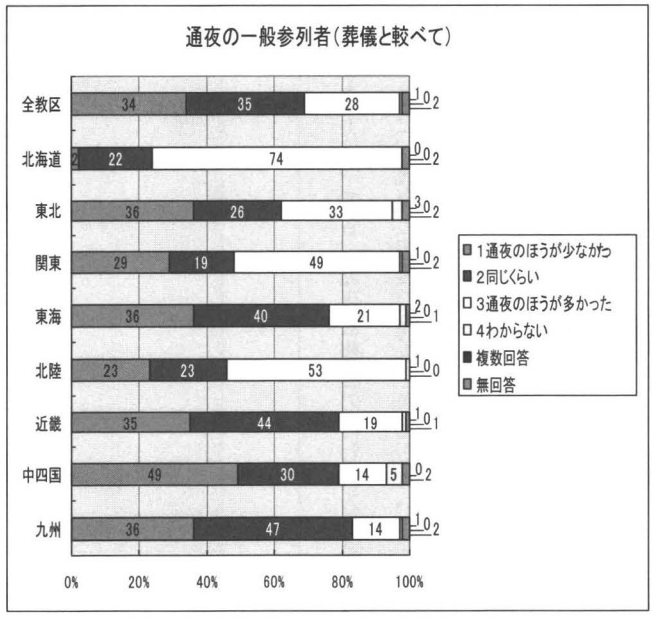
化センターの中でも、通夜と葬儀の行われる場所には大きな違いがあり、また、通夜と葬儀の場所を変えるということに関しても、都県による大きな違いが見られるのである。

通夜の一般参列者

通夜に「一般参列者を呼ぶか」と「通夜の一般参列者の人数」について見てみよう。「通夜に一般参列者を呼ぶ習慣がない」という回答は、東北に36%、中四国に24%、関東に17%と多く見られる。なお、ここにはグラフを載せていないが、関東の中で「一般参列者を呼ばない」という回答をした人のうち長野が37%を占めているように、「通夜に一般参列者を呼ぶ習慣がない」ということは、教化センター内でも地域差が見られる。なお、長野では、「通夜には親しい人しか参列しない」という習慣があり、また参列する場合には平服で参列するとのことである。



次に、通夜と葬儀での一般参列者の数を較べてみると、全教区では「通夜のほうが少なかった」34%、



「同じくらい」35％、「通夜のほうが多かった」が28％であり、全国的に見ると、通夜にも多くの参列者が集まるという状況が明らかとなった。特に、関東・北陸では「通夜のほうが多かった」という回答が約5割を占め、葬儀より通夜のほうに人が集まる状況になっている。

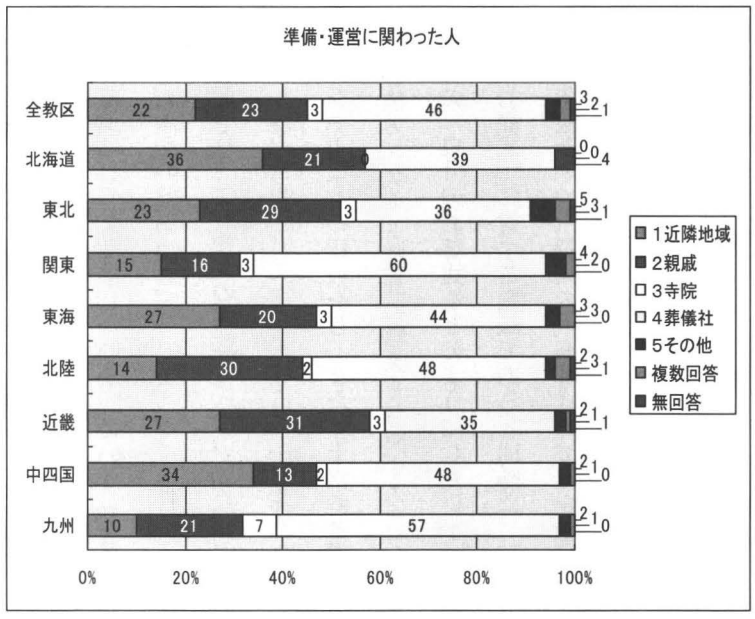
最も特徴的な数値が見られたのが、北海道である。「通夜のほうが少なかった」という回答はわずか2％で「通夜のほうが多かった」は74％を占め、通夜のほうに、参列者が多く集まる場合が圧倒的に多いことが分かる。これは、北海道の一部では開拓時代に仕事が忙しいため葬儀に参加できないことがあったという歴史的経緯があり、そのため今でも「通夜には必ず行くものだ」という通念があったとも聞かれ、このことが関係しているのかもしれない。

一方、「通夜のほうが少なかった」という回答が最も多かったのは中四国（49％）であった。また、東北、近畿、東海、九州でも「通夜のほうが少なかった」という回答が「通夜のほうが多かった」という回答より多く、通夜より葬儀に多くの人が集まる場合が多いことが分かる。

準備・運営に最も深く関わった人

どの教化センターでも「準備・運営に最も深く関わった人」は葬儀社であり、現在、葬儀社がお葬式に持つ影響力が如何に大きいかを示す結果となった。特に関東と九州でこの回答値が高い。

一方、地域近隣という回答を見ると、もっとも高いのは北海道であった。なお、この北海道を除く他教化センターの「近隣地域」という値を、葬儀を自宅で行ったという値と比較してみると、その順位はほぼ一致していることが分かる。つまり、自宅で葬儀を行うことが多い地域ほど、準備運営に「近隣地域」が深く関わっているということである。ただし、北海道ではこれは当てはまらず、葬儀の場所に関しては北海道特有の事情が関係しているのであろう。



都県によっても大きな違いが見られることが分かった。

高度成長期以降における人口移動と地域共同体の衰退、また葬祭業者の拡大と影響力の増大により、「お葬式」に関する各地の習慣が衰退し、全国的に「お葬式」の形態は均一化されつつあることは事実であろうが、現在でもこれだけの地域差があることもまた事実である。つまり、均一化という方向に向かいながらも、それぞれの地域が、それぞれの生活文化を反映しながら、変化していると考えることが出来るだろう。だからこそ、我々僧侶は、他の地域との違いを認識しつつ、自分の地域の生活文化を正確に把握した上で、しっかりと「浄土宗のお葬式」を勤めることが大切であろう。

（名和清隆）

おわりに

今回は、「お葬式をどのように行ったか」ということに関して、特に「場所の問題」、「準備・運営に関わった人の問題」、「参列者の問題」に限って比較を行った。その結果として、教化センターごとに大きな違いがみられた。また、関東教化センターを見た場合には、

第6回　私のお葬式はこうしてほしい

はじめに

浄土宗総合研究所が実施した「檀信徒アンケート」は、大きく分けて「喪主として務めたお葬式はどのようなものであったか」という「お葬式の実態」と、喪主としてお葬式を体験したうえで、「自分のお葬式はどのようにしたいか」という「お葬式への意識」の二点を尋ねるものであった。

第5回では、「お葬式の実態」について教化センターごとの差異に注目しながら報告した。ここでは、「お葬式への意識」について教化センターごとの比較をし、また浄土宗総合研究所アンケート以外の各種アンケート調査の結果を参照することにより報告をしたい。この「自分のお葬式をどのようにしたいか」ということは、現在の「お葬式」に対する意識であると同時に、10年後、あるいは20年後30年後といった将来の「お葬式の姿」を予測させるものでもある。ここに「お葬式への意識」を調査分析することの意味があるのである。

お葬式をしたいと思いますか？

2008年5月30日の読売新聞朝刊の一面に、『宗教「信じない」7割』という見出しが掲載された。

これは読売新聞が実施した連続世論調査「日本人」の結果報告に付けられた見出しであるが、この読売新聞の調査のなかには、「お葬式」に関する設問もあった。

「Q　葬式は、形式にとらわれない無宗教の葬式にしてほしいと思いますか、それとも、葬式をしなくてよいと思いますか。」

形式にとらわれない無宗教の葬式にしてほしい　39・1％

そうは思わない　48・5％

葬式はしなくてよい　8・1％

答えない　4・3％

この結果からは、今まで通りの「お葬式」を望む人（＝「そうは思わない」との回答）が5割に満たないことが明らかになっている。その一方で、無宗教の「お葬式」を望む人が約4割もいて、また「お葬式」をしなくてもよいという人が8％もいるのである。この調査に対して、宗教学者の山折哲雄氏は「無宗教の葬儀を望む人が約4割もいるのは、身内だけで葬式を行うなど、葬儀の簡素化や多元化が影響していると思う」と述べ、伝統的な「お葬式」を望む人が減っ

ていることを指摘している。

それでは、浄土宗総合研究所の「檀信徒アンケート」では、「自分のお葬式を行いたいか」ということについてどのような結果が出ているだろうか。全教区の数値、各教化センターの数値、および参考として東京・神奈川教区の数値を比較してみよう。

Q　あなたは、ご自分が亡くなった際には、お葬式をしてほしいと思いますか。

全教区では、「1. 必ずしてほしい」54%、「2. できればしてほしい」34%であり、あわせると88%の人が「お葬式をしてほしい」と考えていることがわかる。この「お葬式をしてほしい」という数値が高いのが、東北（94%）、九州（91%）である。一方やや低いのが、北海道（82%）である。このように教化センターごとにやや数値に違いがみられるものの、およそ9割という多くの人が「お葬式をしてほしい」と考えていることが明らかになった。

しかしながら、「してほしいとは思わない」との回答に注目してみると、全教区では3%であるが、北海道、関東では5%、東京・神奈川では8%にも上っている。この東京・神奈川の8%という数値は、読売新聞のアンケートで「葬式はしなくてよい」と回答した8・1%とほぼ同じ数値であった。しかし、読売新聞のアンケートが不特定多数の一般のアンケートであるのに対し、本調査は「平成に入ってからお葬式の喪主を務めた浄土宗の檀信徒に対するアンケート」であり、アンケート用紙は「住職が手渡しで配布した」ということを考えると、同じ8%であっても、この数値が持つ意味に大きな違いがあることは明らかである。

	1. 必ずしてほしい	2. できればしてほしい	3. してほしいとは思わない	4. まだわからない	5. その他	複数回答	無回答
北海道	32%	50%	5%	11%	0%	0%	2%
東北	65%	29%	0%	5%	0%	0%	1%
北陸	54%	36%	2%	6%	0%	0%	2%
関東	50%	36%	5%	7%	1%	0%	1%
東海	48%	39%	3%	7%	1%	1%	1%
近畿	56%	31%	4%	7%	1%	0%	1%
中四国	56%	33%	2%	7%	1%	0%	1%
九州	59%	32%	2%	4%	0%	1%	2%
東京・神奈川	44%	39%	8%	8%	1%	0%	0%
全教区	54%	34%	3%	7%	1%	0.3%	1%

どのような形式のお葬式を望みますか？

先に見た「お葬式をしてほしいか」の質問で、「1．必ずしてほしい」もしくは「2．できればしてほしい」と回答した人に、「あなたは、どのような形式のお葬式を望みますか」と質問をした。

	1. 僧侶を招いた家の宗旨である浄土宗の葬式	2. 自分の希望する宗教による葬式	3. 宗教色のないお別れ会	4. 遺族にまかせる	5. その他	6. まだわからない	複数回答	無回答
北海道	81%	２%	０%	15%	０%	０%	０%	２%
東北	84%	１%	１%	13%	０%	１%	０%	０%
北陸	77%	１%	１%	19%	０%	０%	１%	１%
関東	73%	２%	１%	21%	０%	１%	１%	１%
東海	73%	０%	０%	24%	０%	１%	１%	１%
近畿	80%	１%	１%	16%	１%	０%	０%	１%
中四国	81%	１%	０%	15%	０%	１%	０%	２%
九州	78%	１%	１%	18%	０%	０%	０%	２%
東京・神奈川	73%	３%	０%	21%	０%	１%	１%	１%
全教区	77%	１%	１%	18%	０%	０%	１%	１%

この回答では全国的に大きな差異は見られず、ほぼ8割近くが「僧侶を招いた家の宗旨である浄土宗のお葬式」を望んでいる。一方、「自分の希望する宗教によるお葬式」や「宗教色のないお別れ会を希望する」は1～3％と少数である。前述の読売新聞のアンケートでは、「形式にとらわれない無宗教の葬式にしてほしい」と回答した人が約4割いたことと較べると対照的であるといえよう。

「3．遺族にまかせる」という回答は、全教区では18％と約2割の人が、自分のお葬式を遺族に任せると考えている。この割合がやや高いのが東海（24％）、関東（21％）であり、低いのが東北（13％）であった。この「自分のお葬式は遺族に任せる」と考える理由については一概にいうことはできないだろう。しかし、「お葬式は亡くなる人があれこれ考えるものではない」という伝統的な考え方、また「自分のお葬式についてあれこれ言うと遺族に迷惑を掛けてしまう」という家族に対する遠慮、この両方の理由があるのかもしれない。

どの範囲の会葬者を望みますか？

近年「家族葬」という言葉が頻繁にメディア等に登場するようになってきた。首都圏では「家族葬」専門を標榜する葬儀社のフランチャイズチェーンができるなどさまざまな動きがある。「家族葬」とは第2回でも触れたように、家族親族等の血縁、および少数の友人といった小規模の「お葬式」を指すようであり、「家族葬」という言葉はおそらく葬祭業者が、営業上作り上げた言葉だと思われる。このような「家族葬」が増加した理由のひとつとして、高齢での死者が増えたこと、また近隣などでの人間関係が希薄化したことなどが挙げられよう。

浄土宗総合研究所の「檀信徒アンケート」では、自分のお葬式に呼びたい人の範囲を次のように尋ねた。

Q　あなたのお葬式の会葬は、どの範囲の人々に来て欲しいと思いますか。

	1. 家族のみ	2. 家族・親戚	3. 家族・親戚・友人	4. 家族・親戚・友人・地域の人々	5. 家族・親戚・友人・地域の人々・仕事関係の人々	6. 家族・親戚・友人・地域の人々・仕事関係の人々・遺族の関係の人々	7. その他	複数回答	無回答
北海道	4％	9％	24%	35%	7％	17%	0％	0％	4％
東北	2％	7％	16%	31%	12%	25%	0％	0％	5％
北陸	1％	12%	16%	26%	19%	24%	1％	0％	1％
関東	3％	10%	21%	22%	18%	23%	1％	0％	2％
東海	1％	8％	20%	30%	12%	24%	1％	1％	3％
近畿	3％	8％	14%	32%	18%	21%	1％	1％	3％
中四国	4％	8％	13%	31%	12%	23%	2％	0％	6％
九州	3％	9％	26%	31%	8％	17%	1％	0％	5％
東京・神奈川	4％	12%	26%	20%	16%	20%	1％	0％	1％
全教区	3％	9％	18%	29%	15%	22%	1％	0％	3％

どの教化センターでも、「4．家族・親戚・友人・地域の人」という回答が一番多いようである。なお、回答の「1．家族のみ」「2．家族・親戚」「3．家族・親戚・友人」までが、地域の人々、仕事の関係などを含まない「狭い範囲での参列者」と考えることができよう。この1～3までの合計をみると次のようになる。

	1～3の合計
北海道	37%
東北	25%
北陸	29%
関東	34%
東海	29%
近畿	25%
中四国	25%
九州	38%
東京・神奈川	42%
全教区	30%

全教区では3割が家族・親戚・友人までの「狭い範囲でのお葬式」を望んでいることが分かる。この「狭い範囲でのお葬式」の数値が高いのが九州（38％）、北海道（37％）である。また、東京・神奈川も42％と高くなっている。逆に東北、近畿、中四国では25％と低い数値を示しており、「広い範囲でのお葬式」を望む人が多いことが分かる。

なお、東京都生活文化局の『葬儀に関わる費用等調査報告書』（平成14年3月）での、「あなたはご自分の葬儀の規模についてどのよ

うに思いますか。一つあげて下さい。」との質問では、次の通りである。

お金をかけても立派にしてほしい	0・30%		
多少のお金はかかっても人並みにしてほしい	12・60%		
親しい人とこぢんまりとしてほしい	59・10%		
行ってほしくない（家族だけで埋葬）	13・80%		
その他	3・30%		
考えたことがない	8・90%		

この質問では「自分のお葬式」を「親しい人とこぢんまりとしてほしい」と考えている人が約6割となっている。この東京都生活文化局の質問は、「金銭的問題での質問」となっているため、浄土宗総合研究所の「檀信徒アンケート」とは質問内容が異なるものではあるが、やはり「お葬式の規模を小さくしたい」という意識は共通しているようである。

お葬式の意味は何だと思いますか？

最後に、「自分のお葬式」にはどのような意味があると考えているかについて見てみよう。

全教区では、「1. 家族や友人との別れ」が44％と最も多く、次いで「極楽浄土に送ってもらう」が35％と多くなっている。この2つの回答が多いことは、どの教化センターでも同じであるが、北海道と中四国では「家族友人との別れ」（告別）よりも「極楽浄土へ送ってもらう」との数値が若干多くなっているのが特徴である。

	1. 家族や友人との別れ	2. 自分の冥福を祈る	3. 遺族の心を慰める	4. 極楽浄土へ送ってもらう	5. 家の先祖になる儀式	6. その他	複数回答	無回答
北海道	39%	7％	4％	46%	0％	2％	2％	0％
東北	41%	10%	2％	41%	4％	0％	0％	1％
北陸	47%	11%	5％	33%	1％	1％	0％	2％
関東	43%	10%	4％	36%	4％	1％	1％	1％
東海	47%	12%	6％	27%	6％	1％	1％	1％
近畿	44%	12%	3％	34%	5％	1％	0％	1％
中四国	37%	9％	2％	41%	7％	3％	0％	1％
九州	48%	8％	1％	37%	4％	1％	0％	1％
東京・神奈川	48%	9％	6％	32%	3％	1％	1％	1％
全教区	44%	11%	3％	35%	5％	1％	0％	1％

また、「5. 家の先祖になる儀式」との回答した人は、中四国では7%いるが、北陸では1%、北海道では0%となっている。一概にはいえないだろうが、地域による宗教観や先祖観の違いが反映されているのかもしれない。

これまで「自分のお葬式」について、特に「お葬式をしてほしいか」「どのような形式のお葬式がよいか」「会葬者の範囲」「自分のお葬式の意味」について、教化センターごとの比較をすることにより考察をしてきた。第5回に掲載したように「喪主としてどのようなお葬式を行ったか」ということに関しては、教化センターにより大きな違いが見られた。しかし、今回見たように、「自分のお葬式をどのようにしたいか」ということに関しては、地域による大きな違いは見られないようである。

一般の調査や新聞報道などにより、お葬式を否定する意見や、「家族葬」などの小規模の「お葬式」を望む人が多くいることが伝えられ、「もはや伝統的なお葬式がすべてではない」ことが指摘されている。今回の浄土宗総合研究所の「檀信徒アンケート」では、菩提寺の住職にお葬式を依頼し浄土宗の「お葬式」を喪主として経験した人であっても、「自分のお葬式」の場合は、「まだ分からない」と態度を決めかねている人、また浄土宗以外の「お葬式」を望む人も少なからずいることが明らかとなった。このことを重く受けとめなくてはならないだろう。

（大蔵健司）

第7回　今、「お葬式」に必要なこと
―檀信徒の意識から考える―

はじめに

第6回でも言及した「宗教観」をテーマとした読売新聞社の年間連続調査「日本人」（2008年5月30日付掲載）では、「あなたは何か宗教を信じていますか?」の問いに対して、71・9％の人が「信じていない」と答え、26・1％の人が「信じている」と答えている。この調査では、多くの人々は特定の宗教を信じていないとしているにもかかわらず、その最期には伝統仏教の形式に則った「お葬式」を行っているケースが多いのもまた事実である。このような傾向は、信仰とは全くかけ離れたところで「お葬式」が行われていることを意味している。これは、浄土宗の檀信徒においても決して例外とは言えないのではなかろうか。

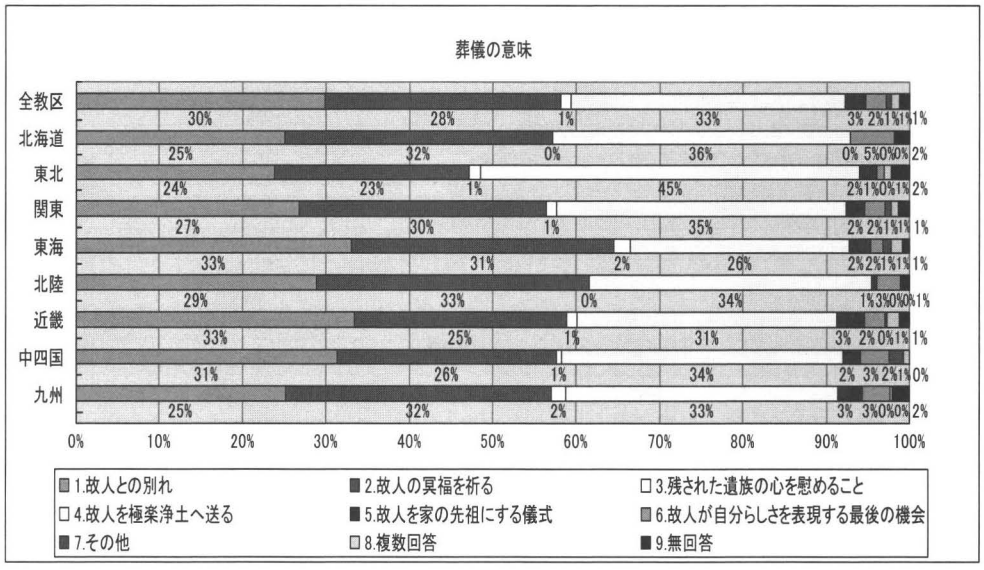
そこで、ここでは「檀信徒アンケート」をもとに、家族の場合と自身の場合の「お葬式」の持つ意味、さらには、家族と自身の場合の死後の行方とその存在意識を中心に考察を行うことで、浄土宗の檀信徒は「お葬式」にどのように意識を持ち、どのような意味で捉えているのかを探っていく。そして、浄土宗における「お葬式」の本来的な意味とはどのようなものなのかについて考え、我々浄土宗教師にとって、「お葬式」に必要なことは何なのかを明らかにしていきたい。

なお、家族の場合と自身の場合を比較し、また各教化センターを比較することにより考察をしたい。

家族の場合の「お葬式」の意味

ここでは、自身が喪主として家族を送った際の「お葬式」の意味についてみていきたい。まず、「ご家族のお葬式を行われ、お葬式の最も大きな意味は何だったと思いますか?」の問いで、全教区平均では、「故人を極楽浄土へ送る」意識が33％と最も高く、次いで「故人との別れ」30％、「故人の冥福を祈る」28％となっている。この数値は、多少の地域差はあるものの全教区的にほぼ相似した結果といえる。ただし、東北において、「故人を極楽浄土へ送る」意識が他地域よりも10ポイント以上高く（45％）、逆に東海においては、他地域より10ポイント以上低い（26％）点は特質すべき事項であるが、その詳細な理由に関しては、今後の継続調査が必要な点である。また、北海道において、「お葬式」を「故人の自分らしさを表現する機会」として捉えている人が若干多いことや、「故人を家の先祖にする儀式」と捉えている人が0・5％にも満たない点も注目され

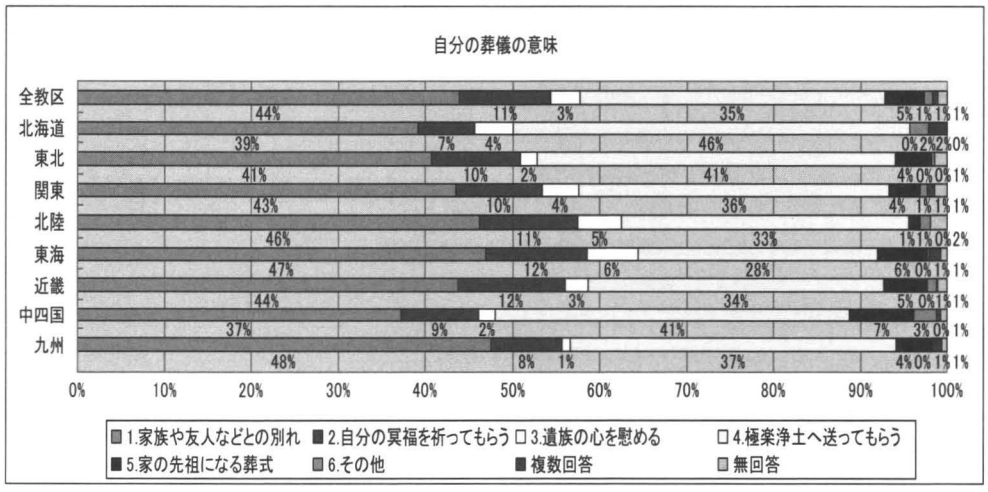
る。また、「お葬式」を「遺族の心を慰めることである」と捉えている値が全教区平均はもちろん、各教化センターで回答項目1～6中最低値を示している。



自身の場合の「お葬式」の意味

次に、自身が送られる側となる場合の「お葬式」についての意識をみていきたい。「自分自身の『お葬式』についてはどのような意味があるか」という問いの回答は、次頁のグラフの通りである。

全教区的に見て、「家族や友人との別れ」が44％、次いで「極楽浄土へ送ってもらう」が35％となっており、さらには「自分の冥福を祈ってもらう」が11％となっている。この他の2項目は「遺族の心を慰める」3％や「家の先祖になる」5％と非常に少数に止まっている。この上位三つの要素が全体の9割を占める点においては、家族の「お葬式」と自身の「お葬式」の両者において共通する点である。この「家族や友人との別れ」で注目されるのは、九州では48％、東海では47％、北陸でも46％と半数近くが、「お葬式」を別れの場であると捉え、「お葬式」＝「別れの儀式」となりつつある点である。また、北海道（46％）と中四国（41％）においては、他の6地域とは逆に極楽浄土へ送ってもらう意識が家族や友人との別れの意識より高い結果となった。さらに北海道においては、先程の家族のお葬式同様、「家の先祖になるという意識」は0％と共通している。



家族の場合と自身の場合の「お葬式」の意識の比較

ここでは、これまで見てきた家族の場合と自身の場合の「お葬式」の意味に関して、共通する回答項目を比較して、両項目間での意識の相違についてみていきたい。

このデータから、家族の「お葬式」の意味合いは、1位が「極楽浄土へ送る」、そして「別れ」と続く。これに対し、自身の「お葬式」の場合の意味合いは、1位「別れ」、そして「極楽浄土へ送ってもらう」ことであり、その順位の入れ替わりが見られる点である。さらには、「冥福を祈る」では、家族の「お葬式」の場合は28％とそのポイントは、他の二要素と大差ないにもかかわらず、自身のお葬式の場合には11％と、そのポイントは他の二要素と大きな開きが生じている。この17ポイントの差の大半は、自身の「お葬式」に際して、「別れ」への意識へと転化されていることも注目される。この「別れ」の意識は、家族の「お葬式」と比較しても自身の「お葬式」に際し、非常に強い意識があることがわかる。

家族と自分のお葬式の意味（共通回答項目のみの教化センター別比較）

お葬式の意味は？	家族	自分	家族	自分	家族	自分	家族	自分	家族	自分	家族	自分	家族	自分	家族	自分	家族	自分
	九州		中四国		近畿		北陸		東海		関東		東北		北海道		全教区	
1. 別れ	25%	48%	31%	37%	33%	44%	29%	46%	33%	47%	27%	43%	24%	41%	25%	39%	30%	44%
2. 冥福を祈る	32%	8%	26%	9%	25%	12%	33%	11%	31%	12%	30%	10%	23%	10%	32%	7%	28%	11%
3. 遺族の心を慰めること	2%	1%	1%	2%	1%	3%	0%	5%	2%	6%	1%	4%	1%	2%	0%	4%	1%	3%
4. 極楽浄土へ送る	33%	37%	34%	41%	31%	34%	34%	33%	26%	28%	35%	36%	45%	41%	36%	46%	33%	35%
5. 家の先祖になる	3%	4%	2%	7%	3%	5%	1%	1%	2%	6%	2%	4%	2%	4%	0%	0%	3%	5%

家族の死後の存在

ここでは、故人の死後の存在について考えてみたい。読売新聞の調査では、「あなたは、死んだ人の魂は、どうなると思いますか」の問いに、「生まれ変わる」と答えた人が29・8％と最も多く、次いで「別の世界に行く」の23・8％、「消滅する」17・6％、「墓にいる」9・9％、「魂は存在しない」9・0％となっている。この回答を、①死後何等かの形で生まれ変わったり、別の世界にいると考える人は、53・6％、②消滅したり、魂などの存在に否定的で、死後は何もないと考える人は26・6％、③現実に納骨された遺骨そのものが自分であるという「お墓」と答えた人9・9％に大別することができる。

そこで、以下で「檀信徒アンケート」の結果を見ていくと、まず「故人の霊はあなたにとってどのような存在ですか」という問いでは、全教区共通して、「故人は残された親族を見守ってくれている存在である」と答えている割合が80％以上であり、遺族側の常に見守ってくれるという一方的視点の強さをみることができる。その一方で、「霊などは存在しない」と答えた人は東日本および中四国では0％であり、あくまで故人がどこかで見守ってくれているのであり、故人を霊という別の存在に置き換えるということはしていない。

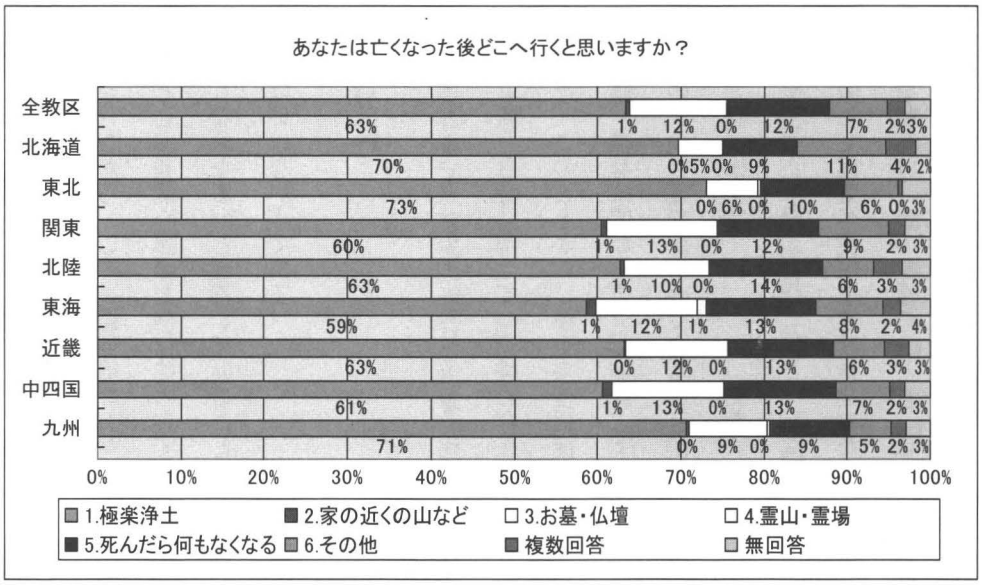
故人はあなたにとってどのような存在か?	九州	中四国	近畿	東海	北陸	関東	東北	北海道	全教区
1. 見守ってくれている	88%	83%	83%	80%	87%	87%	88%	80%	85%
2. 困った時には助けてくれる	1%	0%	1%	2%	2%	2%	1%	4%	1%
3. 供養をしないと良くないことが起こる	1%	1%	2%	2%	1%	2%	2%	5%	2%
4. 特になにもしない	1%	2%	1%	1%	1%	2%	1%	4%	1%
5. 霊など存在しない	1%	0%	1%	1%	0%	0%	0%	0%	1%
6. わからない	3%	6%	5%	7%	5%	2%	3%	4%	4%
7. その他	1%	1%	2%	2%	2%	2%	1%	0%	2%
複数回答	2%	6%	4%	5%	2%	2%	2%	2%	3%
NA	1%	0%	1%	0%	1%	1%	2%	2%	1%

また、「故人は困った時には助けてくれる」1%や、「供養しないとよくないことが起こる」2%といった具合に、具体的に自身に何か善悪を及ぼすような存在ではないという意識が全教区的に顕著に現われているが、北海道においては、「供養しないと良くないことが起こる」と答えた人が5%、また、「困った時には助けてくれる」と答えた人が4%で、他地域より3~4ポイント高い値が出ている。

これらのことから、「見守ってくれる」「困った時には助けてくれる」「供養しないとよくないことが起こる」など、故人と死後も何らかの形で関係性を持っていると考えている割合が9割程あることがわかる。

自身の死後の行方

次に、「自分自身は死後にどこへ行くのか」について、その意識を見ていく。「あなたは亡くなった後、あなたの霊は、どこに往くと思いますか?」の問いでは、全教区的にその大半である63%が、極楽浄土へ行くと回答している。なかでも、東北、北海道、九州の各教化センターにおいて70%を越える高い数値を示しているが、関東、東海といった大都市部を抱える教化センターにおいては、59~60%と前者と比較すると10ポイントも下回っている。しかしながら、近畿においては、63%と全教区平均と同値であり、同じ大都市部を



抱える関東、東海と比べても比較的高い値を記録している。一方で、大方の人が極楽浄土へ行くと答えているが、死んだら何もなくなると回答した人が12％にのぼる点も注目される。

ここで、故人と自身での死後の行方とその存在についての意識を検討してみる。まず、故人と自身での死後のあり方では、故人は残した家族を見守っていてくれる存在であるとの回答が圧倒的であり、自身は極楽浄土へ行くとする回答がその大半を示している。このことから、人は亡くなると極楽浄土へ行き、そして家族を見守る存在になるという意識が大半の人に存在することがわかる。

さらには、故人に対しては、「見守ってくれる存在」であったり、「供養しないとよくないことが起こる」など、死後もその存在を何らかの形で意識していると思われる回答を9割の人が示している一方で、自身においては死んだら何もなくなるという回答が12％にのぼっている。

これらのことから、第6回冒頭で挙げた読売新聞調査と比較してみると、読売新聞調査では、「死後何等かの形で生まれ変わった」り、「別の世界にいる」と考える人は53％であり、また「死後は何も存在しない」という回答が26％である。これに対して、浄土宗総合研究所「檀信徒アンケート」では、「死後極楽浄土へ行く」とする回答をした人が63％であり、また、「死後は何も存在しない」という

回答は12％となり、浄土宗の檀信徒は、読売新聞調査に見られる一般意識より、死後の世界の存在を認識している人が10ポイントほど高いことがわかる。また、これと同様に浄土宗の檀信徒においては、「死後の存在」に関しても14ポイントほど肯定的であることがわかる。しかしながら、この「檀信徒アンケート」の回答対象者は、近年喪主として葬儀を務めた檀信徒の方である。その約1割が「死んだら何もなくなる」と回答していることは、危機感を持って注目しなければいけない点である。

おわりに

以上ここまで、家族の場合と自身の場合のお葬式に関する意識、および家族と自身に関しての死後の存在とその行方の意識についてみてきた。このことから、浄土宗檀信徒の思う「お葬式」の意識とは、家族、自身に関わらず、①別れ、②極楽浄土へ送る、③冥福を祈る、の三つの要素が中心であることがわかった。

そこで我々浄土宗では、この「お葬式」をどのように捉えているかを『浄土宗大辞典』で見てみると、「葬儀式」という項目の中で「亡者を導引して極楽へ往生を遂げさせるために行なう儀式で、遺族の悲しみを和らげ、世の無常をさとし、仏心への回帰を得させる式。」と規定している。このことから、「葬儀式」いわゆる「お葬式」には、①死者を導引し極楽浄土への往生を完遂させる。②遺族の悲しみを和らげる。③世の無常をさとし、仏心への回帰を得させるという三つの大きな意味合いをもった儀式であると定義付けすることができる。

ここで注目されるのは、檀信徒の意識と『浄土宗大辞典』が示すところのお葬式の意味とでは、大きく異なっている点である。中でも特に注目しなければならないのは、『浄土宗大辞典』においては「お葬式」には、遺族の悲しみを和らげることをあげているにもかかわらず、その意識は、家族の場合には全教区平均で1％であり、自身の場合でも同様に3％と非常に低く、一般的には、「お葬式」にそういった意味を見出していないことがわかる。

また、「お葬式」における「別れ」の意識に関してであるが、今回の「お葬式」の定義は、あくまで『浄土宗大辞典』の「葬儀式」の項目によったため、その意義に「別れ」の意味合いが含まれていない。しかしながら、現在一般的に「お葬式」といわれる式中において、「葬儀式」と「告別式」を合わせ兼ねて行うケースが多いため、「檀信徒アンケート」結果からも見て取れるように、「お葬式」に「別れ」の意識が強く入り込んでいる。その結果「お葬式」＝「別れの儀式」という意識が定着してしまっていると思われる。これは、本来の「葬儀式」が持つ意味合いを失いかねないという危険性を大き

く孕んでいる。

これらのことを踏まえ、我々僧侶も、「お葬式」の持つ意味として、極楽浄土への往生を積極的に説くと同時に、その他の②遺族の悲しみを和らげる。③世の無常をさとし、仏心への回帰を得させるという役割を果たすべく努めなければならない。そして浄土宗教師の今後の課題として、「お葬式」、ひいては「葬儀式」の持つ意味合いをしっかり理解し、檀信徒へその意味を明確に伝えることが第一と思われる。

さらには、その意味を伝える中で、真の仏弟子となる本来の目的は、恵心僧都（源信）が『往生要集』中に、「往生極楽を華報となし、証大菩提を果報となし、利益衆生を本懐となす。」と示し、我々が枕経や通夜で読んでいる善導大師の「発願文」中に「かの国にいたりおわって、六神通をえて、十方界に入って、苦の衆生を救摂せん。」とあるように、西方極楽浄土に往生し、阿弥陀仏を見奉り、六神通を得た後に、廻り還って娑婆世界の衆生を救おうということを忘れてはならない。

つまり、故人が往生することは、広義として苦の衆生の救済を意味するが、そこには「愛別離苦」に苦しむ残された家族・親族を見守り導くことが含まれている。このことを説くことが『浄土宗大辞典』に示される「②遺族の悲しみを和らげる」という目的のひとつを果たすことにつながるのである。

よって、何故、私たちは死後、西方極楽浄土へ往生することが必要なのか。更には大切な家族や自身が極楽浄土へ往生した後には何をするのか。「往生の目的」、「往生の意味」、「往生後の故人の役割」を明確に示していくことが今後必要である。

（和田典善）

第8回　戒名か俗名か

はじめに

戒名は「仏教徒の証」であり、檀信徒が仏弟子となり、「浄土宗の信者となった証」であるとともに、信仰の証として重要かつ必要なものである。しかしながら、五重相伝が盛んな地域を除いては、多くの檀信徒は生前ではなく没後に戒名を授かっており、現実にはお葬式が授与戒名の儀礼の場になっていると思われる。

今回の「檀信徒対象アンケート」調査では、檀信徒のなかに「生前の名前（俗名）でよい」と考えている人が少なからず存在することがわかった。これは戒名に対する金銭的な問題とともに、日本仏教のあり方に対して疑問を呈するものである。ここでは、檀信徒の戒名に対する意識の問題を中心に取り上げたい。

檀信徒は戒名を希望しているか？

①教化センター別の比較

「あなたは、戒名を希望しますか、それとも生前の名前（俗名）のままで良いと思いますか」という質問をした。始めにこの回答を教化センター別に比較をしてみる。戒名に対する意識は地域によってどのような相違があるのか、全教区の数値と各教化センターの数値と東京・神奈川の数値を比較してみたい。なお、この設問は戒名ではなく「生前の名前（俗名）のままでよい」とする檀信徒が、どのくらい存在するかを知るためのアンケートであって、檀信徒が俗名のままで行うお葬式を認めるものでないことを付しておく。

	戒名を希望する	戒名を持っている	生前の名前のままでよい	分からない	複数回答	未回答	回答数
北海道	60%	11%	11%	11%	2%	5%	56
東北	67%	9%	11%	11%	0%	2%	231
関東	63%	4%	15%	14%	0%	4%	666
東海	57%	9%	13%	18%	0%	3%	445
北陸	50%	18%	8%	18%	0%	6%	177
近畿	42%	35%	10%	10%	0%	3%	973
中四国	64%	8%	12%	14%	0%	2%	290
九州	60%	9%	15%	12%	0%	4%	337
全教区	55%	16%	12%	13%	0%	3%	3184
東京・神奈川	60%	4%	17%	15%	1%	3%	279

このセンター別の数値の他に東京・神奈川を挙げた理由は、お葬式に対する意識に顕著な変化が起きていると想定され、今後のお葬式の意識の変化を見る上で重要な地域

と思われるからである。ただし、関東のなかには東京・神奈川の数値も含まれている。

教化センターをひとつのブロックとしたので、さまざまな教区が入り、数値に対して疑問を持つ方があろうかと思う。それぞれの都道府県別に分析をしたかったが、全く回答がなかった教区や、また分析するには回答が少ない教区があったために、教化センター別で分析した。

戒名を希望するか?

まず、「戒名を希望するか?」という設問を分析する。この回答は教化センターによって若干の数値の差があるが、「戒名を希望する」と「すでに持っている」という戒名肯定者は6~7割であり、「生前の名前のままでよい」という俗名希望者は約1~2割、「まだ分からない」という未確定者は約1~2割である。このように戒名に対する意識は、地域差があまりないようにも見える。

しかし、各地方教化センターの数値を詳細に検討してみると、「戒名を希望する」と「すでに持っている」人の合計は、全教区71%、近畿77%、東北76%、中四国72%である。これに対して、東京・神奈川は64%で、全教区よりも7ポイントも低い数値である。

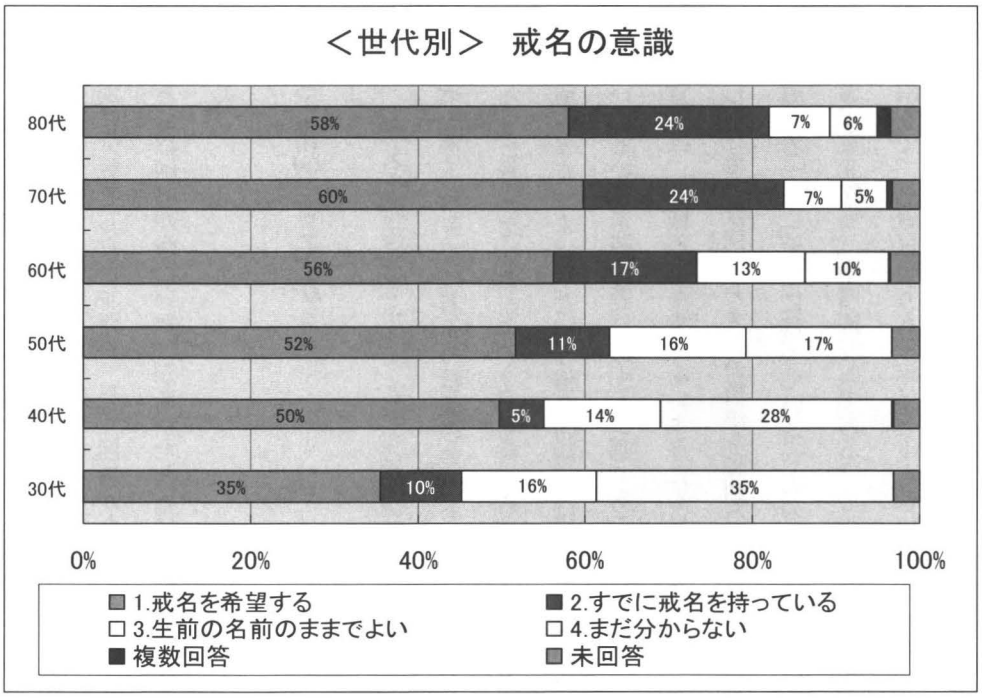
次に、「生前の名前のままでよい」とする人は、関東と九州が15%、東海が13%となっている。これに対して、北陸が8%、近畿が10%と低い。「戒名を希望する」と「すでに持っている」という戒名肯定者が少なかった東京・神奈川は、「生前の名前のままでよい」とする人が17%と多い。

ただし、「生前の名前のままでよい」人は、どの教化センターも約1割を越えていることが共通していることであり、また「まだ分からない」という戒名の必要性の実感が伝わっていない人も多いところで2割弱もいる。「生前の名前のままでよい」と未確定者は、どの教化センターにも2~3割がいる傾向にあるといえる。

「すでに持っている」人は、五重相伝・授戒会が定期的に行われて、布教教化が盛んと思われる地域であり、近畿は35%と高く、続いて北陸は18%である。しかし、五重相伝が盛んな地域である近畿であっても、「生前の名前のままでよい」という人が1割も存在していることは注目しなければならない。しかも、「生前の名前のままでよい」とする人と「まだ分からない」という未確定の人を足すと20%もいるのである。

②世代別の比較

次に、世代によってどのような戒名に対する意識の相違があるのかを見てみたい。ここでは20代の回答票数（13票）が少ないので、分析の対象外とする。グラフの通り、戒名に対する意識は世代差が



顕著になっている。「戒名を希望する」と「すでに戒名を持っている」人の合計は、80代が82％、70代が84％、60代が73％、50代が63％、40代が55％、30代が45％である。このように80代・70代は変わらないが、70代以下の世代は下がるにしたがい「戒名を希望する」人が1割ずつ減少している。

これに対して、「まだわからない」人は、80代が6％、70代が5％、60代が10％、50代が17％、40代が28％、30代が35％である。前者と同様に80代・70代は変わらないが、70代以下の世代は下がるにしたがい増加している。喪主として家族を見送ったのであるが、若い世代は自身についてはまだ実感がないのは当然と思われる。

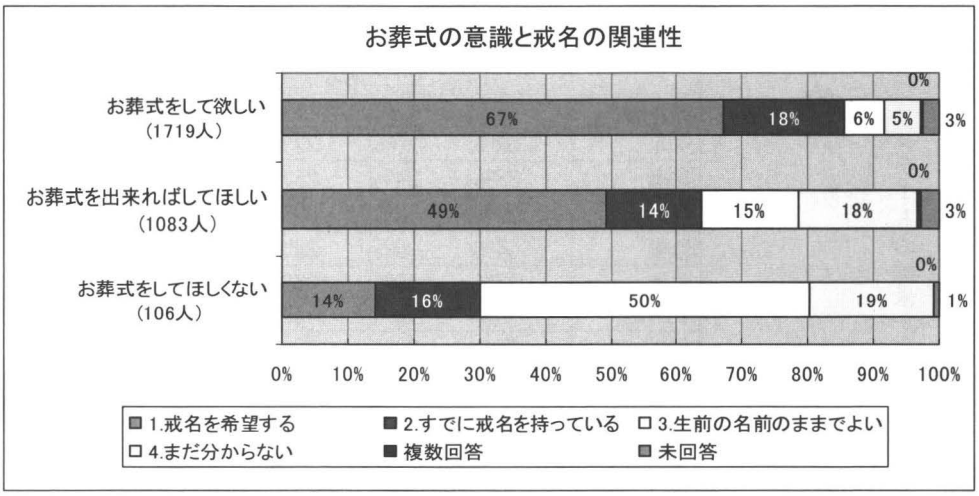
「生前の名前のまま」を希望する人は、それぞれ約1割であった。世代別で見ると、70・80代が7％であり、60代が13％、50代が16％、40代が14％、30代が16％である。60代以下の世代は70・80代の約2倍になっている。

浄土宗の檀信徒であるにもかかわらず、「仏教徒の証」である戒名ではなく「生前の名前のままでよい」とする人が、これほど多くいることこそ問題である。

お葬式の意識と戒名の関連性

自分自身の「お葬式」をどのようにしてほしいかという意識と戒名の希望との関連をみていく。

まず、「お葬式をしてほしい」という人で、「戒名を希望する」と



「すでに戒名を持っている」との合計は85％と多い。しかし、「お葬式をしてほしい」と思っている人のなかにも、「生前の名前のままでよい」とする人が6％もいる。

次に、「お葬式を出来ればしてほしい」という人で、「戒名を希望する」と「すでに持っている」との合計（85％）よりも22ポイントも少なくなっている。

また「出来ればしてほしい」のなかで、「生前の名前でよい」とする人は15％であり、積極的にお葬式を希望する人のなかで「生前の名前のままでよい」とする人（6％）よりも2倍強にも増えている。そして、「出来ればしてほしい」のなかで「まだ分からない」という人は18％であり、「お葬式をしてほしい」人（5％）よりも13ポイントも上がっている。お葬式に対して積極的ではない人は、戒名に対しても積極的ではなく、戒名とお葬式との関連性が強くみられる。

「お葬式をしてほしくない」のなかで、「生前の名前のままでよい」人は50％である。しかし、お葬式をしてほしくないと回答しているのにも関わらず、「戒名を希望する」と「すでに戒名を持っている」人も30％いるのである。

「お葬式はしてほしい」が戒名はいらない、また「お葬式はしてほしくない」けれども、戒名は付けてほしいと考えている人が少なからずいることを意味し、これらの回答者はお葬式と戒名の意義の関連性を理解していないことが伺われる。

生前の名前のままでよい理由

戒名を希望しない理由を考えたい。この設問は「生前の名前（俗名）のままでよい」と回答した388人のみのものであり、回答数が少ないが、教化センター別に比較してみたい。ただし、北海道は回答

	意味が見出せない	高額である	名前に思い入れがある	その他	複数回答	未回答	回答数
北海道	17%	17%	17%	32%	0%	17%	6
東北	52%	20%	24%	4%	0%	0%	25
関東	38%	24%	25%	11%	2%	0%	100
東海	39%	12%	39%	7%	0%	3%	59
北陸	64%	0%	29%	0%	0%	7%	14
近畿	42%	19%	28%	7%	2%	2%	99
中四国	35%	12%	44%	9%	0%	0%	34
九州	30%	20%	42%	6%	0%	2%	50
全教区	39%	18%	32%	8%	1%	2%	388
東京・神奈川	29%	29%	27%	13%	2%	0%	48

数が少ないので、分析の対象外とする。

「俗名でよい」という理由は、どの教化センターも「意味が見出せない」または「名前に思い入れがある」が第1・2位となっている。また「戒名を授けてもらうのが高額であるから」も高い数値となっていることが明らかになった。このことから、その理由は、「意味が見出せない」、「名前に思い入れがある」、「高額である」という三つに集約されることがわかった。

まとめ

以上、アンケートの結果から見える「戒名に対する意識」について触れてきた。これまでに指摘したように、「俗名のままでよい」という戒名否定者が、すべての教化センターの檀信徒のなかに約1割もいて、戒名は「仏教徒の証」であるという宗教的な意義が檀信徒に理解されていないことが問題といえるのではなかろうか。

また、戒名に対して疑問を持っている人は、若年層だけではなく、各世代にわたっていることが判明した。団塊世代前後の人たちでも10・20年後には、現在の70・80代の数値のように「戒名を希望する」人が多くなっていくであろうか。その世代になれば、「寺院に戻ってくる」というこれまでの「常識」が必ずしも通用するとは思えない。

「お葬式」を望む多くの人は戒名も希望するように、「お葬式」と戒名との関連性が強い。「お葬式」は授与戒名の儀礼の場であり、「お葬式」の式前後に「布教の場」としてお葬式や戒名の意味をわかりやすく説明することも必要である。

一方檀信徒のなかに、「戒名はいらない」、「お葬式をしてほしくない」という人もいる。このように、すでに一部では「葬祭のこころ」が崩壊しつつあるともいえる。浄土宗教師はこの「檀信徒アンケート」調査の数値を真摯に受け止めて、現況を鑑みる必要がある。

すべての檀信徒に対して浄土宗の根本の教えを教化した上で、「お葬式」の意義を伝えないと、「戒名もいらない」、「お葬式もしなくてもよい」という檀信徒が多く現れてくるのではないか。

（西城宗隆）

第9回「女性のお葬式の意識」

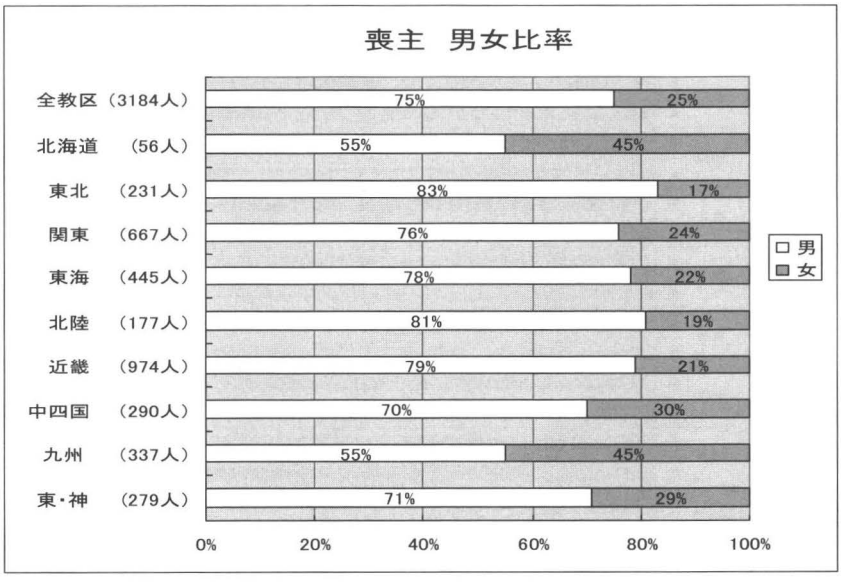
はじめに

従来、「お葬式の喪主」は、家の戸主や継承者である男性が務めることが多かった。しかし、近年では「戸主」や「継承者」という枠組みが外れ、女性が喪主を務めるケースが増えてきているように思われる。これは、社会の変化、家族形態の変化にともない、「お葬式」の持つ意味合いも変化していることによるのではないかと推測される。そこで今回は、女性の喪主の回答を中心に「女性のお葬式の意識」が男性と異なるのか、また教化センターによりその差はあるのかを見てみたい。

なお今回の比較は、全教区、各教化センター、およびこれまでと同様に参考数値として東京・神奈川のデータを比較してみる。また、関東のデータには東京・神奈川の数値も含まれていることをお断りしておく。

喪主の男女比率

まず、実際に喪主を務めた女性の割合はどのくらいを占めているのだろうか。全教区での喪主の男女比率は、男性75%、女性25%であった。つまり、お葬式4件に1件は女性が喪主を務めていることになる。これは、我々の予想を上回る高い数値であった。また、教化センター別に女性の喪主の割合を見てみると、北海道と九州が45%と過半数近い割合を占めており、続いて中四国30%、東京・神



奈川29％であった。北海道、九州においてこれほど女性の喪主の割合が高いことの理由は現段階では明らかでないが地域の特性を含め究明すべき課題の一つである。

これに対して、全教区平均よりも女性の喪主の割合が低いのは、東北および北陸でそれぞれ20％以下であった。これら地域では伝統的な価値観が残っているためか、女性が喪主を務める傾向が低いのかもしれない。

喪主と故人の関係、および喪主の年齢

次に、「どのような関係の方のお葬式の喪主をつとめましたか」という設問の回答を比較してみよう。

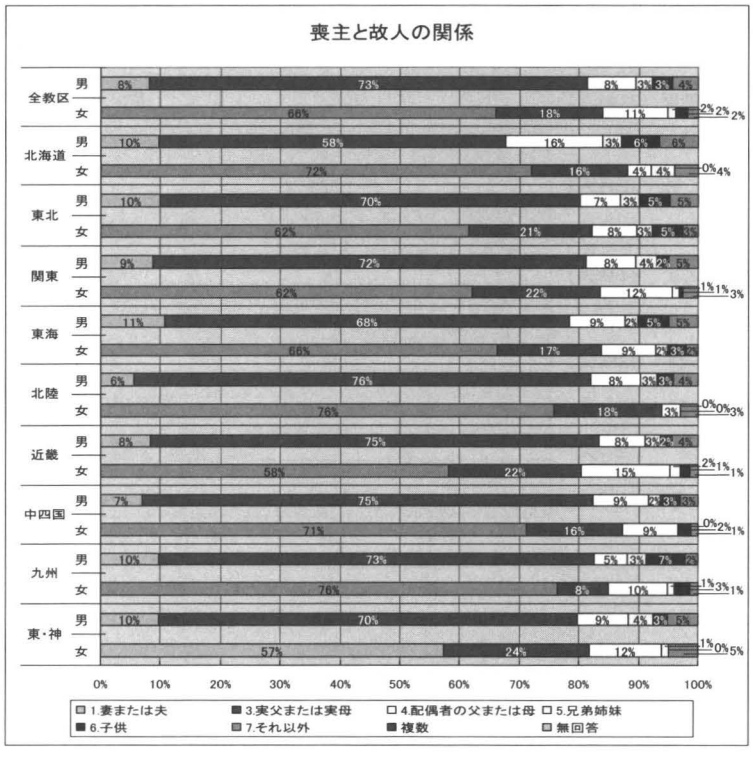
このグラフを見てみると、全教区数値では、次の通りである。

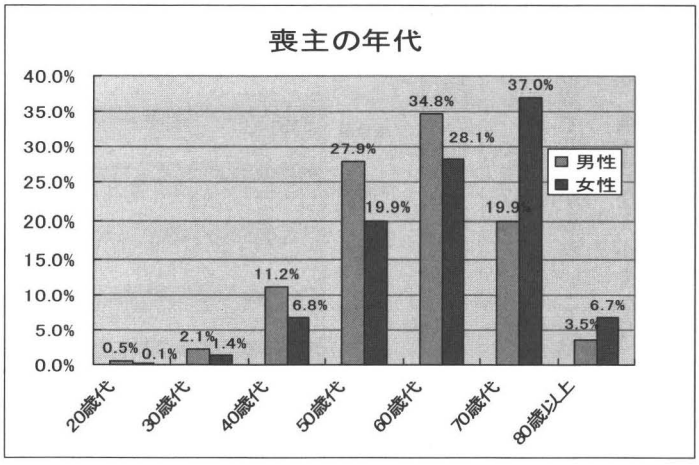
男性の場合　73％→実父母
　　8％→妻
　　8％→配偶者の父母

女性の場合　66％→夫
　　18％→実父母
　　11％→配偶者の父母

である。このように、男性の場合には「実父母の喪主」、女性の場合には「夫の喪主」を務めるケースが多いことがわかる。喪主を務めた年齢を男女（全教区数値）で比較してみると、喪主の年代のピークは男性が60歳代（35％）、女性が70歳代（37％）と、女性のピークの方がひとまわり（10歳代）上であることがわかる。このことは、女性の喪主の多くが「夫のお葬式の喪主」を務めていたことと関係するだろう。

厚生労働省が発表した平成19年男女の平均寿命によると、男性





79・19歳、女性85・99歳であり、ここからも夫が妻より先に亡なる可能性が高いことが伺える。このことは女性の喪主の方が男性に比べ高齢傾向にある理由のひとつと考えられる。

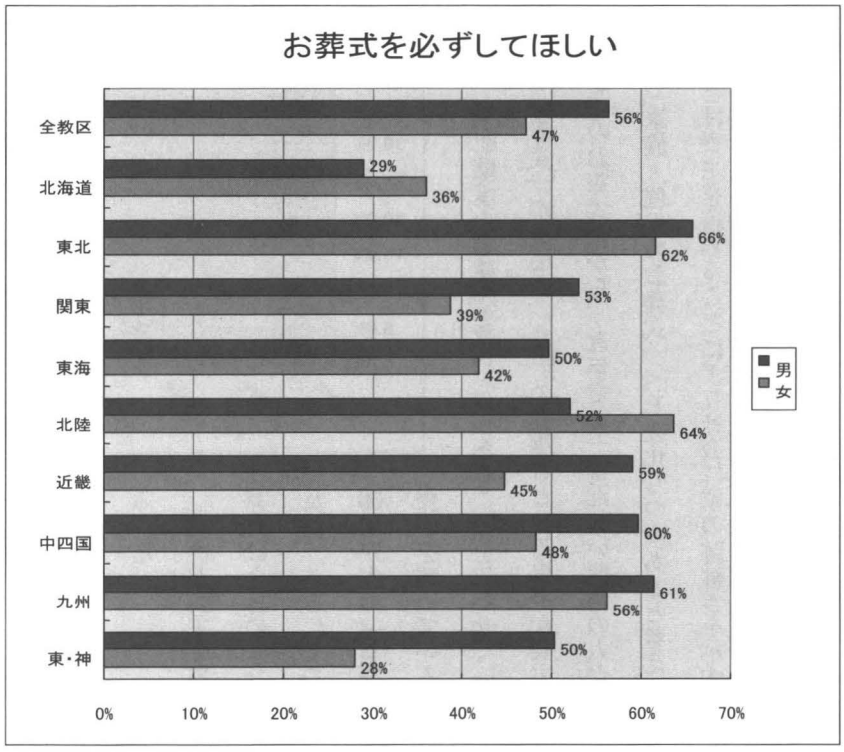
女性が喪主を務めたお葬式は全体の4分の1に及び、さらにそのうちの66%が夫の「お葬式」の喪主を務めているということは、祭祀継承の形態が変化しつつあることを伺わせている。つまり、「お葬式」が従来の「家」の継承者となる男子が喪主を務める「『家』のお葬式」から、近年では一番近しい関係の人が喪主を務める「家族・個人のお葬式」へと変化しつつあると考えられる。このことは喪主を務めることにより社会に家の跡継ぎを示すという「お葬式」の持っていた「社会的意味」が薄れ、その代わりに家族での「個人的な愛慕」が強く表れる場へと変わりつつあるともいえるだろう。

また、女性が実父母のお葬式の喪主を務める割合は、女性が喪主を務めたお葬式のなかで18%あり、男女あわせた合計の数値からみれば、全体のお葬式の約5%を占めていることになる。また、夫や実の父母のお葬式の喪主だけではなく、配偶者の父母の喪主を務めるケースは、女性喪主のなかで11%、全体のお葬式のなかで約3%あることがわかった。

このように、女性が夫や夫の父母のお葬式の喪主だけではなく、実父母の喪主を務めるケースも多いということは、少子化や、女性の子供しかいない等の理由で喪主を務めるべき男子がいないといった、「家族の縮小化」がその理由として伺える。

自分のお葬式をしてほしいですか?

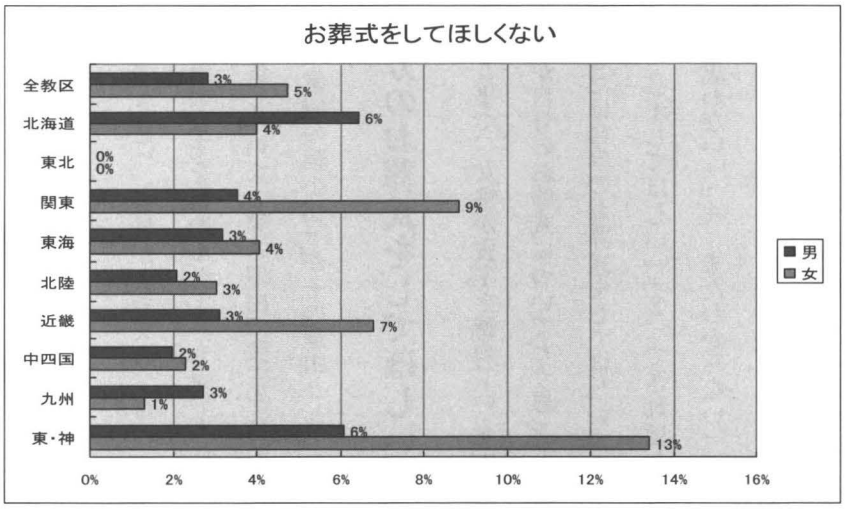
ここまで、女性が喪主を務めている実態を見てきたが、次に女性自身が自分のお葬式についてどう思っているのかを分析してみる。「あなたは自分のお葬式をしてほしいですか?」という問いに対し、「1. 必ずしてほしい」「2. できればしてほしい」「3. してほしいと思わない」「4. まだわからない」「5. その他」の選択肢の中から、「1. 必ずしてほしい」と回答したお葬式を積極的に希望する人の割合を、男女および地域ごとに比較してみた。



全教区の値を比較してみると、自分の「お葬式」に積極的なのは男性56％、女性47％と、男性に比べ女性の方が約1割お葬式を積極的に希望する人が少ないことが明らかになった。北海道は男女共にお葬式に積極的な人が少なく、また東京・神奈川の女性は「お葬式をしてほしい」人が28％と、男性50％に比べて22ポイントも低いことがわかる。

次に、回答数は全教区で3％（106票）と少なかったが、回答選択肢のなかの「お葬式をしてほしくない」を抽出してみよう。

全教区値では、その割合は男性3％、女性5％と割合は少ないものの、やや女性の方が高いことがわかった。東北、北陸、中四国、九州では、「お葬式をしてほしくない」人の割合は低く、そのなかでも特に、東北では男女共に0％であった。逆に、関東や近畿では、「お葬式をしてほしくない」と回答した割合が7～9％と高く、特に東京・神奈川では男性が6％であるのに対し、女性は13％と大きく上回る結果となった。全体的に、九州以外は女性の方が「お葬式をしてほしくない」と答える割合が、男性



よりも多いことがわかる。

なお、「お葬式」をしてほしくない理由としては、女性の意見は、遺族の手を煩わせたくないから（61％）、「お葬式」に意味を見出せないから（16％）、費用が高いから（5％）である。一方、男性の意見は、遺族の手を煩わせたくないから（58％）、「お葬式」に意味を見出せないから（23％）、費用が高いから（10％）であり、男女ともに費用の問題ではなく、「遺族の手を煩わせたくない」が最も大きな理由であった。

自分の希望するお葬式の形

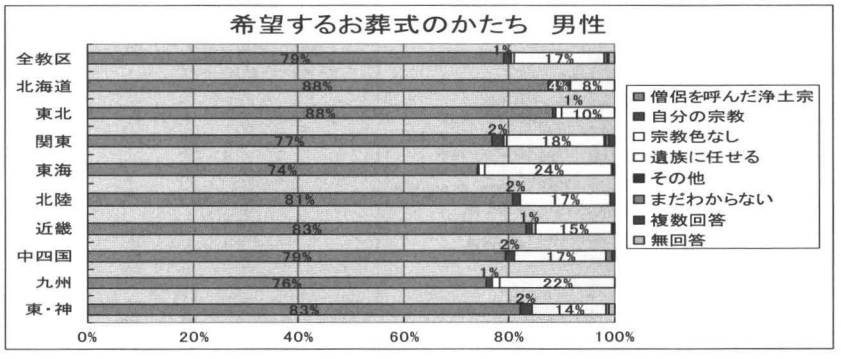
では、女性の回答者のなかで「お葬式を必ずしてほしい」、もしくは「できればしてほしい」と答えた人は、どのような形式のお葬式を希望しているのだろうか？

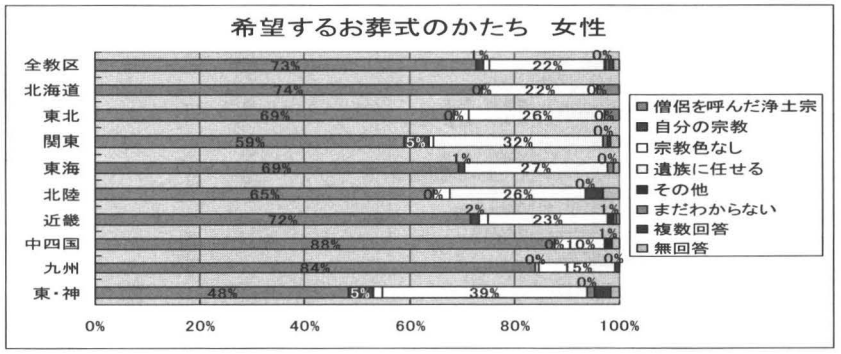
「僧侶を呼んだ浄土宗のお葬式」を希望するのは、全教区比較では男性79％、女性73％と全体的には男性の方が高いことがわかる。しかし、九州と中四国に関しては傾向が逆転して九州男性76％、女性84％、中四国男性79％、女性88％と女性の方が高くなっている。

また、関東では男性77％、女性59％と男女の差がきわめて大きく、そのなかでも東京・神奈川の女性は「僧侶を呼んだ浄土宗のお葬式」を希望する割合は48％と半数を割ってしまっていることは注目する必要がある。

「自分の宗教」「宗教色なし」と回答した人は、浄土宗の檀信徒対象のアンケートであるということから、極めて少数であった。しかし、ここでもやはり、男女の割合は女性の方がわずかに高かった。

一方、「遺族に任せる」の回答では、男女で顕著に差がみられた。





その割合は中四国と九州を除いて女性の方が高く、全教区で男性17％、女性22％であった。特に東京・神奈川では男性14％、女性39％とその差が25ポイントにも及んでいた。この「遺族にまかせる」という回答を選択した理由には、幾つかあると考えられる。

例えば、伝統的な価値観の強い地域では、同じ「遺族に任せる」の回答でも、自分の希望するお葬式の形式をあえて伝えなくても、「当然、自分が喪主を務めた時と同様の形式で、遺族がお葬式をしてくれるだろう。」という期待を含めていることが考えられる。

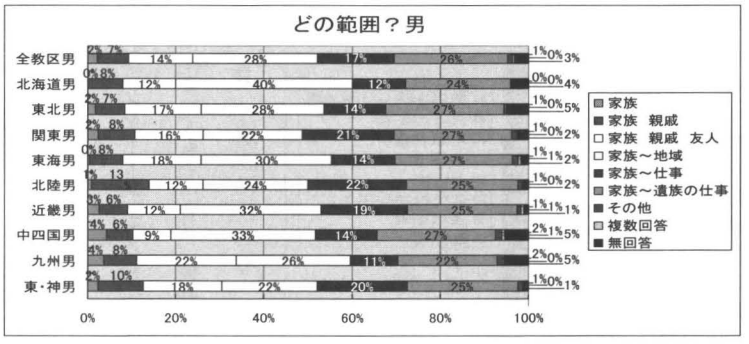
一方、同じ回答でも、自分の希望する形式を遺族に期待しない、または、押しつけようとしないというように家族の間に遠慮がある場合、あるいは家族間の遠慮や、お葬式の形式にこだわりを持たないという場合も考え得る。女性の場合には、先の回で述べた「お葬式をしてほしくない理由」の部分で明らかになったように、喪主を務めた時の苦労から、自分のお葬式では「遺族の手を煩わせたくない」と考えていることも考えられる。

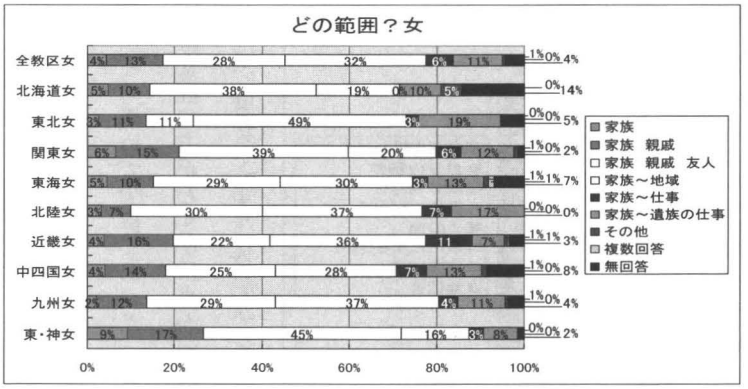
それぞれの理由を明らかにすることはできないが、地域特性や男女差など多様な影響があるかもしれない。

希望する会葬者の範囲

次に、女性が自分の「お葬式」にどの範囲の人に来てほしいと考えているのかを見てみよう。

回答選択肢は、「1．家族のみ」「2．家族・親戚」「3．家族・親戚・友人」「4．家族・親戚・友人・地域の人々」「5．家族・親戚・友人・地域の人々・仕事関係の人々」「6．家族・親戚・友人・地域の人々・仕事関係の人々・遺族の関係の人々」「7．その他」である。





このなかの、「1．家族のみ」から「3．家族・親戚・友人」までが、地域や仕事関係を含まない〈狭い関係〉といえよう。この〈狭い関係〉のみに来てほしいと回答した人の合計を比較すると、全教区で男性23％であるのに対し女性は45％となり、半数近い女性回答者は自分のお葬式に友人までの狭い交友関係の人のみに来てほしいと考えている。

教化センター別に比較してみると、友人までの狭い関係を希望する割合が高いのは、東京・神奈川71％、関東60％、北海道が53％であった。逆にこの割合が低いのは東北で25％と全教区数値よりも20ポイントも下回る。そして地域の人々を含む「4．家族・親戚・友人・地域の人々」を選択する人の割合は全教区では32％であるのに対し、東北は49％と17ポイントも上回る結果となった。これに対し、関東は20％、東京・神奈川では16％と都市部の女性の地域との関わりの意識が低くなっている傾向が数値から伺える。

男女で差がでるのは「仕事関係の人々」、「遺族の仕事関係の人々」を含む5・6の回答をする人の割合である。5・6の回答数の合計は男性で43％に対し、女性は17％と、希望する会葬者の範囲に大きな差があることがわかる。

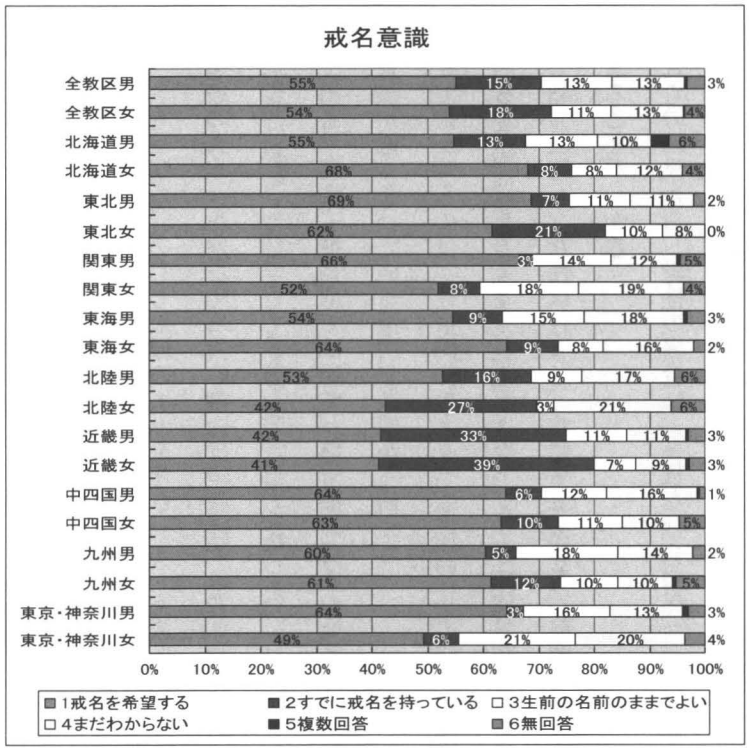
これらの結果から、男性の場合は「多様な社会関係」との別れを望むのに対して、女性の場合は「家族から友人まで」と狭いことがわかる。これは女性の喪主の年齢のピークが70歳代であることを考えると、彼女たちが生まれ育った時代背景には「女性は家庭を守ること」が理想とされていたこともあり、当然の結果であるともいえる。ここからお葬式の持つ意味が男女によって異なっているとも考えられる。

戒名について

第8回で、「戒名か俗名か?」と題し、檀信徒の持つ戒名意識を分析した。ここでは、男女および教化センターによって戒名に対する意識の相違があるのかを見てみよう。次頁のグラフをみると、「戒名をすでに持っている」という回答の割合は、高い順に近畿、北陸、東北の女性であり、他の教化センターと比較して高いことがわかる。

全教区の数値を見ると、「戒名を希望する」「すでに持っている」人の合計は、男女共に約70％である。ただし、「生前の名前のままでよい」とする人は、男性13％、女性11％で、女性の方が2ポイントではあるが少ない。このように戒名に対する意識には、大きな男女差が見られない。

しかし、このグラフからも明らかなように、東京・神奈川は他の教化センターと比較して、異なった特徴を持つことが伺える。東京・神奈川では「戒名を希望する」「持っている」という男性は67％で



あり、これに対し、女性は55％と戒名を希望する人が少ない。また「生前の名前のままでよい」という男性は16％、女性は21％である。

「生前の名前のままでよい」理由は、男性は1位「戒名の意味を見出せないから」（40％）、2位「生前の名前に思い入れがあるから」（27％）、3位「戒名を授けてもらうのが高額であるから」（20％）であった。

これに対して女性は、1位「戒名を授けてもらうのが高額であるから」（44％）、2位「生前の名前に思い入れがあるから」（28％）、3位「戒名の意味を見出せないから」（11％）であった。男女で1位と3位が入れ替わり、男性は「意義」を重視し、女性は「金銭面」を重視していることがわかった。東京・神奈川においては、女性の方が戒名に対して非積極的な考えを持っているといえる。

まとめ

従来、「お葬式」は男性が中心の儀式であった。しかし、今回のアンケート結果では、喪主の25％を女性が務め、その6割以上が夫のお葬式の喪主を務めていることが明らかになった。このことは、「お葬式」の持っていた「社会的意味」が薄れ、その代わりに家族を中心とした「個人的な愛慕と別れの意味」が強まってきたことを表す。つまり、「お葬式」が伝統的な「家」の儀式から、「家族・個人」の儀式へと移り変わっていると考えられるだろう。

今回の分析からは、自分のお葬式に対しては女性のほうがやや消極的であること、女性が自分の「お葬式」をしてほしいと望む場合、その約半数が家族から友人までの〈狭い関係〉の人に来てほしいと考えていることが明らかとなった。このような女性の意識は、それぞれの理由は異なると考えられるが、北海道、中四国、九州、東京、

神奈川で大きな差が見られ、女性と生活圏との関わりがそれぞれの地域によって大きく異なることが明らかになったと思われる。

また、東京・神奈川の女性は、他の教化センターと大きく異なる特徴を持つことが注目される。つまり、「お葬式」や戒名に対して否定的な意識を持つ人が他の教化センターよりかなり多い。断定はできないが、人口流動の多い都市のなかで地域とのしがらみが少ないことや、寺院を含めたお葬式の費用が全般的に高額だと受けとめられていることなどが、東京・神奈川の女性の持つ意識に影響を与えているのかもしれない。

女性の方がお寺へのお参りや、行事への参加、また家での仏壇の給仕をすることが男性にくらべ多いように思われる。それにも関わらず「お葬式」や戒名を希望する人の割合は男性よりも低い。また、女性の「お葬式」に対するさまざまな意識は、アンケートから見てきて明らかになったように、男性の喪主の持っている意識とは顕著に異なっている。

今後、少子化により男子継承者が減ったり、また、男子継承者がいるにもかかわらず、愛慕の念から自ら喪主を務める女性が増えるなど、女性の喪主の割合は増えていくことが想定される。男性とは異なった「女性のお葬式に対する意識」を念頭に入れたうえで、女性に対してお葬式の持つ意義をしっかりと伝える必要があるだろう。

（田中和敬）

第10回　お葬式の意味
―来世観と死者とのかかわり―

はじめに

「宗教観」をテーマとした読売新聞社の年間連続調査「日本人」（2008年5月30日付掲載）では、「あなたは何か宗教を信じていますか?」の問いに対して、71・9％の人が「信じていない」と答え、26・1％の人が「信じている」と答えている。このことは、先の第6回と第7回で報告した。その分析のなかで、7割を超える人たちが、特定の宗教を信じないとしながらも、雑誌やテレビではさまざまな人による「占い」や「スピリチュアル」などが掲載や放映されブームとなり、30代・40代を中心として、「祟り」や「生まれ変わり」といった死後の世界や、何らかの見えない力のようなものに関心を持っている人がいることも明らかにされている。

そこで、この回では近年喪主を務めた方自身の来世観と死者とのかかわりについて、「檀信徒アンケート」を世代別・男女別に見ていき、どのような差異が生じているかを考察することで、今後私たち浄土宗教師がどのような点に注意し、教化活動を行うべきなのかを考える一助とすることを目的としたい。

なお、20代に関しては、サンプル数が少なく、数値に偏りが見られるので今回は除外した。

浄土宗における来世観　―往生とその目的―

喪主を務めた方自身の来世観と死者とのかかわりについて考察をする上で、まず、浄土宗における往生とその目的について考えてみる。

7世紀前半に伝わった浄土教は源信（942―1017）による『往生要集』のなかで明確な浄土思想として確立されていった。しかしながら、源信らによって示された浄土は、確かに来世としての極楽浄土が説かれてはいるが、それは万人のためのものではなく、ごく一部の限られた人のみが往くことができる来世であった。

そのころは、源平の争乱に加え、飢饉や疫病が頻発しており、さらには1052年、いよいよ末法を迎えると人々は現世に完全に絶望しきっていた時代であった。このようなおり、浄土宗を開いた法然上人が、誰もがお念仏さえとなえれば、必ず西方極楽浄土へ往生することができるという教えを示されたことは、絶望しきっていた民衆に希望を与えるものであった。また、法然上人が「弥陀の化身」と称した善導大師の著した「発願文」のなかに、「彼の国に到り已って、六神通を得て、十方界に入って、苦の衆生を救摂せん」とある

ように、その来世観と往生およびその目的は、誰もが厭離穢土・欣求浄土して、西方極楽浄土に往生し、阿弥陀仏を見奉り、六神通を得た後に、廻り還って穢土の衆生を救おうというものである。

換言すると、往生の目的は菩薩道を積み、さとりを目指すことであり、その最終目的は「還相廻向」である。つまり、極楽浄土から娑婆世界に廻り還りて、衆生を教導することにあるのである。

お葬式の持つ意味 ―家族の場合と自分の場合―

ここでは、「家族のお葬式」の場合と「自分のお葬式」の場合の意識について、世代間の違いにも注目して分析してみよう。

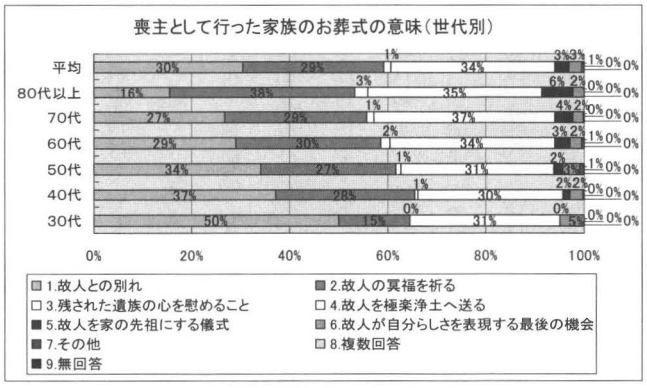
「ご家族のお葬式を行われ、お葬式の最も大きな意味は何だったと思いますか?」、また「自分のお葬式の意味はなんですか?」という問いを行ったところ、次のようになった。

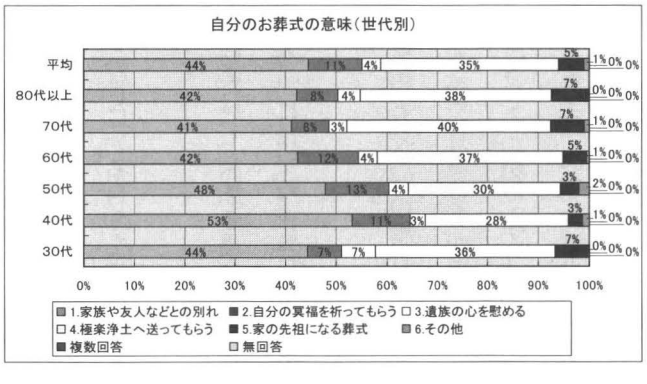
①喪主として行った「家族のお葬式」の意味

30代では「故人との別れ」とする人が半数の50%を占め、40代が37%、50代が34%、60代が29%、70代が27%、80代以上では16%と、世代が上がるごとに「故人との別れ」という回答が減少している。これとは逆に、「故人の冥福を祈る」意識が、30代では15%であるが、各世代でその値は徐々に増大し、80代以上では38%と大幅に増加している。これらのことから、世代が上がるにつれ故人との別れの意識が弱まり、これと逆に故人の冥福を祈る意識が強まるという傾向を見ることができる。

一方、「故人を極楽浄土へ送る」意識は、先に見た2つの回答と比べ世代間での大きな差はなく、30%台である。また、「遺族の心を慰める」「故人を家の先祖にする儀式」という回答は、各世代とも少数であった。

②「自分のお葬式」の意味





どの世代も「家族や友人などとの別れ」という回答が最も多く、次いで「極楽浄土へ送ってもらう儀式」となっており、両者を合わせると回答の8割を占めている。一方、「自分の冥福を祈ってもらう」という回答は1割程度であった。

世代別にみると、50代までは「別れの意識」が「極楽浄土へ送ってもらう意識」を上回っているが、60代以上になるとこの2つの意識は拮抗してくることが看取できる。

③「家族のお葬式」の場合と「自分のお葬式」の場合

「極楽浄土へ送る（送ってもらう）」という回答にはほとんど差が見られない。一方、「別れ」「冥福を祈る（祈ってもらう）」という2つの回答に大きな違いが見られる。

「別れ」という「お葬式」を人間関係から捉える回答を見ると、どの世代においても「自分の場合」のほうが「家族の場合」よりも大きな数値を示している。

一方「冥福を祈る（祈ってもらう）」という宗教性から捉える回答は、どの世代においても「家族の場合」と比べて「自分の場合」のほうが極端に少なくなっている。「極楽浄土へ送る（送ってもらう）」という回答には両者に差がないことから考えると、その減少した分は「別れ」という回答に流れていると思われる。この両者に共通しているのは、「自分が家族を送る立場」と「自分がこの世から別れを告げていく立場」という「この世にいる自分を中心とした意識の違い」と考えられる。

また、「遺族の心を慰める」という回答は、「家族の場合」にはほとんど見られなかったが、「自分の場合」には平均4％見られることは注目に値する。

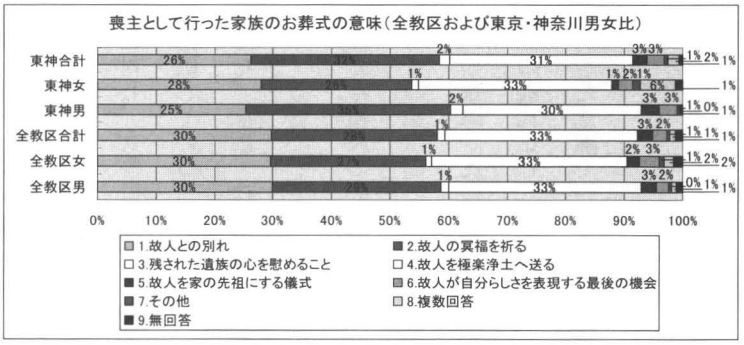
80代以上の「別れ」の意識では、「家族のお葬式」の場合が16％で、「自分のお葬式」の場合は42％と大きな差を見ることができる。この差は、70代、60代、50代、40代でも同じことがいえる。また「冥福を祈る」意識においても、「家族のお葬式」の場合は世代が下がるにつれ、徐々にその数値を減らしているが、自分の場合では、7から13％の間での推移が見られる。一方で「極楽に送る」とした人は、故人、自分ともに各世代の数値はほぼ相似しているが、どちらも40代が最も低い数値が出ている。

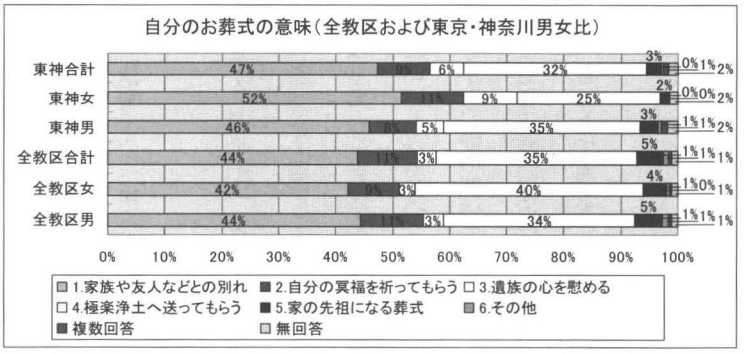
このことから、故人の時は「極楽浄土へ送る」また「冥福を祈る」ことを強く意識しているが、自分の時は自分とこの世の「別れ」を強く意識していることがわかる。

また、30代は総数として62人（全体の2％）と少数であるので、参考程度に見てみると、若くして家族の喪主を務めたことから考えても、その死に対する受け止め方が強い分だけ、「お葬式」の意味

に関して、送った時も「別れ」が50％と高く、自分が亡くなる時は「極楽浄土へ送ってもらう」が36％と、他の世代とは異なる値を見ることができる。

「お葬式」の持つ意味
―全教区と東京・神奈川の男女別―





ここでは、「お葬式」の持つ意味に関して、全教区と東京・神奈川の男女別の意識について分析してみよう。

なお、東京・神奈川を特筆した理由は、「お葬式」に対する意識に顕著な変化が起きていると想定され、今後の「お葬式」の意識の変化を見る上で重要な地域と思われるからである。ただし、全教区の数値には東京・神奈川の数値も含まれている。

①喪主として行った「家族のお葬式」の意味

全教区の男女別では、「別れ」30％、「極楽浄土へ送る」33％とその意識は、男女とも同値である。また、「冥福を祈る」意識は29％と男性の方が2ポイント上回っている。しかしながら、各項目とも男女の意識の相違を特筆するほどの差は見られない。

一方、東京・神奈川では、「別れ」と「極楽浄土へ送る」意識は女性が3ポイントずつ男性より高い。しかし、「冥福を祈る」では、男性が9ポイント女性を上回っている。

②自分のお葬式の意味

全教区の男性で「別れ」の意識が44％と女性の42％に比べやや強く、また「冥福を祈ってもらう」意識も男性が11％、女性が9％と、これも男性の方がやや強い。一方「極楽浄土へ送ってもらう」意識

は女性が40％であるのに対し、男性は34％となっている。男性は「別れ」の意識が「極楽浄土へ送ってもらう」意識より10ポイント高いのに対し、女性は「別れ」42％と「極楽浄土へ送ってもらう」40％と拮抗している。

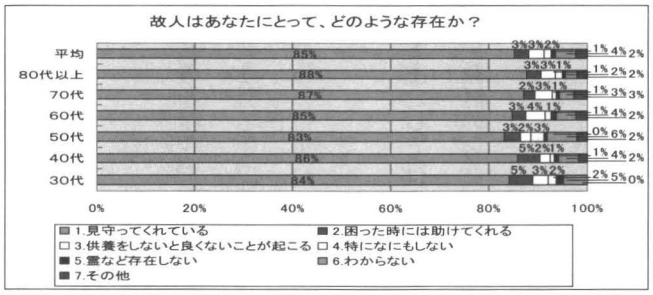
また、東京・神奈川では、女性が持つ「別れ」への意識は52％であり、「極楽浄土へ送ってもらう」25％を圧倒している。さらに、女性の「遺族の心を慰める」意識は9％と全教区女性3％と比較してもその値は高い。一方、男性においても全教区と比較すると「別れ」の意識が比較的高い。このことから、都市部ほど、お葬式を「別れ」の儀式として捉えている傾向にあり、特に女性は半数以上がそういった意識でいることは注目すべきことである。

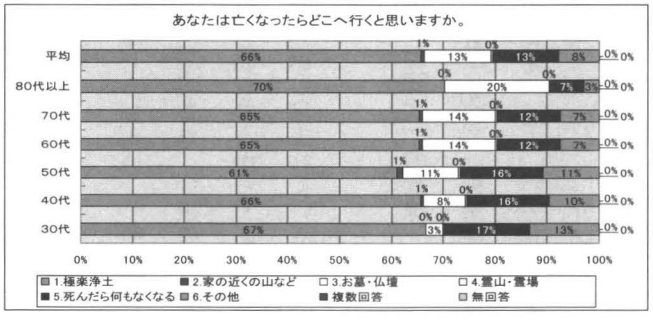
③家族の場合と自分の場合の意識の違い

喪主として行った「家族のお葬式」では、全教区、東京・神奈川どちらとも、「別れ」、「冥福を祈る」、「極楽浄土へ送る」の3つの意識が均衡している。これに対し、自分の場合は「冥福を祈ってもらう」や「極楽浄土へ送ってもらう」意識よりも「別れ」の意識が強い。特に東京・神奈川の女性においては「別れ」の意識が非常に強く、「自分のお葬式」を告別の意味で捉えている傾向にある。また、自分の場合は、「お葬式」に「遺族の心を慰める」意味を少なくとも家族の場合よりも多くもっており、遺族への配慮を見ることができる。

故人の存在と自分の死後の行方の意識
―世代別―

次に、故人の存在と自分の死後の行方の意識について、世代間の違いに注目して分析してみよう。「故人はあなたにとって、どのような存在ですか?」と「あなたは亡くなったらどこへ行くと思いま





すか?」の問いを行ったところ、次のようになった。

①故人はあなたにとってどのような存在か

世代間に関係なく大半の83%から88%の人たちが、「故人は見守っていてくれる」存在であると答えている。このことから、故人の存在は世代間に関係なく、一様に「見守ってくれる」存在であると考えている。これは、今回のアンケートの対象者が平成に入ってから喪主を務めた方であることからも、故人に伝統的な先祖観を見出すより、未だ故人との絆の意識が強いことの現われであろう思われる。

しかしながら、データを詳細に見ると、若い世代ほど、「困った時には助けてくれる存在である」と答えた人が多いことがわかる。ここで特筆すべきことは、50代で「故人は見守っていてくれる」存在であると答えている割合が最も少なく、また、「特になにもしない」や「わからない」と答えた割合が最も多いなど、他の世代と比較しても故人に対して何かを求めたり、逆に何かされたりという関係ではなく、故人とのかかわりに一種の希薄性が見られることである。ただし、調査時点では、50代後半の団塊世代と前半世代では、その意識に相違が見られることも考えられる。

②あなたは亡くなったらどこへ行くか

すべての世代で6割から7割の人が「極楽浄土へ行く」と答えている。このことは、近年喪主を務めた方の回答であることから、ある程度「お葬式」やその他の法要などでの教化が行き届いているのではないかと評価される。しかしながら、若い30代、40代の数値が60代や70代を上回り、50代が最も低い数値であることは注目に値する。更に、比較的若い世代においての「死」の捉え方と高齢になってからの捉え方とに大きな差がないことから、どの世代であっても、「家族のお葬式」を経験することによって「死」や「来世」というものを実感的に捉えていることが窺える。

また、50代を境にして、「お墓・仏壇」と答えた人がそのポイントを減らし、その代わりに「死んだら何もなくなる」と答えた人が4ポイント上昇していることからも、無神論的、世俗主義的な意識を持った人たちが、喪主を務めた人たちの中にも増加していることは留意すべき点である。

③故人の存在と自分の死後の行方の意識の違い

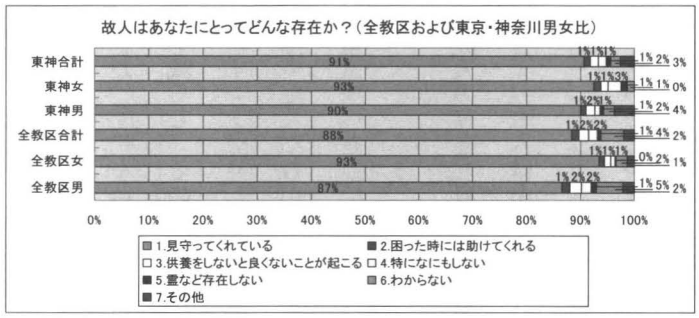
まず、「故人はあなたにとってどのような存在か」という問いでは、「見守っていてくれる」「困った時に助けてくれる」「供養しないと良くないことが起こる」を含め、9割の人が故人に対し、その存在を極楽浄土を含めたどこか別の場所に認めている。そして、何らか

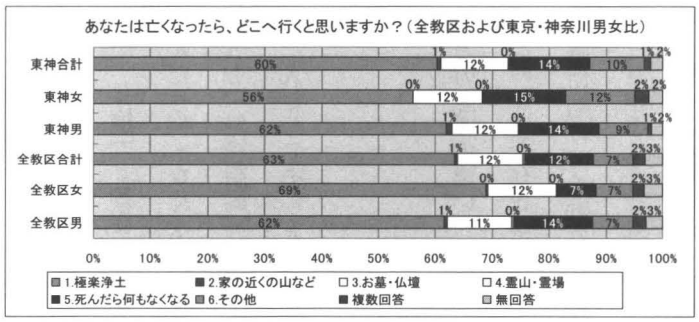
の影響を自分に及ぼす存在として認識している。一方、自分の死後の行方では、80代以上では9割の人が、それ以外では7割の人が主に極楽浄土やお墓や仏壇での存在を認めているが、世代が低下するほど、「死んだら何もなくなる」の回答が増加し、死後の存在性に否定的であることがわかった。

また「故人はどのような存在か」では、全教区で「霊など存在しない」の割合が1%とごく少数であるにも関わらず、自分の死後の行方では、「死んだら何もなくなる」と回答した人が13%もある。さらには「死んだら何もなくなる」と答えた世代が若くなるにつれ増加し、逆に「お墓・仏壇」と答えた人が減少している。この点については、故人の存在には肯定的でありながらも、自分の来世には否定的であるという矛盾が見られる。また、これらの人たちのなかには、故人そのものが実態的（固定的）な場所に存在すると考えるのではなく、普段の何気ない生活のなかに故人との繋がりを感じている人も存在するのではないかと思われる。

故人の存在と自分の死後の行方の意識
—全教区および東京・神奈川の男女別—

ここでは、「故人はあなたにとって、どのような存在ですか?」と「あなたは亡くなったらどこに行くと思いますか?」の質問の回答を全教区および東京・神奈川の男女別に分析していくと、次のようになった。





①故人はあなたにとってどのような存在か

全教区の男女、また東京・神奈川の男女を共通して、「見守ってくれる」存在であるがほぼ9割であるが、全教区の男性では、この値が87%と僅かに9割を切っている。

②あなたは亡くなったらどこへ行くか

全教区的には「極楽浄土」と回答した女性が69％と男性の62％と比較しても高い値が出ている。しかし、東京・神奈川の女性では、逆に56％と低くなっている。また、全教区では「死んだら何もなくなる」と答えた女性が7％であるの対し、男性は14％であり、さらに東京・神奈川では、男性14％、女性15％となっている。このことは、都市部や男性において自分の死後の存在に否定的である。ただし、全教区で見ると特に女性において、その存在を「極楽浄土」に見出していることがわかる。

③故人の存在と自分の死後の行方の意識の違い

先に述べた世代別と同様に、男女ともに、故人の存在に関しては、「見守ってくれる」存在であると考えている。「霊など存在しない」と回答している人は少数であるのに対し、自分の死後の存在に関しては、東京・神奈川で「死んだら何もなくなる」と回答した割合が14％と高く、世代別の表で見ると40代、50代の数値と相似している。また、この回答が全教区の女性で7％であることは世代別で見ると80代以上の数値と同様である。

このことからも、「死んだら何もなくなる」の回答率が高い東京・神奈川においては、考え方が比較的若い世代と相似している。逆に、全教区で見て、女性は伝統的な考え方であるといえる。

まとめ

以上、ここまで来世観と死者とのかかわりに関して、世代ごと、また全教区、東京・神奈川の男女別で考察してきた。

まず、死者とのかかわりに関しては、故人を「見守ってくれている」存在であるとする回答が世代を超えて85％前後であり、また全教区の男女でも同様に88％と高い数値である。この理由として、平成以降に喪主を務めた方々に対するアンケートであったことから、故人が親等的にも年数的にも身近な存在であると捉えていることがあげられる。

これとは逆に、「家族のお葬式」の場合でも自分の場合でも「家の先祖にする儀式」という回答は少なかった。このことは、「お葬式」においては、故人を「先祖」と捉える感覚は起こりにくく、あくまで「家族の一員」に対する儀式であり、死を境に「新しい家族の形」、つまり「現世」と「来世」で繋がっていることを実感するための儀式と捉え、故人との繋がりを強く意識していることが浮き彫りになった。

さらには、「見守ってくれる」存在であるとする回答が高いことは、故人を「先祖」という抽象的なものとして捉えるのではなく、身近

な「死者」として「見守ってくれる」存在として捉えていることを意味し、これが現代人の死者の捉え方の特徴なのではないかと考える。また「千の風になって」という歌が受け入れられたことは、このような現代人の死者観念によるものではなかろうかと推察されるのである。

次に、来世観については、各世代、男女を通して一様に3割から4割の人が自分の死後は極楽浄土に往くと考えていた。しかしながら、来世は浄土に往生したいと考える割合が40代で28%、東京・神奈川の女性で25%と比較的低い意識層が存在することが明確となった。

また、比較的若い世代と東京・神奈川の男女で「死んだら何もなくなる」と回答した割合が高く、若年層と都市部で来世に否定的な傾向がみられた。

これらのことから、多くの遺族は故人を非常に身近な存在と捉え、「お葬式」を「新しい家族の形」として実感するための儀式であると認識していることがわかる。一方、40代、50代、また都市部の特に女性においては、自分の来世の存在や極楽浄土に往くことに否定的であったり、懐疑的であるといわざるをえない。「家族を見守る」ということを多くの人々が求めているのにもかかわらず、自分の来世には否定的であるこの矛盾こそ、今、私たち浄土宗教師が抱える問題なのではないだろうか。「発願文」にあるように、衆生利益の本懐を遂げるために往生するのだということをしっかりと伝えることが大切なのである。また、多くの人が求めている「見守る」という意識を超えて、往生を勧める「往相廻向」ばかりでなく、極楽浄土から廻り還りて、有縁無縁の衆生を教導する、いわゆる「還相廻向」までをも説くことが必要なのである。

（和田典善）

第11回　団塊の世代が変える葬祭のこころ

はじめに

これまで、本編では、主に「檀信徒アンケート」の分析から、「激変する檀信徒の宗教観」を多方面から見てきた。今回は、今後「お葬式」の中心となる「団塊の世代」の宗教観について考えてみたい。この世代は、10年ほど前から親を送り、今後自身が送られていく世代である。

高齢化社会が急激に進行するなかで、退職が始まった団塊の世代の定年後の新たなライフスタイルには、あらゆる業界が関心を寄せている。たとえば、ＪＩＣＡ（ジャイカ・国際協力事業団）が新たに退職を迎える彼らをターゲットに「シニア海外ボランティア」の募集を始めている。新聞各紙は、団塊の世代の退職後の特集を組んでいる。

宗教界でいち早くこの問題に関心を寄せているのは、これまでも常に時代に敏感に対応してきた浄土真宗本願寺派である。御門主自身が団塊の世代直前生まれということもあって、御自身の60回目の誕生を祝う「御誕辰祝賀会」で、「従来のタイプの門信徒も増えていただきたいが、もう少し広い意味で宗門に関心を持つ、何かの時に交流できる新たなタイプの門信徒にぜひ加わってもらいたい」（『中外日報』２００５年10月15日）と述べて、定年退職を迎える団塊の世代への新たな関心と対応を宗門に促している。

団塊の世代とはどのような世代か？

「団塊の世代」は、英語では「ベビー・ブーマー」と呼ばれる。堺屋太一がこれを「団魂の世代」と翻訳した本は、１９７６年にベストセラーとなった（１９８８年に文春文庫）。団魂の世代とは昭和22年から24年の3年間に生まれた人たちのことをいう。少し古くなるが、総務省の「平成14年10月1日現在推計人口」によれば、同年に生存している3年間の団塊の世代の総数は、約686万人である。また、昭和22年から26年の5年間の総計は１０３７万人にのぼる。ちなみに平成14年の0～4才の総人口は、588万人だから、およそ2倍である。当時の出生数は毎年270万人くらいで、その前後の年は、6割程度に落ち込んでいたことを考えると、団塊の世代はいかに大きな塊だったかがわかり、見事な翻訳である。

この団塊の世代の全体的な世代的特徴と社会的な背景をうまく語っている資料がある。第一生命経済研究所発行の『２００４－05ライフデザイン白書　「特集　団塊世代」』（２００３）と、東京女

性財団報告書『男性の自立とその条件を巡る研究―団塊の世代を中心に』（1998）である。

それによると、

①戦後民主主義の申し子として男女同権の教育を受け、また、戦争や敗戦体験が風化していく中でその成長期を過ごしていること。

②約800万人という人口移動は、たとえば「15の春を泣かせるな」というスローガンが当時流行したように、高校や大学の増設を促すなど、多かれ少なかれ日本社会の既存のしくみをゆるがせ、変えていく力となった世代であること。

③管理社会や既成の権威を根底的に否定した学園紛争とその挫折、さらには70年代のウーマンリブを体験した世代であり、戦後の民主主義教育、ベトナム戦争、マルクス主義の経験と相まって、「観念」の上では男女平等の理念を理解している「つもり」の自称「リベラリスト」が相対的に多いこと。

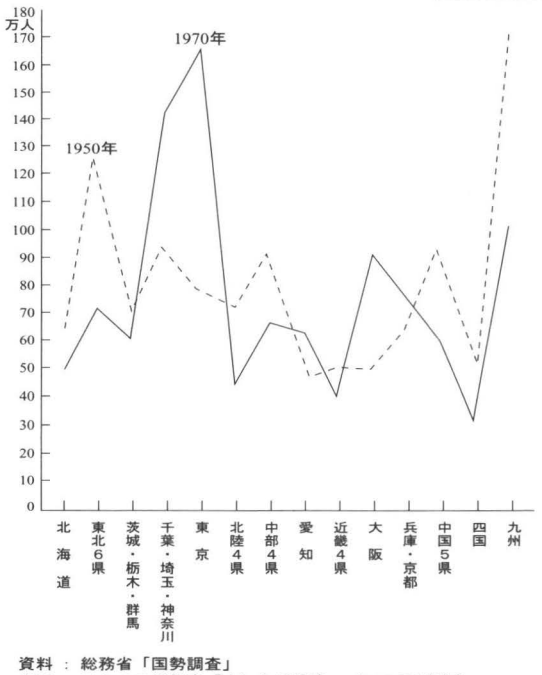
④恋愛こそ男女の結びつきの究極の理想だと考えて、その理想どおり結婚して「男は仕事、女は家庭」という性役割分業型の近代家族を形成した世代でもあること。

⑤戦後の復興から高度経済成長期をつくりあげた戦前・戦中・焼け跡世代のあとを受け継ぎ、高度成長末期から安定成長の達成を支えた中心的世代（会社人間）であること。この世代が、いま、現実に企業や職場で中枢的な地位を占めているが、同時に経済成長の限界と、それにともなう日本企業の基本的なしくみの大きな転換期をまともに経験している。その意味では、「受難」の世代であること。等が特徴としてあげられる。

団塊の世代はどこに生まれたか？

このように、団塊の世代は、保守性と革新性を併せ持つ世代である。三浦展（あつし）『団塊世代を総括する』（牧野出版、2005年）によれば、この世代は、アイビーファッションやジーンズをはき、ビートルズを愛し、大学紛争やウーマンリブ運動などの改革的側面を持

1950年と1970年地方別団魂世代人口の変化　グラフ1



資料：総務省「国勢調査」
出所：アクロス編集室「大いなる迷走」（PARCO出版）

つ等、非常に先進的、都会的新しさを持っている。その一方、家族関係や行動様式に保守的な面も併せ持っている。この相反する二面性こそが多様なイメージを感じさせられる理由だろう。

さらに、革新的なイメージを与える「団塊の世代は学歴が高い」というイメージは、学歴の高い人数がそれまでの世代に比べて相対的に多いからではなく、絶対的な人数の多さと思われる。文科省の資料によれば、昭和39年に高校進学率は7割を超えた。地方都市では当時中学卒業生の3分の1は就職だった。さらに大学に行ったのは高校へ進学したうちの3分の1くらいだった。団塊の世代で伸びたのは、大学ではなくて高校進学率だったのである。

実際には団塊の世代の多くが、「金の卵」と呼ばれる集団就職などで地方から大都市に出て行った。つまり、地方で生まれているのである。グラフ1は、三浦氏の前掲書のなかで、総務省国勢調査数値をもとに図表化したものである。これによると、昭和25(1950)年当時、0歳から4歳までの合計人口が多いところは、破線が急激に高くなっている東北6県と九州だということがわかる。ところが、彼らが成人を迎えた20年後、大きく変化している。千葉・埼玉・神奈川、東京、愛知、大阪は人口が上昇し、それ以外のほぼすべての道県で減少している。特に減少差が激しいのは東北と九州である。例えば、東北は約125万人から70万人に半減し、九州は170万人から100万人に激減している。逆に、東京は80万人から170万人に、千葉・埼玉・神奈川は90万人から140万人へと激増している。

このように、団塊の世代は、高度経済成長の労働力として、東京を中心とした首都圏や大阪へ集中移動し、その後、生地に戻ることなく、大都市近郊に定住化していったのである。

団塊の世代の生活観

東京ガス・都市生活研究所のアンケート調査の報告書『生活レシピ』によると、団塊の世代の約3分の1が4人暮らしで、そのうちの75%は夫婦と子供2人である。親と同居しているのは約4分の1しかいない。多くは、故郷や親元を離れ、最終的に大都市近郊に終の棲家を定めた人たちである。彼らは、多くが賃金労働者であり、農耕文化的生活感が薄いために、先祖や血縁意識が薄い。家族に死者が出ないと「先祖はいません」という人たちである。第3回で報告したように、戦後直後に生まれた団塊の世代を境にして、以下のどの世代でも、近隣、親戚、職場の人間関係の志向は、「全面的つきあい」から「部分的つきあい」に、さらには「形式的つきあい」が増加してきている。また、この変化はどの都市の規模でも同じ傾向が見られるようになってきている。特に、団塊の世代は男女ともに、前述の『ライフデザイン白書』によれば、近隣との疎遠化が急

速に進んでいる。それまでの世代と同様、町内会・自治会など地域の互助的活動の比率は3割弱と変わらないものの、ボランティア活動など社会的活動への参加比率は1割以下と低く、個人的な趣味への参加は3割を超えて急増している。つまり、この世代は、地域社会よりも、趣味などを通じた友人等の個人的な関係を重視しているのである。こうしてみると、団塊の世代の近年の特徴として、地域との結びつきが弱い脱伝統派、孤立派が増加していることがわかる。

次に、家族意識についてみてみよう。三浦氏は前掲書で、この世代は恋愛結婚と友達夫婦の世代だという。確かに、恋愛結婚と見合い結婚の比率は団塊の世代の結婚時期に逆転し、以後その差は開くばかりである。平成7年には、見合い結婚は1割を切った（国立社会保障・人口問題研究所）。親や「家」制度に縛られない自由で個人主義的な理想の結婚を求め、人数的に偏りがあるため、同世代を相手に選んでいるのも特徴的である。また女性は、職場を捨て結婚を選んだのが、団塊の世代の恋愛・友達婚の姿である。

しかし、『ライフデザイン白書』によれば、団塊の世代の女性の意識は、時代の変化につれて変わってきている。男性の性役割意識はそれまでの世代階層よりも高く保守的であるのに対して、女性の方は性役割分業意識は低く、それ以降の年齢階層に近く低くなっている。つまり、若い頃は恋愛結婚による家庭生活に夢を抱いたものの、現在では家事労働型の妻としてのあり方に対する反発的な傾向が出てきている。

団塊の世代のお葬式に対する意識

以上のように分析してきた団塊の世代であるが、「お葬式」に関してはどのような意識を持っているのだろうか。ここでは、最近行われている「お葬式」を通して団塊の世代の宗教観について考えてみたい。

①「自分のお葬式」の縮小傾向としての「家族葬・身内葬」

「お葬式」の形式の変化も激しい。「大都市近郊」に定住した団塊の世代は、地縁や広い意味での血縁に含まれる親族縁よりも友人関係を重視している。会社・近隣・親戚等のあらゆる関係では、緊密なつき合いよりも部分的、さらには形式的なつき合いを望む傾向が一層加速化してきていることは既に述べた。最近の「お葬式」の縮小化はその表れである。

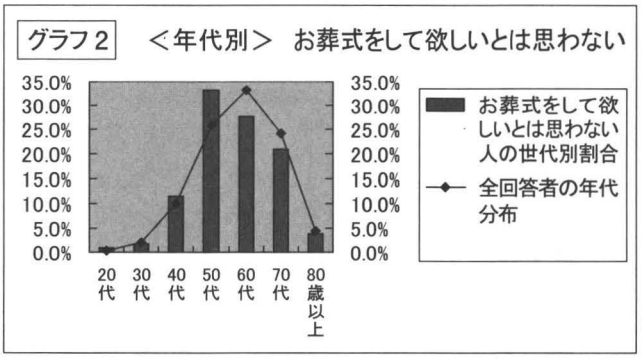
さらに重要なのは、送るべき家族ばかりか、団塊の世代は「自分のお葬式」についても同じように考えているようなのである。

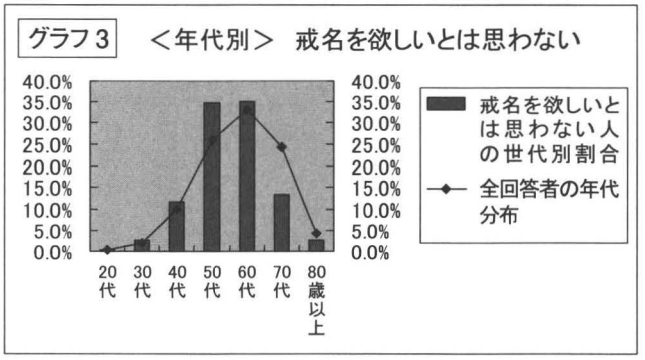
東京大田区に本部を置く冠婚葬祭互助会「くらしの友」が首都圏在住の団塊の世代の男性400人と女性383人を対象にして行ったインターネットアンケートがある（女性は2005年3月、男性は9月）。

「自分のお葬式をどうしたいか」という質問に対して、女性は「家族葬」34・5％、「身内葬」51・4％、「家族、親類、友人、近隣、会社関係が参列する従来型」14・1％だった。一方男性は、「家族葬」25・6％、「身内葬」40・4％、「従来型」30・9％と回答している。女性の方が、会社などの社会的に義理と感じる関係に縛られることが少ない。また、前述の「女性は近隣とのつき合いが薄い」（『ライフデザイン白書』）という報告や、趣味などで形成された友人や自身の血縁親族とのつながり意識が強いことから、男性よりも「家族葬」と「身内葬」の回答が高い数値なのは理解できる。しかし、社会的関係が強い男性でも、「従来型」が3割しかいないことは、都市部における人間関係が、近隣や会社関係から家族友人志向へ劇的に縮小・個人化していることを証明している。近い将来、団塊の世代の「お葬式」では「従来型」から「身内葬」へ、さらに「家族葬」への比率はさらに高まることが予想される。

②「自分のお葬式」を希望しない世代

浄土宗総合研究所の「檀信徒アンケート」から、「自分のお葬式を望まない」回答を世代別に見てみよう。次のグラフ2「〈年代別〉お葬式をしてほしいとは思わない人」をみると、折れ線グラフが全回答者の世代分布を示しているのに対して、棒グラフは「お葬式をしてほしいとは思わない人の世代別割合である。回答者総数から見れば、全部で105人であることから、3％でしかないために信頼性はあまり高いとはいえない。





しかし、これを見ると、50歳代だけが、折れ線グラフの平均よりも飛びぬけていることがわかる。ちなみにこのアンケート実施時に団塊の世代は56～58歳であった。ここからも団塊の世代だけにみられる特徴がうかがえる。

次に「戒名を希望しない」という回答を世代別に見てみよう。右のグラフ3でも、グラフ2と全く共通している傾向が伺える。

総数では387人で、全回答者の12％である。第8回「戒名か俗名か」で見たように、50歳代は16％と最も高い。このグラフからも、団塊の世代が他の世代に比べて、平均回答から突出して高い回答を示していることがわかる。

このように、「お葬式」のような伝統的な価値観に対して、少数とはいえ、否定的な考え方を持つ人が他の世代に比べ多いということが団塊の世代の特徴であるといえよう。

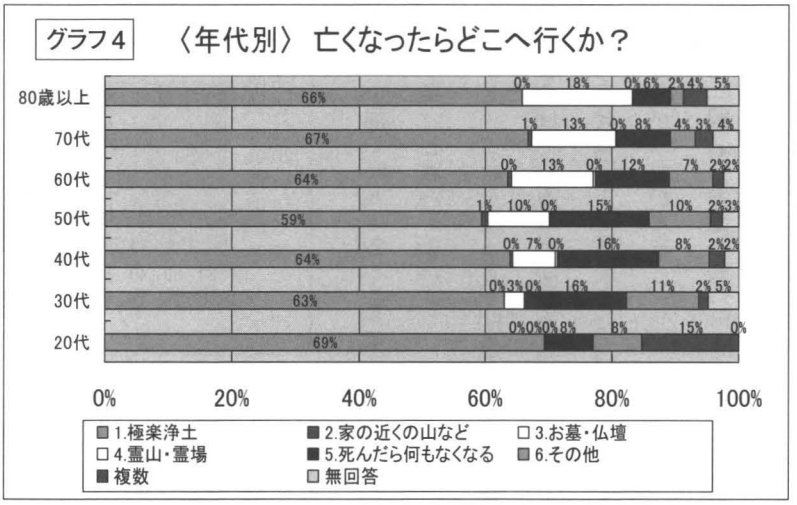
③団塊の世代の来世観

団塊の世代は死後の世界観をどのように見ているのだろうか。

下グラフ4からは、やはり団塊の世代に特徴的な否定的な価値観が伺える。「極楽浄土」という回答は、どの世代よりも低い。若い世代が60歳代以上と同様の数値を示しているのは、家族の喪主を務めていることから理解できる。だが50歳代がもっとも低い数値を示していることは、団塊の世代の特徴を表しているのではないだろうか。

「死んだら何もなくなる」の回答が高いのも、この年齢から下の戦後生まれの世代的特徴を示しているのではないだろうか。

以上の数値からだけでは即断はできないが、団塊の世代は現世中心で、死に対して永遠性を伴った宗教的意味を感じていない人たちが他の世代よりも多いという世代的傾向があるように思える。さらに、そうした傾向は戦前生まれの世代より確実に増えている。生まれ育った地域社会から切り離されて伝統的な生命観に触れる機会が減った結果や、戦後の教育や社会的な影響か、この世代の人達は人間関係を会社や地域社会から切り離し、家族との繋がりまでに縮小してきているようである。



④墓の私化・個人化傾向

これは言うまでもなく、団塊の世代の個人主義的傾向が一番はっきりと現れてきているところだと思われる。彼らの結婚は「友達婚」と呼ばれている。故郷の親元から離れ、子供は一人か二人の核家族で、その行く末の墓は単なる遺骨の埋蔵地と思う人達が増えている。なぜなら、第2回「新しいお葬式の〈かたち〉」で述べたように、

そこには「先祖」はいない。農耕文化から切り離された団塊の世代の労働の日々には、先祖に守護されているという実感も必要も祈りもないからである。そうした人達が求める墓は、故人がこの世に存在した意味を表す個人墓になるのは必然なのである。「次の世代とともにいっしょに入る墓」は想定されていない人たちが出始めている。彼らの個人化と私化傾向は、散骨や樹木葬など遺骨の処理形態に現れてきている。

団塊の世代の生命観と寺院の危機

戦後の日本社会の構造的な変化が、団塊の世代にそれまでと異なった意識と行動を、特に宗教意識を作り出してきていることは明らかである。これまで述べてきたさまざまな状況からわかるように、日本の宗教がこれまで前提としてきた農耕型共同体から生み出してきた地縁血縁の紐帯を重視する生命観があった。しかし、団塊の世代には、通用しない人たちが生まれ始めている。現代には、柳田国男が『先祖の話』のなかで述べているような、〈先祖は自らが残した農地や家産を伝える子孫を守り慈しむ守護者で、子孫はそれに対して感謝と供養を行う〉という農耕を中心とした宗教的な世界観には、もはや団塊以降の誰もを十分に納得させられる力が社会全体の中で消滅して来ているからである。それはまた、人は何のために生き、死ぬのか、という生と死の目的が、明確に誰もが共有でき、疑問も悩みもなかった時代の終焉でもある。それぞれが、受け継ぐべき家業も「家」もなく、個として生まれ、個（孤）として生き死んでいくしかない現代では、誰にも共通する死の目的を見出すのは難しい。特に、近代合理主義の教育や文化環境のなかで成長し、肉体的死をもって人間存在の終結とする価値観を埋め込まれた団塊の世代以降の世代にとってはさらに難しい。

寺院住職たちが、当たり前のように行ってきたこれまで通りの対応では、とても手強い存在となるだろう。彼らには自己の存在の意味を実感させてきた伝統社会の「ご先祖さまやホトケさま」がもはや存在していないのである。彼らはいまや、生と死の意味を見失っている世代なのではないだろうか。第10回で述べたように、農耕文化を根底にした先祖を中心とした生死観から、「家族を見守る」新たな死後の生、すなわち生前から保ち続け、肉体的死の後も目指せる宗教的目的を見出して意味づける個別の生死観という目的が必要とされているのである。

これまで、寺院は、人は死後どこに往くのか、どのようなところか、そこは実在するのかといった檀信徒からの問いとそれに答えることに捉われ過ぎていたのではないのだろうか。近代合理主義的立脚点から宗教的疑問の答えに汲々とするのではなく、檀信徒一人一

人に、生と死の目的を肯定的に積極的に問いかけ、肉体的な死の悲しみを乗り越え、残された家族と絆を持ち続けるための往生成仏の意義を見出す手助けと導きをすることが団塊の世代以降の人たちに、特に必要なことだと思われる。

（武田道生）

第12回　新たな葬祭のこころへの取り組み

連載から見えてきたもの

本連載では、これまで『宗報』平成20年4月号から1年間にわたって、浄土宗総合研究所が実施したアンケートを中心に、各地で近年、さらに限定すれば平成以降急激に変化してきた「お葬式の実態」と「お葬式から見える宗教観」の変容の姿を分析してきた。はじめに、これまでの内容を振り返り、見えてきたものについて考えていくことにしたい。

第1回は、総論として、連載趣旨と以後の連載概要を紹介した。

第2回は、「新しいお葬式の〈かたち〉―『個性化』『個別化』するお葬式」というテーマで、現在起きている、またはこれから起こるであろう「お葬式」に関するさまざまな変化を、増加する葬祭場利用・家族葬や直葬、過剰なまでのパッケージ商品化する葬儀社の展開、増える遺族任せから自分で決めるお葬式、死者や遺族が望む遺骨処理の多様化という視点から捉えて、アンケート結果とさまざまな資料から紹介した。そして、こうした変化が起こってくる社会的背景について、産業構造の変化とそれに伴う家族のあり方と先祖観の喪失を指摘した。

第3回は、前回を受けて、「希薄化する人間関係―なくなる世代差・地域差とお葬式の変化」というテーマで、「お葬式」の規模や形式に大きな影響を与える職場・地域・親族間の交流、人間関係の濃淡・強弱について、生まれた世代と居住地域の都市の規模によってどのような差異があるかを、ＮＨＫが行ったアンケートをもとに分析した。この結果、ここ30年間で、ほぼ生まれた世代や都市の規模に関係なく、人間関係への希薄化が進行し、部分的付き合いと形式的付き合いが増加したことが、「お葬式」の縮小化や大都市ばかりか地方都市への葬儀社の進出がこうした背景があることが明らかとなった。

第4回「通夜・葬儀の『場所』の変化がもたらす影響」では、前回で明らかになった人間関係の縮小によって弱体化した地方に、民間葬祭場の急激な展開となって現れていることを紹介した。実際どの地方でも、比率の差こそあっても、葬祭業者の「お葬式」に果たす役割は増加してきていることは間違いない。また、それによって、通夜や葬儀の執行場所が葬祭場へと移行することが「お葬式」の意味や内容に変化をもたらしていることが伺える。

しかしながら、「うちの地方は違う」と感じた方も多いと思われる。第5回「こんなにも違う!?お葬式の実態」は、その違いを、アンケー

ト結果の「お葬式をどのように行ったか」という点から、場所・準備運営に関わった人・参列者の三点に絞って分析した。やはり、ここから見えてきたことは、「お葬式」の持つ地域文化による差異である。ただし、今回のアンケートでは明確な数値では言えないものの、高度経済成長期以降の人口の移動と葬祭業者の進出による葬祭文化の画一化などの影響で、速度の差はあっても、多くの地方で変化が起きていると推測される。それは親戚や地域や寺院ではなく、葬儀社が関わった比率が最も高いことは、すべての教区に共通していることからも窺い知ることができる。

第6回から第10回までが、アンケート回答者の「お葬式から伺える宗教観・意識」で、本シリーズの核心部分であると言えるだろう。

第6回「私のお葬式はこうしてほしい」は、第2回で若干触れたお葬式の「個性化・個人化」について、「お葬式をしてほしいか」「どのような形式を望むか」「会葬者の範囲」「自分のお葬式の意味」について、浄土宗檀信徒の意識を分析した。ここで注目する必要があるのは「お葬式をしてほしくない」という回答で、東京・神奈川の浄土宗檀信徒の回答比率が、読売新聞が行った無宗教の人や喪主未経験者を含む一般回答者の結果と同じ8%だったということにある。ちなみに、全国では3%となっている。また、お葬式をしてほしいかどうか、まだ未定であるという回答は、全国は7%で、一番低い東北でも5%存在する。この両者を併せた1割が、自分のお葬式に対して肯定的とはいえない結果が出た。どのような形式のお葬式を望むかという回答では、「遺族に任せる」という回答の理由を聞かなかったことから推測の域を出ないが、東京・神奈川と東海等の高数値に、家族間のあり方に違いがあるように感じられるのは確かである。この項では、やはり家族や「家」制度に縛られない「個人化」が進行している様が明らかになった。

第7回「今、『お葬式』に必要なこと—檀信徒の意識から考える」では、アンケート結果から、家族の場合と自分自身の「お葬式」の持つ意味、死後の行方とそこでの意義を考察し、「お葬式」に必要なことは何かをそこから明らかにした。この回で重要な点は、「お葬式」の持つ意味として、「家族や友人との別れ」と「極楽浄土へ送る／送ってもらう」が拮抗して高率であるのに対して、「家の先祖になる」という回答は、数%でしかないということである。先祖になるという意識と極楽へ往生するという意識に回答者の中で関連性が伺えない。しかし、故人の霊はどのような存在かという回答では、「見守ってくれている」という回答が全国すべて8割以上と圧倒的に高い。自身も、全国で、「何もなくなる」という回答が1割前後いるものの、「極楽に往生する」という回答が6割以上に上る。この極楽に往生する故人と故人を極楽に送り遺族を見守っていてく

れると回答する遺された家族の呼応の願いに、どのようにわれわれは答えていかねばならないのだろうか。そうした願いへのわれわれの回答は、第2回後の第10回「お葬式の意味―来世観と死者のかかわり」である。ここで、浄土宗における来世観として、往生の意義とその目的を浄土宗義から説明した。さらに詳細に地域、男女、年齢階層でクロス集計し分析した上で、現代の個人化した遺族への「お葬式」の意義をいっそう身近に伝えることの必要性を訴えた。

第8回「戒名か俗名か」では、生前の俗名に執着があり、戒名をほしいと思わないとする回答は全国で1割を超えている。東京・神奈川は2割近い。まだわからないという人を併せると、どの教化センターも2割から3割に上る。これを世代別に見たのが、第11回「団塊の世代が変える葬祭のこころ」である。そこでは、「戒名をほしいと思わない」という回答は、他の世代に比べて団塊の世代だけが突出して高いことが報告されている。第8回では、さらに「お葬式」の希望の有無と戒名希望の有無をクロス分析している。そこでは明らかになったことで重要な点は、回答者が「お葬式」と戒名の意義の関連性を理解していないことである。また、生前の名前のままでよいとする理由は、「意味が見出せない」「名前に思い入れがある」が1位2位と高く、「高額である」は東京・神奈川は高いものの、それ以外の教化センターも第3位であることが明らかとなった。金銭的理由はあまり大きな理由ではないと考える傾向はどの教化センターでも伺える。

第9回は「女性のお葬式の意識」である。まず注目されるのは、女性が喪主を務めている比率が、全国では25%と高率であったことである。平均以上の教化センターは、北海道、九州がほぼ5割、次いで中四国、東京・神奈川がほぼ3割という結果となった。東京・神奈川が高くなることは都市化の影響と推測されたが、他の高比率の教化センターについては、都市化などと異なる当該地域の独自の社会文化的背景があることが予想される。いずれにしても興味深い数値である。また、女性が夫や夫の父母の「お葬式」の喪主だけでなく、実父母の喪主も務めるケースも多いことから、少子化、男の後継者のいないことなど「家族の縮小化」という現代社会の一面が伺えた。そして、女性は「お葬式」を男性に比べ積極的に望む比率が全教区では1割ほど低く、東京・神奈川などは半減する。さらに、「お葬式」を望まない比率は、回答者が少ないものの、東京・神奈川は13%と男性の6%を大きく上回っている。同じ比率の教区センターは近畿と関東である。ここにも女性の家庭内での立場の地域的相違があるかも知れない。また、浄土宗の僧侶を招いた「お葬式」を望まないのも、関東、特に東京・神奈川が高い。このあたりにも大都市部の「家」や家族の一体性よりも自分の主張を持っている女

性の自立性が見える。戒名不要の理由に関しても、全国で見ると、金銭的な理由による不要が第1位で、次いで生前の思い入れ、意義を見出さないと続き、男性とは1位と3位が入れ替わる。ここも女性の意識の特徴が伺える。今回の「お葬式」に関する「檀信徒アンケート」からだからこそ、いっそう家庭内での女性の立場や存在理由が、今や伝統的な家族のあり方とは大きく変わってきていることが明らかになったといえよう。

そして、これから大きく寺院との関わり方を変えていく可能性を秘めている団塊の世代について取り上げたのが、第11回「団塊の世代が変える葬祭のこころ」である。この世代は人口が多いだけでなく、独特の行動様式や考え方を持っている。伝統的な枠に縛られず、逆に伝統的なものを押しつけられることに反発さえする人たちである。

伝統的な葬祭のこころとは?

さて、こうしてこれまで記述してきた内容を概観して来た時、総合タイトルにあげた「葬祭のこころ」とは何かという疑問に行き着く。これまであえて本章巻頭で説明せず、アンケートに現れた現状を分析して、「崩れゆく」状況を報告してきた。ここで改めて、「葬祭のこころ」とは何かということについて考えてみたい。

日本の葬祭仏教は、どのような機能と役割を持ってこれまで支持されてきたのだろうか。その文化的背景はどのようなものだったのだろうか。第2回でも触れたように、これまでの「お葬式」を含めた葬祭は、農耕を中心とした産業構造の中で、それを支える担い手である「家」とその家産の維持継承という役割を果たしてきた側面があると思われる。農耕は、家族の多くの労働力とさらに同族集団や地域社会の成員の共同で営まれてきたことは今更いうまでもない。そして、豊作の祈りは、この世に生きて生活する者たちだけでなく、その「家」の系譜に属すると信じられてきた「家」の祖まで連なる者たちのすべてが共有する願いであると考えられてきた。その願いと血縁や地縁という人と人、子孫と先祖を繋ぐ絆の強化と確認が、豊作の祭やお葬式や法要の宗教儀礼に込められた重要な意義であった。人は個ではなく、さまざまな共同体の一員であり、労働や家族を持つことには、個人にとってと同等かそれ以上の意味と役割があった。現在でそうしたあり方は閉鎖的と批判することも簡単だが、生きることへの必死さと真摯な意味が込められていたのも事実である。

先祖が子孫や村落共同体の守護者となることを祈られていった過程は当然であったろう。仏教の役割は、個人の往生成仏を願う死者供養から、死んだ後に、子孫を守り続ける「ご先祖さま」となるこ

とを願う先祖供養へと受容され、展開していったと思われる。浄土教はそうした点では、宗義的観点とは別に、極めて受け入れられやすい農耕という文化的社会的素地があったといえよう。そこでは、「お葬式」は、死者を極楽に送り、先祖になってもらわなければならない遺族としての重要な儀式的意味があった。それは、僧侶ばかりか誰もが言葉に表す必要もなく共有している宗教意識であったと思われる。例えば、戒名は、宗義とは別に地域社会にとって、共同体の成員の社会的位置関係を表す重要な宗教的役割も持っていたから、付ける付けないといったことを考えることもあり得なかった。個人の判断のつけいる余地などはなかった。もちろん、こうした意見は画一的で、多くの例外が各地にあることは当然であり、あえて一般論を述べているのである。女性の社会的立場や役割についても同様である。女性の喪主が当然の地方もあったとは思われるが、やはり一般的には、「家」の継承を示す喪主は男性が務める地域が多かったと思われる。また、嫁いだ「家」の宗教的慣行に従うのが当然であったと考えられる。

新たな葬祭のこころへの対応

こうした伝統的な宗教的慣行が、地域によって、変化の速度に遅速の差はあっても、変わってきているのはこれまでのアンケートの分析から明らかである。東京・神奈川という地域を一つの指標として挙げたのも、急激に変わりつつある地域を示すことが目的だったからである。

明治以降の急激な近代化による産業形態の変化、特に高度経済成長期以降の劇的な社会構造の変化は、これまでの伝統的な地域社会と農耕文化を破壊解体した。都市近郊に新たな人口都市が出きて、地域社会と隔絶した孤立した家族が大量に出現して来た。彼らの求める人間関係は、第3回で報告したように、現在もなお希薄化、縮小化傾向を辿っている。それは地域の大小を問わないし、現在では小都市になるほど、その傾向に拍車がかかっている。人口の減少などで地域共同体が弱体化した地方こそ、今後変化が激しくなっていくことが予想される。

この傾向の中で何が崩れゆくのかといえば、それは、伝統的社会で一番重視されてきた共同体意識である。生活の中に地縁も先祖意識もない共同体意識の崩壊は、生の意味つまり誰のため、何のために生きるのかという目的が他者から自己に向かうことになる。目的を共有できる世界は家族が中心にならざるを得ない。つまり、個人化した現代では、家族という最小の共同体での生と死の意味付けと目的が今求められているのである。

そうした遺族の思いは、第10回の「死者との関わり」で明らかで

ある。遺された家族を見守っていてくれる、見守っていてほしいという9割に近い、地域を問わない圧倒的な喪主の回答は、先祖供養から死者供養への再転換への願いともいえる。先祖という共有できる世界観を喪失した現代だからこそ、これまでの「家」の永続の祈りから、人は死んだら何もなくなって終わりなのではなく、この世と西方極楽浄土と場所は変わっても、家族が永続し続けてほしいという祈りへと変化しているのである。これまでの先祖の一員になって子孫の守護を祈るという関係から、これからも故人が遺された家族を守り続けてくれると信じたい思いと祈りなのではないだろうか。ここに現代の死者と生者の絆がある。これこそ「新たな葬祭のこころ」といえるのではないだろうか。

家族の死という危機に瀕したとき、家族という最小の共同体に生きる者たちこそ、この祈りに対して実感を持って受容できる宗教的確信を待ち望んでいるはずである。そして、その思いは誰もが共通して持っていた伝統的先祖観とは異なり、遺族のみが受け入れたいと願う、「家」から「家族」へ縮小した家族共同体の救済観である。

そこにこそ私たちが今伝える葬儀の重要性があるのではないだろうか。第10回の末尾にあるように、家族を含む多くの衆生を見守り救済するために、往生成仏を目指すという教義に裏付けられたお葬式の意義を遺族に、例えば戒名の意義、意味などを含めて、懇切に説くことが今こそ必要とされている。また生きることの意味、死ぬことの意味と目的を、生前からそしてお葬式後も、私たちは説き続ける必要がある。個人化して別れだけが強調されている現代だからこそ、新しいお葬式のこころが必要とされているのである。（武田道生）

この稿は、各回の担当者が起草した内容を、全研究員が読み合わせ、検討を加え、最終的な合意に基づいて、担当者が執筆したものであり、内容に関する最終的な責任は、現代葬祭仏教研究班が負うものである。

現代葬祭仏教研究班

浄土宗総合研究所　公開シンポジウム①

崩れゆく葬祭のこころI

―いま！問い直す「葬式仏教」―

◆シンポジウム講演録　第一部　基調講演

平成21年2月20日に開催した、浄土宗総合研究所公開シンポジウム「崩れゆく葬祭のこころいま！問い直す『葬式仏教』」の講演録を掲載します。浄土宗総合研究所現代葬祭仏教研究班は、平成17年に実施した檀信徒への「お葬式に関するアンケート」を分析し、その中からいくつかの問題点を抽出して「シリーズ　激変する檀信徒の宗教観　崩れゆく葬祭のこころ」と題する報告を一年間にわたって『宗報』に連載しました。これに基づき、日本における「葬式仏教」の現状とその現代的意義を新たなる視点から問い直すためにシンポジウムを開催しましたところ、多数の方にご参加をいただき、大好評を博したことは、既に数社の専門誌にも報じられて、ご承知のことと存じます。

連載の第1部は基調講演「葬式仏教から死者供養仏教へ」池上良正駒澤大学教授、第2部はパネリストの発表（発表順に、名和清隆浄土宗総合研究所研究員、竹内弘道曹洞宗総合研究センター主任研究員、井上治代東洋大学准教授、溝口勝巳溝口祭典社長）とパネルディスカッション、全体のコメンテーターは池上良正教授、コーディネーターと司会は武田道生浄土宗総合研究所研究員です。

基調講演「葬式仏教から死者供養仏教へ」

駒澤大学教授　池上良正

武田　司会を務めます武田と申します。よろしくお願いいたします。本日、基調講演をいただく池上良正先生の専門は宗教学ですが、現在、精力的に中国、韓国など東アジアの仏教の実態調査並びに研究を進めております。本日お話いただきます「葬式仏教から死者供養仏教へ」とはアジア全域、それも、今、巨大に膨れ上がりつつある上海などの中国の都市部、そして韓国や日本も視野に入れた、東アジア全体の現在の仏教の受容のされ方、その総合的な研究をなさっ

ております。

その中で、日本などもそうですが、これまで葬式仏教として受け入れられていた仏教のあり方が、現在、死者供養仏教として共通の基盤を持って受け入れられつつあるのではないかという大きな枠組みの中で、大変刺激的な研究をなさっております。

本日は、池上先生に、日本だけの問題ではなくて、近代社会全体が大きく変わっていく中で起こっている一つの宗教事象として、我々自身が行っている葬式仏教も含めて、死者供養という視点からもう一度見直すというご提言をいただきたいと思います。

先生、それでは、どうぞよろしくお願いいたします。

池上　おはようございます。池上と申します。

こういう宗門関係や業界の方々が多いシンポジウムでは、私のような研究者の話は、どうしても観念的・理念的になって、現場でご苦労されている方々の問題意識とうまくかみ合わないことが多いのですが、一方では、逆にそういう人間が少し外側から言いたいことを言わせていただいて、それと現場の問題を突き合わせていくことによって、新たな展望が開けてくることもあります。

私自身は宗教学という立場から「死者供養」の問題を扱ってきたわけですが、どちらかといえばフィールドワークなど、地べたを這いつくばって材料を集めてくるという、広い意味での実証的な研究を心がけてきました。本日は、そういうところからくみ上げた、全般的な枠組みのようなお話をしたいと思います。

「葬式仏教」批判という不幸

全部で4つぐらいの話をしたいと思います。さっそく、一番目の「葬式仏教批判という不幸」という話から始めます。

「本来の仏教は○○のはずなのに、日本の仏教はただの葬式仏教になり下がってしまっている」という嘆き、あるいは批判をよく耳にします。特に、お坊さまの世界をはじめ、各業界のエリート、知識人を自負なさっている方に多い批判です。この○○に入るものは人によって違うのですが、本来の仏教とはこういうものであるのに、日本の仏教は葬式仏教になっている。何と嘆かわしいことか。こういう批判です。

私は、この批判を必ずしも不当だとは思いません。葬式仏教がある種の嘆かわしさを持つ局面というのはたくさんあります。ここで考えてみたいのは、この価値判断が良いか悪いかという話の前に、なぜこういう言い方がとくに知識人を中心に広く言われるようになったのか、という点です。

そこには大きく2つの要因があったと思います。第1は、近代以

降の翻訳概念としてのプロテスタント的な「宗教」観です。明治維新のころから西欧の「religion」という言葉が入ってくるのですが、それが日本人にはなじみのない言葉であって、最初は翻訳語も右往左往するのですが、結局は「宗教」という訳語が定着します。外から入ってきた翻訳概念ですから、そこには暗黙の前提がありました。つまり、「宗教」というのは、何よりもまず「個人の内面の信仰」であり、そのような自覚的な「信仰」を形にあらわしたものが「儀礼」だ、という考え方です。これはきわめてプロテスタント的といいますか、もう少し難しく言うと、一神教の存在論的な信仰、つまり、神様がいるかいないか、それを信じるかどうかが核になり、個人はそういう信仰をもっているからこそ各種の実践が出てくるのだ、という考え方です。

ここから、「儀礼」というのは手段や形式にすぎないと見られるようになる。「あんなのは単なる儀礼だよ」と言えば、心がなくて、形だけ追いかけている、ということになります。ところが、現実面では、ご承知のように明治維新以後、僧侶の肉食妻帯が容認されるなど、仏教界の世俗化は大きく進みました。そういう中で、浄土真宗のエリートである島地黙雷、清沢満之をはじめ、各宗派のエリートの人たちが必死になって近代的な仏教改革を進めます。それはきわめて重要な、大切なものであったわけですが、そこでは「信仰」が中心におかれました。

坐禅に代表されるような、宗教エリートの修行的実践などはすばらしいと言われるのですが、葬儀・墓参・法事のような一般庶民の実践といったものは、内面の深い信仰もないままに慣習の惰性に流された、ただの儀礼にすぎないという言い方で、価値が低いものと見なされていく。どうしてもそういう傾向があったと思います。つまり、「儀礼」の持っている価値を十分に認めていく視点が薄れていった、ということです。

葬式仏教批判の第2の要因は、第2次世界大戦後に、戦前期の国家神道を支えていた家父長的なイエ制度や、そこに癒着してきた宗教体制に向けられた批判です。よく明治以降に「葬式仏教」が批判されるようになった、というような大ざっぱな言い方がなされるのですが、よく調べてみますと、第2次世界大戦以前では、「葬式仏教」という言葉で葬祭と仏教との結びつきを批判するような言説というのは、ほとんどありません。「葬式仏教」という言葉自体が頻繁には使われていません。むしろ葬式仏教批判というのは、戦後の特に1970年代以降です。

たしかに、江戸時代以来、儒学者や国学者による仏教批判の歴史は長いわけですが、そこでも批判の的になったのは、僧侶が戒律を守らないで堕落していることなどです。あるいは出家とか火葬、剃

髪などの行為は親不孝であり、「身体髪膚これを父母に受く。敢えて毀傷せざるは孝の始なり」といった儒教道徳に反するのだというような定番の批判は、中国でも漢の時代からありますから、非常に古いものです。しかし、戦前期には、坊さんが葬儀をやるからけしからん、といったような言い方はほとんどありません。

なぜかといいますと、まさに檀家制度の中にくるまれた日本の仏教は、ご先祖の菩提を弔う、祖先を大切にする宗教ということで、これは大事な役目だという言い方が通用していました。これが批判の矢面に立たされるのは、戦後の法改正や家族制度の変化のなかで、イエ制度のようなものが実は国家神道、あるいは軍国主義を支えていたのだ、といった批判が出てきたときです。揶揄と非難を含んだ「葬式仏教」という言葉は、むしろ戦後世代の人たちによって愛用されました。明治以来の「信仰」を「儀礼」の上位に置く宗教観というものが、「本来の仏教」は常に「葬祭」の上にあるという思考の枠組みとして再編成された。つまり、葬祭というのは仏教を広めるための手段・方便にすぎず、信仰としての「本来の仏教」は常にその上にあるのだという、思考の枠組みです。

「葬式仏教」という言葉が社会的に広まったのは、おそらく1963年に圭室諦成先生が『葬式仏教』という本をお書きになったころからだと思いますが、実はこの本でも、「葬式仏教は批判されているけれども、あえて自分はそれを弁証するのだ」というような気負いは全く感じられず、淡々と仏教と葬儀の関係を叙述していくというスタイルなのです。この本は民俗学的なベースの上にかなり乗ってはいますが、葬式仏教批判というものを覆してやろうといった意気込みのようなものは感じられません。むしろ「葬式仏教」という言葉が、そのころはある意味では新鮮に受けとめられているところもあったようです。これが今日言われるような批判的な言葉になっていくのは、むしろ60年代の終わりから70年代あたりではないかという印象をもっております。

いずれにせよ、こういう批判の中で、さまざまな現場の不幸が生じるようになりました。一方では、仏教界のエリートの方々が、これは「本来の仏教」とは違うのだと言うことによって、檀家さんとの意識のずれが生まれました。お寺に帰れば葬式をやる。しかし、「おれはこんなことは渋々やってるんだ」みたいな態度になって、優秀なエリートであればあるほど、葬式仏教の現実から乖離するという不幸があります。

もう一方では、こういう問題を深く考えずに、ただ収入を得るための「家業」として無自覚に葬儀だけをやる。つまり、お経さえ唱えていれば一定のお金が入ってくるために、現実に安住してしまう不幸です。もちろんこれはすべてのお坊さんではありませんが、一

部に、ゴルフとゲームとワインしか話題のないような寺院子弟などが出てくると、一般の人たちからは、それこそ「坊主丸もうけ」みたいな言い方で批判を受けてしまう。そういう不幸な事態ですね。

これらは「葬式仏教」というもののもつ意義、儀礼がもっている意義といったものを、じっくり考えてこなかったことの弊害であろうと思います。そこで、この不幸な批判の言葉は、むしろ「死者供養仏教」というさらに大きな枠組みの中で、その意義を問い直すべき時期に来ているのではないか、と私は考えております。以下では、そうしたお話をしていきたいと思います。

「救済システム」としての死者供養仏教

次の話は、ちょっと難しい言い方になりますが、「救済システムとしての死者供養仏教」というものです。これは私が最近、学会などで発言していることですが、「死者供養仏教」というものを、宗教史上でも特筆すべき巧みな救済のシステムとしてとらえてみよう、ということです。「巧みな」というのは、「非常によくできた」ということですが、日本で「死者供養」という言葉で総称されている実践形態は、どうやら世界の宗教史を見渡しても、実によくできた死者の「救済システム」であり、そのことがあまり自覚的にとらえられてこなかったのではないか、ということです。

インドから中国文明圏に移入された仏教は、「追善回向」という論理を核にして、死者供養的な実践形態を発達させました。つまり、自分が積んだ徳を死者が良いところに行くために回してあげることができる、という考え方です。こうした考え方の素朴な形は、もちろんすでにインドからあります。ただ、これが華々しく開花したのは、やはり中国大陸でした。インドから中国文明圏に移入された仏教は、魏晋南北朝期、とくに江南地域では六朝時代ですが、そこから隋唐期にかけて、大きく2つのものを吸収したと私は見ています。

ひとつは儒教的な「孝」の伝統。つまり、自分の徳を亡くなった親たちに回してあげることによって、親や先祖を良い場所に送ることができるという考え方です。亡くなった親たちを供養するのは最大の孝行であるという形で、「孝」の伝統を吸収します。

他方で、苦しむ死者（鬼）が、生者の災いの原因になるという民間道教的な信仰・実践です。民間巫俗的と言ってもいいかもしれません。要するに、この世に未練を多く残して苦しんでいる死者です。この場合、「苦しんでいる」というのは、特に怨念とか怨霊という強いものだけではありません。だれであっても、人は何かしらこの世に執着とか気がかりを残して死んでいく。そうした死者たちが残した想いを消してあげないと、その想いが生きている遺族たち、残っている人たちに何らかの災いを及ぼす原因になってしまうのだ、と

いう考え方。これは世界中に根強く広がり、長い歴史をもっております。

こういう考え方は古代メソポタミアにもあるし、古代インドにももちろんありますし、世界の各地にみられる原始的な信仰と言ってもいいと思います。とくに中国では、これが民間道教的な信仰や実践として広まっている。あるいは、民間の巫覡と呼ばれるような人たちが積極的に関わり、今日でもその種のエージェントたちによって担われている部分の多い、そういう信仰や実践ですね。

仏教的な追善回向の論理などが儒教と合体したということはよく言われるのですが、2番目の民間道教的・巫俗的な要素を吸収したことは、比較的忘れられることが多いのです。しかし、私はこの部分がたいへん重要だったと思っています。死者供養的な原型は、この二面性を取り入れることによって作られた、ということです。つまり、追善回向の論理を核としながらも、仏教的な功徳を積むことは親孝行や先祖の孝養にもなれば、同時に、何らかの未練を残して亡くなった諸霊の救済にもなる、というのですね。先ほど「巧みな」と申しましたが、非常によくできた「救済システム」としての通念が、このようにして中国大陸で形を整えていきます。

ところで、これまで私は「死者供養仏教」という言い方を何気なく使ってきたわけですが、死者供養という表記は、日本で発達したものです。仏・法・僧の三宝などに供給し資養するという仏教用語の転用ですが、いわゆる日本語で一般に「死者供養」と呼ばれるような実践は、中国、朝鮮半島などでは「済度」「往生」「施食（施餓鬼）」、あるいは「超薦往生」「超度」「薦度」というような言葉が広く用いられます。

なぜここで「死者供養仏教」とあえて言うのかといいますと、これは今申し上げたような、日本人にはほとんど説明しなくても何となく意味が伝わってしまう「死者供養」という死者への対処法です。これが一定の構造をそなえた死者の救済システムであって、これを日本に軸足を置いて、比較宗教学的な観点から眺めてみることは、学問的にも大きな意義がある、と考えるからです。「死者供養仏教」というのは、そういう比較宗教学的な視点からの便宜的な学術用語であるとご理解ください。

これは日本人の宗教学者としての私の問題意識ですが、そういう視点からこの言葉を使わせていただいく場合です。では死者供養は儀礼的・実践的なものが中心だというけれど、そこに「信仰」はないのか。つまり、「死者供養」を支えている信仰というのは一体何だ、ということをよく聞かれます。私は「信仰」という言葉は決して悪い言葉だと思いません。ただ、先ほど言いましたように、「信仰」という言葉が明治以降、キリスト教のプロテスタント的な存在論的

な信仰、つまり、神がいる・いない、神の存在を信じる・信じない、というところから出発した言葉であるために、どうしても違和感が残るのです。

「死者供養」というのは、「霊の存在を信じている」という「信仰」をもっている人がやることなのか、ということですね。多くの知識人はそういうふうに考えます。しかし、これはちょっと胸に手を当てて考えてみれば、実態とはかなり違います。今日、多くの方がお線香一本立てて、お墓参りをする、仏壇に手を合わせる。それは本当に霊魂の存在というものを信じたからその行動がある、ということでしょうか。もちろん、「全くそんなものはないのだ。死んだらすべておしまいだ」と思っている人は、やりにくいでしょう。しかし、そのように言う人も含めて、お墓参りや仏壇でお線香を上げて死者と向かい合うというようなことは、「霊魂の存在を信じる」ということとは別に、多くの人が関わっている実践ではないでしょうか。

そこでは、何かを信じているから、つまり、見えない霊的なものを信じているから行為がある、という思い込みでは、問題がうまく解けてこないと考えます。私は「信仰」という言葉ではなくて、むしろ「通念」とか「イメージ」といった言葉を使うようにしています。つまり、死者供養的な実践というものを緩やかに支えている一般的な通念ですね。これは、あえて言葉にしてみますと、こんな文章になるのではないか。

（1）死者を安らかな状態に導くために、生者、つまり、生きている人は、一定の主体的な実践によって積極的な関与ができるかもしれない。

（2）安らかな状態に導かれた死者は、自分を助けてくれた（つまり、供養をしてくれた）生きている遺族に対して、多少とも超越的な力をもって守護・援助し、利益を与えてくれるかもしれない。

この場合の利益というのは、具体的なご利益というよりも、それこそ「見守ってくれる」というような言い方で表現されるものでもあるわけですね。静かに見守っていてくれるという意味で、守護、援助してくれる。こういう通念やイメージは、多くの人に深くしみ通っていると思います。これは多くの日本人にとっては空気のように当たり前の通念で、「何だ、大学の教師までして当たり前のことを言っている」と批判されるかもしれません。しかし、逆に比較宗教学的に見ますと、決してどこにでもあるというものではない、ともいえるのです。

例えば、一神教文化圏、ユダヤ・キリスト教とかイスラーム圏との比較を考えてみますと、そういうところでは、もちろんこうした考え方が全くないわけではないのですが、少なくとも基本的な考え

方としては、遺族には死者の運命や行く末などを左右する権限は認められていません。つまり、それはすべて神様の手にゆだねられているからなのです。生きている人に許された関わりとしては、あくまでも、死者をしのんで追想すること、思い出すこと、覚えること。ですから、死者のためのミサとか、メモリアル・サービスといった儀礼はキリスト教でもありますが、これは基本的に「死者供養」ではありません。死者をしのんで、それを神のみ手にゆだねるということです。そこでは、死者の運命を生きている人が個別的にあれこれ左右することはできないのです。

ですから、先に挙げたような、生きている人の積んだ功徳が死者の運命を変えることができるとか、あるいは、供養された死者は遺族や子孫を守ることができるのだというような通念というものが発達しにくかった。もちろん、煉獄とか万霊節とか、これは『死者の救済史』（角川書店、２００３年）にも詳しく書きましたが、抜け道はたくさんあったのです。一神教文化圏でも死者供養的なものは、実は民間の中にはたくさんあります。しかし、特に近代に入りまして、こういう考え方は一神教文化圏では非常に弱くなっていく。

それに対して仏教文化圏では、特に東アジアの大乗仏教圏では、死者供養システムというものが極めて大きなものとして展開をしていきました。もちろん、ついでに申し上げますと、仏教も理念的なところに帰していけば、同じことは言えるわけです。つまり、世界宗教というのは、非常に単純化して言えば、共同体よりも個人をターゲットにしてあらわれてくる宗教ですから、個人仕様の宗教です。仏教も釈尊が十四無記の一つとして、死後のことには関わるなとおっしゃったというような、そういうところへ持っていけば、個別の生きている人間が死者に関わることなんかやめなさいという理念は、もちろんあるわけです。

しかし、私のように、宗教の現実態や、それが歴史の中で果たしてきた役割、そういうものに目を向けていきますと、東アジアに展開していった「死者供養仏教」は、きわめてよくできた救済システムとして、決して仏教の理念から遊離した、全く別のものとしてではなく、その精神を生かしながら展開していったという側面も認められます。この救済システムとしての「死者供養仏教」は、仏教がもつ普遍主義的な特性、つまり、地縁・血縁的な共同体の宗教を超える個人仕様の世界宗教として展開していく過程で発達させた、普遍主義的・個人主義的な特性というものをもっています。「輪廻転生」あるいは「追善回向」といった考え方です。それから「慈悲」の思想。こういうものを生かしながら、「不安定で落ち着かない死者イメージ」を、「安らかで落ち着いた死者イメージ」に変換させる実践の技法として、広い社会層に受容され、重用されることになった、

と私は考えています。

ここでも「イメージ」という言葉を使い、あえて「信仰」という言葉を避けています。よく「死者供養」はアニミズムとか祖先崇拝といった「信仰」を核にして展開したと言われるのですが、私はそういう西欧的な宗教理解の枠組みの言葉をあえて外したいのです。なぜなら、その発想自体がきわめて近代プロテスタント的だからです。日本人は本当の神を信じないで、霊魂や祖先の存在を信じる。だからアニミズムや祖先崇拝の信者なのだ、という前提です。ここではそういう翻訳語を使わずに、「死者供養」のもっている通念やイメージというものをもう少し丁寧に取り上げてみたいのです。

そうすると、これはきわめて大雑把な言い方になりますが、「不安定で落ち着かない死者イメージ」を、「安らかで落ち着いた死者イメージ」に変換させる実践技法こそが、広い社会層に歓迎され受容されたことが注目されます。日本には、このようにして中国の文明圏である程度まで完成された「死者供養仏教」の教説や実践様式が、いわばセットで移入されました。さらに、独自の政治的・歴史的展開の中で、「死者供養」と総称される救済技法が徐々に洗練されてまいります。それは中世後期の15世紀頃を転機として、仏教寺院や仏教的宗教者の関与と堅く結びつくようになります。

ここでも、「独自の政治的、歴史的展開」という点を強調しておきます。私たちよりも一世代前の先生方は、ここの部分を「日本独自の固有信仰」あるいは「日本独自の民俗的な基盤・基層」といった言葉で表現なさることが多かった。中国やインドからどんなものが入ってこようが、日本には日本独自の文化や思想があって、それは何かというと、さっき言った「祖先崇拝」「アニミズム」であるというような言い方です。そういうものが古代から一貫した基盤としてあったので、日本の仏教は特殊な葬式仏教になった、というような発想です。今日では、こういう前提が批判されています。今日いらしている藤井正雄先生等は、早い時期から、ある意味では柳田国男的な固有信仰論に対して批判的な目をずっと向けられてこられたと思いますが、我々よりも前の世代で、そういう視点をもっている方は少なかった。

最近では、仏教学の末木文美士先生等も、日本の固有信仰のような民俗的基盤は、それ自体がきわめて歴史的なもので、各時代の歴史の中で変貌していくものであり、古代から一貫した基盤といった発想は、それこそ近代日本がつくり上げた一つのイデオロギーなのだといった批判を展開されていますが、私もそうだと思います。そういうことから行きますと、具体的な時代の一つ一つの問題を、歴史的に丁寧に取り上げていかなければなりません。何か古代から一貫して日本人はこうだ、日本は祖先崇拝の国だ、そういう言い方で

はなくて、どのようにそれが形成されていったのか、そして「死者供養仏教」というものがどのように形づくられていったのか、そういうことを丹念に掘り下げていく研究が必要だろうということです。

こうなるともう、私一人の手では負えません。各時代のすぐれた研究者の方々が、いろいろな角度から掘り下げている成果を借用することになります。とりあえず注目されるのが、古代から一貫した国家による仏教保護的な政策と、そのもとで民衆布教に携わった中下級の僧職や、半僧半俗の宗教者・芸能者たちの積極的な活動です。これらは研究者によって「ヒジリ」「行者」「遁世僧」などさまざまな用語によって概括されますが、具体的な呼称を挙げていけば、沙弥・念仏者・法師・地神盲僧・修験・毛坊主・ミコ・比丘尼などです。要するに、公の僧が貴族や天皇の葬儀しかやらなかった時代に、民衆層に死者供養というものの重要性を説いていったエージェントたちの活動です。

ただ、その前提として重要なのは、日本は古代から一貫して仏教保護的な環境にあったという政治的・歴史的な状況です。それは、中国大陸、朝鮮半島を見れば、仏教が丸ごと弾圧されたという時代が繰り返し出てきます。日本の場合には、明治初年の廃仏毀釈ぐらいではないかと思います。もちろん法然上人を初め、ある信仰勢力が弾圧を受けるということは幾らでもありましたが、仏教全体がずっと保護的な環境にあったことは、きわめて重要だったと思います。民族に固有な基層信仰などということを言うまえに、そういう政治的・歴史的な状況に着目することが大切だということです。

「死者供養仏教」が発達した歴史的要因を項目として羅列していけば、『法華経』・『般若経』をはじめとする諸経典の読誦による滅罪信仰、西方極楽浄土信仰の流行、十王信仰とセットで中国から輸入された年忌法要の拡大、高野山に代表されるような名刹・霊場への納骨習俗の普及、板碑や五輪塔への結縁による共同墓の形成、各種の仏教説話集に代表される唱導文学の編纂、軍記物・謡曲など死者供養をテーマにした民衆芸能の普及、戦国大名による敵味方供養や大施餓鬼会の慣行、などが挙げられるでしょう。そして、江戸幕府による寺請制、いわゆる檀家制度です。よくこれだけが特筆されるのですが、それ以前に長い形成の歴史があった、という視点が大事だろうと思います。

さらに重要なのが、さっき申し上げましたように、明治に入ってイエ制度が温存され、敬神崇祖が称揚されたという政策的な支援ですね。イエ制度というのは、近年の研究だと民衆層で確立していくのは18世紀から19世紀ぐらいともいわれます。日本人にとってイエが大事だというような考え方は、むしろ明治に入ってからかなり出

てくるというようなところさえあるわけです。このあたりは、いろいろな研究者の論争がありますが、ただ終始一貫して日本人はこうだというような言い方ではなくて、それぞれの時代の政策や歴史性のなかで、「死者供養仏教」がどのようにつくられてきたのか、そういう研究が大事になっている、ということだけ申し上げたいと思います。

「死者供養仏教」の構造特性

三番目のテーマは、「死者供養仏教の構造特性」です。先ほどから「死者供養仏教」というのは実によくできているということを申し上げましたが、それを宗教学の視点から、もう少し救済論の構造としてまとめてみるとどうなるか、ということです。これもまた少し理屈っぽい、観念的な話になりますが、二つのポイントを挙げたいと思います。

まず、①死者に向き合う個人の主体性を強化する、という特性です。たとえば緊密な地縁・血縁に支えられた共同体的な社会で死者を弔うとき、つまり亡くなった仲間を弔うとか、何らかの祟り的なものを鎮めるというようなことが起こったときに、対処法として基本になるのは、集団の権威を背景とした祭り（祀り）です。お祭りというのは、ふつう集団的なものです。一人のお祭りというのがあるかどうかはよく議論になりますが、一人ではどうも寂しいわけで、お祭り（祭祀）というものは、やはり祭主を中心にした共同体の実践です。

これに対して「死者供養」は、もちろん共同体に支えられるものもたくさんあるわけですが、仏教的な理念を基盤とする追善回向では、個人による積徳行為を死者の救済に結びつけたという点が注目されます。つまり、個人が積んだ徳、例えばお経を読むこと、あるいは、みずからが施主となって読経をお坊さんに依頼すること、さらに造仏、写経とかいろいろありますが、そういう個人的な積徳行為が、死者をよい場所に引き上げる功徳になるのだ、という考え方です。先ほどの言葉で言えば、「不安定で落ち着かない死者」というものを、「安らかで落ち着いた死者」に持ち上げることができる、変えてあげることができる、ということです。

神様にお任せしなさいといって、いっさいをゆだねるのではなく、あるいは共同体の権威にまかせるのではなく、この私にもできるのだ、という感覚を育てていった。ここに、平凡な庶民が単独で死者救済に向かう道が開かれました。これは個人の主体性を強め、道徳的な生き方を促進するものでした。

先ほど言いましたような、沙弥・行者とか、いわゆる中下級の私度僧的な人たちが仏教を民衆層に普及させていくときに利用した唱

導文学などを見ていきますと、こういうテーマで満ちあふれています。たとえば当時、社会的地位があまり高くなかった一介の女性が、自分の亡くなった両親、夫、子供のためにお経を上げたり、あるいは、仏教的な功徳を積んだりすることで、その人たちを良い場所に行かせてあげられる、といった説話です。

ここには追善回向という論理がもっていた、仏教の個人主義的といいますか、世界宗教としての特性が生きていると思います。つまり、名もない個人が、集団の権威や助けを借りることなく、あくまでも個人の資格と自主性によって、身近な死者たちを「安らか」で「高い」地位に押し上げることができるようになった、ということです。貨幣経済が浸透して一部の民衆層が経済的な基盤を上昇させてくる時代、中国では隋唐期から宋代以降、日本では特に古代末から中世にかけて、いわゆる鎌倉新仏教というものが出てくる時代です。それはすぐれたエリートの教説として出てくる側面もあるのですが、もう一方では、民衆層へ「死者供養」が浸透する時代でもありました。つまり、死者に向き合う個人の主体性が強化されていく時代でもあったわけです。

「死者供養仏教」の構造特性としてもう一つ注目しておきたいのが、②関係性（縁）を創り出す力をもつ、という点です。仏教の専門家の方々を前に、「縁」というような言葉を安易に持ち出すと、おまえはちゃんと縁起論がわかっているのか、といった批判を受けそうですが、もちろん専門的な縁起論の論争など私にはわかりません。ここでは関係性という言葉を、一般庶民が使うような意味での「縁」という言葉に置きかえたのだと理解していただいたほうが良いと思います。つまり、「ご縁」とよばれるような関係性ですね。「死者供養」という実践はこれをつくり出す力をもつ、ということです。これもまた、先ほどの一神教文化圏などと比較した場合、「死者供養仏教」の特性として考えられると思います。

つまり「死者供養仏教」というのは、死者に働きかけて冥助を期待する、そういう身体的な実践として儀礼化、習俗化されてまいりました。この実践は、遺族と亡くなった人とを結ぶ関係性（ご縁）、あるいは、供養の実践をともに担い合う、生きている人たちの間の関係性（ご縁）を浮かび上がらせ、強化する働きをもつ、ということです。

ここでも、よくこういう質問を受けます。「日本人は、お墓参りや、仏壇に毎朝手を合わせるようなことをやっているが、その日本人は、どういう他界観、あるいは霊魂観を信じてきたのか」という質問です。さっきのことと関連してくるわけですが、こういう問いの立て方が非常に多いのです。「どういう霊魂観や他界観を信じているのか」という。西欧の研究者がこういう発想を好むために、日本の研

究者もそれに従ってきた。しかし、私はこうした問いの立て方こそが、「儀礼」というのは「信仰」の表現にすぎないという近代人の偏見をあらわしているのではないかと、あえて言いたいのです。

もちろん、そこに「信仰」なんてないのだということを言っているわけではないのです。ただ、日本人はお盆になれば郷里に帰省して、お墓の掃除をしてお参りをする。おばあちゃんは毎日仏壇にお線香を立てて、お茶とご飯を供えている。そういう現象を説明する際に、彼らはどういう他界観や霊魂観を信じているのかという問いを立てることが、はたして有効だろうか、ということです。

たしかに私は明確な生まれ変わり（輪廻）を信じていますとか、あらゆるものには霊魂があると信じています（アニミズム）とか、死んだ人は必ず極楽浄土に行きます、極楽というのはこういうところで、こういうふうになっていますというようなことを、はっきりと言うことができて、確信している人もいるかと思います。しかし、仏壇の位牌に向かって手を合わせる日本人の多くは、決して自覚化された霊の存在などを信じているわけではない。逆に言えば、儀礼を真剣に実践するということは、明確な「信仰」などなくても可能だ、という極論さえ成り立ちます。

しかし、だからといって、多くの人が、無為に、何の感慨も抱かずに位牌や墓への礼拝を機械的に繰り返しているのかといえば、これもまた違います。そうではありません。死者はもういないのだ、完全に無に帰したかどうかはわからないけれども、生前の姿のままこの世に戻ることは二度とないということは、現在、多くの人が実感としては納得してしまっている。しかし、生前に死者と自分とが何らかの関係性、縁と言ってもいいと思いますが、そういう関係性で結ばれていたということは、それが良い縁であろうが、あまり良くない縁であろうが、永遠に消すことができないのだ、といった感覚は、多くの人に共有されているのではないでしょうか。

死者が生前に、さまざまな人々とさまざまな縁を取り結んでいたという事実、そして、それらの縁そのものが、過去と未来をつなぐ長い時の流れの結び目になっているというような感覚。これは通念と言ってもいいし、イメージと言ってもいいと思いますが、そういう縁は絶対に消えないし、だれにも消せない、という感覚です。「死者を供養する」という言葉で、仏壇やお墓の前にお線香一本立てて手を合わせるということは、まさにこの消しようのない死者との縁を浮かび上がらせる行為です。もっといえば、供養という実践が縁そのものではないか、という言い方も成り立つように思います。

そこでは、死者の霊魂が存在するとか、地獄や極楽が実在するといった、存在論的な「信仰」は必ずしも必要とされない。必要ないと言っているのではないです。そういうものがなくてもやっている

人たちはたくさんいるであろう、ということです。「死者供養」とはむしろ「縁」を再確認し、存続させ、場合によっては良い方向に変えていこうと働きかける縁起論的な実践ではないか。つまり、存在論的な信仰というよりも、縁起論的な実践としてとらえるべきものではないか、ということです。

「供養する」という実践がある限り、亡くなった人は消えても、「縁」が消えることはない。つまり、供養するという実践は、関係性（縁）が消え去ることはないのだという確認であり、もしその縁が悪いものであったならば、もう一度良くしていこう、という実践ではないでしょうか。一所懸命に死者を供養している一般檀信徒の人たちは、そういう通念やイメージでやっているはずなのに、それをどういう「信仰」に依拠しているのか、というふうな難しい議論にしてしまったのは、むしろ近代の学者やエリートたちだったのではないのか、ということをここではあえて申し上げたいと思います。

現代の東アジアの視点から

最後に、第四の話題として「現代の東アジアの視点から」というテーマについて、映像を交えてお話をしたいと思います。ここでは特に二つの点に注目したいと思います。

第一点目は、近年、中国・韓国・沖縄などの東アジア地域で「死者供養仏教」の新たな興隆が注目される、という点です。このような東アジアの現況は、「日本の仏教だけが祖先崇拝と過度に結びついた特殊な仏教だ」といった先入観を、相対化しうる視野を開くのではないかと思います。

よく中国や韓国では葬式と仏教が結びついていないから、日本とは全然違うのだという言われ方がされます。たしかに大きな違いはあります。しかし、先ほど申し上げたように、「死者供養仏教」の原型は中国大陸で作られたものであり、システムとしての特性は東アジアのどの国でも長い歴史を持っています。葬式と深く結びついたのはたしかに日本だけです。それはもちろん江戸時代以降の檀家制度などが非常に大きかったわけですが、根っこをたぐっていくと、「死者供養仏教」という共通の太い根にぶつかります。近年の中国沿岸部の経済先進地域や韓国の都市部に見られる「死者供養仏教」の隆盛は、そうした潜在的な文化が開花したものと考えることもできます。

さらに第二の注目点として、こうした「死者供養仏教」の盛況を支えている人々の大半は、在家の女性信徒である、という点があります。これまでの東アジアの仏教研究において、「熱心な仏教徒」といえば、どうしても男性の僧侶や在家信徒を念頭においてしまうという先入観がありました。尼僧や一般家庭の女性の活動などは、

男性中心の教団史や仏教思想研究の視座からは盲点になりやすかったといえます。従来の仏教研究が、「死者供養仏教」の熱心な信徒は女性であるという現実に、あまりにも無自覚であったことが反省されるのです。

そこで、映像を見ていただきながら、私がここ7～8年やっております中国の経済先進地域での調査事例を紹介させていただきます。［紙面の都合により、当日紹介された多くの写真から、以下では5枚のみを掲載する］

まず、水陸法会です。中国に詳しい方ならよくご存じと思いますが、中国のお寺で一番大きな法会といえば水陸法会です。大々的に7日間にわたって行なわれるものです。これはもともと、いわゆる施餓鬼的なもので、すでに宋の時代には水陸会という言い方で、かなりまとまった形になっております。現在の形態は基本的に清時代の『水陸儀軌会本』に依っていますが、長い歴史を持っています。

この水陸法会の精神というのは、まさに今日お話した「死者供養仏教」の特性そのものです。つまり、ご先祖も含めて、自分の身内の霊を弔うと同時に、水に棲むもの、陸に棲むもの、三界の万霊、すべての衆生に功徳を回向して、これを救済してあげることが、生きている人の幸せに結びつきますよ、という趣旨で行なわれるものです。現在の中国では、水陸会はだいたい冬至の時期と、春分から15日目の清明という、2つの時期に集中して行なわれることが多くなっています。

寺院内の各堂には壇が構えられ、会首（施主）たちの席が設けられます。一般の人でも小額の費用で参加できますが、多額のお金を払った人たちは、会首として、こうした席に座ることができるのです。上海市の大寺院で行なわれる水陸法会には、境内に足の踏み場もないほどの市民が集まります。中規模の寺院の場合は、見ていただくとわかるように、参加者の中心は、黒い着物を着た居士と呼ばれる熱心な信徒の人たちで、ほとんどが女性です（写真1）。

この水陸法会では「冥陽両利」という標語がよく使われます。これはこの儀礼の趣旨をうまくあらわしています。つまり、冥界（あの世）にも陽界（この世）にも利益をもたらす、ということですね。「現当二世の利益」ということです。水陸のすべての諸霊に、自分が積んだ功徳を回向するのです。そういうことをやってあげ

写真1　上海市・西林禅寺の水陸法会

ることによって、自分たちも幸せになるし、亡くなった人たちも幸せになる。こういう精神です。

次に寺院で毎日のように行なわれる超度の儀礼を紹介します。亡くなった家族のための供養、いわゆる法事です。上海の大きなお寺では、現在では予約が取れないほど、毎日何組もの法事が行なわれています。中国では、紙銭を焼いて死者に届けるという民間道教的な風習が広がっていますが、これがお寺にも入っている。法会の終了後には、紙銭を赤や黄色の紙の袋に入れて燃やします。寺院の公式見解として、「あんなのは迷信だ」とおっしゃるお坊さんもいますが、寺ではちゃんと紙銭を焼くためのドラム缶などを用意しています（写真2）。これをやらなければ遺族は満足しないのです。

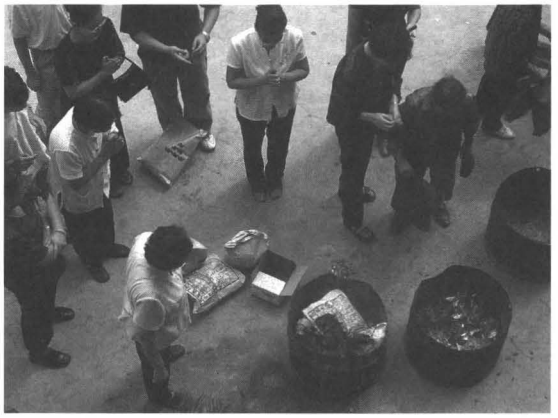


写真2　寺院の境内で紙銭を焼く信徒たち

紙銭を「経」とよぶ場合もあります。これはいろいろなやり方があって、信徒たちがお経を読みながら、あるいは「南無阿弥陀仏」と念仏を称えながら紙銭を作る。だからそれが経になる、というのです。あるいは紙銭にお経が印刷してある、だから経だ、というのがあります。いずれにせよ、紙銭を焼くのは「迷信」だけれども、お経を死者に送り届けるのは良い事だというわけです。方便といえば方便ですが、こういう形で寺院側が紙銭というものを取り入れています。

２００８年の9月に調査した上海の法善庵という尼寺の事例をあげますと、すでに午前と午後の法会の予定は、数週間先まで予約でいっぱいになっていました。内容的にはほとんどが死者のための供養で、「金剛経」と「地蔵経」の法会がほぼ半分ずつになっています。「金剛経」の法会というのは『金剛般若経』を読むものですが、これはどちらかというと、人に力をつけるお経だと説明されます。さっき言ったイメージからいうと、やや不安定な死者、つまり若くして亡くなったとか、事故で亡くなったとか、あるいは遺族が何か死者に不安定さを感じている。そういう場合は「金剛経」が選ばれ、それによって生きている遺族にも力をつけてあげるわけです。これに対して、「地蔵経」のほうは、80歳・90歳での往生のように、お年寄りが安楽に亡くなった場合などで、そういうときは「地蔵経」によって、良い場所に送ってあげるということです。

私自身は２００６年に、杭州の簫山極楽寺というところで、みずから施主になって、亡くなった妻のために一日がかりの法会をやっ

てもらったことがあります。このときには、午前が「金剛経」の法会で、午後が「地蔵経」の法会でした。その模様はビデオ映像に収録しました。私の妻の場合、49歳で亡くなりまして、だいぶ早過ぎるから、私自身の力も落ちている。だから、午前はまず「金剛経」で施主に力をつけてあげよう。そして午後の「地蔵経」で、奥様を良い場所に送ってあげましょう。そんな説明の仕方でした。

こうした供養の法会は、寺の年中行事にも組み込まれています。中国で主に死者供養の儀礼をやる時期としては、ひとつは清明のとき。もうひとつが旧暦の7月です。盂蘭盆から地蔵様の誕生日とされる7月30日にかけての地蔵法会の時期ですね。それからもうひとつ、揚子江の南の江南地域へ行きますと、冬至の時期です。

上海市などでは、冬至の時期には大規模な墓参が行なわれます。私は去る12月の冬至に、上海の福寿園という高額所得者向けの大きな共同墓園で調査をしました。この時期には、「落葬」といって、その年に亡くなった人の遺骨（遺骨といっても日本のような骨ではなくて、骨灰にしたものですが）を納めた壺なり箱なりを墓に納める儀礼が行なわれます。このときには、共同墓園にお坊さんたちが出張してきまして、家族ごとに死者の写真を置いて、その前で読経して、それから骨灰を墓へ納めます。

さらに注目しておきたいのが、先ほど申し上げた「浮かばれない死者」たちと、それを対象とした施餓鬼の要素です。「焔口」などと呼ばれる儀礼です。例えば中国の寺院では、本殿などの片隅に面然大士というのがよく祀られています。これは観音様の化身などと説明されますが、いわゆる餓鬼の姿をしており、民間で「孤魂野鬼」とか「無祀鬼神」などと呼ばれるものを形象化したものです（写真3）。つまり祀り手のいない無縁の死者や、餓鬼の姿をかたどったものを祀っているわけです。

写真3　西安市・草堂寺の面然大士

上海市の大寺院として知られる龍華寺の地蔵法会でも、一族のご先祖の菩提を弔うだけではなくて、本尊の対面に無祀鬼神に供養する壇というのを、必ず設けるのですね。そして、まずこういう浮かばれない霊から先に礼拝します。日本的に言えば三界万霊といいましょうか、そういうものから先に供養するという作法が確立しているのです。それらの位牌の文字ですが、龍華寺の場合には「普利十

方法界四生六道一切無祀孤魂等衆」「南無鉄圍山観音権現面然大士之宝座」、玉仏禅寺の場合には「無祀孤魂等衆」「十方法界四生六道」となっていて、だいたい同じような文言ですが、「死者供養」を考えるうえで、これらはたいへん重要な要素だと思います。

次に注目したいのが、死者の位牌を寺院に奉安する慣習です。現在ではこれが非常に盛んになってきておりまして、上海市で最も大きな寺院として知られる玉仏禅寺でも、最近、新位牌堂を増築して、新しい位牌を開発しています。旧来の位牌に比べるとデザインもモダンな感じで、さらにこの位牌堂では死者の写真、つまり遺影が前面に置かれるようになったことが新しい特色です。

位牌の形は、寺によって違います。もちろん日本のように檀家制度はないですから、それこそ自由競争です。だから寺ごとに、魅力的な位牌という言い方はおかしいですが、そういうものを開発して信者を集めようとする努力がみられます。デザインをはじめ、遺影を納める場所などに、さまざまな創意工夫がこらされています。蟠龍庵という尼僧寺の位牌は、淡いピンク色で、ピンクの豆電球が一つずつ付いています。

真如寺という寺は仏塔が有名です。そこで、位牌も塔の形にしていました。一つ一つの位牌が塔の形で、さらにそれを格納したケースも塔の形になっている（写真4）。こうした塔のケースが、堂の中に4基ありまして、一つの位牌を納めるのに幾らという金額が分かりますから、その数を数えますと、ここから得られる寺の収入も計算できます。4基あれば、このお堂が2つくらい建つのではないかというような収入になっております。こうした位牌堂が、今、各地で建設ラッシュになっている。最近参りました杭州の法鏡寺という寺でも、まさにこれを建てているところでした。

写真4　真如寺の位牌を納めた仏塔形容器

それから、蓮池法会などという言い方で、恒久的な位牌をつくらない人のために、1年間だけ安価な紙の位牌を張り出してあげる、という供養の仕方もあります。これはたいへんな人気です。広い専用の堂内の壁に、黄色の紙位牌が何百枚と貼られています（写真5）。亡くなったお父さん・お母さんなどの名前が書かれ、脇に施主の名前が書いてあるものが多いのですが、これとは別に、「普利十方」と書かれた紙位牌もあります。いわゆる無縁の供養です。

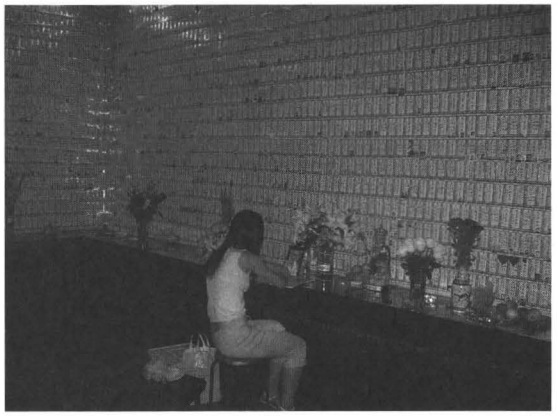


写真５　上海市・圓明講堂に奉安された一年期の紙位牌

これはどういう人が納めるかといいますと、どうも家で良くないことが続くとか、何か居心地が悪いとかいう場合、これはやはり何かの「たたり」とまではいかなくても、何か救済を必要としている死霊がいるのだということで、「普利十方」の位牌を奉納するわけです。つまり三界万霊に供養するというような言い方で、これを納めることによって心が落ち着いていくわけですね。そうした「普利十方」の位牌も全体の2割ぐらいございます。

これらの位牌に書かれた文字に注目しますと、亡くなった人や施主の名前のほかに、「仏力接引」「仏力超度」などの文字が目立ちます。仏力接引とは、まさに仏の力で引き上げるということです。あるいは「仏光接引」、仏の光で引き上げるとか。表現はいろいろありますが、まさに仏法の力で、死者をより良い場所に送ってあげるんだ、といった考え方がいかに根強く人を集めているかを知ることができます。

中国のお寺は、これまで、お墓のような、死者の遺骸を納める施設とは無縁だ、と言われてきました。たしかにそうなのですが、この常識が、最近崩れてまいりまして、お寺で納骨堂といいますか、中国の場合は遺灰堂ということになりますが、火葬された骨灰を納める堂などを寺院内に建てるところが出てまいりました。

これは明らかに火葬政策の影響ですね。中国では共産党政権下で火葬政策がとられたわけですが、現実には１９９０年代ころから、都市部を中心に火葬が一気に進みました。上海市などでは、ほぼ100％に近い火葬率になっています。そうしますと、ロッカー式の遺灰堂なども徐々に出てきている。そして、それを仏教寺院が引き受けるという例が出始めております。上海市郊外の報国寺にある玉仏功徳楼などは、その先駆的なものです。

２００７年の秋には、松陰禅寺というところで、遺灰を安置する堂を新たに作りました。この松隠禅寺には、松隠山荘と呼ばれる共同墓園が隣接しています。先ほど言いましたように、これまで中国のお寺はお墓とは関係なかったわけですが、このように墓園が隣接するような例が出てきています。

実はここは国営の墓地として開発されたのですが、松隠禅寺の居士の一人にお金持ちの女性実業家がいて、彼女が株を買い取って、

社長さんになりました。それで園内に仏教式のお堂なども建てて、お坊さんを呼んで儀礼ができるようになっています。この松隠禅寺は、松隠山荘の落葬儀礼や超度の法会と結びついて、経済的にも繁栄するようになっています。この女性社長さんは、自分が熱心な仏教信者であるということを、さかんに強調しておりました。

この話のついでに、きょうのテーマとは少し違うのですが、私がびっくりしたのは、上海市の公営墓地に行きましたら、「二十四孝図」のパネルが堂々と掲げられておりました。文化大革命はどこへ行ったのかということですね。今や中国は、公営墓地に「親孝行をしましょう」というパネルを掲げるところまで来ています。つまり、それだけ倫理問題に悩んでいるということかもしれません。二十四孝図という日本の若者でも知らないようなものが、中国の公営墓地に堂々と張り出されている。こういう現実がございます。

それから、ついでに韓国の映像をいくつかご紹介します。韓国のソウルの寺院では、近年、四十九斎というものが盛んになっております。いわゆる死後49日目の法事です。韓国でも仏教と葬祭との結びつきは弱いといわれてきました。しかし、近年では死者供養儀礼がずいぶん盛んになってきています。特に、葬式そのものではなくて、四十九斎を寺でやることが盛んになっており、それをやった人たちが、その後の年忌法要などを頼むという例も出てきております。

奉恩寺というところの盂蘭盆節では、「極楽往生」と書かれた提灯が、たくさん奉納されます。また、盂蘭盆節には焼紙の儀礼が行なわれます。韓国の場合、紙銭を焼くということはありませんが、盂蘭盆で使われたお札とかを焼きます。一種のお炊き上げです。

さらに能仁禅院という、ソウル市の新興地域で今どんどん大きくなっている曹渓宗の寺院があるのですが、そこでも「死者供養」が寺院経済の大きな基盤になっています。紙位牌の奉納も盛んで、ものすごい数の1年単位の紙位牌が納められています。これらの寺院の死者供養儀礼では、やはり中心的な担い手は女性たちであることが指摘できます。

ついでに言っておきますと、火葬は仏教に追い風なのですね。つまり、韓国でも火葬政策が急速に進められたわけですが、この火葬政策というのは、旧来の儒教式葬儀の基盤を弱くするのです。その反面、火葬が広がっていくと、仏教寺院が行う死者供養的な実践のマーケットが急速に広がっていく。そういう側面が、たしかにあるように思います。

まとめ

いろいろな具体的な事例を、写真を交じえてご紹介しましたが、最後に簡単な「まとめ」をしておきます。

日本以外の東アジア地域では、政治権力によって儒教が支配原理として称揚される一方で、仏教が抑圧されたという歴史をもっています。そのため、公的・集団的・男性中心的な先祖祭祀や葬儀が儒礼と結びつきやすく、仏教徒による「死者供養」は私的・個人的・女性中心的な民間宗教者（しばしば巫者的な性格をもちますが）、そういうものと同一の範疇の中に封じ込められる傾向が強かったといえます。

これに対して、檀家制度に支えられることで共同体の葬祭をほぼ独占してきた日本本土の仏教では、追善回向による死者の済度がイエの先祖祭祀と直結しやすいという面がありました。また、先ほど言ったように、近代では、こういう癒着の特性こそが、「葬式仏教」の存在意義を正当化する理由としても強調されたわけであります。そこに「地縁・血縁的な共同体が弱まって、檀家制度の基盤が揺らいでしまえば、葬式と結びついた仏教も必然的に衰退する」という思い込みが生まれました。

しかし、近年の中国沿岸部や韓国の都市部、それから、きょうはお話ししませんでしたが、大正大学のグループが調査なさった沖縄県などにおける「死者供養仏教」の活性化といった現状は、むしろ逆の展開を示しております。つまり、そもそも檀家制度などが存在しない中国沿岸部や韓国都市部や沖縄県で、地縁・血縁的な共同体が衰退して個人主義的になっていく時代に、「死者供養仏教」が新たに活性化して盛んになってきているのです。ですからこれは、共同体の結びつきが弱まれば死者供養も衰退するといったような、上で言った思い込みとは逆転したことが起こっているわけです。そこではむしろ、必ずしも家父長的な共同体などに依存することなく、「核家族」とか「個人」とか「女性系譜」などに開かれた「死者供養」の可能性というものも指摘できるわけです。

「死者供養」が共同体を維持・強化するというのは、もちろん非常に重要なことです。ご先祖を大切にするとか、親孝行と結びついている。その側面を私は否定しているわけではございません。しかし、すでに指摘したように、そもそも「死者供養仏教」は、個人を主体とした追善回向の実践を通して、身近な死者を救済できるとする論理によって、共同体を維持・強化する側面だけでなく、個人救済への道を開き、個人的なご縁によるネットワークをつないでいくという、二重の機能を併存させてきました。

現代日本の多くの僧侶の方が、江戸時代以来、しかも、江戸の後期以降ともいわれる体制にすぎないイエ制度に固執して、父系中心の「先祖供養」がなければ「死者供養」そのものが成り立たないと考えていることに、むしろ問題があるのではないでしょうか。先の第4の話題で取り上げましたように、「死者供養仏教」というのは、

きわめてよくできた構造特性をそなえています。そうした特性をもう少し活用していけば、「個人」にも開かれ、「縁」に働きかける力をもつ、そういう潜在力が生かされてくるのではないでしょうか。そうした部分にもっと注目すべきではないかということを、最初に申し上げたとおり、学者の無責任な外側からの発言ではありますが、本日の問題提起とさせていただいて、終わりにしたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。（拍手）

◆シンポジウム講演録　第二部　パネリスト発題

パネルディスカッション　第一発表

浄土宗檀信徒の葬祭意識「お葬式に関するアンケート調査」より

名和清隆

武田　ただいまより、午後の部、パネルディスカッションに入りたいと思います。

最初は、私ども浄土宗総合研究所が、ここ数年にわたって行ってまいりました浄土宗の檀信徒で、喪主を務めた方の意識調査の結果の分析を通して、現代の浄土宗の檀信徒の葬祭に関する意識が現代のどういう状況を反映しているのか。葬祭を通じて問題提起をしたいと思います。

それでは、浄土宗総合研究所研究員、淑徳短期大学兼任講師の名和清隆研究員の発表になります。名和研究員は、埼玉教区浄念寺の副住職を務めております。専門は宗教学、「生者と死者の関係性が現代においてどのように変化しているか」というテーマを中心に研究しております。では、よろしくお願いします。

名和　ただいま紹介をいただきました名和です。今回の発表では、平成17（2005）年9月に実施しました「お葬式に関するアンケート」から見えた幾つかのポイントを取り上げ、浄土宗檀信徒のお葬式の実態と意識についてご報告させていただきたいと思います。

①浄土宗総合研究所アンケートの概要

調査の目的は、浄土宗檀信徒の通夜、葬儀、戒名についての実態と意識、また死者観と他界観について知ることです。お葬式を喪主としてどのように行ったかという「実態」、そのうえで自分はどのように行いたいかという「意識」の両方を見るための設問を設けました。

配布方法は、浄土宗正住職寺院5653カ寺に対して質問用紙3通を郵送し、各寺院の住職が平成元年以降にお葬式の喪主を務めた檀信徒3名に対し配布するという方法を採りました。回収方法は、回答者が直接に総合研究所に郵送する方法です。配布数16959票、有効回答数3184票（回収数3260票、回収率19％）。性別比は、男：女＝3：1。年齢構成は50歳代25％、60歳代34％、70歳代24％でした。なお、本調査の配布方法（寺院住職が檀信徒3名に配布）から、寺院に対して好意的、またお葬式に対して伝統的な観念を持った人が多く回答していると推定されます。

この研究に関するこれまでの発表を簡単にご説明させていただきたいと思います。

まず、『教化研究』17号に、単純集計を掲載させていただきました。翌年、『教化研究』18号では、全国の平均値、近畿、東京・神奈川という3つの比較を行いました。その上で、2008年4月から2009年3月号までの間に『宗報』に「崩れゆく葬祭のこころ」という題名で12回にわたって連載をいたしました。

今回の発表では、『宗報』連載で取り上げた中での幾つかのポイントを取り上げたいと思います。今発表では、北海道や東北、関東というような用語が比較の中で出てきますが、そのような場合には、地方教化センターというようなブロックを指して用いております。また、今回は特に、お葬式の実態と意識に大きな変化があったと推定される東京教区と神奈川教区を足した数値も比較の一つの基準として出していきたいと思います。なお、今発表で「お葬式」という用語は、枕経、通夜、葬儀式、出棺式などの一連の流れとして、お葬式という言葉を使いたいと思います。

②お葬式をしたいと思いますか

全国平均値では、およそ9割の人が「してほしい」（必ずしてほしい＋できればしてほしい）と考えていることがわかります。しかし、地域によりその数値には差が見られます。東北、九州が高く、関東、北海道がやや低く、その差は10％あり地域による差があることが明らかとなりました。

「してほしくない」と考える人は、全国地では3％ですが、関東、北海道ではその数値が高く（5％）、特に東京・神奈川に限ってみると8％と高い数値を示しています。なお、「してほしくない」理由として最も高かったのは、「遺族に面倒をかけたくない」というもので、特に東京・神奈川ではこの数値が高いことが明らかになりました。

「してほしい」と回答した人に「どのようなお葬式にしたいか」と尋ねたところ、「浄土宗によるお葬式」を望む人は、東北が高く（84％）、関東、東海が低く（73％）、両者には10％以上の差が見られました。

③お葬式の意味と故人の存在について

お葬式の意味を尋ねた質問では、「故人を極楽浄土へ送る」（33％）が最も高く、次いで「故人との別れ」（30％）、「故人の冥福を祈る」（28％）であり、この3つの回答がほぼ拮抗しています。なお、「家の先祖になるための儀式」という回答は3％であり、非常に低いことが明らかとなりました。

また、「故人はどのような存在であると思いますか」との質問からは、「霊など存在しない」という回答は1％とわずかであり、「人は死んだ後も何らかの形で存在する」との考えを持っていることが明らかです。そして死者は、困ったときに具体的に助けてくれる、あるいは生きている者に良くないことを及ぼすといった、具体的に力を及ぼすという存在ではなく、生きているものを「見守ってくれている」存在として捉えている（85％）ことが分かります。

④お葬式と戒名の関係性について

「戒名を希望する」55％、および「すでに戒名を持っている」16％であり、戒名を必要とせず、「生前の名前のままでよい」と回答した人は12％見られました。これを年代別に見ると、年代が上がるほど「戒名がほしい」「戒名をすでに持っている」という比率は上がります。しかし、「生前の名前のままでよい」との回答は20代から60代まで13％～16％と類似した数値を示し、70代・80代の7％という数値と大きな隔たりを見せます。60代、50代の人々が今後10年、20年と年を重ねた時、この「生前の名前のままでよい」という数値が減っていくのか、それともそのままの数値を保つのか、注目する必要があると思います。

この「戒名を希望するか」という設問と「お葬式をしてほしいか」という設問とあわせて考えてみると、お葬式の意識と戒名の意識とには、大きな関連性が見られることが明らかとなりました。つまり、「お葬式をしたくない」と考える人のほうが、「お葬式を行いたい」と考えている人に比べ圧倒的に戒名を望んでいないのです。しかし、「お葬式をしたくない」と回答した人の中でも、「戒名を希望する」（12％）「すでに持っている」（16％）が見られることから、現在一般的に行われている「没後に仏弟子となる授与戒名」という浄土宗のお葬式が持つ意味が伝わっていない可能性があることも指摘できるでしょう。

⑤女性の意識について

女性の回答者は全体の4分の1（25％）ですが、地域によってその数値は大きく異なります。北海道、九州では女性の割合が45％と全体の半分近くをしめる一方、東北では17％、北陸では19％と2割を切っています。この女性の回答者率の相違は、女性の喪主の比率をある程度反映していると思われます。このような地域による相違は地域特性と関係しているのでしょうが、残念ながら、今のところこの理由を判断する材料を持っていません。

女性の喪主で、誰の喪主を務めたかを見ると、男性の場合には「実父母の喪主」（73％）（「妻の喪主」8％、「配偶者の父母の喪主」8％）

が多かったが、女性の場合には「夫の喪主」（66％）（「実父母の喪主」18％、「配偶者の父母の喪主」11％）を務めるケースが多いことがわかります。女性が喪主を務めたお葬式は全体の4分の1に及び、さらにそのうちの66％が夫のお葬式の喪主を務めているということは、祭祀継承の形態が変化しつつあることを伺わせます。つまり、お葬式が従来の「家」の継承者となる男子が喪主を務める「家」のお葬式」から、近年では一番近しい関係の人が喪主を務める「家族・個人のお葬式」へと変化しつつあるということです。このことは喪主を務めることにより社会に家の跡継ぎを示すというお葬式の持っていた「社会的意味」が薄れ、その代わりに家族での「個人的な愛慕」が強く表れる場へと変わりつつあるといえるかもしれません。

また、お葬式に対して女性は男性と異なる意識を持つことが明らかになりました。

「お葬式を必ずしてほしい」の回答値を比べると、男性が50％であるのに対し、女性は28％です。また「お葬式をしてほしくない」を見ると、東京・神奈川の男性は6％であるのに対し、女性は13％という数値を示しています。つまり、男性に比べ女性はお葬式に対してやや消極的であることが分かります。特に東京・神奈川の女性にはこの傾向が顕著に見られます。

また、女性は「お葬式をしてほしい」と望む場合でも、家族から友人までの「狭い関係」の人に来てほしいと望んでいる人が多いことが明らかとなりました。「どの範囲の人に、自分のお葬式にきてほしいですか?」という問いに対する回答選択肢は、「家族・親戚・友人・地域の人々・仕事関係の人々・遺族の関係の人々」との分類であり、「家族・親戚・友人」までが地域や仕事関係を含まない「狭い関係」の範囲といえるでしょう。この狭い関係の範囲のみに来てほしいと回答した人をみると、男性23％であるのに対し女性は45％となり、半数近い女性はお葬式を友人までの交友関係（狭い関係）の人だけに来てほしいと考えていることが分かり、男性とは大きな違いが見られます。

これを教化センター別に比較してみると、家族・親戚・友人までの「狭い関係」を希望する割合が高いのは、北海道が53％、関東60％で、東京・神奈川を見ると71％にも上ります。逆にこの割合が低いのは東北で25％と全教区数値より20ポイント下回ります。

そして「地域の人々」を含む「4. 家族・親戚・友人・地域の人々」を選択する人の割合は全教区では32％であるのに対し、東北は49％と17ポイント上回っていました。それに対し、関東は20％、東京・神奈川では16％と都市部の女性の地域共同体への意識が低くなっている傾向が数値から伺えます。このように、地域社会との関わりに関しては、地域によって大きな違いが見られることが分かりました。

⑥小括

アンケート結果からは、お葬式は、「『家』のお葬式」から「家族・個人のお葬式」へと変化したことが指摘できるでしょう。それは狭い範囲の参列者しか集まらないお葬式、また一番近しい関係の人が喪主を務めるお葬式が増加している（特に、東京・神奈川といった都市部。さらにいえば、東京・神奈川の女性）ことからも明らかであると思います。

また亡くなった人は「見守ってくれる存在」と回答した人が大多数を占めたことからも、亡くなった人は家の先祖の一員となり子孫の守護をするという「家」を基盤とした関係から、生前の家族関係を保ちながら「遺してきた家族を見守り続ける」という家族・個人を基盤とした関係へと変化したことが、巨視的にではあるが見て取れるでしょう。

しかし同時に、地域によりお葬式の実態やそれに対する意識には大きな違いがあるということが明らかになったことにも注目すべきでしょう。この相違は、もともと各地域が持っていたお葬式に関する文化背景によるものなのか、あるいは共同体意識や「家」意識の希薄化の進展具合の差異によるものなのか、容易に判断することはできません。しかし少なくとも、現在、地域によって、お葬式が持つ意味や役割に違いがあるということは指摘できると思います。

パネルディスカッション　第二発表

曹洞宗の立場から

竹内弘道

武田　ただいまの名和研究員の発表は浄土宗総合研究所のアンケートだったわけですが、同じように、曹洞宗総合研究センターで葬祭に関するアンケートと、その分析、報告が行われております。その成果を踏まえまして曹洞宗総合研究センター主任研究員の竹内弘道先生よりご報告いただきたいと思います。

先生は現在、駒澤大学の非常勤講師を務める傍ら、曹洞宗総合研究センターの現代教学研究部門の主任研究員を務めていらっしゃいます。よろしくお願いいたします。

竹内　よろしくお願いいたします。私の発表は、レジュメに沿って、言葉を補いながら発表させていただきたいと思います。

今、ご紹介にありましたように、曹洞宗は『葬祭―現代的意義と課題―』（２００３年）という研究成果を発表しております。この刊行に当たりましては、冒頭に石上所長先生から説明がありました、浄土宗様の研究成果『葬祭仏教―その歴史と現代的課題―』を意識

して、これを乗り越えるべく研究したわけでございます。しかし、まだまだ不充分でいろいろな課題が残されております。

本日は、この『葬祭―現代的意義と課題―』の内容に沿った形で発表させていただきたいと思いますが、多分にその内容は、今回の浄土宗様の調査とは異なり、葬祭を主宰する僧侶の側に力点が置かれておりますので、その点はご了承いただきたいと思います。

現代日本において「葬式仏教」が不当に否定的ニュアンスをもって語られる大きな原因には、これまでの歴史観が深くかかわっていると思われます。基調講演において池上先生が述べられました比較宗教学からの指摘が、いわば空間的視野を拡大することによって、従来の固定観念を相対化し、解体するものであるとすれば、これから申し上げます新たな歴史観の獲得と共有は、時間軸上におけるこれまでの知識を再編成することによって、従来の固定観念を相対化、解体する作業であるということもできると思われます。

「葬式仏教」を否定的にとらえる歴史観とは、明治以降、営々と築き挙げられてきた日本仏教史観であって、「鎌倉新仏教」を創出した法然上人を初めとする、親鸞・一遍・栄西・道元・日蓮などの各祖師の革新性を高く評価したもので、「祖師中心史観」と称されるものであります。

先ほどの池上先生の基調講演と内容が重複するところもございますが、このような歴史観察が形成されるに至ったのは、明治以降、西洋文化に触れて近代的自我を確立する過程で、これらの祖師たちの思想が近代的な「個」の宗教に通じるものとして再発見されたという時代的な背景もあります。また、戦後においては、「鎌倉新仏教」の民衆的性格や、国家と一体化した旧仏教からの弾圧に屈しない姿勢などが、高い評価を得ることになったわけでございます。

しかし、こうした祖師中心史観は、鎌倉時代以降の南北朝・室町・戦国期から近世にかけての歴史については、開祖の高い宗教的理念が失われて、世俗化と堕落が進んだととらえる傾向が共通して強いのであります。しかし、実際は、この時期こそ各教団は、人々の宗教的ニーズに応える形で、大きく教団を発展させたのであり、その宗教活動の中心が、他ならぬ葬祭儀礼の執行だったわけです。

「葬式仏教」に対する否定的ニュアンスは、これまでの日本仏教史の上で、僧侶が葬祭儀礼にかかわることが肯定的にとらえられてこなかった、その反映と考えられるわけです。

しかしながら、近年は、こうした固定的な仏教史観を打ち破る新しい歴史観が提示されてきています。例えば、松尾剛次氏は、鎌倉新仏教の祖師たちのほとんどが、比叡山などで官僧として、つまり、国家に認められた公的僧侶として出発しながら、やがて、その地位を捨てて遁世僧となり、民衆の中に入っていって、それ以前の仏教

がなし得なかった葬祭儀礼などの救済行を行ったこと、そのことを「鎌倉新仏教」の特徴としてとらえています。

そして、こうした活動を可能にしたのは、彼らが独自の信仰や修行によって、その時代の精神を支配していた「穢れ」の観念を超克し、「死穢」を厭わなかったからだったと指摘しています。

浄土宗を例にとれば「往生人に穢れなし」という言葉がございます。これは念仏僧の自負の念をあらわす言葉として受けとめることができるわけでございます。

このように私たちは、自らの歴史に、新たな歴史観を獲得することによって、むしろ「葬式仏教」は、鎌倉新仏教が民衆の宗教的ニーズに応えた姿であったのであり、これによって仏教は広く民衆に浸透することになったとして、積極的な意義づけができるようになるのであります。

冒頭にこのように述べましたのは、歴史観というものは、私たちにとって非常に重要な意味を持っていると考えるからであります。歴史観は時として大きなイデオロギーともなり、たびたび日本の歴史を動かしてきました。例えば、明治維新にしてもそうですし、後醍醐天皇の「建武の中興」といわれるものにしてもそうでした。その背後で、歴史観が大きな役割を演じたことを思い起こしていただければその影響力の大きさが分かるかと存じます。

つまり、日本の伝統仏教教団は、今まで自分たちを肯定的にとらえる歴史観を持ち得てこなかった、そこに不幸があったのではないかと思うわけでございます。

さて、『葬祭―現代的意義と課題―』は２００３年に曹洞宗総合研究センターが作成した研究成果でございますが、背景の問題意識として、今日、宗門僧侶が葬祭儀礼に従事することを肯定的に受け止めることができないでいるという、その現実を踏まえて企画されたものです。

私はこの書の冒頭で、従来の歴史観からの呪縛を解き放つべく、これまで述べてきたような、新たな歴史学の成果を紹介しました。しかし、私たちには、ほかにも重要な課題がありました。それは、禅の宗旨から民俗としての葬祭儀礼をどのように意味づけたらいいのか、意味づけるべきか、つまり、宗旨と民俗の乖離の問題でございます。さらに、他界観または来世観の問題、および霊魂観の問題でございます。

禅は現在・此処での生の充足、今生で悟りを得ることを根本とする教えなので、実は明確な他界観や葬送観を持っているとはいいがたい面がございます。そこで、宗義と葬祭民俗の架け橋となるさまざまな意味づけや、葬祭の社会機能について検討がなされました。

皆様のお手元に本の目次が届けてあると思いますが、それによっ

てこの本の大体の内容がおわかりいただけると思います。第Ⅰ部の第2章あたりが、葬祭の宗義からの意義づけということになります。

例として、どのような意義づけがなされたかと申しますと、例えば、葬儀を、受戒し仏弟子となって、これからはるかな仏道を歩み始める儀式、そのように意義づける「はるかなる仏道」という考え。あるいは、授戒し成仏させ、死というものを、無常を悟って成仏したその時点とみなして、葬儀はその後の悟りの「覚路」を荘厳する儀式であるとする意義づけ。あるいは、遺族の悲しみを癒すための「悲の同事行」、同事行というのは、相手の立場に立って相手と一体になるということですが、そういう悲しみを癒すための同事行と位置づける。こういったいくつかの意義づけの試みがなされているわけでございます。

他界観についても問題がございます。曹洞宗の葬儀法は『禅苑清規』という中国宋代の禅寺の規矩・儀礼が記された書物によっており、この中の「亡僧」の葬儀法を転用したものですが、その他界観は、禅浄双修思想が反映した中国の回向文の借り物でございます。しかも、回向文から浄土の語句を不徹底に消去しただけのものです。この点、臨済宗は気にせずにそのままこうした回向文を使っております。

私たちの葬送儀礼は「没後作僧」の儀礼と申しますが、それは「死後授戒」を行い、成仏させて送り出す儀式でございます。しかしながら、今申し上げましたように、回向文の中から、行き先である浄土は消してあるわけです。すでに成仏させたのだから浄土は必要ない、という理屈であろうと思われますが、では、成仏した人はどこに行くのかというと、その点が実は曖昧になっているわけであります。行き先なき魂はどこに行くかという問題は、そのまま残っているわけでございます。

こういった点に関しまして、今回の浄土宗様のアンケート調査を読むと、その結果に対して、私は驚きを禁じ得ませんでした。「あなたは亡くなったらどこか行くか」という質問に対し、調査したすべての世帯の6割から7割の人が「極楽浄土へ行く」と回答しているわけでございます。これはちょっと太刀打ちできないな、という感がするわけでございます。

アメリカのオバマ大統領の支持率が62％ということですが、それに匹敵するわけでございます。現在の麻生政権の指示率が20％以下ですので、これと比べると、いかに6割、7割というのが高いかということがわかると思います。

この点に関しまして、曹洞宗の調査ではどういう結果が出ているかと申しますと、複数回答可能な調査ですので同列には比較できませんが、そこに挙げてございます。

「死後の世界がある」と答えた方が、曹洞宗では明確さを欠いておりますので、40％強なのです。その程度です。

つぎに、死後どこに行くのかということに関して、多い順に挙げてございます。仏の世界54・1％、極楽浄土というのが45・9％でございました。宗旨にはないのですが、ちゃっかりお浄土をいただいています。あの世が38・3％、お墓・仏壇29・3％、天国が21・6％、お寺18・5％、非常にさまざまでございます。

この結果から見まして、改めて日本文化の中に、いかに強固に浄土教の来世観が定着しているかということを確認することができると思われます。

しかし、一方で、見方を変えるならば、この調査結果は別な解釈もできることに気づきます。ここからはかなり強引な解釈になります。つまり、曹洞宗では、明確な来世観を提示しているとはいえなくても、無回答で来世観を持たないというのは5・3％で、残りの檀信徒は何らかの他界観を持っているという解釈も可能だということでございます。さらに言えば、教団の宗旨に関わりなく、人々の心から死後世界の観念は消えることはないのではないかということであります。

そして、曹洞宗はむしろ、『禅苑清規』の回向文から極楽浄土を削除して、魂の行き場を曖昧にし、宗旨と葬祭儀礼の連関を欠いたがゆえに、逆に人々の多様な宗教的ニーズに応えることができたのであり、これからもそのためのメニューを柔軟に提示し続けることになろうということでございます。以上が、私たちの今のところの結論でございます。

以上でございます。

武田　ありがとうございました。ただいま、私どもの名和研究員の発表を受けまして、逆説的に曹洞宗の立場をお話いただきました。

パネルディスカッション　第二発表

社会学そして非僧侶の立場から　井上治代

武田　先ほど名和研究員から女性と葬祭の問題が出されました。午前の基調講演のなかで池上先生が新たな担い手としての女性の重要性についてご報告いただきました。次は、現代日本における新しい葬墓制から「いま葬送分野に何が起きているのか」について井上先生のご発表です。

先生は東洋大学ライフデザイン学部准教授でございます。現在、生死の社会学、家族社会学を教えるとともに、尊厳ある死と葬送をめざしたＮＰＯ法人エンディングセンターの理事長を務めて、市民

団体の活動を続けていらっしゃいます。主な著に『墓をめぐる家族論』、『新・遺言ノート』、『墓と家族の変容』、『子の世話にならずに死にたい―変貌する親子関係』などの著書がございます。

現代の家制度から離れた新たな家族が求めるもの、そして、その家族の中での新しい葬儀や墓制はどのような意味を持つのかというテーマでお話をいただきます。よろしくお願いいたします。

井上　ご紹介いただきました井上治代と申します。私は、少子高齢社会にあって日本仏教が葬祭および死に関与することは望ましいと考え、そう願う者の一人であります。ただし、そのさい「基盤の転換」なくしてよりよい方向への change はあり得ないと考えています。それは次のようなことからです。

日本仏教は家を基盤にした寺檀制度によって家の先祖の祭を介して存続してきました。「家」「先祖祭祀」「仏教」の三者は、相互補完的な関係にあって存続してきたといえるでしょう。そうであるならば、そのうちの一つである「家」が変化すれば、他の二つも随伴して変化するという仮説が成り立つわけです。僧侶のみなさんは「家族」の変化は意識していらっしゃる。しかし、今後も脈々と「家」の「先祖」の祭を仏教が担っていけばいいのだと思っていらっしゃる方が多い。家族が変化して、他の二つが変化しないわけはないという立場で、今日はいろいろとお話ししたいと思います。

ニュースなどでお聞きかと思いますが、今お葬式では家族葬、お墓では樹木葬、そして仏壇ではなく、手元供養が話題を呼んでいます。こういったものが意味する現代人のニーズとは何なのか、そのことについてお話し、日本仏教における葬祭仏教としての方向性を探ってみたいと思います。

①葬送問題の背景

戦後主流になった核家族は、子どもが巣立てば「夫婦だけ」、その一方が亡くなれば「独居」。結婚し家族を形成したからといって最後は一人になる。つまり「家族」という集団を単位に考えるのではなく、何事も「個」を単位に考えなければならない社会の到来を意味しています。このような状況の中、これまで家族が担ってきた介護をはじめとする家族機能が、家族だけでは担えきれず家族外部化し、社会化の方向へ向かいました。

当然この構図は死および葬祭についても例外なく及んでいます。核家族が一代限りで消滅する不連続の家族であればこそ、代々継いでいくという継承制で成り立っている寺檀制度や墓制は、問題化する構図をはらんでいるといえるでしょう。「家」の本質的な特徴と、核家族のそれを比較すると、「永続」対「一代限り」、「単系性」対「双

方性」（夫方と妻方の、双方の親を親とみなす）といったように二つは大きく異なっています。ここに、墓の継承問題発生につながる構造的な違いがあるのです。

１９８０年代後半ぐらいから、家族の第2段の変化が起こりました。それは、配偶者や子どもを持たないライフコースを選ぶ人々、すなわち結婚しない、産まない人の増加。これは墓から見れば、跡継ぎを持たない人の増加を意味しています。

また、少子高齢社会にあっては、長男長女同士に代表されるように、夫方、妻方、双方の墓の継承を期待されている夫婦が増えて、妻方の墓の継承困難はより顕著になってきました。さらに、自立的に生きようとする妻の中には、墓を通じて夫側の家への所属を強いられることに苦痛を感じる人も出てきています。戦後の民法では、結婚したからといって夫の「家の嫁」になるわけではないので、夫婦が単位の家族理念や男女平等意識が根づいた社会になると、父系男子で継がれてきた墓祭祀が疑問視されても当然な流れでしょう。

②１９９０年代に登場した傾向

１９９０年前後から死者祭祀に状況適合的な変化が起こり、代替システムが登場しました。私は、１９９０年代に登場した墓をめぐる傾向を次の４つに分類しています。①継承を前提としないお墓が登場して「脱継承」、②遺骨を海や山に撒いて自然に還るという「自然志向」、③家という集団が単位の葬送から個人が選ぶといった「個人化」の傾向、さらには④夫方妻方、双方の親を一緒の墓に祀るという両家墓などが増えて、現代では墓にも「双方化」の傾向が認められます。

③息子がいても墓は継承困難

新潟県の妙光寺の跡継ぎを必要としないお墓「安穏廟」の申込者の属性を見ますと、興味深いことがわかります。皆さんは、跡継ぎを必要としない永代供養墓を申し込む人は、どのような方たちだと思われますか？　一般的には「子どものいない夫婦」「単身者」といった答が返ってきます。しかし、実態はそうではないのです。一番は、子どもが「娘だけ」、2番目は「息子がいる」ケー

表１　「安穏廟」申込理由別件数　数字は2003年1月15日現在

申込理由	件数	%
①子どもが娘だけ	116	25.7
②息子がいる	100	22.2
③子どもがいない	89	19.7
④単身者	43	9.5
⑤夫と別墓を希望	40	8.9
⑥離婚者	25	5.6
⑦再婚者	20	4.4
⑧その他	18	4.0
合　計	451	100.0

スです。つづいて「子どもがいない夫婦」「単身者」となります。そのあとは「夫の家墓を拒む人」「離婚者」「再婚者」の順です。上位2位とも、「子どもがいる」人たちです。「息子がいる」人は、これまで墓の継承でいえば何ら問題のないケースですが、そういった人たちが買っているということは、すでに継承制が制度疲労を起こしていることにほかなりません。具体的に言いますと、息子が四十幾つでまだ独身とか、息子が結婚したけれども子どもがいないとか、息子が結婚し子どもがいるけれども、生まれてきた息子の子＝孫が全部女の子とか、息子が海外に住んでいるとか、息子が「嫁さん側についちゃった」というようなことも多々起こってきています。また長寿社会ですから、80、90代の親より、60代、70代の息子の方が先亡くなったなどというケースもあります。

④サポートネットワークの変遷

子どものいない高齢者世帯が、約10年前の１９９８年で158万世帯（「住宅・土地統計調査」から推計）もあります。このような人々は、葬儀の担い手やさらには死後の供養をしてくれる人を持たない場合がほとんどです。したがって「喪主」や「死者供養」の家族外部化ということが起こっています。永代供養墓を持っている寺院が合同祭祀を行ったり、遺族に代わって故人の供養を行う行為もこれに当たります。私はＮＰＯ法人エンディングセンターで活動していますが、そこでは、子どものいない会員の方が亡くなった後、喪主となって、納骨や死後の事務処理、部屋の後片付けまで代行しています。

農業を中心とした社会では、家族・親族・地域共同体が強固に機能していました。「村八分」という言葉が示すように、葬儀は火事とともに共同体が担うものとして保証されていたのです。ところが、戦後、高度経済成長期を迎えて近代化した社会では、家族は核家族化して小集団となり、都会を中心に共同体は希薄化して会社関係者が葬儀を取り仕切るようになりました。いわゆる「社縁」です。

そして１９９０年以降、高度経済成長が終わり、近代化をなし遂げたポスト近代社会に出てきたものの一つに、墓を核として集まった人々の結縁による「ゆるやかな共同性」があります。それは家族も含みつつ、家族だけでは担っていけないものを、宗教者を中心に（家族を含むが）家族を超えた人々で支えていきます。

家族・親族・地域共同体といった他者との境界がはっきりした大集団が消失し、さらに家族という小集団としての共同体が弱体化したとしても、その代替の形態として個人が選択的に結んだ網の目のような関係性が捉えられ、境界のはっきりしている共同体とは違った、「ゆるやかな共同性」の存在が確認できるのです。

⑤樹木葬墓地

樹木葬墓地は、１９９０年代に出てきたお墓の傾向の中で、脱継承、自然志向、個人化といった特徴を全部あわせ持ったお墓です。私が行った「樹木葬墓地申込者の意識調査」（２００２年、有効回答183人）の結果を見ると、樹木葬墓地を申込むとき、墓が「なかった」（36・6％）が最も多かったのですが、「継ぐ立場にある家のお墓があった」（17・5％）と「自分の代で買ったお墓があった」（9・8％）を合わせると3割弱の人が既に墓をもっていたこともわかります。このように墓をもっていない人ばかりか、既に墓を所有している人があえて樹木葬を選び取っていることがわかります。

また、樹木葬墓地を選んだ理由で一番多かったのは（同調査、三つまで複数回答可）、「自然に還ることができるから」（76・5％）でしたが、注目すべきは二番目に「継承者がいなくてもいいから」（43・7％）という継承制をとらない点が指示されていることです。三番目に多かったのは「木を植え、その下に眠ることがいい」（41・5％）で、散骨のように特定できないのではなく、シンボルがある方が良いということを示唆する回答でした。同じ自然に還る葬法でも散骨ではなく、樹木葬を選んだ理由を尋ねると（同調査、三つ以内の複数回答可）、「墓地として許可を得た場所なので、安心である」53・0％、「死んだら木（花）になることにロマンを感じる」44・8％、「墓標が全く何もない散骨より、遺骨を埋めたところに標があって特定される方がよい」24・6％の順で多く、「木」とい

う「標」にその良さを感じていることもわかりました。

⑥近代化を成し遂げたあとの社会に出現した墓

日本で言えば1990年以降の近代化を達成した後にやってきたポスト近代社会では、いくつかの国で同じような傾向が見られます。例えばスウェーデンの「安らぎの丘」と、日本のNPO法人エンディングセンターの「桜葬墓地」と比べてみると、ほぼ同じようなものができております。

桜葬墓地は、樹木葬の一種で、シンボルとなる木を桜にしたものですが、個別区画を持ちながら、それが隣接する形で一つの墓地を形成している集合墓です。ただし住宅で言うところの「集合住宅」のような形態です。個別区画はあるが、外柵などで囲んではいません。芝生を囲む縁石に番号が記してあって、縦と横軸に紐を張ると個別の埋葬場所が特定される形式になっています。近くには埋葬者の生没年月日が書かれた銘板があります。

スウェーデンのリーディンゴ市の「安らぎの丘 Vilokullen」も、日本のエンディングセンター「桜葬」墓地と同じように、芝生の下に個別区画があり、特定する外柵などないですが、芝生を囲む縁石に番号が記してあって、そのそばに同様な銘板が置かれています。このような外柵のない個別区画が隣接して一つの墓をつくり、埋葬場所には墓標がないが、近くに銘板があるような形態の特徴を「半匿名性」と言っています。

また、NPO法人エンディングセンターの桜葬墓地「木立」では、2008年1月時点で101区画が売れている中、5人まで入れる家族用47、2人用41、1人用13区画で、家族用が一番多いことがわかりました。家族用といっても夫婦で申込むケースが多く、申し込んだ人々は「子どもたちが入るかどうかわからないが、将来一緒に入りたいと思ったときに入れるように」と話しています。子どもに墓の管理を負わすことなく、しかし一緒に入りたければ入ることもできる。このように現代の核家族の特徴があらわれていて、興味深いものがありました。

⑦手元供養

次に、私が手元供養品購入者を対象に行った「家庭内死者祭祀の変化に関する意識調査」の結果をお話ししたいと思います。まずはじめに、仏教寺院にとって「蚊帳の外の話」ではないということからお話したいと思います。と申しますのは、回答者のうち6割が「寺の檀家」で、「仏壇がある」人が8割もいるのです。「仏壇（位牌）と墓、どちらもある」が65%、「仏壇（位牌）だけある」が16%、「お

墓だけある」が5％、「どちらもない」13％でした。

そこで、「手元供養」を選んだ理由（上位3つ以内）を見ると、「故人の一部である遺骨は、仏壇や位牌より身近に感じられる」59％、「そばに置いてあげたかった」55％、「持ち歩くことができて、いつも一緒にいる感じがいい」29％の順でした。

表2　手元供養品に入っている故人（遺骨）に対して、日常で行っていること（％）

		無回答	ほぼ毎日	2～3日に1回	週に1回	月1～2回	命日・彼岸
1	特に何もしない	6					
2	話しかける	0	54	8	5	1	0
3	飲食物を供える	1	43	6	2	1	2
4	手を合わせる	1	56	9	4	2	1
5	手に取る、持ち歩く	2	17	4	4	2	5
6	経を読む	0	11	2	0	0	8
7	宗教的な祈り	0	10	2	0	1	4
8	その他	0	4	1	2	1	0
9	無回答	2					

8割もの人が仏壇をもっているなら、仏壇でいいじゃないかと思いますが、それだけでは満足できない現代人の意識が「自由回答」から浮き彫りになりました。

「仏壇やお墓に手をあわせても、実感がわかず、まして配偶者の祖父母や代々の先祖の顔も知らないのに、ただ儀式的な感覚でしかありません。出来れば、娘の遺骨は、血縁や家というものにとらわれず知らない人たちのお墓には入れたくはないですが、そういうわけにもいきません。ほんの少しの遺骨でも、娘の一部であり、手元供養をすることにより、より身近に娘を感じられるし、何よりも一緒に居られることの嬉しさをかみしめています。亡くなった娘もその方が喜ぶのではないでしょうか。仏壇やお墓にはない、常に故人を偲べるということは、私にとっても何よりの喜びです」という。

さらに集団から個人への価値意識の転換で、「仏壇は先祖、手元供養は親」として、個人を祀ることへの意識が高まっていることがわかります。「神棚に手を合わせるのは、今の自分や家族が無事にいられることの先祖代々への感謝の気持ちの表し方であり、手元供養は自分を生み育ててくれた母故人へのいつまでも一緒にいたい（近くで見守っていて欲しい）との気持ちの表れです」「仏壇は宗教心の対象。手元供養は自分に近しい人物を偲ぶ」というように、R.スミスのいうメモリアリズムが、家庭内の遺骨祭祀という形態で表出しているといえるでしょう。

説明は省きますが、そのほか手元供養には「伴侶性」「個別性」「分配性」「携帯性」「継承性」「墓をつくらない散骨者と生者との接点」という特徴もありました（詳細は『生きがい研究』第10号（財）長寿

社会開発センター参照)。

手元供養品に対して、どのような行為を行っているかというと、「特に何もしない」はたったの6%だけで、毎日行っていることは「話しかけている」が54%、「食べ物、飲み物をあげている」が43%とか、「手を合わせる」が56%とか、「経を読む」が11%で「宗教的祈り」が11%でした。この人たちの8割は仏壇を持っている人たちですが、手元供養品で全く仏壇の前と同じようなことをやっているのです。

伝統的な他界観や霊魂観が現代人には意味を持たなくなり、故人の一部である「遺骨」が、その人が確かに存在した証となって祭祀の対象に選ぶ人が出現しているようです。

⑧家族葬に

家族葬に関しては、時間の関係で簡単にまとめますと、会社関係者や近隣の人々など、義理の関係者の、葬儀への参列を拒み、悲しみを共有する家族だけで、あるいは加えても親族やごく親しかった友人だけで儀礼を行うような葬儀の私化・個人化の傾向です。V・ジャンケレヴィッチの分類で言えば(『死』仲沢紀雄訳、みすず書房、1978)故人を知らない人の「三人称の死」を排し、死者本人である「一人称の死」と、家族や親類、恋人など故人と深い関係にある「二人称の死」という立場のもので行うことを志向する傾向です。その背景には長寿化による高齢者の死、喪主世代のきょうだい数の減少などがあります。

⑨おわりに

現代は「集団から個人へ」価値意識の転換が起こり、仏教寺院も集団ではなく「個人を単位とした枠組み」が必要となっていると思います。しかし一方で私は、檀家制度はまだまだ需要がありますので、檀家制度も保険として残しつつ、そのうえで個人を単位とした「会員制」を導入することが望ましいと考えます。それには一事例として、家族だけを単位としない「継承を前提としない墓」が有効です。その試みが既に仏教寺院で行われています。「永代供養墓」を核として、そこに集まった人々による会員制をとって活動しているところでは、会員は自己決定して選んでいるわけですからモチベーションも高く、宗教性も高まっています。ある寺院における檀家と会員の、葬式や法事件数とその収入を比較しましたが、最初は檀家の法事や葬式の収入が多かったのですが、今では逆転しまして、会員からの収入が多くなっています。以上でございます。

武田　ありがとうございました。大変豊富な資料と、説得力のある内容を盛り込んでいただきまして、本当にありがとうございました。

後ほどいろいろな質問を受けて進めていきたいと思いますが、今の井上先生のお話にも、前半の基調講演にあった、人と人との結びつく新しい形とか、社会通念の変化、その変化が墓の形態や儀礼として現れて新しい要素が見えてきたような気がいたします。大変興味深い内容でございました。

パネルディスカッション　第三発表

「崩れゆく葬祭のこころ」を構築し直すための葬祭現場からの提案

溝口勝巳

武田　最後に、東京西部の八王子市で、三代にわたって葬祭業溝口祭典を経営していらっしゃいます溝口勝巳社長に現場からお葬式の変化、見える姿、そして、現在の寺院葬儀に関する率直な提言をご発表いただきます。八王子市は人口が50万人を超える都市ですが、半数が流入民という、旧市街地と新市街地がくっきりドーナツ型に分かれている都市で、保守的な従来の住民と革新的な小家族の近年の住民によって構成されている複雑な現代の状況に直面している都市です。よろしくお願いいたします。

溝口　自社の今後の経営を考える中で、八王子も次第に直葬（ちょくそう）（病院などから直接火葬場に行き、通夜・葬儀を行わないこと・読経の有無は問わない）や無宗教葬が増えつつあることに焦点を当てた結果、このままで行くと葬儀がなくなってしまうかもしれないという死活問題にまで発展してまいりました。「葬儀の減少を食い止めるためにどうしたらよいか」と考え、それができるのは唯一ご僧侶であると思い、昨年提案書を作り、八王子市仏教協会の理事長を始め、数カ寺のご僧侶に送付提案申し上げました。このシンポジウムのコーディネーターであり、また地元で信頼申し上げております武田先生にもご意見をいただこうと思いましたところ、たまたま先生も同様な問題に対して大いに危惧され、調査していらっしゃいました。それがご縁でこのように意見を申し述べる機会をいただいた次第です。

①ご僧侶はご存知ない？

本日のメインタイトルの「崩れゆく葬祭のこころ」――、ご考案者の意図は不明ですが、さて、誰の葬祭のこころが崩れつつあるのでしょうか。私はとりもなおさず「ご僧侶も含めた大衆の」葬祭のこころが崩れつつあると思います。大衆の意識の変化も原因ですが、結果として葬儀を行わなくなってきたのは、葬儀自体に価値と魅力を感じなくなったからであって、その責任の一端は、ご僧侶であり葬儀社にあると思います。ご遺族は祭壇料やお布施の仕組を

しっかりと理解することなく葬儀を終えるので、それらに実質的な価値を見出すことができないでいます。しかしこの問題の所在は「高額」にではなく、まさにお布施などの明解な説明不足にあると思います。先程の名和先生の発表の中で、「浄土宗で過去十年内に葬儀をされたお檀家なのに、約一割の方が菩提寺での葬儀も戒名授与も希望しない」とありました。これは、ご住職からすればとんでもない話でしょうが、実は葬儀の現場では決して驚くことではありません。菩提寺があるにも拘らず、渋々そこに依頼せざるをえない檀家さんが少なからず存在しているからです。

例えば、ご僧侶は通夜・葬儀に遅刻しても通常叱られません。ご遺族は心の中で、グッグッと思っても口に出して言えません。しかし、葬儀社はいかなる理由であれ、遅刻をすると烈火の如く叱られます。これは象徴的な例ですが、ご僧侶は檀家の真意の多くをご存知ないのが実態です。

②説明責任の必要性・本来のお布施について

このままでいくと、信心・信仰・信頼の場であるはずの道場すべてが商業化し、だんだん菩提寺と檀家の関係が希薄になってゆく気がして仕方がありません。とにかくまず少しでもつながりのしっかりしている、菩提寺と檀家の関係を強化して確実なものにする必要があると思います。その中で、ご僧侶はその基盤でもある「お布施」についての明解な説明と、その実践が不可欠と考えます。

『お布施ってなに?』（藤本晃著）には、「お布施」は見返りを求めないで善い何かをしてさしあげることとあり、例えば電車の中で席を譲ることもそのひとつです。布施波羅蜜といって、悟りを開くための重要な徳目のひとつと理解しております。善いことをすると気持ちも豊かになります。そして、それは心に蓄積するとも言われています。

葬儀において、ご僧侶はご遺族から依頼を受け、故人の供養のために読経と法話などの法施をします。ご遺族はそのようにお導きいただける仏教に対して感謝し、仏法を守り伝え広めるために財施をします。お互いが「見返りを求めないで善いこと」をするのです。つまりこれらが、同時に同じ場所で行われるので、あたかも読経や戒名の報酬であるかのように思われてしまいますが、これらはそれぞれ別の行為です。あくまでもお布施は「報酬」ではありません。これからも「報酬」で捉えられた場合に、読経や戒名が商品になり、お互いの信頼関係が崩れてしまうのではないかと危惧します。ご僧侶だけでなく、社会も大衆も協力し合い、心からお布施をしたくなるような仕組みと環境を作らなければなりません。全日本仏教会の課題のひとつ、「戒名」に対するさまざまな批判を解決する手段は、

まさに「お布施の理解を深めること」しかないと思っております。

③一般の方々の姿勢

葬儀の打ち合わせの際に、菩提寺から高額なお布施を要求されて困るという話を聞きます。平成20年の読売新聞に掲載された意識調査の中で、「信仰する宗教はない」が70％以上なのに、いまだ葬儀を仏式でされる方が大多数です。ご僧侶にも問題がある場合もありますが、批判的な方の大多数は俄か仏教信者なのかもしれません。一方的にご僧侶を批判するのでなく、一般の方々の信仰そのものも同時に問われてしかるべきでしょう。例えば、毎週教会に献金をするキリスト教信者の方が、通常は仏教信者よりも信仰に掛ける費用が断然多いことを考えますと、お布施の高額感をなくす対策のひとつは、ご僧侶が俄か信者の信仰心を引き出してあげることだと思います。信仰の篤い、また謙虚な仏教徒は、きっと心から感謝をしながらお布施をするはずです。

話を戻しますが、「お布施」は仏教界全体の問題ですので、全日本仏教会が中心になって、少なくとも浄土宗が率先して取り組んでいただきたいと思います。個々の寺院ではなかなか対応しきれず、広がりません。まずこれをしてから、檀信徒の意義や戒名の意味、葬儀や法事の目的などをしっかりと説明していただきたく思います。その際に、私たちはそれらの事柄をしっかりと受け止めることのできる姿勢でありたいものです。

葬儀社も、大衆が納得のできるような説明をせずに、いまだに時代遅れの受注を繰り返しています。私は自分にも責任の一端があるので、率先して改善するように努めております。「祭壇」も「お布施」共々、分かりにくいものの双璧ですので、葬儀社は同様に説明責任を果たしてゆかなければなりません。

④価値のある葬儀

二年前ですが、妻の友人でキリスト教の日本聖公会の信者同士の結婚式に夫婦で招待していただきました。本当に嬉しかったので、心が無防備な空っぽの状態で参列をしました。その式は司祭の巧みなお導きで、新郎新婦と参列者が心をひとつにして祝福できた、予想をしてもみなかったほどの素晴らしい儀式でした。これは結婚式での体験でしたが、私は二十数年間葬儀の仕事に携わってきて、あらためて対象者のことをよく知り、そして熟考をしたご導師が、皆を巻き込み、共に祈り、心を込めて送る儀式の重要さを学びました。それからの私は、ご導師のもと、皆が一体になって故人を送るような葬儀を強く望むようになりました。

私が存じ上げておりますご僧侶のお一人は、葬儀で読むお経の目

指すところや、大意を事前にご案内してくださいます。そして読経を聞きながら、一同が一緒になって式に臨みます。素晴らしいことです。よく「感動葬儀」などと耳にしますが、葬儀が、葬儀社の演出によるものでなく、ご導師による感動的なお導きでありたいと願います。それが現在の私の理想とする葬儀です。

すでにご賢察のように、冒頭の直葬や無宗教葬をされる方であっても、とても真摯な想いで送られる方も多くいらっしゃいます。これらの方々は、残念なことに、現在の仏式葬儀に失望し、価値を見出すことができなかったのかもしれません。

是非とも、ご導師のもとで、価値のある感動的な葬儀が行われることを望みます。そのためには皆で力を合わせて、ひとつひとつ乗り越えてゆかなければなりません。

そして、やはり、これらをお導きできるのは、ご僧侶しかいらっしゃらないと、あらためて思うのです。ご僧侶の更なるご尽力を期待して止みません。

【武田】

第二部の全体のセッションを始めさせていただきます。まず、全体の流れですが、初めに四人のパネリストの方々へのコメントを池上先生にいただきます。

そして、パネリスト同士で質問、意見などをしていただき、それに答えるという形を取りたいと思います。その後、フロアの方々からのさまざまな質問をお受けしたいと思います。

それでは、池上先生、よろしくお願いいたします。

【池上】

それぞれの発表を聞いて共通していたと感じたのは、家的継承制度というものが大きく崩れて、個人化が進んでいるという現実を前にして、仏教界全体の何らかの意識改革が求められているのではないか、ということであったと思います。ですから、ここでは、私のやや抽象的な議論で言ったことを、もう少し具体的に、どういう具体策があり得るのかというようなところに返すような形で、3点ほどにまとめてみたいと思います。

①アンケートというものの持つ危険性

ただ、その前に、一つだけ疑問点といいますか、アンケート調査というものの性格について感じたことを述べたいと思います。浄土宗や曹洞宗が宗門でこのようなアンケート調査をおやりになること自体、私は大いに敬意を表しているわけですが、ただ、数字というものが出てきますと、これがひとり歩きする恐れもあるということ

だけは一言申し上げておきたいのです。再三出てきたように、回収率が19%ということで、伝統的、保守的で、寺に近しい檀信徒に限られている。そういうことを最低限踏まえずに、何が何%、何が何%ということが全体の数字であるかのように受けとられてしまうと、それはまたちょっとまずいことにもなってくると思うのです。しかし同時に、極めて寺に近しい檀信徒でありながら、先祖という感覚を持つ人が少ないとか、そのあたりのところは大いに注目すべきことだろうと思います。

②日本人の抱く他界のイメージ

それと、もう一つ、前半の私の話との関連で気になったのが、他界観、霊魂観の話です。どこへ行くのかということですね。浄土宗のアンケートでは、死後どこに行くと思うかという質問に対して、「極楽浄土」という回答が多かった。これは、浄土宗の方々には極楽とか浄土というものが非常に浸透しているといえるのかもしれません。ただ、一般的に言って、今、若い人も含めて、極楽浄土という言い方がそれほど他界観として日本人に定着しているとは言えないだろうと思うのです。つまり、多くの人たちが、あの世とか、天国とか、浄土とか、よい場所とか、あの世で安らかになるというような言い方を、それほど違うものとしてとらえているだろうかということです。だから、固定的な観念、あるいはそれへの信仰ということを余りに固定化してしまうと、大切なものが見えなくなってしまうのではないでしょうか。

③儀礼の持つ力

それに対して、例えば、お盆には帰省をしてお墓参りをするとか、あるいは、人が亡くなって7日目にこういう所作をして儀礼をするとか、そういう実践というのは、非常に連続性を持っている。儀礼の持っている形の重要性ということを私は少し強調したいと思います。観念や信仰なんてどうでもいいということではないです。ただ、観念や信仰というものに余りにも目が向き過ぎると、死者供養、あるいは、葬祭というものが、信仰があるから儀礼をやっているのだという、どうしてもそういう先入観に捉われてしまうのではないかということです。

一つだけ具体的なエピソードを挙げますと、青森県には「カミサマ」と呼ばれる死者をおろす霊能者がいます。私は昔、その霊能者や信者さんと一緒に、岩木山の赤倉というところで行の登山をしたことがあります。そのときに同行したのは、何名かの中高年のご婦人の方々だったのですが、彼女たちは、山のある場所、八十八箇所という場所ですが、そこへ行くと死者がおりてくるということを皆

知っているわけです。これはもうお約束なのですね。そこに「カミサマ」と呼ばれる霊能者と一緒に行くと、それまでいろいろな話をしていたのが、急にその霊能者に霊がおりてきて、「これは誰だ、あんたのところの旦那じゃないか」などといって、そこではみんな泣いて、本当にリアルな死者の口寄せが行われるのですね。

それが終わると、皆がまた元どおりに歩き出す。その時に、リーダー格の女性の人に、「さっき旦那さんとか、子供さんとかいっぱいおりてきましたけれど、あの人たちは一体どこにいるんですか」と聞いたのですね。そうしたら、そのおばさんは、「おめェ、そんなこと、死んでみなきゃわかんねえべェ」（笑）と言われたのです。

もしその時に、その女性が「あの霊はこの山にいるんですよ」と言ったら、これは柳田国男の「山中他界観」がここでも証明されたというような話になったかもしれません。ただ、「おめェ、そんなこと、死んでみなきゃわかんねえべェ」なんですね。つまり、それが庶民の感覚なのです。

口寄せをして、そこで泣くような女性たちなら、はっきりした他界観や霊魂観を持っているはずだという思い込みが、まずおかしい。どこにいるか、どういうふうになっているかではなくて、ある所作をし、ある場所に行き、ある決まりごとの中で、私たちは亡くなった人と交流ができるのだという約束事がそこで実践として保たれていれば、つまりそういうルールができていれば、幾らでもできるのです。霊魂観とか他界観というのは、少し極端な言い方をすると、私はその程度のものではないかと思います。現在では多くの人が、「天国から見守っている」という言い方をします。しかしこの表現は、「天国だからキリスト教」だとか、「天と言ったから儒教ではないか」とか、そういう話ではないと思うのです。

ですから、現代的変化のなかで、一番恐ろしいといいますか、変わることがあるとすれば、仏壇の前にお線香を立てるということや、お墓の前で手を合わせることをしたとき、「何それ?」と言われるとき、つまり「そんなことやったこともないし、見たこともないし、聞いたこともない」という状況になってくると、これは大変大きな変化だと思うのです。

つまり、実践というものが持つ意味の大きさを考えたときに、霊魂観や他界観がどうであるかという議論がどれほどの有効性を持つのかということを、もう少し考えなければならないだろうと思っています。

④これからの供養のあるべき姿
―先祖供養から三界万霊供養へ―

これまで述べたことに関連させて、3点程「これからの葬儀はこ

うあるべきではないか」というようなことを考えてみます。

一つはやはり、檀家制度。これは井上さんもおっしゃっていましたが、檀家制度は非常に大きなアドバンテージです。決して否定すべきものではないです。中国や韓国の仏教には檀家制度がありませんが、日本の仏教界にとっては、檀家制度があるということは、非常に大きな強みだろうと思います。ですから、檀家制度というものを大いに生かしていくということは大事なのだけれども、ただ、「ご先祖」というものだけに固執すること、これには限界が来ているのではないでしょうか。

現在、女性たち、特に都市の女性たちが伝統的な葬儀を拒否するということが起きていますが、これは要するに、女性が喜ぶ葬儀というものになり得ていないということであります。この原因の一つには、仏教界が先祖供養ということにこだわり過ぎていることにもあるのではないでしょうか。

そこで私が重要な意味を持つものと考えているのは、先ほど私がお話しした、「三界万霊供養」という精神です。中国でもそうですが、「先祖を供養すると同時に、あらゆる衆生や水陸にいる霊魂を救済できる、これが仏法の力なんだ」ということを、仏教の「死者供養」は強く持っていたと思います。

これは、あらゆる生きとし生ける者との関係、つまり縁の強調です。そういうものとの悪い関係を良くすることによって、人が幸せになることができる。自分の家の先祖を守ることも大事だけれども、仏教的な功徳は衆生すべての救済を果たせるのだということ、これをもう少し儀礼に生かしていく道もあるのではないでしょうか。もちろん、「三界万霊」とか「お施餓鬼」とか、そういう言葉や風習は定着していますが、その精神をもう少し個々の葬儀や法事の中にも生かすような手だてはないものだろうか、そんなことを考えました。

⑤布施の功徳を積極的に説く大切さ

先ほどの、一般檀信徒の人たちの参加意識を高めるという溝口さんのお話を、私は共感を持って聞きました。私が2点目として挙げたいのは、布施の意味ということです。布施は無償の布施だという言い方でもいいのですが、私はもう少し功利的に言ってもいいと思うのです。つまり、布施を出すということは何かの役に立つ、それは死者を良い場所に送ってあげることであり、また亡くなった人たち、あらゆる人たちとの関係を結び直していくことである、ということまでは言うべきだろうと思います。

そして、「お経を読む僧侶と、それを聞いてただ焼香する在家」という形ではなくて、一緒にお経を読むことにより、参列者の人た

ち自らが功徳を積んで、その功徳が、自分の大事な人たちがあの世へ行く、そして安らかになることに役立っているのだという、その意識を高めることは、お布施の意味を高めていくことに通じることだと思うのです。

つまり、功徳という感覚ですね。自分は功徳を積んでいるんだ。法事に参加するのは、単に坊さんの訳のわからんお経を聞いているわけではない。そのお経を一緒に読むということ、そして、声をそろえて、称えて、そこに参加することが自分の功徳になります。それが死者を助けていくこと、それは翻って言えば、自分たちが幸福になることにつながるのだということです。つまり、追善回向ということの意味をもう少し理解してもらうような儀礼形態なり努力、これが大事ではないかということを感じました。

⑥縁の大切さ、新しい供養の共同体の創造

3番目は、関係性、縁の強調ということです。先ほど申し上げたように、輪廻とか、解脱とか、極楽とか、そういうものを宗派それぞれに説くことは大事だと思います。しかし、仏教的世界観を今、若い人たちにたたき込もうと思っても、やはりなかなか難しいと思います。

では、葬式なんか嫌だと言っている一般の人に、どのように伝えていくのかということが求められているわけです。そうしますと、もちろん仏教的な理念というものをお坊さんたちがお持ちになることは大切だけれども、それと同時に、「人は消えても、縁は消えないのだ、そして、すべてのものとの縁を結ぶことが葬儀の非常に大きな意義なのだ」ということを、もっとわかりやすく言うことが大切であると思います。

それと同時に、そういう説法だけではなくて、檀家をベースにしながらも、そこに安住するのではなくて、檀家を拡大していくような共同体を形成することが重要なのではないかと思います。つまり、死者を中心にして、新しい死者を弔う人たちの共同体ということです。これも観念的に聞こえるかもしれませんが、例えば、私が調査で関わっている仏教的な講があります。この講は民間の拝み屋さん的な方が中心になっているのですが、非常に仏教的な供養をやっているのです。あらゆる宗派の人たちがそこに行って、それぞれのお家でいただいた戒名を、そこでもう一回書いてもらって供養するのです。だから、あらゆる宗派の戒名が並ぶのです。つまり、そこに来ている人たちの共同体は、それぞれ宗派が違うけれども、尼さんを中心に供養をする。檀家制度を決して奪ってはいないし、邪魔してもいない。

では、人々が何故そういうところへ行くかというと、自分のお寺

だけの供養が何となく物足りないのです。だから、そういうところへ行って集まって、供養の共同体を作って、講を作って、そして、死者たちを祀る。民間の宗教者、シャーマン的と言われるような宗教者の中には、このような活動をやっている人がかなりいるということです。

こういうものを見ていきますと、供養の共同体、まさに死者を中心にして供養をしていく共同体というもの、これこそがむしろ大切で、一般の寺院のお坊さんももう少し努力なされば、それに近いものができていくのではないでしょうか。つまり、縁を檀家からもう少し拡大した共同体を作ろうとする努力があってもよいのではないかということです。

先ほどの井上さんのお話などは、そういう新しい共同体形成というものへのヒントがかなりあったのではないか、と感じながら聞かせていただきました。

長くなりましたが、以上でございます。

【武田】

この研究所が、こうした「崩れゆく葬祭のこころ」、「いま！問い直す」という形で取り上げた「崩れゆく」という表現が、今回の隠れたキーワードというか主題であります。ただいま池上先生から、血縁を越えた地縁の人々の集まりや、血縁で、もっと遠い親戚までも含めた、同族集団の「マキ」や、村落の連合の「惣」であったり、さまざまな共同体が、また通念としての葬儀、死者がどこに行くかという共通観念も含めて、機能しなくなっている。また、井上先生の言葉で言えば核家族、それから、さらに進んだ個の家族、ひとり世帯が、周りから、地域から、親族、血縁からも切り離された家族がたくさん出てくる。そうした中で、今までのように、ご先祖であったり、地域だったらこういう形の葬儀だとか、死者はどこに行くとかということを、我々僧侶自身が当然のように思っていることが、人々には全く伝わっていない。すべてにわたってこれまでの伝統的な葬祭にかかわる通念が失われていく、崩れていっているのではないか。そうした中で、新しい形の葬祭のこころをつくり直す必要が我々にはあるのではないか。まずその前提として、我々自身が、目の前で起こっていることをちゃんと理解することだろうということなのです。一般の人に変われということではなくて、我々が気づくべきではないか。

そこで、先ほどの20分という時間では足りなかったことも含めまして、発表順に補足や、池上先生に対するリプライなどを含めてお話し頂きたいと思います。

【名和】

先ほど、池上先生から、極楽浄土とあの世とは少し違うというお話がありましたが、アンケートの中に「亡くなったらどこに行くと思いますか」という質問をつくった経緯をまず話します。我々が教義で言う極楽浄土と、一般的なイメージとしてのあの世とは違うものであろうということは、設問を作成する際に議論しました。それを踏まえた上で、質問の意図としては、亡くなったら、近くの山に行くのか、あるいは全く何もなくなってしまうのか、あるいは広いイメージでの違う世界へ渡るのか、そういった漠然としたイメージで人々はどのように考えているのかを問うものでした。その中で、我々の行なうお葬式というものが、一体、その世界観、他界観の中でどういった関わりを持つのかというような設問意図があったということです。

また、檀家を拡大するような共同体をつくる必要があるとのことでしたが、まさに今、既存の檀家の中で、その地域を越えてどこかに住所を変える、そういった人へのフォローができなくなってきている。寺院を基盤とする組織自体が崩壊しつつあって、それをとめられないという状況です。そういった中で、新しい共同体の作成は、もちろん既存の檀家からすれば、いろいろな考えも出ようかと思いますが、そういったことも踏まえた上で、我々が真摯に取り組まなければならない問題だと思います。

【竹内】

曹洞宗のホームページに一番よく寄せられてくる質問が、地方から都会に出てきて、そして、身内が亡くなったとき、その葬祭、法事に関してどうしたらいいかという質問です。

これに対して、宗門としては、第一に、実家の菩提寺さんにまず相談して、しかるべきつてをそちらのほうで探すようにと答えるしかできないのでございます。現代の社会に対応した檀家さんに対するきめ細かなフォローというものがなされていないというのが現実です。これは恐らく、ほかの教団でも同じところがあるのではないかと思いますが、これなどはまさに、先ほどの、家族形態の変化についていけてないことが如実に現れていると思っております。

あと、他界観に関しまして、こういうことが問題になったのは最近であります。それはなぜかといいますと、私たち僧侶側の宗教の力、信仰の力というものが衰えてきた結果ではないかと思っています。私たちの研究の中でも、明治期の高名な禅僧は、禅定を基本にして、そこから出てくるパワーで自在に葬儀に対応していたという例が報告されています。むしろ、みずからの宗旨、宗教の衰退によってマニュアル的な理論づけというものが必要となったのではないか

と考えます。けれども、それは、一方で単なるつじつま合わせに終わる可能性もあるわけです。根本のところは、葬儀を主催する僧侶の宗教者としての力量にかかわってくる部分が非常に大きいので、宗門としてはその部分もあわせて、いかに僧侶の質を高めていくかというところに問題意識を強く持っております。

【井上】

社会が今どういう方向に行こうとしているのか、その傾向を読み取って、現状を把握し、宗門で対策マニュアルをつくればいいというレベルの問題ではなく、世襲によってモチベーションが低下している僧侶たちが、本当に親族を亡くしている人たちに対峙できるかというようなところまで行くのだろうなと思っております。

先ほど、浄土宗の名和さんから、アンケート調査の結果として、5番目に、女性の意識について挙げられ、「女性はなぜお葬式に関して消極的なのでしょうね」と、聞かれました。私は、それは逆だと思います。消極的ではないから、このようなことをわざわざ、風当たりを受けながらも主張しているのだととらえていますし、積極的だと思います。その理由は、一つは女性の方が平均寿命が長いということ。男性は自分の看取りや葬儀について、たくさんの親族に囲まれて逝くことを想定しているところがありますが、女性は夫を送った後、自分の時は人手も少なくなっているので簡単にしてあげたいという配慮も出てくる。このような微妙なところまで読み込んでいくと、この回答が見えてくるのではないかと思います。

それから、「檀家を拡大して共同体を」という提案についてですが、檀家制は、家族・家を単位として継承していくものですが、会員制は、個人の自己決定によります。檀家は、自分の代でその寺、その宗派を選んだわけではない、だから受動的で慣習化していきますが、会員制は能動的に選び取っているのでモチベーションが高いと思います。

会員制のつくり方ですが、例えば、跡継ぎを必要としないお墓を提供している寺院では、檀家制とは別に、そのお墓の使用者を会員にしているところがあります。それは、その人が死ねばそれで終わりというような形態です。しかし実際は、それを見ていた子供たちが「それはいいね」と思って、そういったお墓のあり方を支持し、法事なども積極的に行うケースが増えています。檀家制度で縛って、「継いでいかなくてはならない」ではなくて、「選択の自由」があることが、かえって人を寺に引き付けているのです。どんどん宗教性が高まっていくし、自由ななかで「自分たちで選んだ」という意識がいろいろな行動やお布施に反映してくるのではないかと思います。

ですから、檀家になったら、ずっと自分の子供まで檀家にしていかなくてはならないという足かせよりは、檀家にならなくていいよという自由度は、とても宗教性を高めていくと思います。そういう人たちでき上がっていった、墓を核とした緩やかな共同性というものを持ったお寺が、今、求められているのではないでしょうか。

【武田】

今、井上先生がおっしゃったようなメンバー制というのは非常に緊張感がある。いつでも自由に退会できる。その段階から、選ばれるわけですね。選んでもらって入っていただいたにもかかわらず、日常の宗教行為の、我々の堕落であったり、批判にさらされて、やめますという人がボロボロ出て来るというような状況が起きて、我々自身が試されている時代が明らかに出てきている。

最近、NHKなどでも、檀家のやめ方みたいな特集があったりしていますから、お墓を移すとか。そういう話しを公共放送がやるようになってくれば、そんな安閑としていられる状況ではないわけです。

そういう中で、実際の現場で溝口さんは見ていらっしゃるわけですが、人間関係や寺院をめぐるさまざまなつながり、縁、関係性がうまくできていると思うケースとか、批判的に見られるケースはありますか。

【溝口】

今、武田先生からの質問ですが、一番大きいのは、お布施の問題だと思います。最低70万円からでないと受けないという寺院もあったり。言い方も言い方ですね。遺族の方が非常に悲しんでいらっしゃるにもかかわらず、ぶっきらぼうに、打算的に、そんな言い方をしたりする方もいらっしゃったりします。また、通夜、葬儀がおわり、祭壇に置いてある写真と位牌の戒名が違うだけであって、だれがやっても同じような感じがするという、つまり、形式的というのでしょうか、本当にうちの家族のために、亡くなった人のことを想い、お経をあげて、お導きをしていただいたのかわからない。また、故人がお浄土に往ったのか見えないわけであって、どうやらその辺のところが不信であるという話は、よく耳に、よくじゃないです、たまに耳にするわけです（笑）。

今、お布施も、報酬として、本当にありがとうございましたと感謝をして包むのも、非常にいい関係であって、それも一つの文化かとも思いますが、そのようなものを踏まえながら本来のお布施の意味を説明していくには、どのような形で進めていくのが一番いいのでしょうか、池上先生にアドバイスをいただきたいと思います。

【池上】

死者供養仏教というものを歴史的にとらえていけば、寺への寄進なり、写経、造仏、そして読経というのはすべて功徳であるということです。徳を積む、それが、亡くなった人たちをより解脱させると言ってみたり、より高い場所に送ると言ってみたり、いろいろな言い方はあると思いますが、安らかにしていく。死者のためになるのだという。みずから積んだ徳を、自分のために使うのではなくて、死者に回してあげる。その一環として布施も多分とらえられるのだろうと思うのです。ですから、寺を繁栄させ、寺に寄進をしていくというような行為というのは、仏徳を積む、そして、それによって、お坊さんに上げていただいたお経が力を持つわけです。もちろん寄進の額が多ければ力が増す、ということではないと思いますが。

こういう感覚、通念、イメージが全く消えてしまえば、それこそ本当に、何のために葬式なんかするんだということなってしまうので、そこのところのイメージなり通念が生きている間が私はチャンスだと思いますし、これからのご住職は説明をしていく責任があると思います。

そういうことをしっかり一般檀信徒の人たちが納得すれば、お布施を出すし、こんなに良いお葬式をやったのだから死者も喜んでいるだろう、安らかになってくれたろうと思う。そういう通念というものを育てていけば、布施というのは十分に功徳としてとらえられることができるのではないだろうかと、私は思っています。

【武田】

溝口先生のお話は、葬儀を僧侶側がどれだけきちんとやっているかということの受けとめ方にも大きく影響があると思います。

現場の方は一番よくわかっていると思いますが、「布施を出させられた」とか、「取られた」という言葉が今一般的に使われています。「差し上げた」とか、「お出しした」ではないのですよね。つまり、これは心の込められていないお葬式をされたという批判と同じことだと思うのです。要は、お檀家の方の状況をきちんとわかっていないケースがとても多いです。それこそ最大の問題ですよね。檀信徒関係はもう崩壊しているわけです。

それでは、それぞれのパネリストの方から互いに関する質問なりご意見などございましたら、よろしかったらいただけますか。どなたからでも結構です。

【名和】

やはり僧侶の説明責任、死んだらどうなるのかとか、お葬式は何

のためにあるのかということを説明する責任は非常に重いものであると思っております。

もちろん、お葬式や法事の場というのは、なぜお葬式をやるのか、何のために戒名があるのかということを伝える非常に重要な、大きな機会であると思います。しかし、そういったことを受け入れさせるためには、ただ知識としてではなくて、それを信に変える、確かに自分はそうなるんだろうなというようなところまで持って行く必要がある。

そうなってくると、やはりお葬式や追善供養だけではない、信を高めるような機会が浄土宗全体として減っているというのは、問題であると思います。

【武田】

それでは、これから、フロアからの質問をいただきます。「葬式をしないと成仏できないのですか」という質問が来ているのですが。どうですか、曹洞宗としては。

【竹内】

今、浄土宗さんのほうでは、明確な他界観があるということでしたが、曹洞宗はそこはあいまいなので、非常に難儀しております。けれども、それゆえに、相手の求めるところに応じた説き方が許されるのだという話を先ほどいたしました。曹洞宗は葬儀の説明について、かなり自由度があるということでございます。

【武田】

なかなか微妙な問題に踏み込んでしまいましたが、遺族を中心とした人々に、宗教生活へのきっかけとして葬儀そのものを意味づけていくということが一番の根幹ではないかと思うのです。

池上先生には、違った視点で、「講演での『現代の東アジアの視点から』で述べられた、在家の死者供養仏教の熱心な担い手が女性であるという現実は、一体いかなる理由ないし背景、社会的、文化的変化があるのでしょうか」ということの質問が来ております。

【池上】

中国、韓国などの場合には、明らかに、儒礼の先祖祭祀というものが男性中心にかなり行われるわけです。そういう歴史があって、女性たちは公的な祭祀からどうしても排除される傾向がある。ですから、現在でも、韓国ではお寺に行く女性たちは、いわゆるイエのご先祖ということよりも、夫方だけではなくて、自分の実家の死者も供養する。どうしても儒教式の一族祭祀ではできにくい。それが、

仏教だと個人がかかわれますから、個人的に身近な死者を供養するということで、お寺が女性たちに特に好まれるというような傾向があります。

日本の場合も、いわゆる村落祭祀とか、公的なものでは、どうしても男性が中心になる。しかし、家庭でお仏壇に毎日世話をしたり、お茶やお水をかえたりするのは、もちろん当主がなさる家もあるのですが、それが主婦の役割とか、女性の役割ということが長く続いてきたというような傾向があったと思うのです。

私がここで指摘したかったのは、仏教徒という言葉です。熱心な仏教徒。どんな本を見ても、仏教徒の代表というと、男性の名前がずっと出てくるのです。お坊さんが出てくるから仕方がないのですが。ただ、私のように、民衆仏教のほうを見ていくと、特に「死者供養」という実践を担ってきたのは、男性よりも、むしろ女性が非常に多い。中世あたりからの古い時代を見てもやはり女性が中心だったのではないか。

貴族や公的な制度の中では、例えばお寺でも、檀家総代会とか、そういうのは男が出てくる。しかし、実際に日々の供養儀礼とか、そういうものに熱心にかかわるというのは、むしろ女性が多いという、一般的な傾向としてやはりあるだろうと思います。

【武田】

井上先生には、「家制度の変化による脱継承や個人化、家族を含むネットワーク化などが顕著になってきているのに対し、寺院はいまだに家制度の中にあるために、寺院内での継承そのものが現在大きな問題になっていると言えます。お寺が永代供養墓等の担い手になっているという矛盾をどう考えますか」という質問ですが。

【井上】

「永代供養します」とうたっているお寺自体が、男子がいなくて継承難。こんな皮肉なことがありますね。妻帯して家族を形成し、寺が世襲で継がれていけば、一般社会と同様な波をかぶることは当然です。いや、一般社会では継がなくていいものを、寺では継がなければならないのですから、天皇家と同様、もっと厳しい状況にあるわけです。お寺の継承も含め、「家族による継承」に限界があるという事実を原点にして出発しないと、解決策はないように思います。

【武田】

現在、伝統的な共同体が、家制度も含めて変わっていく中で、私たちは、「新しい葬祭のこころ」というものの試みをしました。そ

れは、「人は何のために亡くなるのか」という、亡くなる目的を遺族に明確に示す浄土宗の教義を無謀にも提示してみたのです。

名和研究員、その点ちょっと説明していただけますか。

【名和】

先ほど申しましたように、浄土宗では、死者は極楽浄土へ往き、仏になるための修行をすると考えており、我々浄土宗の僧侶もこの点については十分に説いている訳です。しかし一方、「遺された家族にとって死者はどのような存在か」ということについては十分には説いていないのでは?と思うわけです。

浄土宗のお葬式、特に通夜の場でよく読みますが、「発願文」というものがあります。その「発願文」の一節に、「かの国に至り終わって六神通を得て、十方界に入って苦の衆生を救摂せん」とあります。つまり、亡くなった人は、西方極楽浄土にまず往き、そして、阿弥陀仏に会い、六神通を得る。その後、この世界に戻ってきて、この世界に生活している人々を救うというようなことが説かれております。

この文から考えますと、つまり、人が極楽の世界に往って修行するということです。それではなぜ修行するかというと、その目的としては、こちらにいる人々を救うのだというようなことであるわけです。ここにいる人々というのは誰かというと、亡くなった人の遺族というのも当然含まれるわけです。

そういったことから考えますと、遺族にとっては、亡くなって、どこかに行った家族、我々は極楽浄土と考えますが、その亡くなった家族が今その世界にいるのは、実は自分たちのことを救ってくれるために、守ってくれるためにいるんだというような考え方が成り立つわけです。

このように、死者が極楽にいることが自分たちにとってどういう意味を持つのかというようなことは、実は、今生きている人々を守ってくれるために極楽の世界にいるのだというようなこととして説くことができるのではないでしょうか。

【武田】

少なくとも、肉体的な死というのは決して永遠の別れではなくて、新しい形での始まりというか、家族としての死者が、家族の形を変えて生き続けるということだと思います。また、先ほどの池上先生の最後の言葉にまさに同じようなところがあったと思います。「供養するという実践がある限り、故人は消えても縁は消えることがない」という、この縁がまさに現代の人たちにとっては、新しい家族の絆になるわけです。つまり、家族という縁の強化、解体を防ぐ、

そういうような役割として、教学的にも、葬儀そのものを別れの儀式ではなく、新しい家族の形の始まりだというような説き方はできないものだろうか。そこに、これまでの共同体型の先祖と子孫という形ではなくて、家族の新しい形をつくり上げる儀式としての葬儀という意味、それが残された家族にとって新しい生きる力になっていくのではないかというようなことを実は考えております。

結論のようなものは出ませんが、私たち一人ひとりが、これを結論というよりも、意識改革が必要、すべてにわたって、今の置かれている状況を我々自身が見つめ直していくことが必要なのではないかと思いました。

本日は本当に長時間にわたりまして、どうもありがとうございました。（拍手）

浄土宗総合研究所　公開シンポジウム②

崩れゆく葬祭のこころⅡ
―今あらためて意味を問う！　浄土宗の葬儀・年回法要―

◆シンポジウム講演録

平成23年2月28日に開催した、浄土宗総合研究所公開シンポジウム「崩れゆく葬祭のこころ　Ⅱ　今あらためて意味を問う！　―浄土宗の葬儀　年回法要―」の講演録を掲載する。

浄土宗総合研究所は、これまでに「崩れゆく葬祭のこころ」と題する調査研究を進め、その成果を平成20年4月号から1年間『宗報』へ掲載してきた。そして昨年、里見宗務総長の要請により、現代に対応した浄土宗の「葬儀と年回法要の意味」を再確認するために、『浄土宗の葬儀と年回法要について』（平成22年10月）を刊行した。これに基づき、葬儀・年回法要の意味と本質を問い直すとともに、浄土宗教師が「なぜ葬儀と年回法要をするのか」という共通認識を持ち、変わりつつある社会への対応を考えるためのシンポジウムを開催した。230名以上という多くの方に参加をいただき、前回以上に好評を博したことは、数社の専門誌にも報じられた。

この項では、武田道生浄土宗総合研究所研究員が「浄土宗の葬儀と年回法要―改めて現代社会での重要性を考える―」と題して、浄土宗の葬儀と年回法要について現代的視点から捉え直して発題を行ったものを掲載する。つづいて、パネリストである奈良康明駒澤大学名誉教授の発表「仏教と葬儀の関係」、『寺門興隆』編集発行人である矢澤澄道師による発表「もう一度やってほしいと言われる葬儀のために」、そして、パネルディスカッションをそれぞれ掲載する。奈良師は葬儀と仏教の関係を述べ、葬儀は日本文化の中で必要であると結論され、矢澤師は葬儀が寺院経営の観点からも必要不可欠であるが、喪家への説明が必要だと主張した。パネルディスカッションでは、今岡達雄浄土宗総合研究所主任研究員がコーディネーターを務め、武田・奈良・矢澤三氏のほかに熊井康雄浄土宗総合研究所主任研究員がパネリストとして加わり、会場からの質問に対して4人のパネリストがそれぞれの観点から応答をした。

◆発題◆

「浄土宗の葬儀と年回法要
―改めて現代社会での重要性を考える―」

武田道生浄土宗総合研究所研究員

発題の経緯

ただいまご紹介いただきました武田です。長い間、この問題にかかわってまいりました。前回の「崩れゆく葬祭のこころ　Ⅰ」というシンポジウムでは、浄土宗のお葬式を行った檀信徒のアンケート調査に基づいて発表を行いました。そこでは現在、浄土宗寺院が檀信徒に行っている葬儀の意味がどれほど伝わっているのか、どのような意識で葬儀を行ったのか、そして、回答者が自分のときには、自身が喪主を務めた時のような葬儀をしてもらいたいかというアンケートの回答分析をいたしました。その中でもかなり衝撃的な回答がありました。「自分の時には浄土宗ではなくやりたい」とか、「戒名（法名）は要らない」といったものです。こうした意見が出る状況や背景を分析するにつけ、浄土宗の葬儀の意味や目的が理解されていない人たちが多いという問題をどうしたものかと考えておりました。そこに宗務総長から研究所に諮問がなされまして、まとめたものが『宗報』（平成22年12月号）とともに各寺院に配布された、今皆さまのお手元にある『浄土宗の葬儀と年回法要について』という小冊子です（本書 第4章に掲載）。

この冊子は、現代の浄土宗の、特に葬儀と年回法要の意味と意義をわかりやすく解説したものです。その全体の構成は、第1部は法式の立場から、熊井主任研究員が葬儀年回法要を行う儀礼的意味と意義について、第2部は武田が浄土宗の葬儀の現代における意義について、第3部は今岡主任研究員が葬儀に関する今日的問題の対応について、それぞれ執筆し、最後に3人で意見を交換し修正いたしまして、完成したものです。

本日の私の発題は、第2部を中心として、「葬儀の現代的な意味について」という冊子の14頁から19頁にかけての部分をお話しさせていただきたいと思います。

お手元のパワーポイント画面を印刷した配布資料を中心にお話しさせていただきたいと思います。

初めに私がお話ししたいのは、私が言うまでもなく皆様が当然のこととして理解しているはずの浄土宗の生命観についてです。生命観というのは、一言で言えば、人は何のために生きるか、何のために死ぬかということです。そこから始めようと思います。

つまり、浄土宗の教えに出会った人は、教師も檀信徒も皆、人として生きるとき、どのような生き方が生きる目的なのかということです。我々が「生きる」というときに、我々の一生というのはどこまで続くのでしょうか。今、一般のアンケート調査をやれば、人間は心臓がとまったら一生はそこで終わりというのが圧倒的多数です。肉体的な死後も人の一生は続くという答えはほとんど出てきません。つまり、現代人の生命観あるいは死生観と言ってもいいのですが、科学的生命観と申しますか、命の終わりというのは肉体的な終わりを主に指していると思います。人の一生はどこまでと聞いたときに、檀家の方でさえほとんどの方が、「それはもう病院で死んだときでしょう」というような答えが返ってきます。

では、浄土宗の生命観は本当にそうなのでしょうか。そして、浄土宗の生命観が現代のそれと違っているとすれば、そのような生命観は、日本の社会の中でどのように受けとめられてきたのだろうか。そして、それは今どうして受け入れられなくなってきたのでしょうか。これは自己反省も含めて言えば、布教が足りないと言うことにつきると思います。浄土宗の本儀がきちんと説けていないのではないかということです。それを、葬儀と年回法要の意味をもう一度考え直すことによって、我々自身も、我々自身というより、私が自分を振り返ってみたいと思います。

日本に入って来ている仏教のほとんどが大乗仏教です。大乗仏教の生き方というのはどういうことかといえば、生きているうちに行うべき行は、当然のように、菩薩の行である慈悲行です。それは抜苦与楽、つまり人々の悲しみ、苦しみを取り除き、喜び、平安を与えることであり、利他行としての慈悲行を行うことによって、菩薩としての行を積むことになるという考え方になります。

そう考えれば、我々が浄土宗の教えに目覚めたときから当然勤めるべき行であって、それは我々が生きていくなかでずっと行っていくべき行であります。

そして、生きているうちに利他行、慈悲行が完結するのではなくて、限りある生の後、つまり我々がこの世に生きているときだけで終わりなのではなくて、亡くなった後もさらに、究極の救い、利他行を続けていかなければなりません。究極の救いという言葉自体は宗教学的な言い方になるわけですが、つまり往生を果たして成仏を目指す、その行そのものです。菩薩の行を極楽で積むなかで、さらに救いを行っていくことが浄土教者であるべきだろうと思います。

そうすると当然のことですが、浄土宗では我々は凡夫だというふうにとらえます。この限界があるなか、この世でひたすら行を積むことになります。しかし、有無両縁への慈悲行を完成することは難

しいので、それを完成するために、我々は極楽に行くわけです。肉体的な死があるから極楽に行くのではなくて、極楽に行くためにこの世での生を終える。現代の科学合理主義とは対極の発想がここにはあります。

そこで出てくるのが浄土宗の救いです。この世での行が完成できないために、阿弥陀如来による来迎引接を得て、凡夫の慈悲行を完成させるために往生し、さらに菩薩行を積み、成仏を果たす。その道筋が浄土教者としての生き方になります。つまり、大乗仏教の、特に浄土教の我々の信仰からいえば、現世と来世は人の生きる目的から見れば一直線につながっているわけです。その道筋の転換点に肉体的な死があるのです。人が生きる目的に完成と終わりはないというのが、私なりの考え方です。まとめますと、大乗仏教の生きる目的というのは、この世で果たせなかった慈悲行を行うために極楽に往生し、遂には悟りをひらき、この世に還相し、有縁無縁のすべての衆生を救済することが、我々の究極的な一生ということになります。

つまり、この世から極楽への往生は、この世に生まれ出てきた目的を果たすための「積極的な生まれ変わり」ということになると思います。ですから、よく葬儀のときに我々が使ってしまいがちな、「お別れです」とか、「永久の別れです」というような表現を第一に語るべきではないことになります。もちろんこれは世俗的な意味であり、家族の中から重要な一員が亡くなるという意味では当然のことであるわけです。しかし、本来の教えを明確に伝えるべき時に、伝わっていない葬儀のあり方は、宗教性を失ったお別れ会でしかないと思います。つまり、これは近代の日本人が持ってしまって今に至っている生命観や人間観がつくり出した現世主義です。これを基本的には葬儀屋さんが徹底的に今売り込んでいます。感動のあるお葬式とは、別れを演出する葬儀と受けとめられています。どうもそれに我々自身も乗っかってしまっているところがあるような感じがします。

そうした意味でいえば、死は、肉体的な別れであっても、本来の人の存在としてのあり方、その方との永遠の別れではないということになります。その意味は後ほどご説明いたします。

後ほどの奈良先生のお話とも少し重なるところですが、もともと、遺体の処理であったり、会葬者がたくさんあった、今から20年ぐらい前までのお葬式によく見られたように、社会的にさまざまな関わりのある人たちを招いて、その方々にお別れをしてもらう、死を確認してもらうという意味がありました。現在でも、沖縄などへ参り

ますと、平均的なお葬式でも会葬者が５００人ぐらい、多いと１、０００人ぐらいです。ブラジルでもそうです。本土でも都会などでは近年想像もできない規模の人々の結びつきの強かった時代がありました。現在でもそういう地域がないわけではないですが、そういった地域では当然のように人々が助け合い、そして人々が会葬し、別れを告げていきます。

長寿化社会ということもあるかもしれませんが、最近は「亡くなったおじいちゃんには知り合いがいないから、私たちだけで送りましょう」というような、地域社会の絆が弱まり、家族中心の葬儀がとても増えてきていると思います。

絆と言えば、農耕社会では、地域・親族社会の中で、親族の中で本家の当主が亡くなると、その親族、血縁共同体にとっては大きな危機であります。そして、構成員同士が助け合って生きてゆく農耕文化の中では、人が亡くなるということによって、地域社会全体の危機に陥るわけです。そういったなかで、遺族の方たちをもり立て、継承者を中心として新しく一族を出発させるという「〈イエ〉家族の再生の儀式」という意味もあります。そうした現実的な意味で、人々が香典を持ち寄り、助け合い、励まし合い、そして、新しい〈イエ〉の出発をみんなで応援するというような葬儀の意味も現在では小さくなってきているようです。

そして、よく我々教師が使う言葉で言えば、ほとんど都市では使われなくなってしまっている「先祖」があります。実際には、施餓鬼会とか彼岸会などでは、「ご先祖様のお塔婆をお建てになりますか」とか、先祖供養であったりとか、先祖代々の追善のお塔婆を建てたりと、「先祖」という言葉を我々は当然のように使っているわけです。

「先祖」とは、農耕文化、第一次産業を中心とした文化のなかで、人々が助け合い、財産や土地、畑や水田を守り、次の世代に伝えていく。そして「先祖」に対して子孫は、豊作や家の繁栄への祈りと感謝を持つという存在でした。

しかし、最近は、亡くなった先祖は子孫の子供たちの無事の成長を祈り、そしてまたさらに子孫が繁栄することを守ってくれるのだというような、いわゆる、「死者は没個性的な先祖としてあの世から子孫を守護する」という意識は非常に薄く、我々が行った研究所の檀信徒対象のアンケートでも、「お葬式は、先祖になってもらうための儀式だ」という意識を持っている方は、数％しかいらっしゃいませんでした。

実際に、現在の産業構造の変化のなかでは、核家族化が進み、家の中に仏壇がないという人が当然のごとく増えています。ですから、

いわゆる本家と呼ばれて仏壇を継承する家があるものの、分家化は急激に増加しています。墓地や仏壇の継承についても、最近は長男ばかりではなくて、娘さんが継承したり、いろいろな形が出てきています。長男が仏壇を継承するとすれば、そのほかの兄弟たちは独立した家を構えて独立するわけですから、それぞれのお家に仏壇がないのが当たり前で、仏壇のない家が今とても増えているわけです。神棚も当然同じです。神や仏になった先祖が宿る場がないという状況は、神道の世界でも今、悩みになっているようです。

そうしたなかでは、先祖や家の神に守られているという宗教意識、継続した先祖観は、現在ではほとんどなくなってしまっているのではないかと思います。ただし、これはとても重要な、儀式の目的として行われて来ていたことではあります。これからお話しする浄土宗の葬儀の意味を考えたときには、とても重要な考え方の基盤となっているということがわかります。

坪井洋文氏の論文「日本人の生死観」を宮家準氏が『生活のなかの宗教』（NHKブックス・一九八〇）の中で、円環図に書き直しています。日本人の伝統社会における人の一生について説明しています。円環の右の横のところに誕生とあります。誕生してから、お七夜、ウブアキ（お宮参り、三十日目）、食いはじめ（百日目）、初節句、初誕生、三、五、七歳というように、無事の成長を祈る儀式を行う。どこでと言えば、産土様つまり地域の神様に無事の成長を願って、成長を果たしていくことになります。

実は、産土様と呼ばれている地域の神社の神様は、亡くなってあの世に行って三十三回忌や五十回忌を過ぎた後の人たちのことで、氏神様や産土様として神社に祭られているわけです。その神様の加護によって無事の成長を果たしていくのだという考え方が伝統的にあったという図表です。

そして、無事成長を果たすと、結婚して、子供を産み育てる。つまり、親となり子供を育てることになります。そして、この図表の矢印の意味は、亡くなったおじいちゃん、おばあちゃん、さらに、その先の50年以上前に亡くなった方々が、神として守ります。つまり、この世では両親が子供たちの成長を守り、そして、あの世からは、神になった先祖が亡くなったばかりの霊の成長を守ってくれるのです。先祖たちが子孫の無事の成長を祈るという絆がここにはあります。

成長し、家を持ち子を育てると、次には自分の親をあの世に送るお葬式があります。そして、初七日、四十九日、百カ日、一周忌という順で三十三回忌まで行うわけです。その理由は、亡くなったばかりの死者を無事に成長させ、祖霊（先祖の霊）にするために、遺

族たちが法要を行うのだという図表です。

そして、図表を見ますと、この世とあの世という中心を境にして、この世への誕生はあの世への葬式、お七夜と初七日、ウブアケと四十九日、食いはじめと百カ日、初誕生と一周忌、七五三が三回忌・七回忌、成人式が十三回忌、結婚式が三十三回忌の弔いあげというように、誕生から成長する過程と亡くなった人があの世に生まれかわって成長する過程が、時間的間隔をほぼ同じにして、親が育て、遺された者たちが祭ることによって、人を成長させる儀式が、行われてきたことがわかります。

言い換えれば、赤ちゃんもこの世に生まれて出てきて、親の手によって成長していくように、亡くなった者も、遺された者たちの供養によって成長して行くという、先祖と子孫間の絆や関係性をあらわしています。成長し終わるとどうなるかというと、先祖の霊魂・祖霊になります。先祖になるあるいは〈ホトケサマ〉になるというような言葉、または、〈カミサマ〉になるというような言い方をして、人々は常に、遺された者たちによって育てられ、そして、先に亡くなった者によって守られ、無事に先祖になっていくという循環を示しています。つまり、先祖になるにしても、亡くなったらすぐなるわけではなくて、常に遺された者たちの供養によって成長していくわけです。ここでは、赤ちゃんとして生まれ出てきたときは、親に守られて成長し、親になると子供を守り、亡くなった自分の親を供養し守る。そして、自身が亡くなると今度は、自分が子孫に供養され、守られることになります。

そして、三十三回忌や五十回忌からそれ以後の段階に至って初めて、人の役割として、残された子孫たちすべてを守るという役割を果たし、ぐるりと一周して初めて人の一生が完結する。あるいは生まれ変わっていく。人の役割、目的として、このような考え方が、実際に自覚されていたかはわかりませんが、具体的にさまざまな地域の風習だとか意味づけをまとめてみると、このような人間の一生、生死観があることが坪井氏によって説明されています。

これを見てもやはり、人間の一生は、この世での命というのは上半分なのです。これではまだ人の一生としては完結していない。完結するのは、360度ぐるりと回ったときなのだというような考え方です。

そうした意味でいうと、この日本人の伝統的な生命観と言われているものは、どのような背景を持っているかというと、現在、まさにこれがなくなってしまっているわけです。やはり、農耕文化を背景とした〈イエ〉の永続ということがあります。前半生の役割は、結婚して子を育て、親をあの世に送る。後半生の最も重要な役割というのは、子孫の無事の成長と家の繁栄を守護すること、それが人

の一生の究極の目的で、到達点となるということです（この円環図はあくまでも理念型ですが）。

こうした考え方では、肉体的な死はそこで終わりだと考えるのではなくて、肉体的な死から霊的な生、霊魂と言うのはどういう存在かということとは別として、人間は肉体的には亡くなっても、先祖として生き続けるというものです。即ち、霊魂と言うよりも、先祖という存在です。先祖としての役割を果たすという意味です。そうした意味で言うと、肉体的な死は先祖になって生き続けるための転換点です。つまり、葬儀というのは、参列者すべてが、人が生きる目的を明確化するためのものとして行なわれてきたのです。

つまり、「これからは先祖として守ってくれるんだよね。」と誰もが共通して持っていた死者に対する感情とか地域文化というものが、この伝統的な葬儀の形にはあったと思われます。

そうした意味で、死者と残された生者というのは強い《絆》で結ばれているわけです。「おじいちゃんは今でも成長し続けて私たちを守り続けている」というような感覚です。強い絆、そうしたものが果たして現在、あるのだろうかということです。まさにＮＨＫが言っている「無縁社会」の原点のような考え方です。

これまでのお話を纏めますと、この画面のような6点になるのではないかと思います。①農耕に生きてきた多くの人びとにとって、安定した継続のためには「イエ」が永続し継承されることが望まれた。②そのためには、人の生きる目的を考えると、無事成長し、結婚し後継者を育て上げ、親をあの世に送り、自分の死を迎えるというだけでは一生の前半生でしかない。③後半生の最も重要で長い役割は、子孫の無事成長を守り、豊作や「イエ」の繁栄を守護することであった。④そうであれば、死は〈肉体的な死から霊的な生〉への「転換点」であり、単なる終わりではない。葬儀は人が生きる意味を視覚化し、明確化するための儀式という機能を持っている。⑤あの世に生まれた死者は、先祖に成長する中途の存在で、遺族や縁者が回向することによって成長する存在。⑥死者と生者はあの世とこの世に分かれても、互いに成長のためになくてはならない存在として、強い〈絆〉で結ばれていると考えられてきた。このようになると思います。

以上のような文化的な背景の中で、各宗派の葬儀も受け入れられ行われてきたわけですが、その理由もおおよそ明らかになってきたのではないかと思います。

⑤に「極楽往生のための儀式」とあります。私どもの浄土宗の葬儀の意味を宗学的に見ますと、この世での生を終えた後は、衆生救

済の目的を果たすために、阿弥陀様の来迎引接を仰ぎ、故人の仏教信者としての極楽往生を願うということになります。

「仏教信者として」というのは、亡くなったときにいわゆる三帰戒を授け、仏弟子として極楽に往生していただく、現在我々が行っている作法を意味します。人はこの世でも極楽でも有縁無縁一切の人々を救うために生きるのであって、参列した縁者すべてがそれを明確に認識するための儀式というのが浄土宗の葬儀であろうかと思います。

そうであれば、遺族・親族・近隣など、多くの故人にかかわりのあった、縁のあった会葬者が、葬儀を通して故人が往生し、今後、会葬に立ち会った自分を含む多くの人々を救ってくださるように祈り、見送る、そういう儀式であろうかと思います。

そして、葬儀そのものは、そのことを視覚的に、感覚的に実感し理解する儀式としての役割を果たします。つまり、葬儀というのは、「亡くなった方がこれから私たちをお守りくださるために、極楽に生まれ変わって行かれたのだ」ということを、法話や読経やさまざまな作法、お葬儀のさまざまな形態、祭壇も含めて、そうしたものを通して感じ取るための場ということです。

このようにみると、前半の最後にお話しした伝統的な日本人の民俗的死生観が、亡き人が先祖となって子孫を守護してくれると考えられるのも、浄土宗の葬儀の本旨と非常に近いものがあることがわかります。

元来、先祖という観念は儒教から発した考え方ですから、仏教とは結びつきませんが、江戸期以来、先祖と死者というのは非常に近い存在として、仏教のなかにも取り入れられてきました。中国では三代の先祖の観念があり、日本に入ってくると七世の父母が子孫を守ると言われるようになりました。これが祖をたどるという形で、先祖という観念になってくるわけです。

苦の衆生を守る、有縁無縁の衆生を救うために極楽に行くという浄土教の考え方と、亡くなった人は先祖となって、あの世から子孫を守ってくれるという民俗的な先祖観とは、「人々を守る」という考え方として非常に重なる部分が多かったと思います。

当然、浄土教の考え方は、有縁無縁一切の衆生ですから、それこそ苦しむ人々というのはすべての人々を包含します。もちろん、自分の子供たち、孫たち、そうした遺された家族、遺族は、有縁として当然そのなかに入るわけです。

そうした意味からいうと、日本の伝統的な先祖観は、子孫だけを守るという意味では非常に狭いわけですが、浄土教はもっと幅広いです。有縁、無縁、すべての衆生を救うのですが、まず第一に遺族の人たちを救いたい救ってくださると願うのは、いつの時代でも当

然の心情だと思われます。

そのような先祖観のなかで、浄土教的な考え方と、日本に入ってきた儒教的な先祖という観念が重なるなかで、我々僧侶も当然のように先祖という言葉を使ってきました。亡くなった人は先祖になるというような考え方で使われてきましたが、現在、そうした意味での、先祖という考え方はほとんど死語です。あと数年でもうこの言葉は使用されていないかも知れません。もしかしたら、お寺の世界のなかだけで使われる用語になるかもしれません。

これから、現代人の宗教意識の変化を考え、そこに潜む危機を考えていきたいと思います。

この「望ましい人間関係」という図表は、NHKが5年ごとに行っているアンケート調査の結果で『日本人の意識構造』第7版（日本放送出版協会）に載っているものを借用しました（「崩れゆく葬祭のこころ」第3回を参照）。1973年から2008年の35年間にわたって8回の調査のデータをもとにしてその間の日本人の意識の変化を分析追跡調査したものを図に表しています。

まず、「望ましい人間関係」について、どのような変化が起こっているかをご紹介したいと思います。ひとつめは職場での人間関係です。35年前、オイルショック直前の1973年のアンケート調査では、職場での人間関係は上司や部長さんに仲人を頼むとか、友達の家にお正月に挨拶に行ったり、飲みに行ったりといった「全面的なおつき合いがいい」という人が60％もいました。それが、2008年には34％に減ってきてしまいます。代わりに増加してきたのは、「形式的なつき合い」で、11％から24％と倍以上の伸び率です。現代社会では、窓際になったり、リストラされたりと、会社そのものが人と人との結びつきを非常に弱くさせているところがあります。そうしたことが、この数値の変化から歴然とわかるわけです。

最近私も感じていることですが、お葬式の受付で、会社関係の人が受付をするというのは減っています。せいぜい生花を出すだけです。会社関係の人は呼ばない、知らせない。家族だけで行いますというのがとても増えています。今から10年ぐらい前までは結構、会社の人が休んで受付をしていたことが多かったのですが、最近では、会社に私事は持ち込まないという状況がとても増えているようです。

次に近隣との関係です。隣近所に関しましては、35年前からも、「部分的なつき合いでいいのだ」というのが50％を超えて、ずっと同じ

くらい続いています。

ところが、35年前にはまだ、全面的なつき合いがしたいという人は35％もいたのです。例えば、最近本当に無いなと思うのは、昔は「お米が急になくなっちゃったのよ」とお米を借りに来る人がいたり、「お味噌ちょっと貸してください」という食べ物の貸し借りです。今はコンビニがありますから、ほとんどそんな関係はありません。

そうなってくると、35％から19％へというのは、半減ですね。隣近所とは部分的なつき合いでいいし、さらにいえば、形式的なつき合いでいいのだという人が15％から26％とほぼ倍増し、隣近所も形式的なつき合いになりつつあります。

「あそこのおばあちゃんはずっと病院に入っていたんじゃないの」とか「顔見たことないわね」という現状がわからない希薄な人間関係が多くなった。そうなるとかえって迷惑をかけるから呼ばない。つまり、隣近所に家族が亡くなったということを知らせると迷惑をかける。だから病院から直接斎場にという、他人に見えない見せないお葬式「直葬」が大変増えているのは、こうした状況から見てもわかります。

結局は、「自分が呼ばれて迷惑だったな」と思っている人たちがとても増えているということです。だから、自分の時にも呼ばないというふうになるわけです。これがどんどん増えてきています。これからは、さらに形式的な近所づき合いが増えるだろうと思います。

親戚も実は似たようなものです。昔は「遠い親戚より近くの他人」と頼りになる順を言いましたが、近くの他人も形式的になったら、人は相談するところがどこにもない。葬儀の相談は葬儀屋さんだけというのが今の状況をあらわしているのではないかと思います。

親戚との全面的なつき合いを望む人が、35年前は5割いました。それが今、35％まで下がっています。そして、部分的なつき合いでいいのだというのは、あまり変わらず40％から43％です。ただし、親戚ですらも「形式的なつき合いでいいのだ。結婚式のときに呼んで、年賀状のやりとりをするぐらいだ」という人が8％から22％と、3倍近くにも増えています。このように、どの関係も形式的な人のつき合いというのは今とても増えていることがわかります。これが現実に、親戚もお葬式に呼ばない葬儀の縮小化、家族葬の増加という現象になって現れてきました。最近は大体、喪主が団塊の世代ですから、そうすると、親が70歳か80歳ぐらいです。親の兄弟、おじさん、おばさんが同じくらいの年齢です。遠くて、田舎にいるし、来てもらうのも大変だからという理由をつけて、葬儀に呼ばないというのが、今とても増えているのはこういった背景があるのではないかと思います。

次に都市の大きさでつき合い関係が変わってきたかどうかをみてみます。この分析は、２００３年度の調査を分析した『日本人の意識構造』第６版からのものです。左側の線グラフは都市の規模と近隣のつき合い関係を政令指定都市のような巨大都市の場合と、町村部の場合とを比べたもので、点線が30年前になります。

近隣とのつき合いを見てみると、全面的なつき合いは、２００３年現在になると、どの都市の規模でもどんと下がっています。政令指定都市から10万人以上の市では、30年前には25％ぐらいあったものが、20％を下回るようになっています。ところが、２００３年の点線を見てみると、極端に下がってきているのは実は町村部なのです。１９７３年には町村部は全面的なつき合いが40％だったのですが、30年後には大都市と同じぐらいに下ってしまいました。

つまり、大都市も小都市も、人のつき合い関係の意識はほとんど変わらなくなってきてしまったということです。「うちのほうは田舎だからまだ大丈夫」というのは、非常に危険な考え方になりつつあり、大きな町にあるお寺さんも、小さな町にあるお寺さんも、檀家の人たちの意識はほとんど変わらなくなってきたということを自覚する必要があります。

部分的なつき合いのほうも、基本的には同じです。ほとんど平らになってしまいました。「部分的なつき合いが大事なのだ」と言った人が、これを見てみると、30年前は町村のほうが低かったのですが、今はほとんど同じです。

親戚のつき合いも同じです。親戚のつき合いというのは町村部のほうがやはり強いだろうと思うかもしれませんが、現在はほとんど平らです。30年前は、どこも30％ほど高かった。これがどこもぐんと下がって、特に町村部の落ち込み方が激しいことが見てとれます。

こうした数値の変化を見てみると、現在、人のつき合い関係の意識が大きく変わっているのは、小さい町ほど激しいということがわかります。大都市部はほとんど30年間変わっていません。

そうしたなかで、現在葬儀の喪主の中心となっているのは団塊の世代の人たちです。その人たちの意識がとても重要だと思うのですが、このグラフはその団塊の世代の人たちが現在どこにいるかということを調べたものです。このグラフは、三浦展氏の『大いなる迷走』（ＰＡＲＣＯ出版）から引用させていただいたものです。これは、団塊の世代の人たち、昭和22～25年の間に生まれた人たちの、生まれた地域と20年後に居住する地域の差です。終戦直後ですから当然、その３・４年間は、地方で生まれている人がとても多いのです。例えば、東北６県を見てみますと、50年のときに１２５万人ぐらいい

たのが、20年後、1970年、ちょうど高度成長期の真っ盛りには、金の卵と呼ばれて、都市部へ集団就職する。大学の進学率も急に上がってきた。こういう状況のなか、東北6県は、125万人から70万人弱ぐらいまで下がっています。

それは、中部4県も同じです。一番変化が劇的なのは九州です。170万人が、90万人ぐらいまでに減ってしまいました。では故郷を出て行った人たちはどこへ行ったのかというと、千葉、埼玉、神奈川、東京、そして大阪などです。つまり、大都市部に若い人たちが集中してしまったわけです。

そしてその後、その人たちは通勤可能な大都市部の周辺に居を構えた。現在その人たちの多くはUターンしないで、そこに定住してしまったという状況です。つまり、この人たちは、自分が生まれたときの文化伝統とか人間関係、親戚と離れて出てきて、現在に至っているというわけです。それも住宅政策によって作られた、巨大なニュータウンや団地、分譲地などの人工都市に、出身の全く異なる人たちが住んでいる。

ですから、現在都市部の葬儀がどういう状況になっているかというと、自分の宗派がわからない。宗派がわかっていてもお寺を知らない、見つからない、だから葬儀屋さんに全部頼むという状況が起こっている一番の大元はこうしたことです。

地域社会も成熟していない。例えば、まだその地域に来て10年しか経過していないから、親が病院で亡くなって、地域でお葬式を出すにも、「地域の隣人はうちの母親のことをみんな知らない。だから家族だけでやろうよ」というようになってしまうのは当然です。最近ではさらに、地域の人に知らせると迷惑をかけるから、どこにも知らせずに直接斎場で葬儀を済ませてしまう。直葬ですね。地域と離れ、親戚とも離れてしまった人たちがこういう葬儀を行う傾向が加速化しています。

この人たちの職業もこれまでと違います。ほとんどがサラリーマンです。一代で職業も居住地も変わってしまうから、親子で考え方が全く違います。こういう人たちは、先祖という観念を持ちません。そして仏壇もない。こういう状況は当然のことです。宗教的な文化背景というものが、都市部を中心とした多くの地域の人には現在無いわけです。そこで、葬儀屋さんがとても重要な役割を担うようになっているのです。その極端な例がイオンのケースなどで明らかになったことです。

そうした意味では、現在、地域社会が一番劇的に壊れているのは小都市です。小都市と大都市の文化的な背景のない人たちです。

浄土宗総合研究所が行った、喪主を務めた人のお葬式に関する意識を聞いたアンケート（檀信徒対象アンケート）ですが、そのなか

で、「あなたにとって、故人、亡くなった家族はどのような存在だと思いますか」と聞いたところ、「見守ってくれている」というのが全国平均で85％でした。それに対して、東京・神奈川は87％でした。2％の差でしかないのですが、実はどこの教区もほとんどが85％前後で、一番高かったのが87％の東京・神奈川でした。

この2％をどう見るかということは別の論になりますが、大都市部の遺族の人ほど、亡くなった人が見守っていてくれている。つまり「亡くなった人との関係は、死んで終わりになっていない」と信じている、または、信じたいと思っているということです。

例えば、「困ったときには助けてくれる」とか、「供養しないとよくないことが起こる」というようなギブ・アンド・テークというか、たたり型というか、そうしたことを思う人というのはほとんどいません。これを見てみると、家族がいかに現代の人間関係の中心にあるかということがわかります。つまり、本当に頼りになるのは家族しかいなくて、その家族から死者が出ることに対する不安や緊張のなかで、故人が家族の一員であり続けてほしいと望んでいるのだと思います。

こういう意識こそが、我々が檀信徒の方々に対して一番手を差し伸べていかなければいけない宗教的役割ではないかと思います。家族のなかに亡くなった方ができたとき初めてわかる家族の重さや大切さということだと思うのです。そうしたことに対してどのように我々が応えていけるかということだと思います。伝統的な生死観は農耕文化のなかで、豊作や家の繁栄を先祖や死者が約束するというものでしたが、現代のように産業構造が変化したり、人が移動したりして、地域社会とかけ離れて生活するようになったとき、現在の生死観では、最後のよりどころは親戚や地域社会ではなく、亡くなっても見守り続けてくれる家族しかないのだと思います。

また、現在では結婚しない男性や女性も増えています。NHKが盛んにキャンペーンをしているのと同じ、〝無縁化〟ということですが、現代しかない新しい形の縁というのも当然生まれてきます。例えば、地域とかけ離れた縁として、最近できてきているのが墓の縁です。これからも独身のままだろうと思っている人たちが生前契約しているケースもあります。新宿の東慶寺では、「水の縁」という組織を作っています。そこでは月に一度、合同慰霊祭を行うときに、一緒に契約した仲間の人たちが亡くなったかたの法要に参加するというような縁などもできています。京都の常寂光寺などにも同様の組織があるようです。

このように、さまざまな縁のかたちができてきているわけです。どの縁も皆、大切ですが、我々がまず基本に置かなければならない

のは家族との縁です。これは現在とても大きいものだと思います。

そうしたなかで、絆の喪失というか、人は「個で孤」なのだという考え方や、子孫は必要ない、先祖はいない、家族は必要ないと思っているような人、また人は死んだら終わりだと考えている人たちに、私たちがどのような救いを与えることができるのかを考えることが必要になって来ているのでないかと思います。

家族や人は亡くなっても終わりではないのだ、家族は生き続ける、形は変わっても家族であり続けるのだという伝統的な霊魂観、我々でいえば浄土教的な考え方にとって、葬儀、年回法要というのは本当に大事なことだと思います。人は生き続け、そして、その関係は肉体的な死後もずっと続いていくのだという生命観を根づかせ、我々が現代社会のなかで、先祖という観念は別として、どのように残された新しい家族を支えていけるかということだと思うのです。

ですから、人の絆の弱くなった現代だからこそ、葬儀ほど重要なものはないと思うわけです。なぜかというと、人が生きるということはどういうことなのかということを明確に遺された家族の人たちに説得できる、意味づけできる機会だからです。

葬儀は、遺された方たちのための儀式でもあり、仏教徒として、人は何のために生きるのかということを実感することができる大事な場です。

つまり、葬儀だけ行っている仏教は間違っていると言ったり、恥ずかしいという、我々自身の中にある考え方を振り捨てなくてはならないと思います。本来仏教でやるべき一番重要なことをやっているのだという考え方への変化が必要だと思います。

そうしたことからいうと、伝統的な先祖という観念は消えても、死者は家族として生き続ける。そういう関係を我々はどのように意味づけていくのか。そしてまた、現代のように共同体が崩れていくなかでこそ、家族関係、人と人とが結びついていける最後のよりどころを強化、自覚化させることができるのは、まさにこの葬儀という場ではないかと思います。

亡き人は個人的に、家族の中で生き続けることになります。共同体の死者というよりも、家族の死者ですね。即ち、家族としてのさまざまな思い出だとか、そういったもののなかに人は生き続けるわけです。

これは批判する人もいらっしゃいますが、「千の風」のあの歌も、実は、家族を失った遺族の願いであり、存在し続けていて欲しいという強い思いがあの歌の中に込められていると私は思います。どのような形で還相し、亡くなった方と生きている方が出会えるかという感じ方には、それぞれの形があると思います。各個人の思い出の

中にいる場合もありますし、風の中に亡くなったお父さんがいると感じる人がいても、それは全くおかしくないと私は考えます。遺族の方々の立場になってそうした意味や思いを、我々自身が受けとめて理解していただくようにしていくことがとても必要なのではないかと思っています。

そこで、浄土宗の葬儀の意味をもう一度見直してみますと、私たちの生きる意味、真の人生の目的というのは、法然上人の教えに従い、日々の中で念仏に励み、さらに言えば、菩薩として、有縁無縁の人々の苦しみ、悲しみに手を差し伸べることになります。

私どもの浄土宗が、他の宗派の方から、「浄土宗は何であんなに社会福祉に熱心なんですか」と言われます。それぐらい他の宗派に比べて浄土宗は福祉活動を盛んにしています。これこそ、苦の衆生に手を差し伸べている教団としてのあり方だと思います。そうしたことからいえば、いろいろなボランティア活動などのすべての行いは、こうした法然上人の教えにもかなっていると私自身は考えています。

生きているときにその慈悲行が全うできないので、臨終に際して阿弥陀様の来迎を得て、極楽に往生し、そこで菩薩として利他行を積み、さらには悟りを得て成仏を果たし、苦しみの人々を救う、それも有縁無縁の一切の衆生をです。この浄土宗の教えの有縁の衆生とは、遺された人々にとっては、「うちの亡くなったお父さんが私たちを救って下さる」ということにもなるのではないでしょうか。

このような教えであるということがわかると、葬儀とは、肉体的な死を迎えて営まれる葬儀の場で三帰戒を受けて、仏教信者として、衆生救済という目的を果たすために往生するという新たな生まれ変わりの儀式ととらえることができます。

ですから、一般に戒名と呼ばれているような、法名は要らないといわれる方がいますが、法名があるからこそ、遺族の人たちは、「お父さんは菩薩として仏になる方としての名前を持って、私たちを守ってくれている方になったのだ」と理解することができるわけです。菩薩とその使命を明確に意識させるのは、法名であり位牌だと思います。

俗名というのは、人生の前半生の現世での名前です。ですから「生まれ変わったら、新しい目的を持った名前をお授けするのだ、だから必要なのだ」と、これは絶対に伝え納得していただかなくてはいけないことだと思います。これは私ども浄土宗総合研究所の一致した意見であります。葬儀も含めて、何で戒名が必要なのかと問われたら、それは「あなたたち遺族を守る方の新しい目的のための名前なのだから」と説明すべきです。そして、「それが亡くなった方の

生まれ変わった目的であり、私たちが感謝をするためのお名前なのだ」ということを明確にさせるということが重要なのではないかと思います。

そして、葬儀の参列者も、故人が新たな浄土へ生まれ変わっていくことを実感し、今後、遺された会葬者一人一人を守ってくださる、救ってくださるということを確信する場であり、確信させなくてはいけない場だと思うのです。私たち僧侶もその場限りのお別れのための儀式の執行役、雰囲気を盛り上げるための役割であってはいけない。「これからも生き続けていく方に守られて生きる、その方のために私は来たのだ。来てよかった」と、その場に参列した方に実感していただかなければいけないのではないかと思います。

もちろん、仏教の真理として、無常を感じる場であることは間違いありません。ただ、それだけではなくて、例えば、浄土教の場合ですと、さらなる出会いがこれからもあるわけです。肉体としての終わりはあるけれども、さらなる目的があって、浄土に往かれた方との応答がこれからもあるのだということを実感していただくことが重要なのだと思います。無常だけでは葬儀の重要な点をきちんと伝え切れていないのではないかと思います。

そうした意味でいうと、縮小する人間関係の縁のなかで、葬儀こそが家族にとって唯一の救いになる場だとおわかりいただけたかと思います。さらに、故人との関係からいえば、葬儀は遺族だけのものではないということです。それは、故人の人生にかかわったすべての人々にとって、同じように意味のあることだと思うのです。今の家族は、自分以外の家族のことを知らなさ過ぎると思います。長寿になればなるほど、「おじいちゃんには友達が誰もいない、だから、誰にも伝える必要はない」ということが言われますが、それは家族が知らないだけなのです。自分たちの無知や無関心をおじいちゃんのせいにしてはいけません。それから、おじいちゃん、おばあちゃんが「簡単で、ささやかでいいよ」「だれも呼ばないでいい」と言ったからと、お年寄りの、「人に迷惑をかけたくない」と思う気持ちをそのまま真に受ける遺族にしてはいけません。我々は、そのことを思い返す機会をつくってあげなくてはいけない。「本当にそうなんですか」ということですね。人間、生まれてから死ぬまで、だれも知り合いがいなかった人はいません。幾つになってもさまざまな絆があります。来てもらいたい人も行きたい人もいるかもしれない。

そうした意味でいうと、浄土宗は、死者と生者が共生（ともいき）する仏教です。共に生き続ける宗教です。浄土宗の劈頭宣言の中で

も、「愚者の自覚を、家庭にみ仏の光を、社会に慈しみを、世界に共生（ともいき）を」と、さまざまな共生を伝えていますが、その大前提として、阿弥陀様と私たちの共生があり、そして、極楽に往った故人と残された者たちの共生があります。

日々生きるなかで、先に往かれた方々に守られ、それに報いようと生きる。そして、その方々が成仏を目指す。そのために供養し、日々、念仏回向を行う。それが「浄土宗における人が生きる」という意味です。浄土宗では、この世で生きている人間たちだけの社会ではありません。極楽とこの世も一つの社会としてつながっているのです。

次に、なぜ年回法要を行うことが大事なのかについてお話ししたいと思います。

遺族の方々が、阿弥陀様に亡くなった人の菩提を増上するように供養の心を捧げます。お念仏をとなえます。それによって、阿弥陀様が亡き人の菩提を増上して下さり、それによって亡き人は私たちに還相される。この三者の関係がつながっているのが浄土宗です。

我々が亡くなった方の菩提を増上させるのではありません。僧侶や遺族は阿弥陀様に願いをかけるだけです。それによって、阿弥陀様が亡くなった方へ働きかけてくださいます。そして、その働きを受けた亡くなった方が私たちに働きかけてくださる。回向はこのようにぐるりと一回りします。遺族の方たちがお寺さんに法要をお願いするというのではなくて、遺族の方たちには、「私たちが法要することが大事なのです」というふうに積極的に思っていただくことが浄土宗の心だと思うのです。遺族の方たちが主体的に喜んで法要に、施餓鬼会に、さまざまな行事に参加してくださるのではなくてはなりません。それが、亡くなった方のためであり、遺された家族のためなのです。

今の社会で一番必要なのが、そういう、「私たちにできることは何か？」という思いです。それは、お坊さんに、お寺さんにお経を上げてもらうことですか。違います。それは、遺族の方たちが、自分たちの思いを亡くなった方に届けようという心で法要を行うことです。私たちはその手助けをするのです。つまり、現代の社会のなかで、一人一人に、「私たちにもできることがある」と法要を積極的に行っていただくことです。それが年回法要の心だと思います。

最後に、葬儀と年回法要についての浄土宗の教えの根拠について考えてみたいと思います。

これは『発願文』の中に出てくる善導大師の法語を私なりに読み解いたものですが、さらに、法然上人の御消息にも当然、「人は何

のために生きるか」ということが書かれております。

一つ目は津戸の三郎へつかわす御返事ですが、「かかる不信の衆生のために、慈悲をおこして、利益せんと思うにつけても、とく極楽へまいりて、さとりをひらきて、生死にかえりて誹謗不信のものをわたして、一切衆生をあまねく利益せんとおもうべき」であると諭しています。

また、鎌倉の二位の禅尼へ進ずる御返事にも「慈悲をおこして、念仏申して、極楽の上品上生にまいりて、さとりをひらき、生死にかえりて」と書かれています。次の大胡の太郎への御返事もそうです。「よくよく往生をもねがい、念仏をも励ませたまいて、位高く往生して、いそぎかえりきたりて、人をもみちびかんとおぼしめすべく候」とあります。

これらの言葉は、まさに法然上人が、「我々が念仏者として生きる究極の目的は還相なのだ」ということを訴えているのです。これらのお言葉こそ、我々現代社会が一番必要としている人と人との絆の存在そのものではないかと思うのです。

即ち、亡くなる方もそうですし、家族の方も、亡くなった方があなたたちのことをどのように思っていてくださるのか。つまり「亡くなったから終わり」ではなくて、亡くなった方が生きている我々のことをどう思ってくださっているのかという思いを常にめぐらさせる必要があります。

そうすることで、「この世に生きるわれわれは、阿弥陀様とともに極楽で苦の衆生を救済している死者（先祖）に見守られ絆を保ち続けている」という新しい家族観ができます。もうひとつは、生きている我々も、大乗の仏教徒として菩薩行を行う必要性があるのということです。社会にかかわる仏教です。これらもすべて苦の衆生を救う慈悲行の実践であり、その先に往生浄土という考え方があるべきだという、この21世紀の浄土宗の劈頭宣言の考え方が、今、このような社会だからこそ、必要とされているのではないかと思います。

ＮＨＫの「無縁社会」というプロジェクトは、3年前に企画と取材が始まったようですが、この時に我々が、「無縁」という言葉の重要性について、考えていただろうかと思うと、我々の至らなさを感じてしまいます。檀家の後継者がいなくなることが無縁だと思っていただけではないでしょうか。

この言葉が一般化された後でこういうことを言うのも非常に恥ずかしい思いもするわけですが、今こそ我々自身が、葬儀・年回法要

を通して、我々が果たすべき、新しい家族が生まれ変わっていくことに手を差し伸べていくという役割の重要性について、考え直すべきときだと思います。

そして、年回法要を通して新しい家族が生まれ変わっていくことに手を貸しているという、強い誇りと宗教的な信念を持つことこそ、今の状況に対して我々ができることでありますし、浄土宗がこれから生き残っていくという意味でも、一番重要なことではないかと思います。以上で終わらせていただきます。（拍手）

講題　「仏教と葬祭の関係」

曹洞宗僧侶・駒澤大学名誉教授　奈良康明

1．皆さん、こんにちは。ただいま、ご紹介をいただきました奈良でございます。先ほど、武田先生のお話を伺いまして、大変参考になりました。私は曹洞宗の人間でありますが、重なるところと重ならないところがございました。いろいろな意味で、葬祭に関心を持っている人間として、教えられるところが多くございました。

曹洞宗の立場を申しますが、決して曹洞宗の宗義を言うわけではございません。あくまでも、私個人の考え方でございますので、そういうふうにお聞きをいただきたいと思います。

発表のためのレジュメを出させていただきましたので、それをご覧になりながらお聞きいただきたいと思いますが、「仏教と葬祭の関係」という形で、幾分理念的なことを申し上げたいと思います。

基本的な視点といたしましては、葬祭はメディアが問題視しているほどひどくはないと思います。しかし、ひどい事例があるのも事実なのです。あえていえば、少数の心ない事例が、教団全般の評価にかぶさっている面があろうかと思います。

同時に、一般的傾向として、私ども僧侶の、いわば葬祭に関する職業（化的なもの）の行き過ぎた姿勢も多々ございますが、従来の葬祭の意義と意味が失われてもおります。

何か大きなきっかけがあると、仏教葬祭はつぶれてしまうのではないかという危険性を感じておりまして、僧侶個人としても教団としても緊急に対応すべき問題であります。そういう意味で、日本仏教教団にとりまして、葬祭は大きな曲がり角に来ているだろうと思っています。〝直葬〟などという問題は、その象徴的な問題でしょう。

今日の葬祭の問題点として、レジュメに（1）と書きましたが、ここは読むだけにいたします。現在、葬祭がおろそかにされておりますが、無視、軽視、あるいは形式化されている伝統を数え上げますと、先ほど武田先生のお話にもございましたが、まず社会的認知という機能があまりなくなってきました。

地域共同体の人間関係の崩壊、あるいは秩序の回復もできにくくなっている。社会的連帯感も薄い。死者への敬意、死者との親しい関係の喪失。それから、死者霊との関係の二面性、霊魂を認めると認めない。それにかかわらず、今度はお盆とかお彼岸のときの、墓参りという習俗は霊魂を認めるか認めないかなどという問題を超え、複雑な様相を示しています。

あるいは、葬祭というものを、生きている人の心の癒しという重要な機能があったはずなのですが、それがどうも薄くなっているように思いますし、それと深く関連して、葬祭儀礼の形式化というものもあろうかと思います。仏教者側の葬祭への意識のあいまいさなどもあるかと思います。

そうしたことを踏まえて、本日は問題点として、仏教と葬祭の関係、それから生者と死者の関係について申し上げたいと思います。

2．まず、仏教と葬祭の関係です。先ほど武田先生のお話の中にも、一般的な傾向としてご指摘がありましたが、仏教僧侶が葬祭を行って悪い理由は全くないと思っています。歴史的にも葬祭と仏教教団はどこでも深くかかわっています。世界の仏教教団はすべて葬祭を信者のために行っています。

しかし、今日のように問題が出てくると、僧侶が葬祭を行うのは筋が違うとか、行うべきでないとか言われますし、一方、僧侶の側でも忸怩たる思いで葬祭を行っているということがございます。

これも先ほど武田先生のお話の中にもございましたし、浄土宗の総合研究所が前に出された『葬祭仏教』（ノンブル社・１９９７年）という本の中にも、僧侶が忸怩たる思いで葬祭を行っている面があることを指摘されております。これは、実は曹洞宗でも同じでございます。しかし、私どもが忸怩たる思いを持って葬祭を行っていては、社会の人々に満足を与える儀礼はできないだろうと思います。

なぜそうなのでしょうか。仏教というのは、宗教的にハイレベルの信仰であり、実存的な信仰であります。一言で言うならば、悟り、往生を求める信仰であります。自己というものを見詰め、宗教的「安心」を求める宗教でありましょうし、私は仏教を、「自己凝視」することを本分とする宗教と見ております。

どういうことかというと、自己の内部を凝視し、自我的なはからいを否定して、自己、人間の究極の価値を追求していく、これは仏教の用語を使って言えば出世間レベルの教えだと思います。仏教の教理の大部分はこのレベルにあると思います。

そして、このレベルの信仰というものがなかったら、仏教ではなくなってしまいます。その意味で、このレベルの教えが「仏教の本質」だと言ってよろしいと思います。

しかし、一方、葬祭は民俗儀礼です。私どもの社会生活にも、例えば通過儀礼とか農耕儀礼とか、さまざまな民俗的な観念と儀礼がございますが、それをなくしては社会生活が成り立ちません。そういう意味で、いろいろな民俗的な儀礼と相並んで葬祭というものは、「社会生活に必須の宗教的要請」でございます。

仏教の本質が悟り、往生にあり、そして「自己凝視」のレベルだというなら、葬祭をはじめとする民俗信仰は、社会生活に必須の宗教的要請であり、その内容は「自我充足」だといっていいものです。つまり、自己以外の何らかの超越的な存在、例えば神とか精霊とか鬼霊とか霊魂とか、あるいはそういう観念とのかかわりにおいて自我の充足を図り、心理的・精神的安定を求めると言ってよろしいかと思います。

したがいまして、本質的な仏教信仰と葬祭というものは、宗教的なレベルも違いますし、機能も違いますし、構造も違いますし、意味も違います。発生の経緯も異なっています。

ですから、釈尊も比丘たちも信者さんの葬祭にかかわっておりません。それでも、ちゃんと仏教信仰は成り立ち、教えが説かれているわけです。ついでに申し上げるならば、古代インドにおきまして、信者さん方の葬祭はバラモン僧がやって来て行っていました。

つまり、葬祭と仏教信仰は直接の関係はないんです。しかし、現実の歴史の中では仏教教団は葬祭を手がけ、それによって教団が定着し発展してまいりました。これは、南方上座部におきましても、チベット仏教におきましても、大乗仏教におきましても、そして日本の仏教におきましても同じでございます。

日本においても室町期以降、各教団が葬祭を手がけることによって津々浦々まで教団が発展してきたという事実がございます。これは特に、私ども禅宗のほうで言うならば、圭室諦成先生の名著といわれます『葬式仏教』（大法輪閣・１９６３年）という本によって論証されている問題でございます。

つまり、仏教信仰は葬祭がなくても成り立つが、教団が社会に定着するためには葬祭がないと維持できないのです。そして葬祭と仏教教理は理論としては整合しないのです。木に竹を接ぐようなものだからです。葬祭そのものは仏教の教理に完全にはのりません。端的な一例が、霊魂と無我説の問題です。

輪廻説は古代インドの民俗信仰に端を発しています。輪廻の主体は霊魂ですが、仏教の無我説と正面からぶつかります。それにもかかわらず、釈尊は通俗的倫理として功徳を積み、良き後生を願う輪廻説を（少なくとも当初は）在俗信者に容認しています。次第に仏教教団は霊魂と無我説との矛盾に苦しみ、さまざまな議論がでています。最終的には、唯識説の阿頼耶識こそが実態でなくして業を担っ

て輪廻していく主体であり霊魂であるとまでいうようになりました。

ただ、これは教理学の問題でありまして、一般の教団のレベルにおいては全く理解されない問題で、依然として未解決だと言わざるを得ません。現に日本でも、この疑問に対して仏教側からはほとんど説明がされていません。

当たり前なんです。仏教教理は民俗的な要素を考慮しながら構成されたものではないのですから。

しかし、教団が葬祭を行うようになったときには、仏教の世界観との種々の関係づけは当然出てきますし、また出てこなければなりません。仏教葬祭の意味づけはしなくてはならないものでしょう。

そして、ここに実はインド以来の仏教指導者の特色がありまして、〝悟り一点主義〟というのがあるんです。悟り、往生以外は「仏教」ではないという考え方が強いんです。ですから、葬祭の意義づけはするのですが、禅宗系ではせいぜい教化布教の場である、などと意義づけます。しかし「仏教」ではないのです。

そこから、葬祭は仏教ではないということが出てきてしまうのです。しかし、仏教教団が公認し、僧侶全員がそれを行い、経済的基盤ともなっている葬祭が、なぜ、「仏教」ではないのでしょう。民俗としての葬祭はそれなりの遺族の心を安んじる機能を持っていますし、現代ではとにかく仏教的意味づけもなされています。それを何で仏教ではないと拒否するのでしょうか。

仏教を教理としてのみでとらえるから、そういうことになるので、民衆の間に定着している仏教、教団がかかわっている仏教を広くとらえるならば、仏教でないと切り捨てる方がおかしいのです（私はそれを「仏教文化」と位置づけているのですが、本日はこれに深入りしないことにします）。

3．もちろん、民族儀礼の救済と仏教と実存的な救済の内容が違うことは当然です。しかし、民俗が心を安んじ、癒しの儀礼として伝承されていることも事実で、民俗の中には迷信的なものもありますが、それは別として、だからこそ民俗を吸収することによって、教団は社会に定着し得たものです。純粋培養されたような教理のみで社会生活は成り立たないのです。

そう考えてまいりますと、葬祭にかかわる観念と儀礼の仏教化が大切になってきます。教理化ではありません。意味づけです。各宗派の教理、世界観によってそれぞれに異なります。

たとえば曹洞宗では、葬祭は「悟りの実践」であると説く方もいます。悟りの生活の普遍性という視点からの意見ですが、さすがに有力ではありません。一番普通に、私どもが教えられてきているの

は、葬祭は教化の手段、教化の場であるということです。

例えば、葬式は死というものを見つめさせるから、そこで無常を説く。無常の人生を知らしめ、無常を生きる「安心」を説き、信仰へと導入させていかなければならない。だからこそ通夜説教は大事だなどと説かれてきているわけです。

しかし、そんなことは何も葬祭だけでやることではなくて、普段からやっていることだろうと思いますし、またやっていなくてはいけないものでしょう。曹洞宗の人間として敢えて言わせていただくならば、普段何にもしないでいて、葬祭のときだけ無常を説くというのは何だろうという疑問を、私は持つんです。

葬祭は、手段ではないと思います。葬祭儀礼は葬祭儀礼自体として意味のあるものです。例えば、葬祭儀礼というのが本来どういうものかというと、家族が亡くなります。膝ががくがくするぐらい不安で悲しい。そこに、近所の人や親戚、友人などが来て励ましてくれる。慰めてくれ、いろいろ助けてくれて仲間意識が出てくるわけです。

そして、そこに顔の知ったお坊さん、檀那寺のご住職が来てお経を読んでくれる。それが、何かはよくはわからないなりに、こうやるものだと決まっている一つの形です。長い時間をかけて成立してできた、家族を失った人間の悲しみを癒していく一つの形なんです。

そして、そういう形が行われていくことによって、逆に悲しみの心が少しずつ慰められ、癒されていく、そういう葬祭儀礼そのものの意味があると思います。

ですから、そうした儀礼の本来的な機能を無視、あるいは軽視して教化の手段であるとか、いや悟りに導くものだとかいったような意味づけより先に、儀礼自体の意味を重視するべきでしょう。信仰を鼓吹するとか、教化が先立っているんです。そうではなくて、もっと遺族の心に寄り添った形で、僧侶の慈悲の発露として、葬祭儀礼を心から行っていくべきだし、それが実は、教化につながるものだろうと思います。

葬祭は教化の手段ではなくて、結果なので、あまりに教義的、あるいは教化面での建前を主張すると、葬祭の実がないものになってきてしまいます。葬祭儀礼そのものは心の癒しの儀礼なのです。

そのためにこそ仏教的世界観とかかわる面があるのですが、形式化してしまっています。もちろん慈悲の心を持って一所懸命に儀礼をやっている方はたくさんいますし、多くの僧侶がそれを意識してやっているのです。しかし、そういう葬祭のあるべき姿が教団全般としてはやはり薄いといわざるを得ませんし、それが教団全般の葬祭の形式化につながり、仏教葬祭の評価を下げているものだろうと思います。

まとめて言うならば、葬祭は仏教の本義とは宗教的機能、レベル、意味、成立の経緯等を異にするものであり、悟りや成仏を目指す「修行」ではありません。仏教行事として意味づけることは必要ですが、必ずしも仏教教理と整合性を得られるものではありません。

整合性が得られないから仏教ではない、仏教僧侶としてやるべきでないなどと考える必要はないと、私は考えています。あくまでも、遺族の悲しみの心を癒す儀礼として、慈悲の行為として行うべきものでしょうし、その意味で、儀礼そのものの意味を重視したいと思います。

心温まる、そして檀信徒の方が納得できる葬祭儀礼というものを、現在いろいろとある形（儀礼の形式）に内実の心を吹き込んでいく作業が欠けている面を反省するべきではないでしょうか。それが今日の仏教葬祭が魅力を失っている最大の理由だと考えております。

4．次の問題ですが、葬祭の中心テーマは、霊魂をも含む生者と死者との関係だと思います。

回向というと、これは仏教の教理のほうでそれなりの定義がございます。自分の積んだ善根功徳を自己および他者の悟りに対して回向する、回し向けると教えられています。その通りだと思うのですが、具体的実践の面から言うともう一つよくわからない。私はその意味を広げて、葬祭儀礼に関しては、次のように考えています。

つまり、生きている人間の死者を思う心を、故人に回し向けていく、心遣いを向けていくという、ごく素直な意味でとっていいと、応用問題として考えております。

実は、こうした例に関しまして、『寺門興隆』の２０１０年6・7月号に、私は〝直葬〟について書かせていただきました。

そこにいくつかの例を書きましたが、例えば下町の女性で、父親の法要に際し、「天国にいるに違いない父親に不自由させてはいけない」とわざわざ走り回って、父親の好きだった刻みたばこを買ってきてお供物として捧げているという場面がありました。

やはり葬式、あるいは法要に際して亡き人を思い、会話し、語りかけること、それは生者の立場から死者に心を向けることであると同時に、実はそうした死者との心の交流、会話というものが、今度は生きている人間に返ってくるわけです。

そして、生きている人間が人生を、毎日を前向きに生きていく力にもなっている、一種のカタルシスとなっている。そういう形で回向ということを考えております。

私どもとしては葬祭というものの意味や意義を認めてもらうということと同時に、それ以上に、生者と死者との親しい人間的な感情の交流を復活していくための努力というか、オリエンテーションを

していかなければいけないのではないかと考えています。今日「無縁社会」ということがいわれ、もっと人間的なツナガリのある社会に戻そうという動きがありますが、同じことを生者と死者、ご先祖、についても考えていっていいでしょう。

そして、難しいのは霊魂の問題ですが、「死者霊を巡る考え方（曹洞宗僧侶へのアンケート）」というものを資料として提示しておきました。これは、曹洞宗総合研究センターが『葬祭　現代的意義と課題』という書物を２００３年に出しまして、その資料編のほうに載っている調査です。

おもしろい統計がございまして、曹洞宗の僧侶に対してのアンケートです。複数回答ですが、「魂は存在する」が47・6％。「魂は存在しない」が7・5％。「追憶のなかに存在する」が47・0％。「素朴な感覚として存在する」が54・8％となっています。

明らかに、ここには葬祭というものは死者の霊に対して行う儀礼だという一般通念があり、同時に仏教は無我説であって霊魂の存在を認めないという知識があり、その中間にどのように考えていいかと迷った結果、このような回答がなされているのだと思います。

先ほど、武田先生が、家族の思い出の中に実感される生者と死者との絆ということをおっしゃられましたが、私はもう一歩進めて、生者の追憶に残る死者の人格というものを、葬祭における霊と認めていいのではないかとさえ考えております。

もちろん、物理的な霊魂があるのだと考えられる方は、それを信じてよろしいかと思います。それは一向に構わないと思います。先ほど申し上げたように、葬祭というのは教理ではないのです。民俗なのです。

だとすると、一番考えやすい。しかし、もっとも正しく建設的だと思われる考え方を受けて一向に構わないと、私は思います。と同時に、無我説というものとのかかわり合いがありますから、私個人は「霊魂はあるのか」と聞かれたら、「今のところあるとは思いません」と答えています。そんなことで、葬祭ができるのかというと、「十分にできる」と答えているのであります。

私に合理的思考に「毒された」親しい友人がおりまして、宗教も認めない、人間の死も認めない、ましてや霊魂なども認めない人間です。その私の友人が、父親の葬儀で会葬された方々に挨拶して「皆さん、どうも本日はありがとうございました。亡き父も草葉の陰で喜んでいると思います」と言っていました。あとで「お前の普段言っていることと違うじゃないか」と批判したら、にやっと笑って「でも、親父の笑う顔が出てきたんだよね」などと言っていました。

あるいは、天国にいる父親に刻みたばこをご法事の際にお供えした女性に、別の機会にですが「霊魂はあると思う?」と訊いたら、

こともなげに「霊魂ですか。そんなものないんじゃないですか」と答えておりました。

こういう受け止め方というものがあるわけです。

それから、養老孟司先生とお話をしておりましたら、先生は脳死を認めない方なのですが、「三人称で呼びかけたときに、その故人は死んでいる。二人称で呼びかけたときに生きている」とおっしゃっていました。

つまり、「ねえ、あなた、早く死んじゃったわね。皆寂しいわよ」などと、「あなた」という二人称で呼びかけているときに、その方にとってご主人は生きていると言うんですよ。ところが、「主人はもう亡くなっちゃったんですよ」と言ったときに、既に死んでいるということなんです。

つまり、人間の死後の存在というものを、単に物理的な霊魂の存在だけで判断するのではなくて、もう少し私ども生きている人間の心の働きの中で認めていくことが、あってよろしいのではないかと思います。

まとめますと、人生を生き抜いてきた人の死の重さを尊重するという心情、心根を育てて、死者と生者との交流の意味をオリエンテーションしていく必要が私どもにあるのではないかと思います。

その一環として、物理的な霊魂の存在を認めてもいいけれども、認めなくても葬祭は成り立つし、仏教の無我説との矛盾も説明しやすくなるのではないかと考えております。

そのほか、現代の葬祭儀礼につきましては、いろいろと合理的な説明というものが必要だし、可能だと思いますが、それは本日省略をさせていただきます。

以上、2点について私見を申し述べさせていただきました。ご清聴どうもありがとうございました。（拍手）

講題　「もう1度やってほしいと言われる葬儀のために」

高野山真言宗僧侶・月刊『寺門興隆』編集発行人　矢澤澄道

身に余るご紹介をいただきまして、ありがとうございます。

武田先生にいたしましても、奈良先生にいたしましても、わかりやすく調査研究を重ねていらっしゃるようです。それに対して私は、小さい雑誌でございますが、ジャーナリズムの手法で見てきた人間であります。

ジャーナリズムというのは、アカデミズムとは大分違いまして、その日、その日の話題を、そのまま伝えるという手法をとります。調査はするけれども、比較分析はともかくも、研究などはしないで、その生の形のまま、読者に考える材料を提供するという立場です。

ですから、いくら積み重ねてみても、それは質的に変化はありませんので、研究にはならないのでございます。きょう発表することも、研究というわけではございませんので、その日、その日に考えてきたことの一端を、時間をいただける範囲で申し上げたいと思います。

お二人の先生方の発表は本当にそのとおりだと思いますので、それを捕捉するような内容になると思います。

さて、私のジャーナリズムの視点は、常に寺院にありまして、寺院からものを見ていくという立場だけです。それが唯一の視座でありますので、多少これまでの先生のご発表とは違う表現になると思います。ただ、それは表現が違うだけで、申し上げるところは同じであります。

まず第一に、私が寺院というものを考えるときに、いつも念頭に置いている言葉があります。それは社会学者のマックス・ウェーバーという人の言葉です。

「世界宗教の中で、仏教のみが宗教税を制度化せずに教団を維持しようとした不思議な宗教である」ということです。ここでいう仏教というのは、日本の仏教をかなり視野に入れた言葉です。

宗教税というものを制度化していない宗教は、仏教だけで、ほかの宗教は全部宗教税というものを、名前は違っても信徒に課しているわけです。それに対して仏教は、税金という形で徴収するということがない宗教なんだということで、私はなるほどなと思いました。

ただ、そこで問題になるのは、宗教を維持するのにはお金がかかるということです。この場合の宗教というのは、哲学的・倫理的、あるいは学問的宗教ではないのです。教会です。教会を維持する制度には宗教税が要るというわけです。したがって、寺院を維持するのにはお金が要るわけです。きょうはそこから考えてみたいと思います。

寺院が供給するものは、もちろん仏教です。それ以外にもあるかもしれませんが、中核は仏教です。その仏教を生かすものは、絵画であったり、文学であったり、美術であったり、あるいは習俗であったりするかもしれませんが、まず第一にはそこに僧侶というものがいなければいけません。

そこで、僧侶という立場から、今回与えられた葬儀の問題を考えてみたいと思います。

では、僧侶が何によって生きているのかといえば、皆さんも既にご存じのように庭を耕して生きているわけではありませんし、また何か物を売って生きているわけではございません。これは、確実にお布施で生きているわけです。

これを、乞食（こつじき）で生きていると言い換えてもいいと思

います。原始仏教はそのとおりです。僧侶は生産をしてはいけないので、とにかく皆の思し召しを得て、僧侶は生きているんです。それ以外で生きている僧侶がいるとしたら、それは余分なことなんです。

僧侶は、お布施でしか生きられないんです。それを自ら認めたのが僧侶なんです。ですので、お布施を得なければ生きていけません。もしお布施を得られなければ、その僧侶は僧侶として立ち行かなくなるというのが原則なんです。今、私は僧侶を個人のように言いましたが、もともと僧侶教団と言い換えてもいいし、寺院と言い換えてもいいように思います。

そこで、私たちが今持っている、この寺院を守る人は誰かといえば、もちろんそれは僧侶であります。しかし、僧侶だけで守っていけるわけではありません。それを支えて護持する人たち、それを本日では檀家といっております。

かつての日本仏教は、その檀家が国家でした。国家によって仏教は守られていましたが、国家の統一性がなくなって破綻しますと、今度は武士階級とか勢力者によって守られてきたわけです。

そして、法然上人、親鸞聖人、日蓮聖人などの人々によって、一気に寺院というものが民衆化していきます。そのときに、寺院というものは革命的にその性格を異にしました。

寺院というのは、僧侶だけのものではないし、国家だけのものでもなくなったわけです。国家のものであったときに、仏教はどういう役割をしたかというと、たたりや災い、そしてけがれを清めるために制度化したと、一面では言えるのではないかと思います。

それは、上から与えられた思想です。そういう思想が、平安前期まで蔓延していたのではないかと思います。それは、戦争や飢饉、大災害などが起こったとき、その理由を為政者はある程度理由づけたり、管理できなければ権威がなくなってしまいますので、それに仏教を使ったわけです。もちろん、仏教だけではありません。神道も利用していったわけです。

それが時代の変遷と共に、仏教は国のものから庶民のものへと変わっていき、説く対象が庶民化していく時代になっていったわけです。

その中で、先ほど武田先生が説かれたように、人間の中で最も苛酷な現実は死でありますから、その死一点に布教の焦点を当てて、それを往生という形で、布教の方便として、仏教を、教団を維持していくために制度化したという歴史があったのではないかと思います。

それは今日までやはり変わっていないのではないかと思います。むしろ、檀家制度によってより強化されたのではないかと思います。

したがって、もし「葬儀は誰のためにあるか」といえば、それは僧侶のためにあると言ってもいいのではないかと思います。むしろ、仏教のためにあるわけです。

もちろん、神道であってもいいし、葬儀をしなくてもいいわけです。かつては一遍上人の絵図にもありますように、外に遺棄するという時代も長くあったわけです。私たちはそれをとても不思議に思いましたが、それにもちゃんと理由があったわけです。

実は、この3月に井原今朝男さんという国立歴史民俗博物館の教授が『史実中世仏教』（興山舎　2011年）という本を私どものところから出版しまして、そこに詳しく書いてあります。なぜ肉親の遺体を外に放置できたかという、新しい見解を出しています。

話は少し変わりますが、この仏教と葬祭の関係ですが、もちろん国家によって保護されていたときの仏教は、そのことをそれほど重要視しなくても、教団の維持はできました。庶民からの税金ではなくて国費に支えられていましたが、国家管理から解放されたと同時に、どこかから収入を得なければ維持していけないということになったわけです。

国家から離れた瞬間に、仏教はもう崩壊してもよかったのです。崩壊してもよかったのですが、それを人々は捨てませんでした。しかし、捨てた歴史もあるんです。

皆さんもご存じのように、1203年に、ヴィクラマシラーという寺院がイスラム教に攻撃されまして、そのお寺が滅亡したことをもって、インドにおける仏教は滅びたといわれています。

なぜそこで終わったのかといえば、それは民衆に対して葬送儀礼をあまりしていなかったのではないかという説があります。仏教がなくなったのは、イスラムの攻撃にやられたというよりは、むしろ、社会的な必要性がなくなったので自ら崩壊していったというふうにいう人もいらっしゃいます。

つまり、民衆によって教団は支えられているということが事実であることを、教団は認めていましたが、民衆に迎合する、民衆にあまりにも傾くことを、求道出家集団である僧侶たちは求めなかったんです。そのためにインドにおける仏教は滅びてしまったというふうにもいわれています。

ここは、とても教訓になるところだと思います。私たち僧侶、さらに寺院の目指すものは求道ではありますが、その集団を支えていくのは民衆にほかなりません。

乞食で生きていくしかない僧侶は、いくらお金を集めても大した額になりません。1日、1日を暮らす程度のものしか得ないというのが乞食僧でありますが、それを外から守るのは民衆です。ですから、民衆に対して何もしない仏教は当然滅びます。

やはり、まず自利というものがあります。お釈迦様も、自分が悟りを得たときに、これで自分の城へ帰ろうと思ったのではないかと思います。

しかし、梵天に「あなたの教えは他にとっても有効だから」と請われて、立ち上がって5人の仲間に法を説いたというふうにいわれているわけですから、自分だけの行で終わるわけではないのです。やはり、他を生かすという、そこに私どもの本質があると思います。

私は真言宗ですので、弘法大師の書いた『菩提心論』を重要な論文として紹介したいと思います。いかに厳しい求道をしても求道にしか過ぎない。それが誰のためになるのかといったときに、自らのためでだけあるとしたら、それは宗教にはならないわけです。

やはり、それは国家のためであり、民衆のためにならなければならないということです。そこで利他、すなわち「菩提心」というものを位置づけたのです。菩提心とは求道、すなわち自分を救済することがそのまま他を利することになるということです。求道と利他とを一つにするとは、たとえば自らをおいて、他を生かすことです。

そういうところから考えれば、葬儀というのは、もう菩提心そのものです。私たち僧侶が生きていくための菩提心の発露として、葬儀をすべきだというふうに教えられているわけです。それ以外に僧侶が葬儀を行う目的はないのです。

私たちは、基本的に自分の都合のいいものしか見ようとしません。自分の欲するものしか見ようとしません。しかし、目の前に人が倒れていたら、それを無視して放置することはできないと、それを何度も手を差し延べるというのが菩提心なわけです。

こういう言い方をすれば、葬儀というのは僧侶にとって、仏教を守る人々の最期の死を弔う、とても必要なものだと教えられています。つまり、まず仏式葬儀をするのは誰のためかといったら、僧侶自身のためだということです。そして、お寺のためだということを、まず第一に考えなければいけないのだろうと思います。

ですから、「葬儀をする」のではなくて、「葬儀をさせてもらう」というふうに思ったほうが、しやすくなるのではないかと思います。当然、葬儀はするものだと思っていると、相手にさまざまな負荷を与えます。

しかし、葬儀をさせてもらえる、自分もそれによってお布施をもらえるんだと思う。そういう境地が自分にあるとしたら、相手が満足するようないい葬儀ができるのではないかと思います。

私が葬儀をしてやるのだ。それは税金のように当然のことだというのではなくて、乞食ですから、もらえなくとも与えるものです。ですから、させてもらえるんだというような意識の転換が必要なのではないかと思います。

そこで、させてもらうのだという立場から、私が今回の講演をさせていただけるというので、チェックリストをつくってみました。

私も何回か、葬儀についての講演会、あるいはシンポジウムなどに行ったりしているのですが、ではどうしたらいいんだといったときに、どうも手がかりになるものがないのです。

今、問題になっているのは、一つには檀家さんの葬儀です。檀家さんの中に弔わない人があらわれている、あるいは弔えない人が出てきている。これは、今日のキーワードなのですね。私が住寺する寺でも、小さな寺ですが、ここ2〜3年で2つ、ちょっとショックな事案がありました。

1人は、もちろん檀家さんですが、いきなり遺骨を持ってこられました。自分の奥さんの遺骨を突然持ってきて、「これをお墓に入れてほしい」と言われましたので、私はちょっとびっくりしまして「葬儀はしたんですか」と聞きました。そうしたら、「していません。直接火葬をしてもらいました」ということで、親子でやって来ました。私が「なぜ葬儀をしなかったのですか」と聞きましたら、終始無言でした。

「この遺骨をお墓に納めたらどうするのですか」と聞きましたら、「四十九日をしてください」と言われました。「では、戒名はどうするんですか」と聞きましたら、「戒名はつけてください」ということでした。では、「お位牌をつくりましょう」と四十九日の日に葬儀・引導をわたしてから埋葬をしました。やはり、参列者は少なかったですが。

その後、「一周忌やりますか」と聞いたら「やります」。「お施餓鬼には来ますか」と聞いたら「行きます」と。それ以後は一般の檀家さんよりもむしろ熱心で、足繁くお墓参りもするし、檀家さんとして褒められるようなことをすべてしております。

なぜ、そのときに葬儀をしなかったのかということは、私にはわかりません。そこまで調査できませんでした。それが1つ目の例です。〝直葬〟という言葉が、ちょうどあらわれ始めたぐらいのときでしょうか。

2つ目の例は、「自分の親父が亡くなりました。98歳の大往生です。ついては、お葬式をしなくてもいいですか」と言うのです。本当に真顔で言うのです。「お葬式はしなくてもお布施は出しますから」とも言うのです。

「どうして」と聞いたら、「誰も来てくれないから」と言うのです。「広い斎場を使ってやっても誰も来てくれないので、葬儀をする必要はない」と言うのです。そこで私は、「そんなことないでしょう。斎場で寂しいならうちのお寺でやりましょうよ」と言いました。

そこに、斎場の抱える問題があるのです。今まで需要は右肩上が

りで、斎場の経営者は大きな斎場をどんどんつくってきました。今でもそうです。

皆様方もご経験されていると思いますが、２００席ぐらいの大きなホールでも、集まってくるのは10人くらいということがあります。そうすると、寂しいですよね。そういうことを、その人は味わっているのだろうと思います。それで、葬儀をしたくないと言うのです。

ですから、「では、うちの本堂でやったらどうですか。お寺でやりましょうよ。もう3人だけでもいいじゃないですか。あしたでよければ、あしたお通夜をやりましょう」と言って、お通夜をやることになりました。

そうしましたら、20人ぐらいの方が来ました。誰も来てくれないと話していたのでびっくりしましたが、葬儀もそれくらい来ました。何のことはない、誰も来てくれないと自分で思い込んでいただけで、実際はちゃんと来たのです。そういうこともありました。

この2つは、象徴的な例だと思います。葬儀をしたくないわけではないのですが、その一方で葬儀をしたくない理由もあるのです。そこが、とても重要な心理だと思います。

もちろん、弔わない人、弔えない人にはいろいろな理由があります。まず第一に、費用がかかるということです。今の東京で葬儀を出すには２５０万円がかかると言われると尻込みしてしまいます。

しかし、私の実感では、お布施の相場は30年前とあまり変わっていません。何が変わったのかは、皆さんご存じだと思います。接待費、会場費、そして葬儀費に圧倒的にお金がかかるようになりました。

しかも、会葬者も少なくなっているので、香典という相互扶助ができなくなってきています。そのために、出費が多いという観念がもうすでに頭の中にあるものですから、尻込みしてしまうわけです。ただ、実際はそんなにかからないのです。かかるわけがないのです。なおさらお寺でやればかかりません。しかも、お寺によっては「お布施なんか要らないよ」と、相手の境遇をみて、言っている人もいると思います。

ですので、費用がかかるからしないというのはクリアできると思います。会葬者がいないということも、先ほど言ったとおり大きな理由になりますが、これもクリアできると思います。悲しんでくれる人がいないというのは思い過ごしだと思います。

そして、親父はもう十分生きたから死んでも悲しくないので、葬式なんかいいという言い方もあるかもしれません。しかし、これまで挙げたものは情緒的な心理です。しかし、決定的な心理もあります。

これは、私たちとしてはどうしようもないことで、革命的な意識

の転換が必要だと思いますが、「子どもに迷惑をかけたくない」という言い方です。

迷惑をかけたくない、それは長寿社会の長老者がもらした言葉です。こんなに長生きをして、これ以上、死んでからも迷惑をかけたくないということです。

今、電車の中でも子どもが何か悪さをしますと、「そんなことをすると人に迷惑がかかるじゃないの」と、大体親御さんはしかるようです。昔は、こんなしかり方はしませんでした。「そんなことをしたらバチが当たるよ」とか、「そんなことを言ったら恥ずかしいじゃないの」と、こういうふうに叱ったものです。

ところが今は、「迷惑がかかるじゃないの」と言うわけです。迷惑がかからなければいいんです。迷惑がかからなければいいというのは、相対的な価値観ですよね。それに対して、恥をかくよというのは絶対的な観念です。

「迷惑がかかる」という言い方から、私たちは迷惑になる人間がいけない、迷惑になる子どもがいけない、迷惑になる大人がいけない、迷惑になることはみんないけないというふうに考えてしまうわけです。

事実、法律にもあります。昔、暴力団とか愚連隊とかが市民生活に迷惑をかけたのです。そのときに、東京都は初め、昭和37年に「愚連隊防止条例」というものをつくったのです。それが、平成10年に「迷惑防止条例」になりました。その後、ほとんどすべての自治体に迷惑防止条例ができていきました。

ベネッセが平成18年に、東京、ソウル、北京、上海、台北の5都市で、3歳から6歳の幼児を持つ保護者6000人に、我が子に将来、どんな人になってほしいかという質問をしたのです。

そうしましたら、東京のトップは「友人を大切にする人」で74・5%だったのです。その次に、71%が「他人に迷惑をかけない人」と答えたのです。3番目は「自分の家族を大切にする人」です。「周りから尊敬される人」は12%、「社会のために尽くす人」もわずか11%でした。

ところが、ソウルでは「他人に迷惑をかけない人」というのが24・7%、台北では24・1%、北京と上海では何と4%でした。他人に迷惑をかけない人間などというのは、目指すべき人間像ではないのです。日本は、いつのころからかそうなったのでしょうか。

それは当然、高度経済成長によって家族主義になったということも、その1つの理由だと思います。つまり、社会が味方をするのではなくて、所得が充足したので家族内だけでも守れるようになり、それだけ意識する世界が小さくなったのではないかと思います。

これまでは、社会によって自分たちは守られるという意識が強

かったと思いますが、社会は必要ない、家族だけの所得で十分だということで、それが恐らく高度資本主義の行き着く場所になってくるのではないかと思います。今は家族主義ですが、もっと進むと個人主義、個別主義になってくるのではないかと思います。

そういう意味で、先ほどの統計、つまり迷惑をかけない人間像が日本人の理想のようになっていくのかもしれません。個人尊重主義の行きつく場所ではないでしょうか。

そういう前提がありまして、これからの葬儀はどうあるべきかということを、このようにチェックリストにしたわけです。

別にこれは、チェックが多いほうがいいというわけではないのです。少なくとも、私たちにとって葬儀というのは寺院を守る、仏教を守るためのフロントです。最前線です。もちろん、本質ではありません。

フロントが崩壊しますと、本質がむき出しになって壊れます。そういう意味で、やはりフロントはとても重要です。問題はすべてフロントすなわち現場に現れるものです。

物事は現場にあるわけですから、私たちは現場を預かっている人間として、それをどのように対処していくかということが、とても重要だと思います。

そのために、まずは「1　亡くなったら第一報は寺にするよう檀信徒に教えているか」ということです。これは、あくまでも檀家さんがという意味です。もちろん、檀家さんではない人については、また対応を考えなければいけません。

しかし、何事も今までの努力、あるいは営みが崩れるのは、外側からではなくて内側からですから、まず私たちが視野に入れるべきことは、社会全体を見るという目もとても重要だと思いますが、私たちにとっての社会である檀家です。

ですから、檀信徒をまず弔う必要があります。その意味づけは、先ほど武田先生がおっしゃったとおりですが、亡くなったら、第一報は寺にするようにするということです。

これによって、他の人に主導権が渡るのを防ぐことができます。まずは仏教として葬儀をやるということです。僧侶のためにするのではないのです。仏教としてやるのだということを宣言します。そうでないと、本来的にはお坊さんを呼ぶ必要はないのです。

2番目は、「枕経に行っているか」ということです。これは、とても大事なことです。遺族にとって、遺体に触る最も最初の人に信頼を置きます。一番初めに遺体に触った他人を、遺族の心理としては一番重要視します。なぜならば、特殊な事態ですから、遺体に触ってくれるというのはとても信頼に値することなわけです。

お坊さんが行ったらその方の遺体に触ります。そうすると、檀信徒が「親身になって自分の身内を弔ってくれる」というふうに思うわけです。『おくりびと』という映画では、最初に遺体に触れる人が葬儀社の方ですから、もうそちらのほうに主導権が全部いってしまいます。

その役割はとても重要ですから、私はそういう方々に敵対するわけではありません。むしろ、共同でしなければいけないというのが大前提なのですが、まずは僧侶が枕経に行って遺体に触れることがとても重要です。

「3　通夜・葬儀の意味を教えているか」というのは、第1にやるかどうかということですね。「通夜と葬儀をしてくれますか、しませんか」ということを確認しなければなりません。

「4　通夜・葬儀を寺で行うよう勧めているか」。これを、私は常に言っています。葬儀を行うときはお寺でやってください、お寺でやってくれれば満足しますからと申し上げています。それでも、10人に2人ぐらいしかやってくれませんが、これはいろいろな事情があることですので、言い続けたほうがいいと思います。

「5　戒名・法名・法号（位牌）の意味を教えているか」。葬儀というのは仏教のフロントであり、フロントは一瞬で終わるのですが、そこから宗教の中核にいくのには、時間が必要です。つまり、葬儀のあとにある年忌などを重視することが、人々の悲しみに寄り添う檀家制度のいいところだと思うのです。

お寺を守っていくのも、1回だけではなくて何かの機会に繰り返しお寺を守っていく、仏教を守っていく、僧侶を守っていくという形をつくるには、位牌がとても重要です。

繰り返し、繰り返し故人を思い出してもらうことによって、僧侶や寺院の位置づけというのは自ずからされていくと思います。そのために、位牌というのはとても大切です。要は〝位牌仏教〟と言われているぐらいに、位牌は重要なのです。

もちろん、そのことによって、寺院というものが亡くなった人の記録をしてくれるところにもなります。ここは重要な点ですが、自分の家族の記録をしてくれるところには、とても信頼感を感じるものですので、そこから離れることはとても難しいと思います。このようなことを、日ごろから説いていく必要があると思います。

お釈迦様は、人々にあなたはなぜ悲しいのか、あなたはなぜ弔いをしなければいけないのか、あなたはなぜ迷っているのかといったときに、一番初めに必ず「それはあなたが無知だからです」というふうに言ったというのを読んだことがあります。

無知だから、つまり、救われなくともいいというのは無知なんです。葬儀をしなくてもいいというのは無知なんです。魂がないというこ

とは無知なんです。迷わないということも無知です。知がないんです。

あなたは、知識を持っていて、お金もうけや人づき合いは上手ですが、悲しみを乗り越えられる智慧がないでしょう。人を悼む智慧がないでしょう。この智慧ですね。これが仏教の本質ではないかと思います。般若ですよ。

これを実践するのが、葬儀の1つの意義だと思います。したがって、戒名を与えるということは、智慧を授けることにつながると思います。

「6　故人の人柄や経歴、実績、臨終の様子などを詳しく聞いているか」。これは、とても重要なことだと思います。いろいろな統計がありますが、葬儀というのは、やる人にとってはそれしかないのです。一生に1回か2回か3回しかありません。ですので、非常に個別的なものです。統計では計れません。

つかさどる方も、この人だけにしかできない葬儀をしなければいけないんです。この人であるからこういう葬儀をやるということを宣言できるのは、導師しかいないのです。ですので、導師は亡くなった人に対して必ず、葬儀の中で語りかけなければいけないと思います。

私は、必ずこの諷誦文というものをやっています。真言宗では諷誦文というのです。あるいは、歎徳文とか表白とか引導法語とかいいます。

もともと、日本の葬儀は、室町時代辺りに禅宗の人がつくった儀式の例を、各宗派が取り入れていった結果だといわれています。そのときに、引導法語というのはとても重要だということを、他の宗派の人が学んだのです。それから、そういうものが行われるようになりました。

それによって、葬儀とは故人を主人公にする儀礼でありますから、これまで遺族も知らなかったような、寺院でしか語れない故人のストーリーを発表してあげる場が葬儀でもあるわけです。これをしない僧侶は、形式化した僧侶になってしまうと思います。

「7　葬儀のお布施の意味を話しているか」。これは、仏教を守るためだ、僧侶を守るためだ、ひいては檀家を守るためだということです。

私は必ず、葬儀に際しまして、その諷誦文をいたしますし、弔辞を必ず読んでもらっております。これは、なかなか普通の人には読めないものなので、最近はもう、5歳ぐらいの子どもに弔辞を読ませています。

そうすると、一気に葬儀というものが亡き人の物語になります。単にお経を読むだけではなくて、その人の物語が再生できる現場に

なっていくわけです。

奈良先生は先ほど、葬送は仏教本来のものではないとおっしゃいましたが、仏教を守るためには、また仏教を生きたものにするには、葬儀がとても重要だということを、最後に述べておきたいと思います。あとは、先ほどのチェックリストを見ながらチェックしていただければと思います。ありがとうございました。（拍手）

今からのよりよい葬儀のための25チェックリスト（導師用）

（月刊『寺門興隆』矢澤澄道作成／23年2月28日）

1 □亡くなったら第一報は寺にするよう檀信徒に教えているか
2 □枕経に行っているか
3 □通夜・葬儀の意味を教えているか
4 □通夜・葬儀を寺で行うよう勧めているか
5 □戒名・法名・法号（位牌）の意味を教えているか
6 □故人の人柄や経歴、業績、臨終の様子などを詳しく聞いているか
7 □葬儀のお布施の意味を話しているか
8 □葬儀のお布施の額を（問われずとも）伝えているか
9 □納棺に立ち会っているか
10 □葬儀社に通夜・葬儀の祭壇等のしつらえを事前に指導しているか
11 □祭壇上、本尊と位牌と遺影の位置を的確に指導しているか
12 □遺族・会葬者を祭壇の方に向けて座らせているか
13 □葬儀場に勝手なＢＧＭ（音楽）を流すことを止めさせているか
14 □読経中は会葬者への振る舞い（御斎）を中止させているか
15 □通夜の場で法話をしているか
16 □通夜の後のお斎に同席しているか
17 □葬儀で故人に語りかける諷誦文、表白、歎徳文、引導法語などに力を入れているか
18 □葬儀で弔辞を読むようにすすめているか
19 □火葬場に同道しているか
20 □葬儀と初七日をはっきり分けて勤めているか
21 □茶毘（初七日）の後のお斎に同席しているか
22 □（いずれのときにでも）枕団子・一膳飯・霊供膳など供物や雲形、祭壇飾り等の意味を説明しているか
23 □埋葬に同道しているか
24 □七七日忌をしているか
25 □百日忌をしているか
補 □檀信徒以外の葬儀を（積極的に）引き受けているか

◆パネルディスカッション

今岡　それでは、ただいまよりパネルディスカッションに入りたいと思います。

パネリストの先生方は、先ほどご講演いただきました武田道生先生、奈良康明先生、そして矢澤澄道先生です。それから、今回『浄土宗の葬儀と年回法要について』の執筆に当たりました、浄土宗総合研究所の主任研究員である熊井康雄先生を加えた、このメンバーでディスカッションを進めていきたいと思います。

武田　お二人の先生、本当にありがとうございました。お話をお伺いしていて、最初はお二人とも、私の話とは大分違うことをおっしゃっているのかなというふうに思いながら聞いていたのですが、つまるところ、私の話したことと同じ内容だったと思います。

それはどういうことかと申しますと、もちろん宗学的に言えば、葬儀の意味というか、絶対的な重要性というのは特に必要ないわけです。阿弥陀さまのお救いによって極楽に往生するということが決まっているわけですから、僧侶が極楽に送っているわけではないということは間違いありません。

では、何のために葬儀をするのかといったときに、奈良先生は寄り添う心や、葬儀の持っている社会的な意味について指摘されました。

それは、矢澤先生にとっても同じことでありまして、矢澤先生はちょっと〝ひねくれた〟言い方で、そのことをおっしゃっているわけですが、私のほうは、長い話だったにもかかわらず、そのことをきちんとお伝えできなかったのではないかなと思います。

浄土宗における葬儀とは何かといったときに、やはり儀礼の持っている力ということを申し上げておきたいと思います。

葬儀の意味について教義的にわかっていても、それを視覚的、情緒的に会葬者や遺族の人たちに「この方はこういうふうに極楽に生まれ変わっていくのだ」と理解させる力のことです。教義的理解よりももっと強く、儀礼そのものがそういう力を持っているということです。

つまり、葬儀、それは読経であったり、送る言葉であったり、諷誦文、歎徳文であったり、位牌であったり、そうした儀礼の一つ一つが、実はとても強い力を持っていて、浄土宗の持っている、生まれ変わって人々を救うという還相回向の心を、葬儀を通して理解していただくことができるということです。

さらに言えば、生まれ変わっても残された家族は新しい家族に生まれ変わって、これからも〝ともいき〟していけるのだ、つながっ

ていけるのだ、互いに想う心はつながっていくのだということを実感することが、とても重要だというように、葬儀の重要性をお伝えしたわけです。

葬儀の場をとおして、そういう浄土宗の教えがきちんと遺族の人たちに理解されるということ、そして、それからさらに四十九日忌、百カ日忌、一周忌、三回忌、七回忌という年回法要のたびごとに、その心をさらに伝えていくということが重要です。

そうした法要を行うたびに、ご家族の変化であったり、家の生まれ変わっていく姿であることに我々がかかわっていく、そして、法要させていただくというへりくだった心の中に、遺族の方々の感謝や喜びを感じ取っていくということが、実はとても大切なことだろうと思います。

私は、宗教学が専門で、教学は専門ではありません。ですから、教学の細かいことというよりも、そういう社会的な機能、儀礼的な機能といったことからお話しさせていただきました。

ただ、それと同時に一番重要なのは、会葬者の方や、遺族の方が、その場で浄土宗の葬儀を行うことにどういう意味があるのかということを理解するということです。

原点からたどれば、無宗教葬なのか、宗教葬なのかで分かれます。次がその宗教葬の中でなぜ浄土宗なのかということを、我々は問いかけるべきです。

浄土宗の葬儀はこういうところがとても大事なんですよ、というようなことが伝えられるかどうかということが、私は大事だと思いまして、今回の『浄土宗の葬儀と年回法要について』でも、それを中心として書かせていただきました。

今岡　ありがとうございました。奈良先生、どうぞ。

奈良　両先生のお話を伺いまして、感じたことを申し上げさせていただきたいと思います。

武田先生のお話は、細かな統計などもお使いになり、非常にわかりやすく説得力がございまして、いろいろな面で感銘を受けながら伺っておりました。

一つ、私ども曹洞宗との大きな違いかなと思いましたのは、葬儀というものが死者に対して往生を祈る場であるということもさることながら、生きている遺族の方々の極楽往生というものを教え導いていく、信仰を教化していくという面が非常に強いということです。

これは、浄土真宗のほうでも同じだそうで、私が伺った限りにおいては、葬祭というものは死者のためのものというよりは、生者の報恩行であるという解釈をされているということも伺っております。いずれにしても、遺族の方々を信仰に導いていくという面に非常に重きが置かれているように思いました。

私どもも、決して遺族を無視しているわけではありません。亡くなった方に対しては葬儀の中で引導を渡します。それによって悟りの道に導いていく。それによって、儀礼上の意味とすれば、死者を仏の国へ導いていくということがございます。

それでは、遺族の方にどういう姿勢で臨むのかと申しますと、「そういうわけだから、あなたも悟りに向かいなさい」とはちょっと説きにくいのですよね。禅宗の究極的な理想はもちろん成仏、悟りなのですが、葬祭のときに遺族に悟りを求めよとは言いにくいものですから、あまり言いません。

そのかわり、もう少し一般的な意味で信仰の道に引き入れていく教化の場であるという面が強いですね。浄土宗の教化のポイントが「極楽往生」であることははっきりしている。その辺が曹洞宗と違う点の一つかなと感じました。

それだけに、余計、曹洞宗の場合には、儀礼というものの持つ意味が大切かなと思いますし、遺族の方の心を癒す、形式に堕すところのない、温かい葬儀というものを、いろいろと考えていかなければいけないものと考えております。

葬儀を葬祭儀礼として大切にしていく。曹洞宗の場合は、なまじ教化だの何のというのがかえって儀礼の本来の意味をぼかしてしまっている面がありはしないか、そんな反省が私にございます。

今、申し上げたことを裏返すならば、儀礼というものの大切さを武田先生もおっしゃったわけですし、そのとおりだと思います。矢澤先生も、葬祭儀礼というものの大切さを申されましたし、僧侶が葬祭を執行する際の心構えについても申されました。

お布施のことに関してもそうですし、「葬儀をさせてもらう」という一つの姿勢も、いろいろとうなずきながら聞かせていただいた部分がございました。

もう一つ、矢澤先生のおっしゃったお言葉の中に、菩提心というものがございました。これは、私ども僧侶としては常に持っておるべき、そして、それを生活の中に持続させていくべき重要な信仰の基本でございましょうし、その菩提心は、求道ということにつながるわけです。そういう意味で、求道としての葬祭ということを申されました。

これは、特に葬祭とは限らないのですが、最近、「信仰と社会」という問題を大きなテーマとして考えておりまして、あるところにずっと書いたりしています。

これは、ある意味では往相回向と還相回向ということとも似た問題なのですが、禅の場合には自己のうちを見つめ、仏法つまり真実に身を投じて生きていく。法は無我の世界ですし、その無我に向き合っていく。

同時に、私ども現在の僧侶は昔と違って、完全に社会内の存在でございますので、社会のことに一切かかわらないということはできません。社会制度そのものとしても、脱社会の人間などというのは許されないというのが、現代という時代でございます。

そうしますと、「無我の世界」に向かう修行と、「我の世界」でうごめいている社会に対する働きかけというものを、どう調整、ないし統合していくかということが問題となってきます。つまり、悟りの世界に向かうか、社会参加の方向に向かうという二つの方向があります。方向としては二つですが、私たちの生き方としては当然一つに統合されなければならない。

その二つを統合する理念として道元禅師は発菩提心を説いていますし、具体的には慈悲の自覚と実践です。

葬祭もそうした僧侶としての基本的な在り方の上に行われていくべきものだと思いますし、矢澤先生のご意見に賛成です。

今岡　ありがとうございました。矢澤先生、お願いします。

矢澤　武田先生には、社会的に葬儀が置かれた状況を、とてもわかりやすく教えていただきました。

皆さんでつくられた、この『浄土宗の葬儀と年回法要について』についてなのですが、浄土宗だけでなく、各宗派も何々宗における葬儀と年回法要というような、資料を配布したり、作成したりしています。

書かれていることは、先生方がとても苦心して研究された成果ではありますが、読んでいて違和感はなく、そのとおりだろうと思います。

もちろん、細かいところについては論争があるかもしれませんが、大体こういう葬儀の形式で私たちもやっているし、宗義的にもこのようなことで間違いないと、皆さんおっしゃると思います。では、なぜ今、これを改めて発行しなければいけないのかというと、とても重要な理由があるのだろうと思います。

歴史的には、葬儀と宗派というのはあまり関係がなかったように思うんですね。そこにお坊さんがいるからやるので、そのためにどこかからお坊さんを呼ぶということはなかったと思います。

したがって、葬儀は、地域によって守られてきたということが言えると思います。本尊さんが何である、読むお経が何である、呼ぶお坊さんが何宗であるといったことは、頓着しなかったというわけではないでしょうが、重要な関心事ではなかったわけです。

とにかく、お坊さんが導師をしてくれれば、あとは皆がつくっていくという葬儀だったろうと思いますので、それはまるで方言があったようなものだと思います。方言を尊重していた時代があったのと同じように、方言のような葬儀というものがあったのだろうと

思います。

ですので、昔はこういう、「浄土宗における」というものは必要なかったのではないかと思います。むしろ、こういうものがあると弊害になったのではないかと思うぐらいです。現在でも、地方によっては曹洞宗の人、浄土宗の人、真言宗の人が脇導師として、あるいは一緒に葬儀に出ているところもあるぐらいです。

ですから、いわゆる宗派主義的な、宗義を教化する場としての葬儀というものは、なかったのではないかと思います。

それが、方言がなくなるのと同じように、社会の近代化と同時に、社会的な風習というものが少しずつ失われ始めてくると、葬儀という地域社会から守られていたものを、守る人がいなくなってきました。

そうすると、僧侶がすべてを守っていかなければいけないので、そこに宗義性が基本としてないと、守るものがなくなってしまいます。したがって、宗派主義になっていくのではないかなと思いながら、これを興味深く拝見しました。

そういうことと軌を一にすると思うのですが、寺院においても、そういうことが言えるように思います。地域によっては、寺院の格差がとても出てきました。過去の統計はそれほどないので何とも言えませんが、これほど寺院間の格差がある時代は初めてだと思います。

格差といっても、私は質的な格差のことを言っているのではなくて、収入のことを言っています。収入格差がこれほどつくような時代になったのは、今が初めてではないかと思います。これにはもう、皆気がつき始めましたので、対応を始めたのではないかと思います。

また、僧侶の質の格差ですね。これも非常に大きくなった時代だということが言えると思います。それは、地域の葬儀を守る人たちがいなくなったのと同じく、地域のお坊さんたちを守るべき人たちがいなくなったので、お坊さんはまるで〝裸〟になっていったのではないでしょうか。

ところで、これまで宗義上で葬儀がどうあるべきかということを盛んに説いていた宗派は、浄土真宗ぐらいでした。ほかの宗派はほとんど、修行のカリキュラムの中に葬儀の作法を多くは入れていません。

私も、高野山で修行したときには、葬儀の作法については1時間しかなかったと思います。葬儀がいかにあるべきかということより、もっとやることがたくさんありましたし、葬儀をそれほど重要視しなかったのは、地方によって全部違うからだというふうに、先生は話されていました。

つまり、地方によって葬儀の仕方は守られてきたんですね。それ

が解体し始めますと、やはりこういう冊子が必要になってくるんですね。

また、こういうものができることによって、「こういうふうにやっていればいいんだろう」というような問題も、また当然出てきますので、これがまた50年後にどう評価されるかはわかりませんが、こういう教則本が新たに作られるのには、そうした時代の必然性が出てきたんだなと思います。

いうなれば、葬儀を、浄土宗の人は浄土宗の宗義に沿ってやらなければいけなくなる時代になったということだと思います。そのために、浄土宗だったら浄土宗の葬儀というものをはっきりと構築して、メッセージを出していかないといけなくなりました。

またそうしないと、それが本当の葬儀らしいものになってこないのではないだろうかという、心理的な圧迫が僧侶側にあるのではないかと思います。社会がこれをどう見ているか、まだはっきりとはわかりませんが、僧侶側にそういう揺れるところがあるのではないかと思います。

それと関連して、奈良先生の話は、特に求道教団、出家教団の最先端を行っている曹洞宗でありますから、そこで在家の葬送をどういうふうにコミットして、矛盾をなくしているだろうかということについては、とても関心を持って拝聴しました。

それは、先生の中に矛盾なく理解し得ていると思いましたが、それ以前に、日本の葬儀の次第の基本をつくったのは禅宗だといわれていますし、『葬式仏教』という本を書かれた圭室諦成先生も曹洞宗の出であります。

なぜ、最も距離の離れている教団が、最も民衆のほうに近寄るような葬式仏教という、これは悪い意味で言っているのではありません、とても重要な仏教の概念を、今日まで構築する足がかりをつくったのかというところを、ぜひ先生に教えていただければと思います。

曹洞宗は出家教団なのに、在家のほうに目を篤く向けて、ほかの教団がやる前に既にそういうものを民衆化していったというのが、とても象徴的だと思います。ですから、私は学ぶべきところが多いのではないかと思いました。

先生のお話の中では、そこのところを触れられていませんでしたので、ちょっとお尋ねしたいと思います。以上です。

今岡　奈良先生、いかがですか。

奈良　とても難しいご質問ですが、しかしこれは各教団共通の問題ではないでしょうか。

まず、曹洞宗は出家教団を標榜していますが、これは浄土宗でもほかの宗派でも、皆同じだと思います。浄土真宗だけは「非僧非俗」といいますので幾分違うでしょうが、現在の出家、つまり私どもは

結婚し、普通の社会生活を行っています。生活様式の面で、伝統的な意味での出家ではないということが一つあります。

それから、現代においては、社会を出た出家、つまり脱社会の人間は、社会のありようとして認められていません。国勢調査では、職業として「僧侶」などと書く時代でありますから、そういう意味で完全に出家ではない生活様式を持っているわけです。

出家教団を標榜している曹洞宗のメンバーが出家ではないとすると、どうなるのか。仏祖にかえれ、とはよく言われるのですが、これは生活様式を旧に戻せ、ということでは意味がありません。釈尊の時代のインドの出家沙門の生活に戻れといっても不可能ですし、またその必要もありません。必要なのは仏祖の精神に戻ることなので、その意味で私は「現代の出家性」を明らかにする必要があると思っています。また、何人かそういう議論もしていますし、律の新しい解釈と適応も含めて、早急に取り組むべき問題でしょう。

曹洞宗のみならず、仏教各派がなぜ葬祭を扱うようになったのかということについては、いろいろな理由があると思うし、私は一言で言えません。しかし、鎌倉期から室町期にかけて仏教教団がこぞって葬祭を行うようになったのには、いろいろな民俗的な理由があったろうと思います。

例えば、高野山のほうに遺骨を運んでくれる巡礼僧などもおりましたし、最近は新しい研究がなされ、僧侶がそれ以前に葬式に携らなかったのは「穢れ」の観念からで、それをものともしない、下層にいた別のグループのお坊さんが取り上げるようになったとかいうことも言われています。

しかし、基本的には、民衆の側から仏教僧侶への期待があったでしょうし、その際、先ほどの矢澤先生のお話のように、宗派などは関係がなかったものでしょう。そして僧侶もそうした要請に応えた、ということがあったのではないでしょうか。そのうえで各宗派はそれぞれに仏教の世界観をかぶせていったものですし、そうした葬儀はやはり当時としては新しい意味を持っていたし、魅力的であったろうと私は思います。そういう意味で一般化してきたのだろうと思います。

圭室諦成先生の『葬式仏教』という本には、禅宗を中心に資料が集められているのですが、古い時代からずっと、14世紀、15世紀、16世紀と時代が下ってくるにつれて、曹洞宗の祖師さま方の語録に表れる葬祭に関する記述の割合が増加してきます。

道元禅師の語録には、葬祭に関する記述は1ページしかありません。それも、お師匠さんの葬儀のことについて触れているだけで、民衆のための葬儀は一言も書かれていませんし、また、現実にやっていないわけです。

それが、次第に葬儀に関する記述が増え、ついには、宗義、つまり修行に関する記述のページを上回ってしまう。それにつれて教団が全国に広がっていったことが論証されています。これは、曹洞宗だけではなく、大なり小なり他の教団についても同じことが言えるだろうと思います。

今岡　奈良先生、どうもありがとうございました。急な質問で申し訳ございませんでした。

実は、フロアからも質問を頂戴しております。数えましたところ、十八枚ぐらいございまして、それぞれ内容が違っております。これを全部お答えするのは至難のわざですので、ご指名があった質問について、まずお答えをいただこうかと思います。

矢澤先生に、質問がきております。25のチェックリストのうち、8番はどういう意味ですかということで、「8　葬儀のお布施の額を（問われずとも）伝えているか」という項目についてです。

それに関連しまして、お布施について我々はどういうふうに考えたらいいのかということについても、コメントをいただければと思います。

矢澤　お布施というと今、イオンの葬儀参入が問題となっております。インターネットにお布施の額を上げたので、全日本仏教会が「これはいかん」というふうにお灸をすえたわけです。そして、いつの間にか、そのホームページからお布施の額がすっかり消えたわけであります。

ただし、このイオンの問題の本質は、お布施にあるわけではないと思います。というのも、イオンの葬儀参入についての宣言の一番初めには、はっきりと「八宗派の本山の許可を得て行います」と書いてあったんですね。その上でお布施の額が書かれておりました。

私どもは、それをいち早くチェックしまして、イオンに取材を申し込みましたが、数日しましたらその記載はあとかたもなく消えていました。ですから、その意味でいえば、イオンは虚偽集団です。嘘をついて出発したんです。これは間違いありません。

再度取材をしても、問題があったということは言いませんでした。もちろん、八大宗派の許可などというものは、一つも受けていません。許可もしないでしょう。それなのになぜ、すぐにわかってしまうような嘘をついてまでやったのでしょうか。

ほかのマスコミは、早く消してしまったので、そのことについて書きませんでしたが、やはり、葬儀を宣伝するに当たっては、何らかの「権威」が必要なんですね。イオンとあろうものが権威を必要としていたということが、イオンの葬儀問題の第1点です。

お布施の多寡をインターネットに載せたことについて、他のマスコミ、そして全日本仏教会が批判しましたが、それ自体は当たり前

のことで、イオンの見識のない勝手な宣伝なのだと受け止めればいいと私は思っています。

額も大して低いものではなかったので、世間がどのようなことを言っても、それを受け入れるか受け入れないかは、檀信徒と寺院だけの個別的な問題だと思います。ですから、そのように宣伝するのは世間様の自由です。それに従うか従わないかは、その檀信徒、そしてお寺のやり方でしかありません。

抗議した団体が悪いというわけではないのですが、私個人は、社会がそのようなことを言っているということをありのままに受け入れればいいだけであると思います。ただ一つ問題なのは嘘をついたことだけだと思っています。

ですから、イオンの問題が示したのは、イオンがそのことを意識していたかどうかはわかりませんが、葬儀のお布施は、その僧侶に対するお布施ではないということです。仏教や寺院に対する維持費だととらえたほうがいいと思います。

もちろん、葬儀のお布施は、三輪清浄だという言い方もありますが、寺院を維持していくための、会員の会費のようなものだと考えたほうがわかりやすいと思います。

ですので、豊かではない寺院には、葬儀によっていくらかのお布施をしていただく必要があります。そのために、僧侶は一生懸命お経をあげるということではないかと思います。ですから、寺院側のお布施に対する観念を檀信徒の人に押しつけて、そうでなければいけないというものではないように思います。

あくまでも、私たち寺院には共通の観念がありますが、一般の人にそれを押しつけることはできないのだろうと思うんですね。そういう意味で、この8番の「問われずとも」というのは言っても言わなくてもいいということです。葬儀のお布施というのは何なのかということをわかってほしいという意味です。

ですので、あまりにも、このお寺の維持・経営に資さないような額でしたら、それは事情を説明すればいいと思いますし、また、相手の方が困窮されている方でしたら、無料でやって差し上げるという話し合いをすればいいと思います。

そこは、〝あうんの呼吸〟が必要になるところだと思いますので、日ごろからおつき合いがないと、そのことがわからなくて問題が起こってくるわけです。これは、あくまでも檀信徒とのお布施のやり取りについて申し上げました。

お布施そのものが、もちろん三輪清浄であるということは間違いありません。ですから、僧侶が請求するなどということはもってのほかですし、逆に安くしますからやってくださいと言うのも、もってのほかです。理解してもらうということが、とても重要ではない

かと思います。これが現実だと思います。

それによって、檀信徒の寺院に対する信頼というものができればいいのではないかと思います。それによって不信が培われるのであれば、住職、僧侶はそれに対して対応しなければいけないという、難しい問題があると思います。そんなところです。

今岡　どうもありがとうございました。次に、武田先生に質問がきております。

「発願文」の還相回向というと、上品上生の往生ということですが、それと凡夫、要するに上品上生は難しいかなというような凡夫性の問題についてです。加えて、還相回向と、七回忌ですとか十三回忌といった年回法要との関係について、どういうふうに考えたらいいかということでございます。

武田　ありがとうございます。私は、教学の専門家ではありませんので、遺族の立場に立ってお話ししたいと思います。

私も含めてそうですが、この時代の中で上品上生できると思っている方は、そんなにいらっしゃらないのではないかと思います。

一つは、あくまでも目標ということです。すべての人がその9つの段階のどこにいるかということよりも、重要なのは自分自身をどのように高めていくかということや、故人がどのような人であったかという遺族の思い、そして、私たちがその方をどのように知っているかという、家族との関係の中で私たちが語れるかどうかだと思います。

そしてまた、「いつになったら還相できると思いますか」といった形であらわれる、現代人の持っている時間感覚や合理性の問題があります。「西方極楽浄土というのはどこにあるんですか」というのも同じです。

近代のいわゆる科学合理主義に毒された愚問、無知な質問に対して、我々自身が同じ土俵に乗っかって答える必要はないと思います。「お宅のご主人様は下品下生でしょうね」とか、我々には判断できないわけです。それは、阿弥陀様のお計らいだからです。

どこにいったらとか、どうしたらとか、そこまで我々が仏の世界に対して言うこと自体が傲慢だと思いますし、我々ができるのは、ひたすら家族とともに祈ることだけです。それが重要だと思うんですね。

科学的な説明をすることは、基本的にその人たちが信じようと思っている世界観を、我々自身が壊すことにつながると私は思っています。

だから、ともに考えてあげればいいことで、断定的に言ったりとか、その質問に対する宗教的な世界の説明を科学的にしたりすべきだとは、私は思いません。どうも我々自身が、檀信徒の人たちの、

今の学校教育の世界にはまり込んでしまって、自分たちで自分たちの首を締めているところがあると思います。

ですから、ともに信じればいいんです。もしかしたら、もう還相してくださっているかもしれません。それを遺族の方々が感じ取れるかどうかだと私は思います。

特に、葬儀というのは危機的状況ですから、そうした場に立っている人たちにいかに信じるかという心を伝えること、信じることの大切さを説くことが重要です。ですから、一周忌や、三回忌、初彼岸など、ことごとにご主人を感じる、そうした心を持ったことがないかと呼びかけるべきだと思います。

私はこの間、ある方の一周忌の前の日に、私の母親の一周忌のことをちょっと思い出したんですね。そうしたら、何とその日の夜、10年ぶりに母親の夢を見てしまいました。

「これは〝いる〟ぞ」と、私自身もそのときに、人の心のありようといいますか、それは単なる夢だよといえばそうなのですが、「まだ〝いる〟な」、そして「向こうもこちらのことを気にしているんだな」と感じ取っている自分がいました。

これは、誰にでもいえることではありませんが、それぞれ人が想う気持ちに、先ほど奈良先生がおっしゃったように寄り添うことができるかどうかが重要で、「何回忌だからもう還相してくださっているんでしょうね」とか、「経典にはそう書いてありますが、まだわかりませんね」とかいうことではなくて、来てくれていると信じたいその人たちの心を、我々が信じることだと思います。

実際、我々には科学的にわからないわけですから、「わからない」と言うのではなくて、我々自身がそれを信じていることが大事だと、私は思っています。

今岡　引き続き武田先生で申し訳ないのですが、今、遺族感情に寄り添うという話をされましたが、どの程度寄り添うのかという問題があります。

例えば、遺族が葬式の日に迷い込んできた猫を、亡き母の生まれ変わりだと思って飼っている。それが心の癒しになっているという遺族感情があるそうです。それは、先ほどの還相回向の話とは全然違う話ですが、寄り添わなければいけないのでしょうかということです。

武田　個別の話はとても難しいです。遺族の方がそう思う瞬間があったという心はとても大事だと思います。

本当にその猫かどうかということは誰にもわからないわけですし、その人が感じ取ったということはあるわけですね。「生まれ変わり」というのは浄土宗的ではないと思いますが、そのとき来てくださった猫に、依代として入り込んだかもしれませんし、すぐに戻っ

ていったかもしれません。

例えば、風の中にとか、光の中に、星の中に、雪の中にとかいっても、ずっとその中にいるわけではないわけです。多くの現代人にとっては、そこに居着いているという感覚よりも、そのときに感じ取る、存在を感じ取るということがとても大きいと思います。私は、そうした意味での還相的な感覚というのは、とてもわかるような気がします。

それと、お正月とお盆のときに帰ってくる死者という考え方は、日本の民俗文化の中で長く育まれてきたものです。死者が帰ってきて守ってくれる、豊作にしてくれるとか、遺族の健康、家運の隆昌を守ってくれるという感覚というのも、それと重なる部分がとてもあるのではないかという気がします。

ですから、すべてを否定するというよりも、温かく見守るということはとても大事ではないかと思っています。

今岡　答えにくい質問にご回答いただきまして、どうもありがとうございました。

次に、奈良先生に質問がきております。きょうのレジュメの「2.問題点：」のところに①、②、③とありまして、①と②についてはお話がありましたが、「③葬祭儀礼の疑問」の清規についてコメントがなかったので、一言お願いしたいということでございます。よろしくお願いいたします。

奈良　曹洞宗の葬祭儀礼というのは、その内容も形式も基本的には11世紀中国の禅林における、『禅苑清規』という、僧院の生活を書いた清規書に基づいているのです。清規とは僧院の生活のルールブックではありますが、さらにどう行為をすれば仏の生活となるかという生き方を説くものです。

そこには悟りを開いたとされる長老と、それから修行途中で亡くなった僧、亡僧というのですが、その両方の葬式儀礼が書いてありまして、基本的にはその亡僧儀礼をもとにしてでき上がった儀礼の形式が、その後いろいろ手直しはされていますが、現代まで伝わっております。

修行途中で亡くなったお坊さんに対する儀礼ですから、現代ではまず授戒をして在家の信者さんを僧侶にして、そして亡僧に対する葬儀儀礼を行うという形なんです。ですから、今日の葬式儀礼は二つの部分に分かれておりまして、最初が授戒会、その後が亡僧に対するお葬式というふうになっています。

それで、基本的な精神というのは、亡くなった方に対して「残念だよね、一緒に仏道を一生懸命修行しながら生きてきたんだけれども、残念ながらあなたは亡くなってしまいましたよね。でも、世界は異なっても私はこちらで仏道を生き抜いて行きます。あなたもあ

の世で仏道を生きていきましょう。ともに仏道を生きていきましょうね」というものです。

ですから、亡くなった方に対して「報地を荘厳せんことを」、つまり悟りの道を荘厳されますようにとかいう回向文を唱えるんです。

それに関しまして、非常に大きな問題が一つあるのです。とにかくお坊さんになってもらわないと葬式が成り立ちませんので、授戒をしなければいけません。

しかし授戒、信者さんの立場からは受戒ですが、元来は生きている間にするべきものでしょう。生前受戒が普通です。しかし、今や亡くなってしまった。そこで遅まきながら授戒しようということで、これを「没後作僧」といいます。それにどういう意味があるか、いろいろ宗学上の問題が出ています。

これに対して、有力な宗学上の一つの意見があります。それは、道元禅師は霊魂の存在は断固として否定していますが、死後の世界は認めているということです。つまり、輪廻は認めているんですね。来世についてもおっしゃっておりますし、三時業などというものも認めています。

ただ、霊魂の存在を認めないで輪廻のことを言っても、それは輪廻にならないのであります。先ほど申し上げたように、禅師は輪廻を教理として認めるのではなく、伝統的な「仏教文化」として取り上げて換骨奪胎し、それをもとにしてご自身の信仰を説いているという姿勢が強いと思います。

そういう姿勢の中で、仏道を生きるということは、過去世から未来世にわたる「今」というものを大事にして生きていくことです。過去・現在・未来にわたる永遠の「今」（「而今」という術語があります）を生きるのが修行で、それを「今、ここに」生きることが永遠を生きることだし、同時に未来永劫に「今」を修行してゆくべきものと道元禅師は説いています。

こうした状況を踏まえて、「はるかなる仏道」という言葉を使う方もおられまして、これは死んだあとも未来永劫に仏道を修行し続けていくという、強い求道の精神をそういう形で述べているわけです。したがって、そういう面から見ると没後作僧だって構わないじゃないかという理論立てをする面もございます。

ただし、そのためには霊魂的な、いわば「はるかなる仏道」で修行する主体が必要になってきて、どうしてもそこで霊魂という問題が出てきてしまいます。そういう問題に対して「永遠の『今』を、私が『いま・ここに』生きているのだから、輪廻の主体など認めなくてもいいじゃないか」と私などは言っているのですが、いや、それでは困るという議論がいつもございます。

それから、もう一つ、それに関連いたしまして、（没後作僧では）出家授戒をしているわけです。亡くなった方を出家にしているんです。それなのに、戒名を授ける相手が在俗信者を示す「信士」や「信女」、「居士」、「大姉」とは何だという問題がございます。

これは、やはり在家授戒に変えなければいけないのではないかと思いますが、そうしますと、亡僧を対象にした回向文が合うかどうかといった問題も出てきてしまうというわけです。

今岡　どうもありがとうございました。

熊井先生、質問に一つお答えいただきたいと思います。葬儀、告別式などと言われておりますが、新聞などを見ますと「告別式」としか書かれていなくて、「葬儀式」ですとか「葬儀」という記述はなかなか見当たりません。

亡くなられた鷲見定信先生が、「今後は新しい名称を考えなければいけないね」というようなことをおっしゃっていたそうでございますが、それについていいアイデアはございますでしょうか。

熊井　いいアイデアといいましても、なかなか難しいのですが、この冊子にもちょっと書いたように、「告別式」というのは少なくとも、我々として使うべき言葉ではないのだろうと思っております。

我々が行うのはやはり「葬儀」であって、告別式というのは、そこに宗教が介在するとしないにかかわらず、生前に親交のあった方との別れの式というような意味合いなわけですから、我々が行うのはあくまでも「葬儀」なんだという意識は持っていなければいけないと思います。

ただ、確かに世間一般に、最近は「告別式」というふうに表現することが非常に多くなっておりますので、現実問題として、それをある程度は受け入れなければいけないのだと思っております。

そのために、何か新しい名称といっても、特に我々の法式の世界は非常に古い世界ですので、何か新しいものをつくっていくというのは、非常に難しい面があります。今後また、一つご意見を聞かせていただいて、何かよい名称があればと思っております。

今、ちょうど没後作僧というお話が出ましたので、その件について一言申し上げておきたいと思います。私どもも、枕経を行います。枕経に関しては、矢澤先生のチェックリストにもそれを行っているかどうかという項目がありました。

これは最近、特に東京近辺では行うことが難しいことがありますが、やはり私はできる限りこれを行うべきであると思っております。

ただ、浄土宗でも「没後作僧」というような言い方をされる先生がいらっしゃいまして、現実にそのように理解されている方が大変多いのではないかと思います。

しかし、禅宗のように、あくまで出家成仏が本来の道であるとい

うお宗派にとっては、没後作僧ということは大切なことなのでしょうが、お念仏によって往生させてくださるという浄土宗においては、没後作僧ということは全く必要ないと思います。

ですから、枕経の中でお剃度を行うことになっておりますが、これはあくまで在家の仏教信者とする式で、あくまで剃度であるんだということを、我々は理解しておく必要があります。

それから、もう既に五重とか授戒といった行を受けて、そこで剃度式が済んでいるという方にとっては、あくまで身と心との煩悩を取り去るための作法としての剃度といった理解で、これを行っていくことが必要だろうと思います。

基本的に、浄土宗の枕経は、まず第一には臨終勤行であるということで、そこに剃度が入るか入らないかは、私はそれほど重要な問題ではないと思っております。

この冊子の執筆を一部担当いたしました中で、その辺についてあまりはっきりとは書いておりませんが、あえて没後作僧という言葉を使わないで「仏教徒にする儀式」と書きましたのは、そういった意味であることだけ、一応お話をさせていただきました。

今岡　どうもありがとうございました。

そろそろ時間でございます。本日は「今あらためて意味を問う！―浄土宗の葬儀・年回法要―」ということで、私どものつくった冊子を中心に据えまして、このようなシンポジウムを開催させていただきました。

パネリストの皆様方は論客ぞろいでございまして、なかなか時間のコントロールが難しく、時間が足りなくなってしまったことを申し訳なく思っております。お詫びする次第でございます。

葬儀の問題というのは、問題としてずっと長くあるわけですが、特に最近は地域性の崩壊が問題となっております。例えば、地域でも今まで3人や5人で葬儀を行っていたものが、1人で葬儀を行うようになってきたとか、葬儀の形態の大きな変化が起こりつつあります。

それから、住職が行っていた葬儀のいろいろな儀式が、世代的になかなか継承されない、つまり、寺院内でも師弟間でなかなか継承がうまくいかなくなってきてしまったということから、全国に一律の方式で、宗派として何か新しい方向性を出さなければいけないという状況になってきたと思っています。

一応、この冊子の中で新しい方向性を差し示してはおりますが、葬儀とか年回法要をきっかけに、その日常的な活動の中でこれからは布教教化を推進し、檀信徒の皆さん方が喜んでお葬儀をしてくれるような寺檀関係を、つくっていかなければいけないのではないかと考える次第でございます。

きょうは、長時間に渡りどうもありがとうございました。それでは、最後に先生方に盛大な拍手をお願いいたします。（拍手）

浄土宗の葬儀と年回法要について

対応し、浄土宗の教義に準拠した「葬儀と年回法要の意味」についてとりまとめました。

皆様方の日々の活動への参考になれば幸いです。

平成22年10月30日

浄土宗総合研究所

はじめに

皆様もご承知の通り、葬送儀礼はそれぞれの地域の特色を残しながら、儀礼の意味づけについても地域の特色が反映されたものとして執り行われてきました。しかし、今や、社会は大きく変わりはじめています。いわゆる「お葬式」に関しても自宅葬から斎場葬へ、地域ぐるみの葬式から家族葬や直葬などへの変化が見られるようになりました。また、「お葬式」や「戒名料」については、日刊紙、週刊誌、テレビなどの種々のメディアを通じて、様々な意見が述べられています。それらの意見の中には、私たちの宗門の考え方と異なるものがあり、看過するわけにはいかない状況になってきました。

浄土宗では総合研究所を中心に「崩れゆく葬祭のこころ」と題して調査研究を進め、その成果を『宗報』へ連載し、公開シンポジウムを行うなどしてまいりました。そして今回、里見法雄宗務総長の要請により、これらの調査研究の結果を土台にして、新しい時代に

葬儀の浄土宗としての理解

熊井康雄

浄土宗の葬儀にはどのような意味があるのでしょうか。阿弥陀仏の本願念仏によって極楽往生させていただく宗旨である浄土宗には、当然、聖道門などの他宗派とは異なる葬儀の意味づけがあります。「釈迦に説法」のようですが、まず浄土宗の葬儀のあり方を考えてみたいと思います。

ご承知のとおり、浄土宗の葬儀は、亡き人を極楽浄土へ導くための儀式です。しかし往生した後には「六神通を得て十方界に入って苦の衆生を救摂」する、つまり還相回向するという究極の目的があることを理解しておく必要があります。余談ですが、「冥福を祈る」についての浄土宗としての理解も必要です。極楽で仏果が進み、早く悟りを得て還相されることが浄土宗の「冥福」であると理解すればよいと思います。

次に、儀式面を考えてみましょう。当然ながら浄土宗は仏教ですから、亡き人を極楽浄土へ導くためには、まず仏教徒であることが必要条件となります。そのために行う儀式が枕経です。葬送前夜の通夜には、念仏・誦経・礼讃などを勤めて亡き人に回向し、阿弥陀仏の来迎引接を願います。そして葬儀式の引導で宗義の肝要を伝え、さらに念仏回向して亡き人を極楽往生へ導くのが浄土宗の葬儀です。

これら一連の葬儀で行う、下炬・引導・茶毘・収骨・埋葬などは、釈尊が父浄飯王の葬送で行った故事に由来しています。そのほかにも古くから習俗として伝えられてきた儀礼が多く、地域的な特色も見られますが、今回は浄土宗の葬儀について統一した意味づけの再確認を行いました。

1、戒名（法名）

浄土宗では、誉号二文字、戒名二文字の生前授与が基本です。また、死後に授与する没後法名は、三帰を受けた仏教徒としての名前であり、釈尊の教えによって阿弥陀仏の浄土への往生を願う浄土宗の葬儀には必須のものです。

【解説】

いわゆる戒名とは誉号、戒名、位号を含めた呼称として使われていますが、ここでは法名と呼ぶことにします。

浄土宗には信仰を培う儀式として、五重相伝と授戒会があります。ですから浄土宗の法名は、五重相伝による誉号二文字、授戒による

戒名二文字に位号を付すのが標準です。また院号は信仰の篤さや、寺院護持への貢献などに応じて寺院から贈るもので、対価により授与するものではないことを十分に説明することが必要です。

一方、没後授与の法名は、生前に授戒と縁の無かった人にも授けるため、これを批判する向きがあります。しかし、仏教に帰依した上で浄土往生を願うのですから、仏教徒としての名前である法名を授かることは、たとえ没後であっても当然といえましょう。また日本では人生の節目に改名を行うという文化があり、法名が生者から死者への節目に贈る名前として受け入れられる土壌があったことも見逃せません。

没後授与にあたっては、遺族から故人の生活信条、性格、趣味などを伺い、どのような考えで文字を選んだかを説明できるようにすると良いでしょう。

2、枕経

枕経は、死亡直後に勤める儀式で、剃度作法によって心身の煩悩を絶ち、阿弥陀仏の来迎引接を願う臨終勤行です。遺族とともに仏の来迎引接を願う最初の儀式ですから、出来る限り勤めることが望まれます。

【解説】

臨終の知らせは本来、使者が来寺して告げるものでしたが、最近は電話で連絡を受けることが多いと思います。このような場合でも直ちに用件に入らず、まず「直正直面の伝」により十念をとなえてから、日程などの打ち合わせをするように心掛けます。

枕経では、亡き人への剃度作法の後、仏壇の本尊に回向しますので、仏壇の扉は平常どおり開けておきます。しかし最近の住宅事情では仏壇前で枕経を勤められないことも多いので、そのような場合は来迎仏（お名号）を本尊として勤めることになります。このためにも来迎仏、剃度用の剃刀などを平素から用意しておくことが必要です。

浄土宗総合研究所が行った「お葬式に関するアンケート調査」によると、枕経を勤めることが多い寺院は全国平均で81％にのぼりました。しかし、寺からの地理的条件や時間的制約から、枕経を勤めることが困難な場合もあります。また、初めてご縁を結ぶ方の場合には、故人をよく知りませんから法名を考えるのが難しいことがあります。このような場合には、やむを得ず法名授与などを通夜で行いますが、まずは遺族の方々ともども心からお念仏をとなえ、故人の人柄や生活についてのお話をお伺いする場として枕経を勤めま

しょう。

3、通夜

浄土宗の通夜は、念仏を中心にご法語や礼讃・詠唱等を参列者とともに唱える法要です。もともと通夜は、ごく内輪の者が集まって勤める内夜伽（うちよとぎ）で、現在でもこの方法を守っている地方が各地に見られます。

【解説】

通夜は本来、葬送の前夜に遺族・親族・親しい知人などが集まり、夜を徹して亡き人の往生を願い、読経念仏することで、これを全通夜といいます。しかし、現在では葬儀の前夜に一座の法要を勤める半通夜が普通です。

近年では仕事の関係で昼間の時間的自由度が少なくなったためか、都市部を中心に通夜の会葬者が葬儀よりも多くなる傾向があり、通夜が告別の場となりつつあります。本来しめやかに勤めるべき通夜が盛大に行われ、内輪の者で心を込めて亡き人を弔うことが困難になっています。

最近になって家族葬・炉前葬といった葬儀の簡素化が進み、葬儀不要論さえも声高に叫ばれています。このような状況に対応するためにも、通夜における法話の実施は極めて重要な意味を持つことになります。なぜなら、通夜は出棺時刻などにより法要時間を制限される要素が少ないのである、程度の法話の時間を取ることができる上に、通夜には浄土宗以外の親族や参列者が大勢集まる可能性がありますので、浄土宗の葬送の意味、阿弥陀仏の本願、念仏の功徳などについて、多くの方々に理解していただく大きな機会だからです。

4、葬儀式

浄土宗の葬儀式は下炬と引導が中心です。下炬は炬火による荼毘の作法、引導は亡き人を極楽へ導くことで、ともに浄飯王葬送の故事に由来したものです。下炬、引導の後、念仏回向して亡き人を極楽へ送る儀式が浄土宗の葬儀式です。

【解説】

下炬と引導は加行（伝宗伝戒）を受けた教師のみに許される伝法ですから、助教師や宗徒が導師を勤めることはできません。加行の手控えなどで意義や作法を再確認し、亡き人に対して親疎・愛憎・貧富などで区別することなく、心を込めて引導回向するように心掛けることが大切です。

浄土宗の葬儀作法には禅宗から取り入れられた作法の名称が多い

ものの、それぞれの作法には浄土宗としての意義付けがあります。従って私たちは、阿弥陀仏の来迎引接を仰ぎ、極楽往生を願う浄土宗の葬儀作法として行わなければなりません。しかし、習俗として、仏教や浄土宗の教えによらないさまざまな伝統的慣習も各地に伝えられていますので、これらの意味や内容を理解し心得ておくことも重要です。

また、近年は葬儀式を告別式と称することが多くなっています。しかし、葬儀式が亡き人を極楽浄土へ送るための宗教儀礼であるのに対して、告別式は生前に親交のあった人との別れの式典で、本来宗教性の有無は問わないものです。われわれ僧侶が執行する宗教儀式を、安易に告別式と称することのないよう留意すべきでしょう。

5、荼毘・収骨

日本は古来土葬でしたが、仏教伝来以後、釈尊の荼毘にならって火葬が行われるようになりました。荼毘と灰葬（収骨）は仏教に由来する葬法ですから、我々は僧侶として粗略にすることなく勤めなければなりません。

【解説】

日本では衛生上の問題などから、大都市圏を中心に土葬を禁止している自治体が多く、全国でも火葬がほとんどを占めています。火葬のことを仏教では荼毘といいます。昔の荼毘は火屋を作って薪を積み上げ、導師が火を点じて読経し、翌日に灰葬するという方法でした。現在は自治体等の斎場（火葬場）で火葬をするため、読経時間に制限を受けますが、短時間とはいえ疎かにせず勤めることが大切です。

火葬は地域によって葬儀式の前に済ませる場合と、式後に行う場合があります。収骨まで勤めることが望ましいのですが、式前に火葬する地域では、次に行う葬儀式の準備などで時間がとれない場合もあるでしょう。しかし、式後に火葬する場合には、収骨までの待ち時間が比較的落ち着いて遺族と向き合える貴重な時間となります。葬儀式までは何かと気ぜわしく、ゆっくり遺族と話をすることもできませんが、この時間は遺族の亡き人への思いを聞いたり、今後の仏事の心得などを話したりする絶好の機会です。特に新しく縁を結んだ場合や、平素接することの少なかった檀信徒の場合には、教化の時間として積極的に活用することが望まれます。

追善法要の浄土宗としての理解

熊井康雄

私たちは、葬儀の後も年回などのさまざまな追善法要を勤めます。追善法要は葬儀ほど地方色はありませんが、その意味付けは必ずしも統一されていないのかも知れません。ここでは浄土宗の追善法要について再確認したいと思います。

亡き人の菩提の増進を願って善根功徳を積むことを追善といいます。亡き人のために念仏を回向すれば、阿弥陀仏の光明に照らされて、仏果が増進し、やがて還相される、そのように願って、日々念仏を励むのが浄土宗の追善回向であり、特に日を定めて勤める法要が追善法要です。

一般に追善法要というと、命日などの仏事を思い浮かべますが、亡き人の仏果増進を願って回向するという意味では、葬儀が追善法要の第一歩といえるでしょう。

もちろん葬儀の後も毎日念仏を勤めて、亡き人に回向することが大切なのですが、日々の念仏はつい怠惰に流れがちです。そのため折あるごとに念仏読経の機会を持ち、追善の誠を捧げるのです。江戸時代の書物にも、「平素の供養を怠ってはならないが、常人は続け難いので年忌を定め、懇ろに供養するのである」と記しています。追善法要はそのときだけ勤めればよいのではなく、日々の念仏を勤める延長にあるのだということを檀信徒に伝えることが重要です。

ただ大切な点は、我々のとなえた念仏の功徳が直接亡き人に及ぶと考えるのではなく、念仏を回向することによって、阿弥陀仏が亡き人の仏果を増進させてくださるのだと心得て念仏を勤めることです。

1、中陰

阿弥陀仏の本願により極楽往生させていただく浄土宗の教えには、四十九日を経て次の生縁が定まるという、いわゆる「中陰」の説明はふさわしいものではありません。浄土宗としての中陰の理解が必要でしょう。

【解説】

『倶舎論』などでは、有情（生けるもの）が死んでから生まれ変わる過程を、生有・本有・死有・中有の四種に分けています。中有（死んでから次の生を受けるまでの間）は中陰ともいい、七日ごとに死生して七度目に次の生縁が決定するという四十九日説が代表的なものです。このことから死後七日ごとに経典を読誦し、七度目の

四十九日を満中陰として死者の冥福を祈る習慣が起こり、中陰は亡魂が迷っている期間などといわれるようになりました。

浄土宗の教義は即得往生ですから、亡き人が次の生を受けるまでの中間的な存在としての中陰はあり得ないことになります。したがって中陰供養を勤めるには、浄土宗としての中陰の意味づけが必要になります。一例をあげれば、『観経』の「三輩段」に説く九品往生の経説により、「極楽へ往生してから蓮華の花が開くまでが浄土宗の中陰」とする考えなどは、浄土宗の理解として適切なものと考えられます。極楽に往生した亡き人の蓮華の花が早く開くことを願い、追善の誠を捧げる期間として中陰を過ごすのはとても意義深いことではないでしょうか。

2、初七日

中陰の最初の区切りである初七日は、とくに重要な追善法要です。葬儀式までは亡き人の極楽往生を願うことが中心でしたが、初七日からは仏果増進と還相を願う浄土宗本来の往生の意味を説くことが大切です。

【解説】

往生した亡き人を包み込んだ蓮華の花が一日も早く開くように、遺族が心を込めて追善の念仏や読経を勤める最初の法要が初七日です。極楽でどのように仏果が進むのかといった法話をする良い機会であると思います。

中陰の忌日は、亡くなった日を一日目とする「数え」で日にちが決められます。また忌日の追善は正当日あるいは逮夜（前日の午後）に勤めるのが正しい供養のあり方とされています。以前は亡くなった日に枕経、翌日に通夜、翌々日に葬儀式が行われ、葬儀は三日で終了し、改めて初七日が行われていました。しかし、最近は火葬場や葬祭場あるいは、僧侶や参列者の都合によって正当日を待たずに初七日を営むことが多くなりました。浄土宗総合研究所のアンケート調査によると、葬儀式当日に初七日を行う「繰り上げ初七日」が過半数で、甚だしい場合は葬儀式中に初七日を組み入れることも行われるようになっています。このような世相にわれわれ僧侶が安易に同調せず、初七日を出来るだけ丁寧に執行するように心掛けたいものです。

3、満中陰（七七日、四十九日）

浄土宗の教えでは、満中陰が次に生まれる世界の定まる日ではありませんが、現実に満中陰法要は全国の浄土宗寺院で勤められています。したがって、浄土宗としての満中陰の捉え方に共通理解を持

つことが必要です。

【解説】

現在ではほとんどの自治体が火葬以外の葬法を認めていませんので、埋葬する時期に制限はなく、満中陰が主流となりつつあります。このため本来は七日ごとに勤めるべき中陰の回向も、集約して五七日（三十五日）か満中陰に勤める場合が多く、宗派を問わず満中陰は重要な区切りとされています。

浄土宗で特に満中陰を重視する理由は見当たりませんが、『観無量寿経』に「往生して七七日経つと蓮華の花が開き、悟りを求める心を起こし、やがて（初地の）菩薩の位に入る」と説かれていることから、亡き人が一日も早く菩薩の位に到達されることを願って、満中陰の法要を勤めるとよいでしょう。

以前は満中陰を忌明けとし、それまでは公の場への出るのは控えるという慣習がありましたが、最近では初七日を終えると日常生活に戻る例が増えています。しかし、四十九日という時間は、亡き人を偲び、寂しさや悲しみを癒すためにも非常に重要な期間です。葬儀を終えて直ぐに慌ただしい日常に戻るのではなく、亡き人と共に過ごす中陰を大切にするよう勧めるとよいでしょう。

4、百箇日

百箇日は仏教の教えによる忌日ではなく、中国で行われていた祭祀が日本に取り入れられたものです。寺院側が積極的に勧めないためか、最近では一部の地域では省略される傾向にあるようですが、その意義を再認識する必要があります。

【解説】

百箇日は、もともと中国の儒教で没後百日目に行われた卒哭の祭祀が取り入れられたものといわれます。卒は「終わる、終える」の意味で、没後百日を経過して嘆き悲しむことを終えるために行う祭祀です。とくに仏教的意味合いがなくても、百箇日は満中陰後およそ50日を経た時期ですから、亡き人に追善の誠を捧げる縁（よすが）としては非常に良い頃合いといえましょう。

現実には、満中陰を終えると直ぐに「香典返し」に気を取られ、遺品の整理、相続の手続きといった雑事に煩わされて、一周忌までは忽ちのうちに過ぎてしまいます。その間は盂蘭盆会、彼岸会などの年中行事を別とすれば、落ち着いて亡き人の追善を心掛ける機会はほとんどありません。いわば満中陰から一周忌までは追善供養の空白期間なのです。

百箇日はこの間に勤める追善法要です。毎日の供養を欠かさないことはもちろん大切ですが、家族や親族だけでも集まって百箇日を営むように勧めるとよいでしょう。慌ただしい日々の中にも、折にふれて亡き人を偲び、追善の誠を捧げつつ一周忌を迎えるようにしたいものです。

5、年回法要

亡き人の菩提が進むことを願って、一定の年ごとに勤める追善法要を年回といいます。浄土宗では生前に縁のあった人々が集まり、亡き人の仏果増進と、人々の極楽往生を願って念仏・誦経・礼讃などを勤め、追善回向の誠を捧げます。

【解説】

故人が亡くなった日を命日といい、毎年迎える亡くなった月の命日を祥月命日といいます。祥月の語は儒教で死後十三月目（1年目）の祭祀を小祥、二十五月目（2年目）の祭祀を大祥と呼ぶことに由来しています。日本ではこれを一周忌・三回忌として勤め、以後三・七に当たる年を年回とするのが通例です。このような年回の勤め方は十三仏信仰による先祖供養の影響といわれますが、もちろん浄土宗では阿弥陀仏を本尊としてすべての年回法要を勤めなければなりません。なお五十回忌以降は、遠忌として五十年ごとに亡き人や先祖に感謝する追善法要を勤めます。

二祖聖光上人は、「法然上人が後白河法皇の十三回忌にあたって、御追善に六時礼讃や三部経を勤められ、以後、都の人々は皆、浄土宗によって追善法要を行うようになった」と記されています。私たちは法然上人にならって年回法要を勤めているのだと心得、心を込めて執行することが大切です。

日ごろ疎遠になりがちな親族や縁者が、亡き人の縁によって集えたことを感謝し、ますますの仏果増進と還相を願って年回法要を勤めるのはとても意義深いことなのです。

葬儀の現代的な意味について

武田道生

今日まで、葬儀がどのような意味や目的で行われてきたのかを整理してみましょう。

①体を処理するための儀式

②社会的に死を確認するための儀式　人は生涯のさまざまな場で多くの人々と出会い、社会的な役割を果たしています。それゆえ、故人と関わりのあった人たちにとって、別離を行い確認する儀式でもありました。

③共同体で危機を克服する儀式　近隣や親族など地縁血縁の多くの人たちによって、遺族の悲しみや今後の生活上の不安などの精神的物質的な危機を乗り越えるために行われる共同儀式でもありました。

④先祖にする儀式　稲や作物の豊作や家業の繁栄、子孫の安寧などを、過去累代の先祖や死者に祈ってきた人々は、きちんとした葬儀を行うことで、故人が先祖としてあの世から子孫たちを守護してくれることを祈り、確信する儀式でした。

⑤極楽往生のための儀式　浄土宗の葬儀は、阿弥陀仏の来迎引接を仰ぎ、故人を仏教信者にして極楽往生を願う儀式です。私たちが生きる真の目的は、法然上人が「疾く極楽へ参りて、悟りを開きて生死に還りて……一切衆生を遍く利益せん……」（津戸三郎入道へつかわす御返事）と諭されているように、有縁無縁一切の苦の衆生の救いのために生きることなのです。遺族、親族、近隣など故人と生前に縁のあった会葬者が、葬儀を通して「故人の往生浄土」の目的を視覚的感覚的に実感し理解するのが葬儀です。これまで人々が、亡き人は先祖となって子孫を守護してくれると考えたのも、こうした教えが背景にあったからなのです。

1、浄土宗における葬儀―往生の目的

私たち浄土宗宗徒の生きる目的と死の関連を、「⑤極楽往生のための儀式」から考えてみましょう。

私たちの真の人生とは、法然上人の教えに順い、日々のなかで念仏に励み、臨終に際して阿弥陀仏の来迎を得て極楽に往生し、菩薩として、さらには悟りをえて成仏を果たし、苦しみの日々のなか救いを求めている有縁無縁の一切衆生を救う還相回向を果たすことです。

このような教えであることを理解すれば、肉体的な死を迎えて営まれる葬儀は、生前授戒や死後三帰を受けて、仏教信者として本当

の目的を果たすために往生するという新たな生まれ変わりの儀式であることがわかります。私たちのいのち全体から見れば、この時点では、まだ道半ばなのです。つまり、肉体的な死は、私たちのいのちの真の終末ではないということです。そして、遺族や友人など葬儀の参列者は、故人が新たな浄土へ生まれ変わって往くことを実感し、今後残された私たちを救ってくださることを確信する儀式なのです。

しかし、現代社会に生きる私たちのほとんどが、肉体的な死は人生の終末だと考えていて、生に執着しています。なかには人生の敗北とさえ考える人たちもいます。そうした人たちにとって、葬儀は遺体を処理するための儀式であり、また社会的に死を確認するための別れの儀式でしかありません。もちろん、これまで家族と過ごした生活や友人との交流の終わりであることは避けようもない事実です。その意味では、この世での人生は儚く、無常であることは間違いありません。葬儀は「生者必滅、会者定離」という仏教のひとつの真理を、残された人たちに感得させる「別離」の重要な場でもあります。研究所の「檀信徒アンケート」でも、自分が故人として行われる葬儀の意味について、「極楽浄土へ送ってもらう儀式」という回答が全国平均で35％なのに対して、「家族や友人との別れ」が44％と高率でした。自分が喪主を務めたばかりの檀信徒の回答がこのような高率であったことについて、きちんと教えを説いてきたか、改めて考え直す必要があります。

これまで述べてきたような浄土宗の葬儀と私たちのいのちの目的がわからないと、当然故人との過去の思い出にばかりとらわれることになります。法然上人の説かれる浄土宗信者としての生きる目的に必要な戒名の意味が理解されていない、つまり「戒名は必要ない」という人たちが出てくるのです。同じアンケートでは、12％が「俗名希望」、13％が「未定」でした。その理由では、「戒名に意味を見いだせない」39％、「生前の名前に思い入れがあるから」が32％で、金銭的理由は18％に過ぎませんでした。このように日頃の教化活動のなかで浄土宗の本義が十分に檀信徒に理解されていない様子が伺えます。

また、葬儀が浄土宗との初めての出会いとなる遺族や日頃から寺との関わりがほとんど無い家の方々には、枕経などを通じて懇切に、亡き人は残された有縁無縁の人びとへの慈悲の実践のために浄土往生するという、法然上人の説かれた教えを懇切丁寧に説くことが重要です。もちろん葬儀の場で、往生の目的を強調するあまり、肉体的な死や別離を軽視した法話は絶対に避けなければいけませんし、儀式を疎かに扱うことも許されません。肉体的死と往生浄土は切り離すことのできない一体のものです。浄土宗では人の生きる目的は

肉体的な生だけに留まらず、浄土において成仏するところにあることを、常日頃から説くことこそ最も重要なことです。

2、葬儀の社会的意味

葬儀の意味について、共同体で危機を克服する儀式でもあると述べたように、伝統的な地域共同体では、近隣の多くの人々が葬儀の担い手となり、葬具を作ったり、もてなしの食事を作ったりして、死者を送りました。これは農村ばかりではなく、都市部でも行われていました。地域社会では、死はその家だけのものではなく、地域社会全体の危機でもあり、全員で危機を乗り越えることが重要だったのです。

現代社会では、死は縮小化しています。職業は多様化し、助け合い共同することも少なくなりました。人はやむを得ず移動転居を生涯繰り返します。このように現代社会では、人はそれまでのさまざまな縁を切り捨てて生きざるを得ないのです。まして高齢者は故郷に取り残されたり、知り合いのない都市の住宅地に同居させられたり、施設で長期間暮らすことになります。友人との交友関係や社会的関係などはますます個別化し、家族ですら故人の生涯での人間関係を把握することは困難になっています。近年の葬儀の縮小化が急激に進んでいる背景にはこうした社会状況があります。

しかし、社会的に死を確認するための儀式としての葬儀の機能は故人の存在、尊厳にとって絶対に必要なものです。人生のさまざまな困難や喜びを多くの人々との出会いのなかで分かち合ってきた人の死は、決して家族や故人だけのものではありません。故人に関わってきた多くの人たちにとって人生の一部となっています。私たちは有縁無縁の全ての縁のなかで、これまでもこれからも関わり合って生きて行くことを感じるために葬儀に参加することが必要なのです。仏教における葬儀の社会的な意味が重要である理由はそこにあります。

3、家族の真の癒しとしての葬儀

葬儀の重要な機能には、遺族や親類縁者、友人知人らの別離の悲しみや苦しみ、あるいは今後の不安などを癒す、また共同体で危機を克服する儀式といったことがあります。始めに述べたとおり、葬儀は亡き人を極楽往生に導くための儀式ではありますが、この癒しの機能も極めて重要なことは言うまでもありません。遺族は悲しみと不安のなかにいるものの、近隣・親類縁者・友人らの会葬と励ましのなかで、儀礼が粛々と執行されていくこと自体に癒しとしての葬儀の宗教的な意味があるのです。私たち僧侶には、傷つきやすい情況にいる遺族を思いやった誠実な儀礼の執行が求められているの

です。

また、極楽往生のための儀式であることを理解してもらうことこそ遺族にとって本当の意味での癒しになります。浄土宗の教えを枕経から説き勧め、通夜・初七日などの機会を用いて、肉体的な死は真の終わりではなく、遺族を含めた有縁無縁の人々の苦しみ悲しみを常に思いやり、還相して救うために極楽に往かれたときちんと説くことが必要です。浄土宗の葬儀は、これまでの生への別離と極楽への再生の儀式なのです。死は決して終わりでもましてや敗北でもなく、亡き人と生きる世界は異なっても、共に生き続ける「新しい家族」の始まりだということを説かなければなりません。

遺族にとっての真の癒しは、「新しい家族の始まり」というこの「ともいき」の教えではないでしょうか。極楽で見守り続けている亡き人とともに生きているという希望をもって葬儀と年回法要に臨めることこそ、現代社会の孤独と悲しみと不安のなかにいる遺族にとって一番必要な教えです。

4、浄土宗の葬儀と年回法要の現代的意義

近年、急激に社会が解体し変化しています。その最も大きな変化は人間関係の希薄化です。居住圏の広範囲化と移動は、兄弟親族などの血縁間の交流を希薄にしています。地縁の緊密さも薄く無力になっています。無縁社会とまでいわれ、伝統的な交流関係が縮小化する現在、地縁血縁とともに、退職後も続く社縁や友人との友縁や共同墓の使用者同士の墓縁など新しい人間関係が誕生し、改めて家族の意味や新たな絆や縁が見直されてきています。

このような現代社会に生きる家族や孤独な個人にとって、これまで見てきたような浄土宗信者の目指すべき生き方、つまりこの世と極楽という異なる世界でともに絆を保ちながら生きていくという考え方や生き方こそ意義があります。人は、自分のためだけでなく、家族や友人や他者のために生き続けたいと心の奥底で求めていることが「檀信徒アンケート」からも明らかになっています。85％以上の人が、「故人は残された家族を見守ってくれている」と回答しているのです。浄土宗の教えでは、亡き人への追善回向は阿弥陀如来への念仏によってふり向けられます。それゆえ、遺族にとって、日々の念仏や、仏果増進の願いを込めて法要を行うことこそ、阿弥陀仏と結縁し、亡き人との絆をいっそう強めることになります。葬儀が新たな家族の絆の始まりだとしたら、年回法要は亡き人との絆を強め、年々ともに生きていることを実感し振り返ることができる大切な機会なのです。人間関係の絆や縁が薄くなった現代社会だからこそ、浄土宗の葬儀と年回法要は、いっそう重要な役割を求められています。私たち僧侶の社会的責任がいま問われているのです。

今日的問題への対応

今岡達雄

昨今、葬儀にまつわるさまざまな問題が社会的な関心を集めています。葬儀の必要性を問う書籍がベストセラーになり、葬儀を行わない直葬が増加していることが指摘されています。また、大規模小売業者が葬祭事業に参入し、葬儀の布施の価格まで明示しています。このように、現代社会における葬儀は大きく変容する兆しを見せています。こうした状況に対して寺院も僧侶もしっかりと対応していく必要があります。

核家族化や自己決定権の重視などが浸透した社会では、それまで地域社会の中で意識せずに行われてきた宗教的習慣の世代間継承が困難になっています。このため、宗教的儀礼の意味についても、僧侶の側から能動的に教示していく必要があります。葬儀に関しても、寺檀関係の希薄な人々にとっては、宗教的な意味や伝統的な習慣が継承されていないため、意味も分からずに、血縁や地縁の援助なしに営む儀式になっているのかもしれません。

葬儀に関して、これまで人々にあまり伝えてこなかった重要なことが二つあります。その第一は、浄土宗の葬儀が果たしている宗教的な意味、社会生活を営む上での重要な機能を明確に伝えることです。第二は布施の問題です。葬儀は商行為ではないので、価格や料金という言葉はなじまないということです。そこで行われるのは布施行です。僧侶は法施を行い、遺族は財を布施するということです。この二点に関して社会から説明が求められているのです。

1、死生観の変化への対応

現代社会では「人の死」に対する考え方、感じ方が大きく変容してきたように思われます。日本の社会は何百年も前から地縁血縁の強い社会でした。そこでは地域の共同体的生活習慣や習俗が何世代も継承されてきました。もちろんその生活習慣や風習は保守的であり束縛的であり、時には差別的でもありました。

しかし、工業化による所得の増大、就業構造の変化と人口の流動性の拡大などによって、核家族化の傾向が高まり、大都市部の過密化と地方の過疎化が同時進行し、生活習慣や習俗の継承が困難になってきました。

また、医学や医療技術の進展は数々の難病を克服し、世界で有数の長寿を実現しましたが、医療への依存の拡大は死亡場所の変化をもたらしました。昭和30年頃の死亡場所は自宅85％、病院等15％でしたが、現在では病院等85％と逆転し、多くの人は病院や診療所で

最期を迎える社会になりました。さらに、生殖補助医療や移植医療などの「人のいのち」を操作する医療の発達は、人々の生命観や死生観を大きく変容させる可能性を秘めています。

このような生命観や死生観の変化は、私たちが今ここに存在している前提となる輪廻思想や、私たちが最終的な目標としている極楽浄土への往生観に大きな影響を与えていると思われます。こうした社会であるからこそ私たち浄土宗教師は、葬儀や年回法要を通して、阿弥陀如来の本願と極楽浄土への往生、成仏と還相について多くの人々に伝えていく必要があります。

2、檀信徒でない人々への対応

葬儀の問題が指摘されるたびに、「そうした問題は大都市部での固有の問題である。地方では寺檀関係がしっかりしているからそのような問題は起こりえない」という声が聞こえてきます。しかし、伝統的習慣の継承問題は地方でも急速に進行する可能性があり、大都市部の問題だと座視する訳にはいかないと考えます。

寺院との関係希薄な人々の多くは、地域共同社会の中で培われてきた伝統的な葬儀に関する習慣を継承していません。つまり、葬儀の意味も葬儀のやり方も何も知りません。病院で死を迎え、葬祭業者からのアドバイスを聞き、それぞれの考え方に従って判断をしながら葬儀を実施していくことになります。その個々の判断は、葬儀の意味やあり方から判断させるのではなく、その時の時流に大きく影響されます。

現在の時流は、節約・低価格ですから、「同じもの」ならば一円でも安く手に入れることが称賛されます。この「同じもの」という評価に大きな問題があり、実は「同じもの」ではないのに「同じもの」のように思い込んでいることも多いようです。これまで述べてきたように、宗教的な意味に基づいて僧侶が心を込めて行う葬儀と、無宗教で行われるお別れ会では、残された人々の心の持ちようも、社会的に果たされる機能もまったく異なっています。しかし、これらを「同じもの」と思い込まされているのが現状です。

檀信徒や初めて縁を結んで葬儀を行う方々に、葬儀の意味や葬儀が果たしている社会的な機能を十分に理解してもらうことが極めて重要になります。

2、戒名料

戒名については、浄土宗未来委員会委託研究報告書『戒名―その問題点と課題（平成13年3月）』で詳しく述べています。また、本書においてもいわゆる戒名（法名）として、そのあり方を示しています。

未来委員会報告書では次の4点を指摘しています。

(1) 戒名は念仏者（仏教徒）としての証しである。

(2) 戒名授与に際して授戒、五重相伝などの儀式の普及が必要である。

(3) 位号、院号は明確な基準で授与すべきである。

(4) 「戒名料」という呼称は不適切であるので、使用しないことを周知徹底すべきである。

このように指摘する一方で、世の中では「戒名料」という言葉が一般的に使用されていることも事実です。特に戒名料の金額問題は、それまで寺檀関係がなく葬儀のとき初めて縁を結んだ場合に多く発生します。寺檀関係がある場合には、昔からの習慣とか、檀信徒の意向によって、法名の贈り方や布施のあり方についての合意形成が為されている場合が多く、問題化することが少ないのではないかと考えます。

葬儀のとき初めて縁を結んだ場合には、法名の必要性と法名のあり方について説明し、本来生前授与すべきものを没後授与しているということを説明しましょう。また、位号や院号は生前の功績によって、寺から授けるものであることを説明した上で授与の可能性を話し合い、布施額とは切り離すべきでしょう。

4、葬祭ビジネスとの関係

一昔前の葬祭業は地元密着型の業態であり、地域内の寺院とも緊密な関係にありました。この場合には、葬儀の儀式的内容、日程調整、布施の内容については寺院が、その他については葬祭業者が担当するものとの暗黙の了解がありました。一部にはこのような関係が続いていますが、広域展開の葬祭ビジネス業者の台頭により、この関係が大きく変化してきました。

喪家の要望という言葉を用いて、葬儀の宗教的な意味を無視した演出を試みたり、既に決めてしまった日程を押しつけたり、布施の金額を提示したりする業者が現れています。また、葬儀を紹介する見返りとして、布施金額の一定割合を請求することもあるようです。多くの場合このような業者は短期的な事業規模の拡大を目標としており、長年続いてきたという継続性という伝統を踏みにじっています。こうした業者と組することのないように注意しなくてはいけません。

葬儀から宗教性が無くなれば、葬式を行う意味が失われ葬儀を実施する人の減少につながります。葬儀の実施率が下がるということは、葬祭業者にとっても重大な事態であるはずです。このような視点に立って、広域的で大規模な葬祭ビジネス業者についても、浄土

宗における葬儀の意味、法名の理解の仕方、布施の意味について理解してもらう必要があり、僧侶の側からの働きかけも今後の重要なテーマになるでしょう。

おわりに

葬儀についてはこれまでもさまざまな問題が指摘されてきました。問題の背景には多様な社会的問題がありますが、最終的な原因は、宗教的慣習や習俗の継承が行われなくなったことにあります。

「葬儀とは何か?」「葬儀をどのように行うか?」「年回法要とはどんな意味があるのか?」「どのように法要を行ったらよいのか?」

このような事柄は、檀信徒の代々の当主から次世代の当主に、あるいは、当主の妻から次の世代の当主の妻に伝えられていたものです。しかし、核家族化や居住の流動化などのさまざまな社会変化に伴って、その伝統の継承が困難になってきました。その結果として、家族が亡くなったとき初めて、具体的の問題として直面し、待ったなしに訳も分からずに対応しなければならないのが葬儀であるという状況が頻発するようになってしまいました。

このような状況に対応して私たちが出来ることは、葬儀や年回法要の意味、具体的な実施の方法を機会ある毎に提示していくことです。これまで葬儀の実施方法は地域によって大きく異なるものでありました。本書は葬儀の実施方法を一つに決めるものではありません。しかし、浄土宗の葬儀の意味については同じ方向性を持つことが必要です。これまで個々の教師が行っていた説明と異なる場合もあるかと思いますが、浄土宗教師が出来るだけ同じ方向性をもって葬儀が勤められるようにしましょう。

「浄土宗の葬儀と年回法要について」
平成22年10月30日発行
執筆担当者:
葬儀の浄土宗としての理解　(熊井康雄)
追善法要の浄土宗としての理解　(熊谷康雄)
葬儀の現代的な意味について　(武田道生)
今日的問題への対応　(今岡達雄)
編著:浄土宗総合研究所
発行:浄土宗

編集後記

本書は、浄土宗総合研究所の総合プロジェクト研究の「現代葬祭仏教」による平成13年度より23年度にわたる研究の成果報告書である。ただし、平成17年度に「葬祭仏教研究」から「現代葬祭仏教」と改称したときに行った「檀信徒アンケート」調査以降の研究報告を掲載した。巻頭にあるように、第1期の葬祭仏教研究は『葬祭仏教』を、第2期には『戒名　－その問題点と課題－』を刊行した。そして、第3期の現代葬祭仏教は本書を刊行して、現代葬祭仏教の一応の集大成とする。

「寺院アンケート」には、お葬式が変化したという回答が多々あった。「檀信徒アンケート」は、平成17年度に調査したものであり、平成以降に喪主を務めた人の意識である。特に、バブル崩壊頃よりお葬式の実態とその意識が急激に変化していると感じられる。例えば、「檀信徒アンケート」を分析し始めた頃は「直葬」の読み方がまだ統一されておらず、しかも、「家族葬」もまだ一般化されていなかった。檀信徒の「お葬式の実態と意識」分析としては、賞味期限が切れかかっているかもしれない。そして、平成23年3月11日の東日本大震災によって、お葬式の意識も変化していると思われる。従って、定点調査として、定期的にお葬式に関するアンケート調査が必要かと思われる。

研究成果報告としての本書は、充分にその研究趣旨に適ったものとは言えないかもしれないが、少なくとも「檀信徒のお葬式の意識」に対する認識を新たにし、「お葬式・年回法要の意味」を明確にしたことによって、教化の一助になり得たと信じている。

最後に、現代葬祭仏教の研究代表であった浄土門主知恩院門跡伊藤唯真猊下始め、公開シンポジウムでご教導賜った講師の諸先生、アンケートにご協力いただいた方々、さらに現代葬祭仏教に携わった研究員に改めて御礼申し上げたい。また、主任研究員であった故鷲見定信師の還来穢国を念じ上げる。

平成24年3月

浄土宗総合研究所専任研究員

西城宗隆

浄土宗総合研究所　研究成果報告書　3

現代葬祭仏教の総合的研究

平成 24 年 3 月 31 日　発行

発行・編集　浄土宗総合研究所

〒105-0011　東京都港区芝公園 4-7-4 明照会館内

電話（03）5472-6571　FAX（03）3438-4033